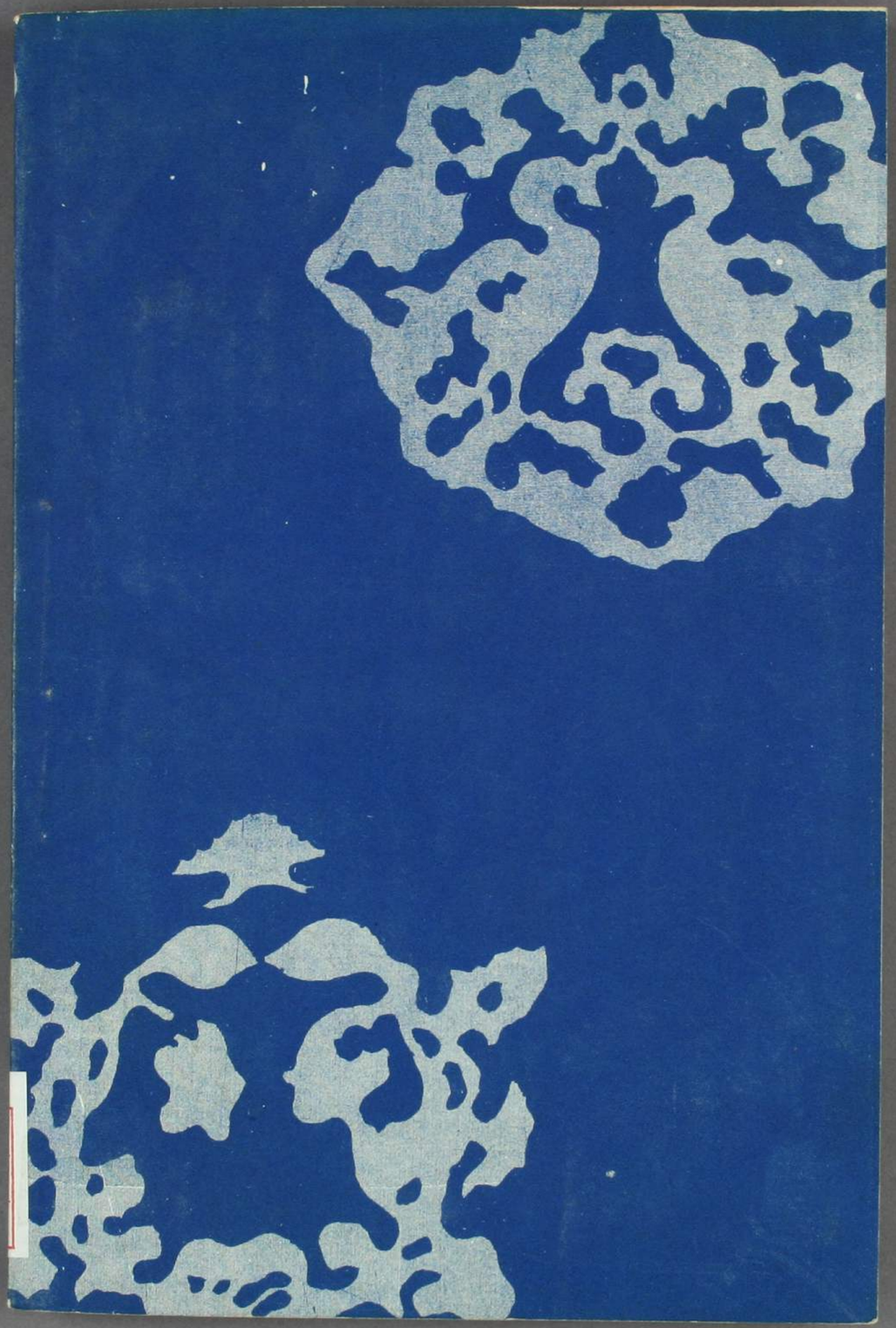
評註近松等作集

日本淨瑠璃叢書

山田美妙等
近松翁作
長男の腹功
外十一種



本間文庫
文庫 14
247
1

山田美妙等

日本淨瑠璃叢書

評註近松等作集

近松門左衛門作

文庫14
D27
1

緒言

評註もとよりまだ周到を得たものでも無いが、近松翁の作に世間まだ此類の物の無い所に因て、終に敢て評註を試る事に爲つた。普通の文學思想の有る人に解されさうな所は大抵省畧し、所謂元祿俗語に至つては成るべく解釋を加へたつもり、まだ本義不詳のも有るが更に研究の上他日重ねて明瞭にする決心、幸ひに多少解釋の目的を貫いた事ならば本望の至りである。

明治三十年九月下旬

美妙

日本淨瑠璃叢書
評註近松著作集

目次

○長町女腹切（お花半七）……一頁
○淀鯉出世瀧徳（井筒屋新七）……二四頁
○曾根崎心中（お初徳兵衛）……五〇頁
○重井筒（お房徳兵衛）……六五頁
○五十年忌歌念佛（お夏清十郎）……八七頁
○心中二枚繪草紙（お嶋市郎右衛門）……一一一頁
○戀八卦柱暦（お三茂兵衛）……一三〇頁

○堀川波の鼓（四人の仇うち）……一六一頁
○卯月の紅葉（お龜與兵衛）……一八四頁
○卯月の潤色（あとおひ心中）……二〇三頁
○伊達染手綱（丹波與作）……二二〇頁
○心中萬年草（お梅久米之助）……二五二頁

長町女腹切

上の巻

例の童の言の葉に、言よる品もよし蘆の、難波の京の物語、今の狂歌に取りなせし、京童の口吟、落首洛外とり〴〵に、その一節を繪双紙や、下立賣を堀河へ引廻したる角屋敷。刀屋石見何某とて、諸役御免の受領職。折紙太刀の御用迄、御所は勿論屋敷方、男たる身の魂の、御刀脇差拵請取所と大看板。（一）』見世は弟子に打任せ、誰が下人やら頭やら、咄し目貫の性よしも、つひ燒つけて惡性に、身を研ぎへらす奉公や、跡のこじりの帳面の、つばめ合せと親方が鞘鳴するぞ道理なり。（二）』主人石見は禪門の、白い天窓に黑眼。仕事場を見巡ッて、「ヤア己が足音聞たやら皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事ぢやないぞ。彼岸過たりやめッきりと日が短かい。夜仕事さしよにも此油の高さでは儲ける程皆戻る。ヤ戻る次手に戻橋の鍔は戻ッたか。一條の御所樣の菊鍔も、九月の御用ぢや合點か。黑鞘が出來たらば鳥丸殿へ渡しておぢや。二口屋のはみ出し、猪熊の革柄、なぜに遲いと毎日二三度使が走る。醒井の親粒もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下細工、菖蒲作りの拵へも、五月からの誂へ、何として出來ぬぞ。薙刀直しを研だらば、辨慶山の町へ持て往け。雨替町の銀作り、御池の町のふち頭、小川通のせかいらぎ、今日明日に持たしてやれ。さッきに來せた下の町の酒屋のかみ、入婿が入る引出物にしたいが、娘が望む道具ぢやと大切先の大刀物、身ばかり買ふて去れ

長町女腹切
●上の巻
（一）落首洛外　洛中洛外に通はせた句。近松翁慣用の筆法。
○下立賣　京都の町名。
○折り紙太刀　折り紙附きの名作の大刀。
○「屋敷き方」の下其等の用を勤めるとの義を言外に隱す。
（二）目貫き、性よし、燒きつけて、研ぎへらす、こじり、つばめ（鍔目＝束め）、鞘鳴り　共に刀劍の縁語。
○鞘鳴り　刀を鞘に收める時鯉口に音のする事の義。爰では主人が喧ましく小言など言ふ意。
（三）白い天窓に黑眼　白、黑對照。
○己が足音　此以下數行は主人の口吻として上段の

たは後家鞘に極ッた」と、堅い親仁の輕口も、刀屋とてや古身なり。(三)』主手代の忠二郎、旦那の前に帳面扣へ、左介喜八は算盤の、さゞんの九月節句前、算用の高見合して、「ヤア此半七の大のらめ、帳面も埒明ず、今朝から爰へ頬出せぬ。何所へうせた。又祇園狂か、宮川町か、繩手か。朋輩共が知ッてをろ。詮索せい」と喚かるゝ。(四)』「イヤ半七は昨日から頭痛するとて鉢卷で小座敷に寢て居まする」。「何ぢや頭痛ぢや。若い身で、又しては頭痛の、つかへの、何のとは、皆茶屋酒が過るから。粥でも焚て喰はしたか」。「アイ粥の事は扨おき、重湯も咽へ通らぬと云ふて、漸うと今朝酒の燗して飲んで見て、どうでも色のない酒は飲まれぬと、苦い顔しながら中椀にたッた三杯」と、云へば主も興さめて、叱る心も拍子ぬけ、(五)』笑ひ暮せし秋の日の、西山近き染浴衣、愛宕參りに袖を引れた、是も仇なる世の勤め。四條の水に名を流し、身の憂數を積あげし、石懸町の井筒屋のお花。世盛り戀盛り。身を賣品はかはれども、刀屋の半七と深い中身と正銘の、互の誠とぎ入れて、締た心のもろひねり。其柄糸のほつれそめ、我親ざめの情なさを、問ひ談合も中絶し、いとし男も親方がゝり。首尾はどうぞと案じほれ、顔の見たさも遣瀬なく、駕籠舁雇ふて草鞋がけ、浴衣を假の旅出立。ぼんほり綿もひねくろしく、背中に皺の寄るべなき、(六)』石見の見世へ「頼みませう。ハ、こりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七殿に、一寸逢ひたう御座りんす」。親方ざよッとし、「はていかうりんす〳〵と云ふ女子ぢや。和女は半七が女房か」。「ハアつがもない私は大坂者。半七が伯母で御座りんす」。「アレまだりんすぢや。ムウ大坂の伯母御とは、伽羅細工の甚五郎の内儀か」。「ア、伽羅〳〵。

鞘鳴り」を受け、齷齪する體を示す。筆法簡潔で綾なからゆた所近松翁の得意の筆。
○戻る　同語を種種に異用した名句。
○菊鍔　菊の花形の鍔。菊の縁で「九月」と受ける。
○黒鞘　故に「烏丸」と受ける。
○二口屋　故に「はみだし」と受ける。
○猪熊　獣類の意で「革」と受ける。
○以下皆上の例。「菖蒲作り＝五月」、「薙刀＝鉾慶」、「兩替へ＝銀」、「池＝ふち」。
○「大切先の大刀物」上にある「婿」を受け、又「娘が望む」に接し、暗に滑稽の意を含む。
○後家鞘　中刄の無い鞘。相手の無い義。
○輕口　滑稽の意有る故。
(四)さゞんの九月「算盤」の縁。三三が九の義。
○大のら　非常な放蕩者。
○祇園狂ひ　京都祇園町の遊女に溺れる事。
○宮川町、繩手　共に惡所場。
(五)茶屋酒　色茶屋で飲む酒。
○色の無い酒　婦人抔と共に飲まぬ酒。
(六)積みあげし　石懸町の縁語。
○中身、研ぎ入れて　刀の縁語。
○もろひねり　柄絲の編み方の一種。
○ゑめた、もろひねり、ほつれ　共に柄絲の縁語。
○親ざめ　刀の飾りの鮫鞘、即ち鮫の皮を曬した物で、子鮫のは柔く親鮫のは堅い。刀の縁で此語を用

何かのお禮にとう參る筈なれ共、主は細工の人だから、貧な世帶の隙なしで、今日迄の御無沙汰。大事の甥が出世の門。祝ひ月を心掛、愛宕かけての登舟。乘合の窮屈さ。とろ〳〵と寢よとすりや、後からせゝるやら、前からは毛の生へた、大きな足を突出すやら、齒切をするやら寢言やら、可笑しい事の數々は、山崎から連もあり、あがッてお山を一息に、嵯峨へ下たりや仕合と、釋迦樣の開帳の、相伴やらおこゞやら、旅籠屋で支度して、直に是へ」と出次第の口は手管に馴々しく、「皆樣御免ア、しんどう」と腰掛て、煙管取手もぞんざいに、「皆樣半七の朋輩衆か。しんくな仕事で御座りんす」。繻子の肌着に色さらしなの、伯母と名乘て刀屋に見するは迂散者なりし。(七)』「ソレ喜八。伯母が逢に登られたと、半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進せぬか。幾人をッても氣が附ぬ」と、云ふ内に半七は、そッと起きて障子の隙、覗けば馴染のお花なり。「南無三寶、扨は内々苦勞にした、慾づらの繼父めが、年切増のもがりごと、急々にせがむと見えた。其工面に來たさうな。何にもせよ出過ぎたこと。逢も危なし逢はぬも又、仕舞の附ぬ我身ぞ」と、夜着引被り、生たる心地はなかりけり。(八)』親方は正直一ぺん、「半七はなぜ出ぬぞ。頭痛でまだ起られぬか。他人では無し、なう伯母御。寢所へいて逢はッしやれ。をやま狂ひで酒やら何やら過る故、煩ひ暮して物も喰はぬ。少意見して下され。そりやそこへ案内せい」と、下地は好に据る膳、甘ひ首尾とぞ成にける。(九)』やゝ時過て是も又、愛宕參りの花お札。風呂敷包下人に持せ、「刀屋の石見樣とはこなたか。大坂甚五郎が女房半七に逢ひたい。伯母が來たとおッしやれて下され」と、云ひ入れば家内の上下愕然して、「ヤアこりや何ぢや。門にも

ゐ、肉身の親に通はせたもの。
(七)逢ひたう戻りんす　遊女たる事を示すための里詞。
○つがもない私は大坂者　胡麻化して言ふ意。若い婦人の癖に伯母であるなどと言ふ所慌てた體を巧に示す。
○ああ伽羅伽羅　先方の言を借りて愈胡麻化す意。以上すべて出任せ。
○釋迦様　山城嵯峨に安置される有名な釋迦尊。
○おこと　御籠もりの略の轉。
○しんくな　辛氣の訛り。面倒の義。
○「繻子」以下「迂散者なりし」まで作者の地の文。
○色さらしなの伯母　「さら」は新らしい義。色はでやかの意。直ちに「更科」となり、信濃國

伯母内にも伯母。騙子か狐に極ッた」と、不審がるやら怖がるやら、中にも亭主は一理屈「ざわ〳〵と囂い。奥へ聞えりや詮議がならぬ。默れ〳〵」と小聲にて「表の伯母御通らしやれ。爰へ〳〵」と云はるゝにぞ、綿帽子取てしとやかに、「是はまあ〳〵結構なるお内方。つひしか御出入申さねば何方様が誰様やら。コレ其所な前髪殿盆一枚貸ッしやれ。私が事なりや心迄奥様へ上まする。ひの上の切荒布、花の都へこんな物。お耻かしや」と差し出す。伯母の年ばい格好を、見ればどこやら面相も、半七によく似たり。扨は奥なは似せ物めと、思へども念の爲。「是は〳〵云はれぬこと。女房共は寺參り。戻ッたら見せませう。してつきもしほもなう半七に何用有て登られた」と、云へば伯母は打笑ひ、「いや半七にさのみ用もなけれ共、旦那様へ少お頼申事。連合甚五郎登らるゝ筈なれ共、お屋敷方の御用は多し、飛脚でも如何とて、扨私が登りし」と下人に持せし風呂敷より、棒鞘の一腰を取出し、「是は是信國とや。去大名の若殿へ藏屋敷から上らるゝ、大切な拵物。大坂にも彼是と、職人衆も多けれど、京細工と申甥子が爲、内方へ頼みます。注文は此通。さぞ方々の請取、御忙しいは存ながら、どうぞ近々に頼上まする。此次手に半七めが顔も見たさ、何やかやに登りました」と差出せば、石見は脇指注文見合、「是は此方の商賣。心得た」とずッと立て、「是伯母御、戀しがらるゝ甥がざまを見せませう。暫く其處に」と云ひ捨て、思ひ掛なき一間の障子、蹴破ッてつッと入る。(一〇)』二人ははッと驚いて、狼狽廻る胸ぐら、両手に摑んで、「ヤイ半七のいきずりめ。ようも〳〵親方を踏附たな。あの女が來た時から、ござりんすが呑込まれぬ。りんすの正體顯れた。をやまやら惣嫁や

更科姨捨山の意で「さらしなのをば」と掛かる。此やうに窟屈に掛かりたがる所近松翁の長所で、同時に又短所でもある。
(八)もがりごと　望みねだる事。「もがり」は稍惡性の意を含む。八犬傳にも「もがり」を名にした惡徒が有る。
(一〇)更に眞の伯母の來る所混雜の發端。
○御内方　近松の時代では「御宅」などの敬語の義。
○前髪殿　前髪つけた小僧。
○心まで　此「まで」此時代では「ばかり」の意。
○ひの上　意義未詳。
○言はれぬ事　御心配なされずともの事の義。
○つきもしほも無う　月も潮といふ

ら、厚皮づらな晝日中、大坂の伯母で候と、目利の家へ似せ物を、ぬく〳〵と寢所へ迄手引させ、主に一杯汝めは、甘い所を喰ふたな。親代々の刀屋を太鼓持にするのみか、座敷を揚屋に仕くさッた、お禮申」と突倒し、えさし掃おッ取て、さん〳〵に打敲く。(一一)』伯母は此體聞よりもはッと人目の耻かしさ。憎うもあれど甥子が難儀。思ひやられて何とがな、此場の首尾をと氣を碎く。半七阿花は身の科を、云ひ包めんと眞顔にて、「申々旦那様。お氣が違ひはしませぬか。私は兎も角も、伯母ぢや人を打擲あり、必後悔なさるゝな」と、云はせも果ず、「ヤア盗人猛々しく、其姿になッてさへ、まだ惣嫁めを勞はるか。主の身代空になし、天道をかすめをる。ヤイ天罰と云ふもので、大坂の伯母が登られた。目の前へ連ていて敲き殺して腹をゐる。サアうせぬか」と杖振上、はた〳〵と打つ音に、伯母は悲しく走りより、「旦那様暫く」と、取附ば振放し、縋りつけば突倒し、とかうする間に思案して、「ヤア、こりやお吉か。そなたは此所へどうして來た。コレ申し旦那様。あれは私が妹」と云へば旦那は興さめ顔。半七は猶合點せず。花はきよろ〳〵狼狽る。袖を扣へて、「コリヤ妹。ヤイお吉是姉ぢや。姉が顔を見忘れたか。うろたへ者」と睨つけ、目まぜで知らすれば、やう〳〵と心附、「ハアほんに姉様。姉様〳〵ぢや」と、云ふ聲慄ふ斗なり。(一二)』伯母は色目を曉られじと、「五條の木賃宿へ行きはせで、姉さへついど來ぬ内へ、騙子らしいこと云ふて來た故に、こんなこと。旦那様のをやまぢやと御覽じたも御尤。今日も愛宕で私をお袋とはか云ひませぬ。それも道理ぢや。あの人は腹がはりの兄弟で十五違ひ、半七が爲には伯母なれど、年は甥より二ッ下。伯母甥の好とて、親うするを知らぬ目

で、女夫と見るに咎はなし」と、非の入りさうな事どもを。云くろめたる情の程、二人はあッと嬉しさも夢に夢見る如くぞや。(一三)』主の石見まんまとくひ、「ムヽウ二人ながら伯母御か。よい年して不重寶過ッた。免してもらを。伯母御怪我は無かッたか」と、脊中按れば彼方向く。「ヲ、若い人の道理〳〵。其方な伯母樣頼みます。譏嫌取ッて下され。是半七。言分してくれ」ともじ〳〵と勝手へ出、「皆の奴等うッかりと、なぜ茶漬でも爲て出さぬ。腹の立た揚句ぢやにけんどんを取りに遣れ。マア盃を出して置け。むづかしからう己は出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ勢ひ口に、伯母をも知らいで見知らした」と、足早にこそ出にけれ。(一四)』跡見送ッて半七は、伯母の前に手を仕へ「何にも態と申ませぬ。面目ないと有難いと、胸は二つに裂ます」と、悔み歎けばお花も涙に染々と「私は四條石懸町、井筒屋と云ふ茶屋に花と申す勤の者。半七樣とは末々まで、面倒見あふ契約に、ちといき詰ッた憂ふしの談合に、逢いで叶はぬ事あッて、横着な此有樣。伯母樣なら大事の甥を、唆かすとのお憎しみ、そこも許して下さんせ。いとしいが只因果ぞ」と共に詫ちて泣きければ、伯母も同じ涙にくれ、「さう見た〳〵。連合は大坂で伽羅屋といへば、町によい衆屋敷方。人に知られて世の憂無情、此伯母とても知ッて居る。色事は若い役。此上にどのやうな生きる死ぬるの塲になりても、藥袋もない氣を持つまいぞ。世間多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて、悲しい事酷い事、そこを死ぬが心中ぞや。眞實男可愛くば、五度逢ふものを三度逢ひ、二度を一度になす時は親方も譏嫌よく、戀に身をうつこともない。二親もない半七。伯母一

說は附會ゝ過ぎる。「つき」は附き穗の義。「しほ」は機會の義。雙方で、「突然に」、「つきほもなく」などの義。(一一)謀計露顯、局面一變。○いきずり　太い奴。○ムりんす　前に里詞の「りんす」を主人が怪しんだ其反映。○惣嫁　京坂方言。地獄女。○「こりや阿花が…」伯母の詞。機轉で紛らす意。文變化を極はめる。(一四)まんまとくひ　まんまと一杯食つた義。局面又一變。變幻の趣きを盡くす。○腹の立ッた揚げ句ぢやにけんどんを取りに遣れ　けんどん即ちけんどん蕎麥の義。立腹を受けて「慳貪」の意を含ました所翁の得意の筆法。○はれやれ　「はれ」、「やれ」共に掛け聲の感歎詞。ああ、やれなどの義。○みしらした　見知らせたの義。憂き目を思ひ見知らせた意。(一五)いとしいが只因果ぞと　句調自然に婉しく、可憐の姿ありあり見える。○さう見た見た　さうであらうと察しやる意。京坂で元祿時代の通用語。(一七)代物　代價。元祿の通用語。

人甥一人。元は知行も取た筋。職人の弟子と朽果れど、可愛いとも不便とも、思ふ者は此伯母一人。末かけて頼みます。今日伯母が登らずば二人の命は有るまいもの。有難や忝なや愛宕參りの一驗。佛神のお蔭ぞ」と、意見も親は泣寄の、二人が肝に堪へつゝ泣くより外の事ぞなき。(一五)』伯母は重ねて「やれ半七。泪ついでに今一度泣ねばならぬ此脇指。見知てゐるか」と差出せば、半七棒鞘の柄引ぬき、中刄を見れば信國。裏目釘の穴際に風と云ふ字の一字銘。横手を拍て「是は扨。我家の重代ぞや。親の秘藏が年を經て、巡り來るも不思議なり。二度武士に立返る、瑞相なり嬉しや」と推戴く脇指を、伯母引とッてからりと投げ、なう情なのさふらひや。武士になれとて見せはせぬ。此脇指ゆゑ家筋の、かう零落た因緣咄。小耳にも聞きつらん。お花とやらも繫がる人。悲しい咄の一通りを聞てたも。(一六)』もと我々は伊勢の龜山者。先祖は猪瀬文平とて、あの子が爲には祖父樣。お持砲の鉄砲大將、百五十石取た人。おなじ家中に高木宮内とて、八百石取る旗頭。互ひに無二の中なりしが、上方のとりうりが此脇指を賣りに來て、諸朋輩の附合に祖父樣も望みにて、買ひ求めたい志し。彼の高木も望をかけ、代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興。とは云ひながら高木が麁忽。文平お身の身代では高い物ぢやがお買るかと、ふッと云ひしも互ひの不運。苦笑ひにて一座は濟み、その取沙汰の國一杯。いはれぬ猪瀬が齒も立ぬ、刄物好して高知行の、高木殿と張合て、人中で耻辱うけ、あれでも武士かと言囃す。此脇指を買いでは、一分立ぬ祖父樣の、武具馬具衣裳、夜の物まで代なして、三百貫の折紙代一倍まし、二百拾兩に買求め、直に中刄に一字銘。高木に勝との

心にて、風と云ふ字を鐫記し、明れば九月十五日、登城の道に待うけ、高木遣ぬと聲をかけ、尋常に擊果せ、屋敷へ歸ッて祖父樣は娘子供に暇乞。命に替し此信國、必らず人手に渡すなと、お腹へぐつと押立て、右の脇さで一筋に、唯一言の義に依て身上を果されたり。其方の父樣は伯母が爲には兄樣。その折しも江戸番。直に江戸より浪人あり、永々の憂苦勞、悲しい暮しが病となり、彌憂き其中にも、遺言にて此脇指、乞食するまで離すなと、藥も飲ず、祖父樣の第三年、同じ月に病死ぞや。悲しいとも憂いとも。情なやお袋も又歎き死。跡に殘るは伯母と其方。まだ九ツの頑是なし、伯母が心を推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬると、不思議と思ふ氣が付て、及物の相性見る人に、目利して貰ひしに、祖父樣父樣同じ火性。刀は水の流れ燒、以ての外の不吉の脇指。すは一尺四寸五分、けん尺は災難。是を其儘持ならば、三代迄は崇るとある、占に驚いて、捨賣に賣放し、廻り廻ッて十三年目。お屋敷方より此脇指、捧へ仰付られて、孫子の其方の眼にかゝると、はや親方の打擲の、難儀に逢ふも此不思議。武士美しと思やんな。一言の咎より、親祖父の命を絶ち、子孫までおちぶれしは、前世の業とは思へども、愚痴な心に淺ましい、此脇指がないならばと、科ない及物に恨が殘り、折ても捨たい氣なれども、今では大名のお腰の物。家の敵の此脇指。主人の樣に撫擦る、その時々の身過ぎほど。悲しい物は無きぞとよ。子にも甥にも唯一人。奉公大事に勤めてたも。いとしの身や」と掻口說、膝に凭れて泣きければ、半七も伏沈み、お花ものかぬ身の上と語るも聞くも主の內。頷き合つ叮きの、忍泪ぞ哀なる。（一七）』「ヤァうか〳〵咄してあれ見世さし時。伯母は直に伏見まで、

（一八）見世さし時　見世鎖し時の義。夕暮れで見世を閉ぢる時刻。

○阿花女郎にもえんでがな　「えん」は緣の意。緣もあらばと「又やがて」逢ふ事も有るとの略文。

○浪人あり　「あり」は「見分あり」、「意見あり」抔のやうに名詞體の動詞に接し、敬語とする語。爰では「浪人する」の意で動詞と見、即ち浪人と御爲りなされたの義で用ゐたもの。

❸中の卷

（一）名は堅く人は和らぐ石懸町　「堅く」は「和らぐ」と反映。遊女町故「人は和らぐ」といふ。

○浮き身をぱんと　町ぱんと町も花柳の町。浮き身をぱんと諺めも諺の意を暗に含む。

○八乳の繪ぞ三味線　三味線は猫の皮で張る。腹の皮で乳房の瘦が四つ出たのが四乳、八つ出たのが八乳、何れも三味線の皮の最上品。繪ぞ三味線は延べ棹で無く、棹中程から隨意に繪を外しの図

夜中でも船はある。來年のお祓には必ら下りや。此脇指の捧。注文の通り、隨分急いで下してたも。旦那殿內室樣へよい樣に賴むぞや。お花女郎にもえんでがな。又頓てや」と出ければ「ィヤ私も東。道までお供致しましよ」。「ァ、折角來て素戻りか。これ半七伯母は粹ぢや。跡でしッぱりと咄しやいの」。「ィヤ〳〵別に咄す事もござりませぬ」。「そんなら祝ふて口濕して去しや」。「ィヤ最早お茶も飮ました」。「ッテ茶ばかりで濟むものか。しんこの樣な物なりと茶の子甥の子。のこ〳〵振舞や半七」と。二人引寄せ寢所の障子の中に押入れて、伯母は氣をほり堀河通り、二條通りの高瀨船、直に大坂へ下りける。（一八）』

中之卷

名は堅く、人は和ぐ石懸町。前には戀の底深き、淵に浮き身をぱんと町。都の四季の月花を、爰にとゞめて通路や。馴染〳〵の色遊びの、中にお花は忘れても、忘れがたなや刀屋の、半と深きつま戀に、なつく八乳の繪三味線。心くらべの連引に思ひの色を忍び駒、忍ぶに余る涙かな。浮氣鳥とそやされて、月夜も闇も此里へ、光滿寺と云ふ坊主客、お花に馴し鷺の、ほけきやうとも念佛とも、知らぬが佛の戶帳ぞと、井筒が暖簾擔木杖にてひらりと揭げ「太郎內にか。四五日お目にぶらさがらぬ」。「ァ〳〵ぞッち風でもない。今夜はしよざいの無常風。沙汰はないと葬禮の戻り。ちよッと寄たし、心はせく。どうせうか斯う燒香場を、たり〳〵に遣てすて、引導も何云ふたやら。不便や今日の亡者も、祿な所へ往くまい。是もお花へ心中」と、雪の頬さき

心にて、風と云ふ字を鐫記し、明れば九月十五日、登城の道に待うけ、高木遣ぬと聲をかけ、尋常に擊果せ、屋敷へ歸ッて祖父樣は娘子供に暇乞。命に替し此信國、必らず人手に渡すなと、お腹へぐつと押立て、右の脇まで一筋に、唯一言の義に依て身上を果されたり。其方の父樣は伯母が爲には兄樣。その折しも江戸番。直に江戸より浪人あり、永々の憂苦勞、悲しい暮しが病となり、彌憂き其中にも、遺言にて此脇指、乞食するまで離すなと、藥も飲ず、祖父樣の第三年、同じ月に病死ぞや。悲しいとも憂いとも。情なやお袋も又歎き死。跡に殘るは伯母と其方。まだ九ッの頑是なし、伯母が心を推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬると、不思議と思ふ氣が付て、刄物の相性見る人に、目利して貰ひしに、祖父樣父樣同じ火性。刀は水の流れ燒、以ての外の不吉の脇指。寸は一尺四寸五分、けん尺は災難。是を其儘持ならば、三代迄は祟るとある、占に驚いて、捨賣に賣放し、廻り廻ッて十三年目。お屋敷方より此脇指、拵へ仰付られて、孫子の其方の眼にかゝると、はや親方の打擲の、難儀に逢ふも此不思議。武士羨しと思やんな。一言の咎より、親祖父の命を絶ち、子孫までおちぶれしは、前世の業とは思へども、愚痴な心に淺ましい、此脇指がないならばと、科ない刄物に恨が殘り、折ても捨たい氣なれども、今では大名のお腰の物。家の敵の此脇指。主人の樣に撫擦る、その時々の身過ぎほど。悲しい物は無きぞとよ。子にも甥にも唯一人。奉公大事に勤めてたも。いとしの身や」と搔口說、膝に凭れて泣きければ、半七も伏沈み、お花ものかぬ身の上と語るも聞くも主の內。頷き合つ叮きの、忍泪ぞ哀なる。(一七)』「ヤァうか〳〵咄してあれ見世さし時。伯母は直に伏見まで、

○浪人あり　「あり」は「見分あり」、「意見あり」抔のやうに名詞體の助詞に接し、敬語とする語。爰では「浪人」を「浪人する」の意で助詞と見、即ち浪人と御爲りなされたの義で用ゐたもの。

(一八)見世さし時　見世鎖し時の義。夕暮れで見世を閉ぢる時刻。

○阿花女郎にもえんでがな　「えん」は緣の意。緣もあらば「又やがで」逢ふ事も有るとの略文。

●中の卷

(一)名は堅く人は和らぐ石懸町「堅く」と「和らぐ」と反映。遊女町故「人は和らぐ」といふ。

○浮き身をぼんと町　ぼんと町も花柳の町。浮き身をぼんと陷める意を暗に含む。

○八乳の繼ぎ三味線　三味線は猫の皮で張る。腹の皮で乳房の痕が四つ出たのが四乳、八つ出たのが八乳、何れも三味線の皮の最上品。繼ぎ三味線は延べ棹で無く、棹中程から隨意に繼ぎ外しの成

夜中でも船はある。來年のお祓には必らず下りや。此脇指の拵。注文の通り、隨分急いで下してたも。旦那殿內室樣へよい樣に賴むぞや。お花女郎にもえんでがな。又頓てや」と出ければ、「イヤ私も東。道までお供致しましよ」。「ア、折角來て素戻りか。これ半七伯母は粹ぢや。跡でしッぽりと咄しやいの」。「イヤ〳〵別に咄す事もござりませぬ」。「そんなら祝ふて口濡して去しや」。「イヤ最早お茶も飲ました」。「ハヲ茶ばかりで濟むものか。しんこの樣な物なりと茶の子甥の子。のこ〳〵振舞や半七」と。二人引寄せ寢所の障子の中に押入れて、伯母は氣とほり堀河通り、二條通りの高瀨船、直に大坂へ下りける。(一八)』

中之卷

名は堅く、人は和ぐ石懸町。前には戀の底深き、淵に浮き身をぼんと町。都の四季の月花を、爰にとゞめて通路や。馴染〳〵の色遊びの、中にお花は忘れても、忘れがたなや刀屋の、半と深きつま戀に、なつく八乳の繼三味線。心くらべの連引に思ひの色を忍び駒、忍ぶに余る涙かな。浮氣烏とそやされて、月夜も闇も此里へ、光滿寺と云ふ坊主客、お花に馴し鶯の、ほけきやうとも念佛とも、知らぬが佛の戸帳ぞと、井筒が暖簾撞木杖にてひらりと揭げ、「太郎內にか。四五日お目にぶらさがらぬ」。「エ、珍しいどッち風が吹いたぞい」。「イヤ〳〵どッち風でもない。今夜はしよざいの無常風。沙汰はないこと葬禮の戻り。ちよッと寄たし、心はせく。どうせうか斯う燒香場を、ゑ〳〵に遣てすて、引導も何云ふたやら。不便や今日の亡者も、碌な所へ往くまい。是もお花へ心中」と、雪の頰さき

し得るもの、是も三味線の最上品。入乳、纏ぎ三味線、連れ引き、忍び駒共に三味線の縁語。

○浮氣烏　月夜烏などの語の世に有る縁から「月夜」と受け、更に其縁で「光滿寺」と受ける。文に些しの抜け目をも許さぬ。

○太郎内にか　太郎は井筒屋の主人の名。

○「ぞッち風」と出た故「無常風」で受ける。

○沙汰は無い事　元祿の通用語。別段の儀も無いとの義。

○よ〳〵にやッて捨て　好い加減に胡麻化して。

○雪の頬さき　雪のやうに白い阿花の頬さきの義。但し此「雪」との形容は縁之しく近松翁には珍らしい不出

遠慮なく、髭口寄せて頬ずりは、山葵おろしにぬきの玉子、痛そな顔の痛々し。(一)』お花が浮ぬ顔付に、花車も亭主も氣の毒がり、「コレお花どうぞいの。お寺ならば大黒。爰ではわッさり惠比壽顔して見せましや。サア笑やいの」と迫立れば、「ア、太郎おだまり〳〵。あれは我等に甘へるの。腹立つ所が猶うまし。嚊州二階へ連ておぢや。今夜は妓衆の惣揚見事なとか。古手の肴取置いて、蒲燒一種で呑明す。鰻四五本割かせに遣や。南無阿陀彌佛」と騷ぎ立。皆々二階へ上りける。(二)』既に傾く宵月の、夜もはや四ッ半七は。銀の才覺ならず者と、茶屋にはせかれ親方に、見限られつゝ筒井筒、心の水もかへ干て、流れ歩きにとぼ〳〵と、格子の影に身を潜め、お花が便を待居たる。爰に誰とは白髪まじり、きんか天窓に無用の灯燈、門口にてふつと消し、「ハア太郎左衛門様お宿にか。花めが父西陣の丸兵衛でござる」と、たつみ上りに言ひければ、亭主夫婦「ヤア親父來てか。こちへ〳〵」と茶釜の前。太郎左衛門顔顰め、「此頃段々云ふ通り。そなたが娘お花が事。そも〳〵小めろの時分から手形の表丸十年。親方に損もかけず、追付年季も明くぞや。なれども勤のならひ、小間物屋の煙草屋の、紙屋で候、呉服屋で候の、すのこんにやくのと借錢が今の金で七八兩。その上親父も長者ではなし、あの子にかゝる身でないか。がらり廿兩、ま一年切まし。居なりに居れば借錢も先其分。賣買高い此節、貳貫目ぢかい廿兩。其方が手取に温まれば、兩爲と思ひ世話やけども、かの柄卷屋の半七と云ふ虫が差て、何の彼のと入性根。お花が一切呑込ぬ。是からは勝手次第。半七と云ふ職人の弟子、爰らあたりの拂ひさへ埒明ず。東ふさがりになッた者。打みしやいでもつぶ三文ないは知て

來な形容。

○山葵おろしに煮抜きの玉子　山葵おろしは髭武者の坊主の顔の形容、煮抜きの玉子は滑に白い阿花の顔の形容。

(一)御寺ならば…見せましや　法師の妻は寺院で大黒といふ。阿花も法師に買はれる身であれば大黒と同格のやうなとの洒落。すぐに七福神の縁で「惠比須顔」と出し、笑顔の義に聞かせる筆の巧者。「わッさり」は今いふ「あッさり」淡泊、手輕の義。「見せましや」の「ましや」は「申しや」の略。敬語。

○南無阿彌陀佛　此場合ひ猶「南無阿彌陀佛」を言ふ所巧みに法師たる所を示す。

(二)夜も早…ならず者と　夜も四つ

居る。あの様な獄道と腐り合たお花が行末、流浪は知れた事。少さいからの馴染なれば、よいこと聞く様にはござらぬ。どうぞ意見でも召れぬか。壁に馬乘かけては明べき埒も明ぬもの。前びろに手形しやう爲に呼に遣た」と語りける。(三)』門口には半七、聞けば悲しさ無念さの、格子の柱嚙ひしぎ、齒を咥しばり泣居たる。親仁は横手ちやうど打て、「扨々苦々しい。親方殿にお世話をかけ、不孝者と申さうか。その刀屋め知て居る。ならずものゝ大將、菰被りの下地、ヤイ花めはどれに居る。爰へ來い、用が有る。引ずりに往て、お客の前で耻かゝさうか」と。昔作りのつごと聲。お花は人目の耻かしく、「アイあの盃藤さんさよさん預かッて下んせ」と。言すて降りる箱階梯。「ヤア父さんか夜更て何しにござんした」と傍へ寄るを突倒し、「ヤイ不孝者。親方殿、お話しで一から十迄聞屆けた。半七めと云ふ騙子めと夫婦にしては、年寄た此親が鼻の下が干やがる。廿兩と云ふ金が天から降るか地から湧か。かたりめが挨拶、はらりしやんと切てしまひ、年切増て奉公するか。否と言へ分別有り。サア〳〵どうぢや」と腕捲り、摑み付べき顔色なり。お花ははッと胸塞がり、暫し泪にくれけるが、なう父さん朋輩衆は内證。客さん達の手前もあり、さもしい事を言はんする。勤する身の親達は、どの口聞ても可愛や親ゆゑ苦勞をする。定めの年も近づく。屆いた男を見定め。未の片附心がけ、身を安樂にして見せいと、云はぬ親は御座らぬ。節季〳〵にせびらかし、足いで又年を切まし、男に迄添せまいとはあんまり酷うござんする。ほんの親より繼父は猶大事と嗜み、隨分孝行盡せども、こなさん私にみぢんも憐みはござんせぬ。殺しなりと何うなりと、分別次第にさあんせ。半七

様と挨拶切り勸はせぬ」と斗にて、人目も耻ず大聲あげ、身を悶えてぞ泣き居たる。(四)『傍若無人の繼父冷笑ひ「よう吐すな盜人の晝寢も當があるる。汝が母に何の見込はなけれども、汝を賣て喰う爲女夫になッた。今の詞は誰が敎へた。半七の掏摸めにならふたか。ぺり〳〵吠る頬げた蹴放いて仕舞ん」と、武者ぶり付を井筒屋夫婦「年の內はこちの物、疵付させぬと挽放す。「思ふ男に添れぬからは殺しや〳〵」。「ヲ、殺しかねうか」と、擲合捻合大喧嘩、破れかぶれと半七襟引括げ、井筒屋の庭へつか〳〵。拇卷屋の半七と聲をかけ、九兵衛を取て突のけ、眞中にぜッかと座り、「コレ親父。其方はお花が繼父。酢につけ粉につけ憎いのも理り。此半七をすりの騙子のがんだうのとは、いつ騙りした盜みした。半七が目には其方を人賣りと見た、もがりと見た。よし夫は兎も角も、お花は己が女房すべい。奉公仕舞ふては、繼父殿でござらうが、主のある女房分別して物を云へ」と、せきくる顏の靑疊叩き散して詰かくる。(五)『ムウ刀屋の半七とは其方か。ぜれ顏見やう。はれよい男の。江戸元結にしゆす鬢。天窓付は兩替町。內證は曾我殿、見せかけ力身おいてくれ。此年迄敗毒散一服飮ぬ此親父。ゆすりはたべぬ。ヱ、慮外ながら、親も許さぬ女房とは粟田口へ徃きたいか。此娘女房に持てば小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへない樣で、なんぢやお花を女房ぢや。いき騙りとは其事。いッそ手を能う巾着か屋尻切れ」とぞ喚きける。(六)』半七ぐツと急あげ。「ムヽヶよう云ふた。小豆粒は持ねども小判と云ふ物持て居る。來年の給分廿兩渡すからは、お花は身が女房」と、紙入より金廿兩取出し、「ヲヶ金でした。小判と云ふ物近付になッて置け」

井即ち今の十一時頃。半から直に半七に掛かり二錢の才覺ならず」から「直に「ならずもの」と掛かる、文勢飛動。

○筒井筒　暗に井筒屋の屋號に通ふ。

○井筒、水、かへほして、流れ　共に井筒の縁語。

○きんか頭　禿頭の義。禿げて光る故提灯も稻無用との義を暗に滑稽の意を持つ。

○小ゆろ　小女郎の義。小阿魔抔と同義。

○手形　元祿の通用語。今日の證書と同義。

○がらり壯南「がらり」は物音の形容。一寸身動をしても壯兩金を費したとの義。「おざり三百」などの同樣の句。

○まん一年　今一年の略。京坂方言。

○入性根　今言ふ入れ智慧。元祿時代の通用語。

○半七といふ職人の弟子　此間無用の文。却って煩雜を極はめる。

○打ひしやいても「打ひしやいても」の轉。「ひしやぐ」は挫く義。

○つぶ　金錢の粒。

○よい事聞くやうにはムらぬ　行末流浪すると思へば餘り好い感じでも無い。

○壁に馬乘りかけて　俄に迫ッた場合ひとなる事の形容。

○四孤かぶりの下地　乞食の下地。

○つこま壁　壁原不詳。恐らッた壁音。

○杜鵑ぬが挨拶「挨拶」は元祿時代で「交際」の義。

○はらりしやんと　ぱらりと落ちる。

と、眞向に投つくる。「ヤヽ半七。あの娘はまだ五十年が百年が、顏に色氣の有る中は、奉公さして喰ねばならぬ。千兩道具の娘を、廿兩の目腐金で、女房に持うやべかこまあなるまい。何所で盜んでうせたやら、後の詮索喧しい。己に呉る」と投つくる。「ヤヽ金貰はう好みがない。己に呉る」と投返し。投つけ打つけ摑みあひ、お花ははッと泣出す。太郎左衛門つッ立、「コレ半七、お花はこちの奉公人。親父とのせりふなら何所ぞ外でしたがよい。門には大勢人だかり、客の邪魔して貰ふまい。それ男共追出せ」。「心得太兵衛長兵衛五介、ばら〳〵と立かヽり、無理無體に引出す。お花はわけも正躰も、涙ながらに取付を、どこへ〳〵と押分る。親父を中の關守の、雪駄片足になら草履、足には足らぬ半七が髻を摑んで引立しは、目もあてられぬ次第なり。「ヤア親父も先歸ッて、諸事談合は明日の事」。「ヘヽアそれもさう、然らば明日參りませう。申までは及ばぬが、花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者。汝明日來て何とする。待ッてをれ。ヱ息せい張て喉が渴く」と、ごぶり〳〵と熱花の、茶びん天窓を振立て、河原を西へと歸りける。(七)』斯る哀の最中、二階の階子ぐわた〳〵、數から坊主の佛頂顏。「お花そこに何して居る。先の押への盃はいつの世に戻る事。物體今夜は和女が顏浮々せいで酒が呑ぬ。氣を替て西石懸の關東屋で騷がう。太郎山乘貸してたも」。「ヤア殘りの子供は西石懸が天竺へも御同道。お花一人は我等が內。手放しては內證に、氣遣ありまの」。「いふな〳〵。皆迄云ふな。湯のだんこか。湯治するなら遣ひ錢、見事な事か」と金三兩、衣の下より投出せば、是こそほんの、忝け有馬の湯のだんこ、ゆのだんこ。今はありま

のゆのだんこ、しよんがえ。西石懸へと騷ぎける。(八)』同じ所も西側は、祇園丸山前にうけ、芝居の櫓暗き夜も、行かふ人の提灯は、月もおろかと照渡り、見おろす〳〵。おろす駕籠からぬッと出た、ほうらく頭巾の醫者殿は、藥師如來の引合、つぼ屋の客と脉をとる。それ〳〵〳〵花車も亭主も槌で庭掃く人よびに、走る足元おかるぢやないか、お玉ぢやないか。「お玉やあい」。「はて是から呼で屆くものか」。「わけもないと云はん紋紗の衣着て、ぞめき姿ののら坊主。後姿見た樣な。ヲ、それよ、あれは愚僧が五人組。萬年寺の同宿、忍ぶ戀路の摑みどり。深綠屋の小丁稚が、一中節の川風に、聲も廣がる扇屋の、仲居のまんが供して通る、あれは澤村長十郎。あッたら男を頓て大坂へ下り舟。歌流金子も難波津へ、咲くや此花其花の、噂も戀の種ぞかし。苦のない女郎の仇口を聞くにも增る涙の露。お花は一切氣も浮ず、四條の河原幾萬人、ぞめきの中に彼の人が、若やと目をも花色の、張樊頭巾しよんぼりと、番屋の蔭に佇みしは、慥にさうぢや、噫ちよッと逢たい。云ひたい事も山衆の手前。客の手前も量りかね、床柱に打凭れ、念佛申して紛らかす。(九)』料理人の傳介盃を下に置き、「ヤア花樣の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌も古めかし。町方に流行る阿彌陀の光と云ふ事して、御一座の娼婦樣方、誰樣にても阿彌陀如來に當ッた者が豆腐と酒を買に行く役人。色里に無いづな騷ぎ。娼婦樣方いかに」と云へば、「ヲ、是は珍しい。早う〳〵」と紙押廣げ、蜘のす御光延紙引さいて錢の高。「もみ鬮は惠方果報、後に無理云ふまいぞ。サア今が大事の所」と、鼠なきしてしめあげに、「さよ樣どうぢや。十六文。お仕合〳〵。藤さまは、三十六文。小めろの林は、十文。それは

さつぱりと。(五)盜人の晝寢も當が有る云云の語巧みに欲性の老父の口吻を描く。○つか〳〵〳〵、柄卷屋　同壁の文飾。文に活氣が有る。○がんだう　「强盜」の音の轉。(六)はれよい男の「はれ」感歎詞、やれの義。「の」感歎詞、なう(嘯)の約。○しゆす髮　繻子髮と書く。元祿時代流行の麗しい髮。○天窓付は兩替町、內證は曾我殿兩替町風といふ髮は元祿時代の流行で、花柳風流の少年杯が結ッたもの。曾我殿は此頃通用の隱語で「貧乏」の義、即ち古への曾我兄弟は赤貧で育ッたとの口傳から起こッた語。兩替町は此文だけで―其語の直接の意義が金錢に關係の有る所から―富豪の義を含ませた語、一方で髮、一方で富豪、一言で二義を持つ。つまり髮の風は兩替町で、富者らしいが、內證は貧乏であらうとの義。端倪ならぬ計りの奇妙の文、特に此邊が此翁の得意である。○いきがたり　太太しいゆすり。(七)小判といふもの近付云云　一句充分の憎みを盡くす。○やべかこまあなるまい　本義未詳。(七)心得太兵衛「心得た」と言ひ掛け、直に都合よく太兵衛などと出來合ひの名を出した句。出來合ひながら文勢急激。○にえ花　今言ふ「煮花」。茶の緣で「茶びん頭」へ掛か

濱なみさゞ波や。しが樣たッた二文か。お杉はなんぼ」。「悲しや己は三百ぢや。エ、儘よ前垂質に置う迄」。「ヲ、云やる迄ない。錢がなくば布子を。はぎさん島さん、是も如來ははづれた。サア是からは花樣、きり〳〵もみ鬮明さんせ」。「ア、忙しい何ぞいの。私が樣な因果人が、なんの阿彌陀になるものか。これ見さんせ」と押披けば、「そりやこそ云はぬかサア花樣が阿彌陀ぢや。名代は叶ひませぬ。娼婦樣に豆腐買して、居ながら田樂喰ませう。きつう坐敷が晒落て來たサア面白い」と笑ふにぞ、お花は何がなかこつけに出たいは心一杯。猶も色目を曉られじと「ア、迷惑。そんな事に今まで歩いた事なけれども、てんほのかは往て除ふ。其間に用意して置かんせ」。「ヲ、用意擂子鉢刷題擂木子しやに搆へ、待て居ます早う〳〵」。「ハヲそこらは合點ぢや」と姿も下女に二世かけし、男の爲や徒歩跣足、つひに被なれぬ置き手拭急げばまはる小褄ほら〳〵、杉が前垂かり橋を、足もしどろに行過る。(一〇)』半七は番屋の影ちらと見るより、「コレ〳〵爰に居る」と招かれ、「ヤア半さんかいの。逢たかッた」と抱きあひ、兎角は涙ばかりなり。「コレ泣て居ては濟ぬこと。今宵中に大坂迄退ねばならぬ。サアおぢや」と手をひけば、「ヤア待んせ。先刻の小判どうしての才覺ぞ。詮方なさに恐い事などさんせぬか。有樣云ふて落付せて下んせ」。「云ふ迄もないこと。此身になッた半七を、粉に叩いても一歩一つ誰が貸さう。先度の脇指三十二両に賣拂ひ、銘なしの下坂寸も燒も替らぬを、八兩で買ひ替へ、貳両で銘を彫せ、拵へ濟して大坂へ下し、其賣へぎの廿両。たとへ首になるとても、もう取返しのならぬこと。此上ながらも罪に遇ば我一人。伯母婿伯母にも難儀をかけず、和女の行末頼むため。心ざすは大坂。誠に

る。
○茶瓶頭　所謂藥鑵頭。
（八）此坊主前に無用の人物、今是から阿花が家を拔け出すため有用の人物となる。
○藪から坊主　俚諺の成句「藪から棒」から急に通音で「坊主」と出した句。
○山衆貸てたも「山衆」は「をやま衆」の略、即ち遊女の義。
○氣遣ひ有馬の下文の「湯治」及び「小唄」の伏線。
○遣ひ錢、見事な事。「遣ひ錢」は元祿時代の通用語、やはり費す金錢の義。即ち、金が用とならば遣ひもしやう、いざ見事であらうとの義。此邊の言語は實に元祿時代京坂の普通會話を直寫したもの。

和女の繼父が、盜人と云ふたも虛でない。我身で我身が恐しい」と、語ればお花も身を震はし、「そんな事であらうと推量に違はぬ。いとしや私ゆゑ種々にお身を狂はする。詮議の時は皆私が業にして、身を逃れて下さんせ」。「罪に遭ふとも逃るゝとも、分隔はないわいの」。「ほんにさうぢや女夫ぢやもの」と、又締寄せて泣く中に、跡の二階に「花樣遲い、こりや豆腐に買れてか。迎ひに往け」と、聲々の南無三寶。見付られては足元暗き、いせきの石に踏くじき、長き緋絹裏足纏ひ、走るとすれど夜中の太鼓。どん〳〵ぐりのづしを出れば建仁寺、だらりが鳴ぞだらつくまいぞ。駕籠よ〳〵と呼れども、無いか聞かぬか耳塚の、西に錢座の名のみにて、小錢なければ草鞋も、二足を小判一兩で、買ふて穿く身ぞ哀なり。（一一）』

阿花半七道行

幾夜〳〵の憂勤。七枚起請そら誓文。日本國の神さんを、欺した罪か欺された、人の恨かねたみぐさ、つひに我身の下り舟。乘おくれたる淀堤。淀の河水行く末は、いかなる罪に逢坂の、道がどこやら何里やら。身は初雁よ初霜に、寢亂れ姿忍ばしと、前垂とッて丸絆の、襷をじみな抱帶。しやんと結んで引締て、歩むとすれど行き馴れぬ、道はかどらぬ女旅。これも何ゆゑ男山。作りし罪は山崎の、麓はあれよあはれげに、いつか都へ歸る山。春は梢にいろ〳〵の、花咲く山にと山巡り。となりは青し夏山の、かしは散るてふ卯の花や。山時鳥山あひの、景色の花に顏つくる、笠を傾むけ山めぐり。秋はさやけき月影の、いたらぬ山は無けれども、わけて名高き山うけの、月見る方へと

○見おろす〳〵曲の調子爰で一段改まッて花やかになる、其境界として緩い句を挿んだもの。作曲の肝要。
○ほうらく頭巾　今いふ雲碌頭巾かといふ。
○つぼ屋の客　藥師佛は藥の壺を持つ緣から、つぼ屋に掛かる。此つぼ屋とは實際の屋號か。さも無いならば、文は稍徒らに掛かッたとの批難も入る。
○槌で庭掃く　忙がしく騷ぐ體の形容。
○廣がる扇屋「廣がる」は扇屋の緣語。
（一〇）づな騷ぎ　當て字すれば「圖な騷ぎ」とも書く。「づ」は元「づ横柄」、「づぶとい」などのやうに程度の毒毒しく大きい意の接頭語。それを

山巡り。扨又冬は遠山の、霙もてくる雲のあし。賢き雁は南向。北を後に山のこす。山又山や峰白し。雪を誘ふて山めぐり。巡り〳〵て山姫の、山衆交りの淨瑠璃も、夕べ限りの口癖や。今日は姿を町風に、扮すとすれど隱れなき、帶のひらかた近くなる。松原過て河邊を見れば、あれ〳〵あれ五つばかりの子を眞中に、乘合舟の女夫づれ。思ひなき身の高笑ひ。余所のつまごと浦山し。流れわたりの情であろと、網の目にさへ戀風が溜る。荻の〳〵上風身に染々と、切て一夜は虛なしに、ほんの女夫といつの世に、いはれつ云はん情なやと、抱き締たるそぎ袖も涙にひたす計りなり。（一一）』間夫で逢ふたも一昔。それ覺えてか一昨年の、十七日のおぼろ月。宵のがさけにほの〳〵と、二人火燵のじやらくらを、憎や烏に起されて、あかぬ別れの朝より、日文ちぶみの付届け。いとしごげんと書たるは、ほだしの種か花すゝき。ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結びぶみ。方樣まゐる花よりと。思ひまゐらせ候べくの。わけの酒盃色見えて、わきていづみの思はくは只逢ひまして〳〵。又の御見をまづかしく。その言の葉も昨日といひ、今日と暮して飛鳥川。流れの里ははるばると、跡にながらの夕あらし。髮のをくれのはら〳〵〳〵。共に亂るゝ我心。曇ある身は恐ろしの、お城も近き難波江の、よしあし知ッてはまる身を、異見は釋迦に京橋の、此方の森を隱家と、暫らく勞を晴らしける。（二）』

下の卷

急ぐとすれど秋の日の、短かきあしの難波潟。京橋より暮かゝり、問ど隱れも長町の、伯母の家作常

爰では直に「な」を添へて形容詞にした。即ち、非常な、えらいなどの義。
○しが様「さざなみ」の縁。
○布子をはぎ様布子を「剝ぎ」と掛けた語。
○てんほのかは元祿時代の流行語。今いふ「へちまの皮」と同義。即ち、朝めし前、譯も無い杯の義の句。
○下女に二世かけし　下女に「似せ」と掛けた語。
○前だれかり橘　前だれを「借り」と掛けた語。
(一一)賣り減ぎ　賣ッて殘ッた儲けの殘金。
○首になる　成句。罪の結果が首に及ぶ。
○豆腐に買はれてか　一句輕妙。
○聲聲の南無三寶　一句敏捷。
◎阿花半七道行

常の、咄に大方顯當て、伽羅細工の甚五郎様は此方かと、窯明れば、「ア、いかにも是が甚五郎。何方からぞ」と云ふ伯母の聲。「イヤ京の半七下りました」と、お花諸共つッと入り、「ヤア是は〳〵珍しい。文の來たは一昨日、間もなう何の用あッて。ヤ連も有るさうな誰様ぢや是へ」とあひしらふ。「伯母様お久しうござんす。いつぞやお目にかゝッた花と申す者。御無事で目出度御座んす」と、腰打かくる二人の體、心得がたくや思ひけん。ヘアようこそと斗りにて、不思議さうにぞ見えにける。(一)半七色を曉られじと、「お花ことも奉公の年明。和泉の親元へ歸る道幸ひ同道致しました。イヤ先それはさう。誂への脇指。先様は侍衆、お氣に入ッたかいらぬか、萬一お氣にいらいで、甚五郎殿や伯母様に、難儀のかゝる事あらば、其難を私が身に受けうと存じ參ッた。其次第が氣遣な。どうで御座る」と言ひければ、「ア、爰な人、つがもない。細工がお氣に入ぬとて、何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其上悦びや、一昨日下ると其儘、お屋敷へ持參めされしに、柄まはり緣頭鞘の塗、萬事殊の外御意に入、甚五郎が女房はよい甥を持た仕合者。後々はお屋敷の御用も仰付られ、出入させとの御念比。いよ〳〵細工に精出しや」と、聞くより二人は手を合せ、「エ、有難い忝けない。天道のお助け。命拾ふた。お花悦びや。嬉しうござる胸の痞がずッと下ッた」。「ヲ、道理〳〵。武士を相手の商賣、大事に思ふその冥加。今日又俄にお屋敷から脇指について、何やら急なる御用とて、甚五郎殿を召に來て、晝過から參られ、今においてお悦びに、刄渡しの御祝儀。お振舞が有るさうな。定めし醉て戻られう」と、云へば半七色違へ、「ム、脇指について急用とて又呼に來ましたか。サア お花京から道中云ふ通り、かう有らうと思ひし事。我は是に待うけ、甚五郎殿に對面し、脇指の御祝儀身に引受て祝ひ、運に依て今夜中に、お屋敷へ、召出されうも知れぬこと。和女は此邊旅籠屋に一宿し、明日はそう〳〵親元へ」と、云ふ聲付も悄々と、「そうしては半七が一分は立ねども、噫なんとせう暇乞ぢや」と、胸に手を組み俯向て、涙を隱す斗りなり。(二)お花も涙に聲慄ひ、「聞えぬ事云ふてくだんする。悦びも悲みも、二人が身に引受る、約束ぢやないかいの。甚五郎様に逢まして、有無の事を聞く迄は、私や爰を動かぬ。伯母様も女子ぢやが、男の一世の大事の時。見捨られうかコレ半七様。むごい事云ふお人や」と恨み詫ちて泣きければ、二人の顏をつく〴〵見て、「其方衆が云ふ事は、何の事やら此伯母は、すッきりと合點がいかぬ。此方の連合甚五郎殿は、武士附合して堅い人。半七も侍筋。行儀強い若い者と、常々自慢し置きしに、夫に娼婦を同道し、初めて對面させられうか。一町北はみな宿屋。二人ながら早う往て、甚五郎殿に逢たくば、半七ばかり明日おぢや。夫婦にも成果せ、首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此體見せ、大事の甥を連合に見限らするが口惜い。此世話やむも大切さ。サアはや〳〵」と氣をせけば、「御憐みの忝なさ、涙が溢れ有難し。然らば伯母御へ一寸内證申す事あり」と、にじり寄れば「マア待ちや。歸られうかと思ひ、あぶ〳〵する」と、庭におりて耳門の、鏁をしやんとかけ、「サア何事ぞ氣遣し。語りや聞かう」と云ふ所へ、甚五郎邃だしく門叩いて、今日が暮て門鎖る。明よ〳〵と云ふ聲に、そりや情なや歸られた如何せん。借屋の路次へも廻されず、押入には夜着布團。何所へ隱さんかやはかくるゝ。帷子入れて夏

一〇七枚起請そち書文　「七枚起請」は數多の客にそれぞれ欺いて數多出す起請。「そち書文」は不眞實の書文。
○ねたみぐさ　實物の草では無く、唯「ねたみ」を婉曲にした語。但此語は本文に殿しい關係無し、言はば此「ねたみぐさ」は句末の埋め草。
○罪に逢坂　罪に「逢ふ」と掛かる語。
○作りし罪は山崎の　罪は山ほど多いとの意。以下山づくしの所作になる故、文句むしろ愁歎の意無く理想的の劇に傾く。「ぬくりぬくりて山形の」までが山づくしの所作、一轉して山の縁から山衆即ちをやまに移り、自己の身の上に至る。

過し明長持に秋の鹿。つまも憧れて諸共に押隱すこそ哀なれ。(三)』蓋を押へて聲立てまいと、欠伸ながら「ア、とろ〳〵と假寢の、寢耳にけはしい叩きやう」と、耳門明れば甚五郎、せきにせいたる顏色。血眼になッて駈上り、「ヤイ女房共。甥のとのに掛ッて此甚五郎が身代破滅。命の大事になッてきた。此脇指折紙付正銘の信國を、今の世の廢物下坂にすりかへ、銘を似せて突つけた。先は武家方出入の門。盜人は女房の甥。此甚五郎が存ぜぬと云ふ言分けならず、京へ詮議に登ッては欠落者と町内へ、付屆にあふては人中で口利れず、死ぬるより外文珠の智惠にも能はぬ」と、脇指からりと投出し、溜息ついたる斗りなり。伯母ははッと胸塞り。扨は半七が身に、覺ある詞のはし。思ひ當ッて途方にくれ、暫し返答もせざりしが、半七元より覺悟の前、長持の蓋押あけ、出んとするを、睨みつけ〳〵、脇指取あげ「なう甚五郎殿。私は女子の、物の道理は知らねども、ついて廻る身の因果は、大名高家智者學者も免れず、是は正しく半七めが業なれども、半七がして半七はせぬ心。何を隱さん元彼の信國は、常々語りし我家に、三代迄は崇ると云ふ、性にふさはぬ脇指。一目で是はと思ひしが、武士の上こそ刄物の相性、町人職人に成果て、何の咎の有るべき。親もない一人の甥。是をつでに一國の、お細工の得意つけたさに、私がさもしい心から、律義またい半七に、惡根性が付そめ、身の大事仕出したも、往廻ッて三代目の手に觸しその祟。知ッて居ながら此伯母が、おしごと仕たる其咎め。因果とほかは思はれぬ。耻かしユござる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る。廿年足ず連添て、何を男の爲もせず、身の難儀をかける事、恨にあらう憎からう。それが悲しい面目ない。許して下さ

○ひらかた　地名。
(二)それ覺えてか　一昨年の、十七日の朧月　神韵縹緲の名句。後の作者が此句法を脱胎して常盤津の「忍夜戀曲者」を作り、「それ覺えてか君さまの、袴も春のおぼろぞめ」の妙句を成した。
○まづかしく　「まづ」は先、「かしく」は今のもと。
●下の卷
(一)短きあしの難波潟　「あし」は秋の日足と蘆との二つに掛かり、「難波潟」を喚び出す。
(二)つがもない　つまらぬ事をの義。
○半七が一分は立たねども云云　此邊陽に隱して陰に泣く、胸中の大混雜。巧みに二三の短句で寫す。
(三)すッきり　今いふ「すッかり」の原語。
○世話やむも大切さ　世話を病む、即ち世話を氣に病むも甥の身を大切と思ふ故。
○あぶあぶする　あぶなく思はれる。
○今日が暮れて門しめる　今暮れたばかりだに早くも門をゾめたのかと不審がる句意。節略の句法。
○かやは隱るる　「何處へかくさんかや」の意。「かや」は感歎詞。一轉して「蚊帳」の意を含ませ、「蚊帳は最早秋ゆゑ隱れて無い」との義を持たせ、そこで「秋の鹿」の語が出る。一方に於いて「かやはかくるる」は「やはか隱るる」の義、即ち、どうして隱れおほせやうとの義をも持つ。文章簡潔ながら些し無

れ甚五郎殿」と、夫の膝にどうと伏し、聲も惜まず歎きしは、理り過て哀なり。(四)』「甚五郎も男氣の、夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業、存ぜぬと云ふて此甚五郎が立ものか。見ず知ずにも義理に依て、命を捨るは男の役。氣遣するな首切れうが、牢へ入らうが皆我科に引うけ、半七に憂目は見せぬ」と、心は利發に逸れども、差當ッて相手づく。思案にくれてぞ見えにける。女房は手を合せ「ア、情の末とて忝ない。侍衆は斯樣の事を皆御存じ。脇指の因緣を申し、伯母一人の科に落とし、こなたにも半七めも罪を脱れて下され」と、脇指取てすらりと拔き、「本のは信國是は下坂。作は替れど燒刄寸尺一對なれば、一家に祟るは同じこと。是故に父樣が、人を打て其刀でまッ此樣に押肌脱ぎ、逆手にとッて左の脇ぐッと立て」と云ふ詞。直に突たて、右へさッと引廻す。(五)』是はいかにと甚五郎、縋付ば半七夫婦飛で出、「伯母樣狂氣か情ない。身に覺ある故に死に來た半七」と、脇指に取付を突除て、「ヤイたわけ者汝を殺す程ならば、なんの伯母が長口上。自害をもする物か。手の惡い事仕たれども、欠落して身を隱さず。伯母婿の難儀を思ひ、身を捨て來た心。さすが筋目程あッて、切ても是はでかしたな。汝が父御は我兄樣。最期の時に預りし甥なれど、着替一つ帶一筋、何を優しき事もなく、預りし甲斐もなかりしに……大事に替る。命其方には遣ぬ。皆兄樣への奉公ぞや。伯母さへ死ぬれば、科は一人に極ッて、脇指は上り物。外に御詮議は殘るまい。刄物の祟りも三代濟む。行末目出度う出世して、親祖父の名字を繼や。サア早う往や〳〵」と、深手に息もきれ〳〵の、血汐に落る涙の體。花はわッと咽返り、半七は猶涙にくれ、「伯母伯父は親同前。張付にかゝるとて、一寸も

理な所も有る。
(四)付けとどけ　元祿時代の通用語。行くさきへの通知。
(七)ばッた草葉　上に町内の者の騷ぐのを受け、其物音として「ばたくさ」と出した句。それを促聲にして「ばッたくさ」とし、更に一轉して「ばッた(蝦蟆)」に通はせ、其緣から直に「くさば(草葉)」と出す、千古至妙の簡潔な句。

退ませぬ」と取つけば甚五郎、「ェ、不合點な。其方が爰に狼狽て、伯母に犬死さするか」と、二人を取て突出し、鉤鉄樞しッかとふろせば、「なうそんなら退ませう。ま一度逢せて下され」と、夫婦は門に打凭れ、聲を揚てぞ泣き居たる。(六)『伯母は苦む息づかひ、「ナウ甚五郎殿。人立のない前に、早う死にたい止目は、どこぢや〳〵」と悶ゆれば、涙ながら甚五郎。「女なれども武士の切腹。止目とは勿體なし。介錯せんと立寄れば、「いや〳〵人の切たと我切たは、疵改めに顯れて此方の言分むづかしい。急所を敎へて下され」と男增りの自害の體。夫はいよ〳〵心くれ、爰を〳〵と我喉笛を、指せば頷き振上る、手も弱り、はッたと落て、太股に突立る。又振上れば突外し、肩先がばと突込たり。左手へはづれ、右手へはづれ、苦しむ顏。夫は悲しむ南無阿彌陀。南無阿彌陀佛の聲を力に、喉のくさりを一刀。うんとばかり、目もくれなゐの薄もみぢ。夜明の嵐に散失せし墓なき最期ぞ是非なけれ。歎きの聲は何事かと、向ひ隣裏借屋。潛戸蹴放し駈入て、やれ女の腹切自害よと、組中年寄月行事、町代夜番が棒ちぎり木。ばッたくさばに置く霜の、墓なき命南無阿彌陀。南無阿彌陀佛疑ひなき、西方極樂淨瑠璃に語りて哀を留めける。(七)』

(總評)此一曲近松翁の世話物中其晩年の作には最も遠いものながら一個の作者近松門左衛門の作としては前に種種の時代物を書いた後の筆とて老巧の作たるには違ひない。刀屋の主人は賓客として出ただけに止まッた、是は面白く無い。眼目たる伯母の描寫は翁の筆としては左して俊れたのでも無し、普通と言へば言ふものか。阿花は唯是色に迷ッただけの可憐の

婦人、半七は律義ながら同じく徒らな愛に溺れて終に伯母を殺すに至ッた遊治郎、甚五郎是また普通の人、光滿寺の和尙は何か當時の社會を穿つための人物らしい。但し場面の緩急は頗る宜しく、化性の阿花に欺かれて刀屋の主人が一旦之を半七の伯母と思ッた、ここに既に滑稽の意あり、一轉して眞の伯母が出て局面に疾風を吹かせ、同時に甥を思ふ伯母の優しい情を見せ、刀の因緣になり、轉じて花街になり、欲性の老爺が出て大波が起つ。此老爺の描き方は殆ど曲中の第一で、惡惡しい語氣殆ど眞に迫る。樓主太郎左衛門は算盤一方の肌合ひ、是またよく寫された。惡性の九兵衛老爺と慈悲性の半七の伯母とは曲中に好對を爲す。

道行の段は翁の作としては上來のものでない。「曾根崎心中」のより遙に劣る。下の卷是また上中の二に全體及ばず。趣向の末を結ぶのに汲汲とした痕跡がありあり見える。但し半七が表面に心の愁歎を含み、裏面におづおづ苦しむ體を描いたのは巧みであッた。

全體の趣向に於いては甚しい無理も無い。肝心の伯母のを今一息深く描いて欲しかッた。

淀鯉出世瀧徳

上の巻

曲輪住ひは時雨の雨よ。ふッつふられっ、むら〳〵さめの、まだひぬ露もまだひぬやよや。ァ、霧は、ふだんの伽羅を焚き、壹にも勝る燈火は、月常住の夜見世かや。朱釋迦さんやもいかな事。直下にみつの浪花の里。戀も所の氣につれて、萬手廣き大曲輪。色に擲つ金銀は、土か砂場の西口や、思ひほころぶ袖口を、九軒阿波座の野良鳥。月夜はなほか闇の夜も、瓢箪町を腰付に、異見ふる手の印籠の、底に焚がら吸がらの、煙に油煙たな引て、霞が關か東口。爰ぞ浮世のだての大木戸。あけぬは銀のとがしの關。(一)』夫つら〳〵かもんみれば、大盡客衆の秋の月は、小判の雲に光り、小傳よびまし、や長へんじ、驚かすべき夜半もなし。三番太皷つてんてん。天下は夜なか八つ過、曲輪は戀の壹中や。獨籠やろ斗りぞ寢聲なり。(二)』頃しも初冬、玄猪餅。小豆繩のべんがら縞。羽織の上に手拭お び、頭巾鼻まで顏隱し、女郎買ふべき風にもあらず。さながら用なき體にもあらず。そちらへ何と も片づけて、思案に落ぬ風俗。新町橋の橋の上、橋辨慶が薙刀の、鞘拾ふたる如くにて、うろ〳〵と して立たりしが、ちよこ〳〵と立寄て、「是鵺籠の衆。卒爾ながら物問ひませう。今宵九軒の井筒屋の客は、何處衆の何とした人。まだ爰に遊んでか。どうでござる」と尋ねける。(三)』「ァ、されば井筒屋のお客は、隱れもない八幡の住人、江戸屋の勝二郎殿。替名は鯉様。拾兩萬遣ふても、こちとが百

(一)曲輪住ひは…むらむらさめの曲輪住まひは時雨と同じやうで、瓦ひにふッたりふられたりとの義。時雨の縁で「村雨」を出す。「ふッつふられっこ」の七言を受けて、似た調子に「むらむら」と重ねて七言にした所如何にも手際な口調で、後世の淨瑠璃に大分此眞似が有る。

○霧は…夜見世かや「ふだん」は不斷の義。此二三句は傳來の古句を醸案した物。古句に「霧は不斷の香を焚き、月は常住の燈を掲ぐ」とある、此句の手近い例は既に太平記にも見えて居る。

○金銀は土か砂場か「砂場」は此里の遊の大字。金錢を土か砂と擲つとの義から直に轉じた。

○ほころぶ　其縁語「袖口」。

○九軒　袖口を「くけん（絆けん）」の意。

○瓢箪町　その縁語「腰づけ」。

○腰づけ　その縁語「印籠」。

○棚引きて　其縁語「霞が關」。

○とがしの關　其縁で安宅勸進帳のもぢり。

(二)夫つらつら…夜半も無し　此一列安宅勸進帳のもぢり。よく原文の句法に似せ、輕快至妙非凡の名筆。

○天下は夜なか　世間の夜中が曲輪では晝中であるとの義。

○獨籠やろばかり　そゞろ屋なり　獨籠を組む屋だけが眠さうに聞こえるとの義。此「獨屋な

錢落いたとも、思はぬ程の身代なれども、新七とやらいふ手代、堅むくろにせいたうし、一門衆町所迄賴んで、土藏〳〵に封をつけ、一分の金も遣はせなんだげなを、惚兵衞といふ相手代、若い旦那の氣を詰させ、頻はせてはならぬと、新七を追出し、氣儘にぐはんぐはと遣はせる。鯉が生洲を飛で出て、日比馴染の茨木屋の、吾妻をとんと請出し、明日は直に八幡へ「今宵曲輪の名殘ぢやと、井筒屋で大振舞。何だやは知らず井筒屋の、庭から門まで長持で通られぬ。今夜の物入ざッと積ッて二百兩。扨も金は片いきな。有る所には有るものか。私等は夜晝あがいて、三百は儲けかねるに、能う飲だとて一歩取り、兩肌脫でこそぐられ、鼻の穴へ胡椒入れて、くしやみしても一角。いかな鯉でも鮒でも、一くらあかう」と語りける。(四)』新七扨はと恨しく、腹の立つにも主思ひ。「ェ、夫は聞及うだ分限者。ずんと若い人ぢやげな。仰山な酒呑と聞たが、今宵も酒であらうの」。「ァ〳〵ならびもない呑抜。親茂庵といふたも、命を酒に替られた。鯉殿の母御ぜも、元爰に勤めた人。どちらへ似ても蛇の子孫。夫でもよい衆のしるしには、萬事に達した器用人。能の脇師を手いけにして、九軒で主の座敷能。常住酒で足ひょろつき、三番與も高砂も、皆猩々の亂れかと、思ひ升」とぞ笑ひける。(五)』女房お半も手分をして、見はづすまい目もきよろ〳〵。鯽堀邊さ迷ひ來て、夫を小影へ咳ばらひ、招き寄すれば新七合點、そッと寄れば耳を寄せ、「なう今迄、西口につけて居ましたが、爰へはまだ見えぬか」と呟けば、「ェ、よい〳〵」樣子は知れたぞ。まだ井筒屋に居らるゝげな。人が見れば不審が立つ」と、一つ所に立もせず、橋を越たり

(一)夫つら〳〵かもんみれば…　原文の句法を模倣した。

(二)頃しも初冬…　玄猪餅は陰曆十月亥の日に食ふ。

(三)「ァ、されば井筒屋の…　原文の句法を模倣した。

(四)「ァ〳〵ならびもない呑抜…　原文の句法を模倣した。

(五)女房お半も手分をして…　原文の句法を模倣した。

渡ッたり、忍び竚む夫女の姿、夜見世戻りが氣を付て、「ヤアこッてりと味な事。妓狂ひよりあの方の、實入が能らう」といふも有り、「時分から心中の下地か。又義大夫が口の端に、新町橋をかさゝぎの、橋」と語りて行く人も、絶て其夜も更にけり。(六)』「なうあれを見や。中から提灯引舟交くら。禿が謠ふて客送る。そりや是に極ッた。和女は駕籠に取つきや」。「こッちへ任せて置しやんせ」と、大門際に待かくれば、「遣手のつなぢや。羅生門あけてたも」と云ふ。茨木屋の大盡。鯉にはあらで雜魚場の人。「すゞ木樣明日。駕籠の衆頼む」。合點と北へ走れば新七夫婦。なむ三枚肩見送りて、口を明てぞ惘れたり。「それ〳〵そこへ又提灯。今度はよもやはまるまい」と、窯くゞるを手ぐすね引、女房しかと引捉へ、見れば色は眞黑に、横肥ッたる菊石頰。道頓堀のさど島傳八。はッとしらけて立退ば、傳八も膽潰し、「是は君何し給ふ。人違へとは存ずれども、色に袖を引れて、神ヶ忝なう思ほゆる。ホ、〳〵。しづも昔は戀を磨き、年中曲輪に入びたり。太夫天神に引ずり引張れ、夫で顔が引つッた。西爪の樣な顔なれど、色は黑實。ずんど風味のよい男。神ぞ一切振舞たい。ホ、〳〵」。笑ひて南へ歸りけり。(七)』暫く有ッて井筒屋の、能が濟だと出入の者。兵法遣ひ座頭茶の湯者古道具屋。大酒食悦お影を蒙る八十末社。流石の曲輪駕籠きれて、雪駄片足の醉潰れ。遙かの跡よりのさ〳〵と、彼奴は手代の惣兵衛め。同道は侫人組、能の師匠の富川め。京の浪人軍四郎。醫者はすれども、本道守らぬ目藥師なんど。中にも惣兵衛かさとッて、「なんと何れも旦那のはゞを御覽じたか。あれみな我等がさする事。兎角此惣兵衛と肌を合せ、羽翼に付て廻らッしやれ。一期の身代固めて遣

り」で何と無く深更の趣きを見せたのが妙。
(三)玄猪餅　餅の縁で小豆織。
○小豆織　其縁でべんがら（茶紅の染料）。
○橋奪慶　上の句の「橋」を受けて早速の頓句。
(四)せいたうし　語原未詳。牽束の義。
○遣はせなんだげなを　遣はせなかッたとか言ふ事であッたのを。
○相手代　「相」は「相弟子」などの「相」、同勘の義。
○ぐはんぐはと　ぐんぐんと＝ずんずんと。
○一くらあかう　土藏一棟は空にならう。
(五)足ひよろつき　…思ひ升　翁得意の例の輕口。
(六)目もきよろき

堀」。
○夜見世戻り　遊里をひやかして歸る人。露店ぞめきの義ではない。
○時分がら　元祿時代の通用語。のいふ「時節がら」。
○義大夫が口の端に…かわさぎの　此頃惰馳を義大夫にして謠ふ事流行した故の世間咄し。新町橋を「貸す」と掛かったもの。
(七)遣手のつな　おつなといふ名の遣り手。其縁で「羅生門」。又其縁で、「茨木屋」。
○鯉　其縁で、「雜魚場」。
○雜魚場　其縁で「すずき（鱸＝鈴木）」。
○なむ三枚肩　南無三寶に掛けた句。
○はまるまい　欺かれまい。
○しづ「賤」の義。

う。ハテ旦那の身上で一年に、千兩貳千兩はつゝおでも有る事。旦那を名代に立ては、どう包めうとも自由な事。かの新七のいきずりめ。お爲顔で旦那をひづめ、家久しい我等を押退け、一人威勢を振はうと仕居たを、旦那へ吹こみ、まくし出してのけたが、聞けば大坂に狼狽て、此惣兵衛と公事のみやのと吐すげな。あはれでんどへ出やれかし。五幾内をせいて見しよ。今の間にごきさげて心からの非人仇討。どこぞそこらの橋の下、新七は居やらぬか」と、口合悪口潛上はり、どッと笑ふて通りけり。(八)』新七どうも堪へられず、胸を按り靜めて見ても、律義一偏に眞直に、一筋な若い者。末の事も思はれず、切てくれうと飛で出る。女房抱つき、「是こゝな人。女夫の者が世話やくは、勝二郎樣へ御意見申す爲ではないか。あいつ一人切たとて、お主の爲には何がなる。新七が言分なく、身のあつさに切ッたと皆手前のふみかぶり。無念を堪へてお爲になり、親旦那樣の御恩を、送る心はないかいの。其樣に短氣では、私や心元ない」と耻め止れば、新七「夫も皆合點。理が非になるとは知たれども、今の悪口聞ぬか。彼奴が此前親旦那の悪性金を、十四貫目横取して、曲事に遭ふ筈を、兎や角己が精力で、沙汰なしに事濟んだ。其時には命の親と、手を合せて拜んだ。夫から十年たたぬ間に、少しも爲になりさうな、古い手代を嫉み出し、恐くすゞしい此新七に、無い難つけて暇出させ、旦那の身代空にして、今の樣な雜言。伸上ッた頰見れば、火に入る事も思はれぬ」と、涙を流すぞ道理なる。(九)』時に揚屋の上する女子下男。門番起いて「少門を頼みます。是は此方の大事のお客。浮世小路迄お歸りぢや。きつう醉て御座んすゆゑ、斷り云ふて内からお駕籠にめさせます。氣

を通して下んせ」と云ふより早く門番。「皆迄云ふな合點ぢや」と、窰開いて目を眠るも、日頃の金の威光ぞかし。夫婦すはやと橋詰にて、駕籠の後前しッかと捉へ、「お駕籠待ッて下され」と、引留れば駕籠の者。「ヤアこりや狼籍して、息杖の胸打をくらふか」と振上る。「狼籍は致さぬぞ。旦那のお爲に致す事。擲ば擲て、毆かば毆け、旦那へ一言申さぬ中は、駕籠をやらぬ」。「いや放せ」。「いや遣ぬ」と、捻合ふ勢ひ。駕籠を横に打明けて、鼾ながらの勝二郎。橋板をころ〳〵〳〵、川へ落ちんとする所を、お半ちやッと引起し、後を抱へて膝の上。一昨日からの醉醒ず、女郎の小袖を打かけながら、舌も廻らぬ夢半分。「太夫爰まで送ッてか。ヱ、かたじゆけなんきんの八幡酒には醉はぬ。今のは兼平の能の手。木曾殿が泥田へ踏込れた所。末しら雪の薄氷。深田に馬を駈落し、引ども揚らず打てども行ぬ望月の、駒の頭も見えばこそ。こは何とならん身の果。いやはあなんと面白い事か」とひよろ〳〵正體無りけり。(一〇)』「申し旦那樣。是はどうしたお身持ぞ。お前のお影で榮耀する。今夜の人も大勢あるに、お駕籠に一人附く者ない。是が江戸屋の勝二郎樣のお行儀とは言はれまい。私が男の新七にお暇を下され、お出入さへ止められたれど、眞實お爲になる者はお家で新七ばッかり。御身上の害をなす、惣兵衛めと新七と、思ひ替へて下さんすは、お馴染とも思はれぬ。其上忘れはなされまい、前方私御奉公致した中、お寢間へ來いの、お傍に寢よのと、人賴み迄あそばした。私は一つも年重なり、若い御主を唆かす、熊手よ慾よと言はるゝも口惜しし。奥樣お呼びなさるゝ時の、もじやくじやも如何と、お暇を乞ひましたれば、志しを感じた。さりとは女子に氣特者。あの

自身卑下の稱。
(八)かさとッて「岌取ッて」の義。頭役となッて。
○公事のみやの「公事」は裁判沙汰、これを神籤に利かせ、其緣で「みや(宮)」と出した輕口。
○でんど「出る所」の畧の轉。裁判沙汰を受け、裁判所へ出るならば出て見ろと廣言する意。
○五畿内をせいて見しよ　五畿内に居られぬやうに堰き除けて見せてくれる。
○ごさ　今も關西の方言には殘る。食器の古言。麁桶の類。
○あつさ　古言「あつしさの畧。苦しさの義。
○ふみかぶり　身に負ひ被る事。
○すずしい　胸すずしなどの義、潔白の義。
(一〇)落ちて兼平の能を謠ふ所、前に能を學ぶとある所に照應し、而も當意即妙、輕妙を極はめた。

新七といふ者は、親茂庵不便をかけ、我子の如くせられて、兄同然の新七と、夫婦にして一生見捨ぬお約束。其新七を追出し、仇の樣になさるゝは、其時から私を憎さに夫婦にあそばしたか。憎まるゝ覺はなけれども、お心に從はぬ恨を杵であたり杓子であたる御仕方か、但は今にお心殘り、悋氣故の憎しみか。夫なれば猶汚い氣。何が惡うて新七が、御意見は御意にいらぬぞ。賴もしうないお主樣や」と、涙を溢さぬばかりなり。(一一)』實に酒の醉ひ本性忘れず、お半を突退け、「因緣咄おきをらう。新七めが意見聞きたうない。己が親父はな、一年に八千兩九千両宛、三十年遣はれたれども、遂に浮名は立なんだ。こちが身代で、五百兩や千兩遣ふたら何ぢや。ナア慮外ながら夫を新七めが、遣ひ潰すの、身持が惡いのと、一門一家、町年寄、庄屋迄繼歩いて、「藏々に封を附けさせて、阿房者にしてくれた。忝ないこの。何ぢや。和女に心が殘ッて悋氣ぢやあ。置けよ、尤も初は惚て居た。けれども今新七めが喰汚して、裏までかやして喰さがいた物を、此方所望にごあらぬ。ア、慮外ながら新七めが口故に、揚屋の届けも無沙汰になり、若い者の一分を捨うとした、此恨は盡せぬ。勘當の上の勘當ぢや。サア駕籠やれ」と乘らんとするを新七飛出、縋り付き、「お情ない旦那殿。何とて左樣に邪にお聞きなさるゝぞ。新七が御一分を捨てたとは恨しい。捨てまい爲の御意見。金の事は申さぬ。千兩が萬兩でも、金程づくの、お身につくお慰みが有るにこそ。惣兵衛めが計ひにて、もがり共を太鼓につけ、十兩の物入を百兩に附たて、九十兩は分取にして、阿房にして笑ひまするが、こなたは御存じムらぬか。吾妻殿の身請けの金も、私お家にある時分、七百兩と申す金、惣兵衛に渡した。其上

に此度名物のお家の道具、京三界質に置き、二千兩餘の御借金が出來たげな。旦那には借金させ、手代の惣兵衛屋敷を求め、お出入の醫者、浪人、田地買ふたり銀貸して、富限になるが御存じないな。御念比の醫者はあれど、善惡をかぐ鼻がきかぬ鼻缺醫者が、入殘しの目藥でも、お目が明ぬか情なや。此新七めが親は大和の貧乏人。幼少の時、藤田小平次と申した狂言役者へ、奉公やら養子やらに參ッて、女形を致したを、親旦那のお影でお家へ參り、手代並になされしが、さすが育ちが耻しい。算用算勘存ぜねば、何を奉公、御恩を送らう樣はない。律義を我身の奉公にして、お爲にならうと存する一念。五臟六腑に染込で、お主を大事に存じまする。茂庵樣の御臨終、勝が事を賴むぞ。お氣遣なされなと請合ッた甲斐もなく、斯樣にお身を持ちくづさせ、佛へ言分何とせう。お墓所へ參ッても、顏ふりて戒名を、祿に拜みも致されず、涙に沈み居まするわいの。夫さへあるに、此盆から、お前からの言付けか、惣兵衛めが私か、若旦那の勘當の者、お旦那の墓へは參らすなと、お寺へ急度言付け、挿いた花も取捨て、手向の水迄打明けて、未來に在す旦那にさへ、疎せうといふ事か。お爲を思ふ新七が、左程お氣にいらぬは、水と火との合性か、餘りと云へば曲がない。さうではない、若旦那」と、主の意見に恨なき、詞を過し推參云ふ、涙は主の藥ぞや。勝二郎大酒の上、猶々氣にや觸けん、「ヤア意見云ふも所がある。途中に駕籠より引きずり下し、耻かゝせて意見せよと、親者人の遺言か。ヤア此慮外の言分があるか、聞う」と怒らるゝ。(一二)』「是申し勝二郎樣、密かに御意見申さうも、門爪も踏されず、取次申す者はなし、よしお屋敷へ伺候して、六尺共が手にかゝり、擲殺されうば殺

(一二)推參　押し切ッて言ふ言葉。

されう。主從の冥加は忘れまいと。朔日廿八日には、御門に禮して罷歸り、さもなき時にも月の中に、二度三度臺所の口まで參り、傳人さへあらば內證から、申し上げんと存ずれども、さりとは人はつれないもの。古への朋輩も見ぬ顏し、目をかけて引き廻した丁稚小者飯焚まで、詞をかける奴等も無く、馴染とて、可愛や白犬が見知ッて尾を振てしなだれる。犬に劣ッた畜生共、恨むまいとは存ずれ共、凡夫心の淺ましさ。無念でならぬ、女房共」。「ヱ、口惜しい、新七殿。但我々併言ならば、親旦那の魂魄冥途から、蹴殺いて下されかしし」と、夫婦は橋に平伏して、聲をばかりに歎きしは、不便なりける心なり。醉醒の氣は上る。ぐッと堪せいて勝二郎「オ、親父までもない事、身が蹴殺いて見せんず」と、飛懸かッて引伏せ、胴骨をさん〴〵に踏付くる。女房「是はお情なし」と取つけば、「其儘お け、手向ひすな、お腹の愈るほど踏ませませ」。「オ、踏まいで置かうか。重ねて斯樣な慮外をせば、下々に擲殺さする。用心せよ。駕籠持て來い」と打ち乘るも、腹立紛れ諤もなく、後向くやら前向くやら、縱に乘るやら橫堀を、「急げ〳〵」と走らせし、若氣のほどぞ笑止なる。新七は齒噛をなし「ヱ、〳〵口惜しい無念な。あまさかさまの事にても、主に踏まれて恨はない。朋輩の言なし故踏まれたと思へば、腸が燃かへる」と、橋板敲き欄干も、握り挫ぐ斗りにて、涙に眼も眩みしが「よい合點ぢや。思案有り」と駈出るを、女房縋ッて「思案とはどうぞいの。短氣を出さずと待たしやんせ」と引き留むれば「ヱヤまだるい。最前に惣兵衛め、斬損なふたも女房故、短氣も短慮もいる事か。思案は此胸にある」。「ヤア其思案が聞きたい」。「いや是斗りは儘にして、放せ〳〵」。「思案聞かねば放さぬ」。「く

(一三)あまさかさま　天が逆の義。天地相反する事の義。

らはするが放さぬか」と、男思ひの女房と主思ひの男と、誠餘りて摑みあひ、女夫爭ひ犬くはぬ、犬の悋氣に威されて、辻の番太が夢くらふ、ばくろふ町をぞ歸りける。(一三)』請出すといふ其日より、衣裳をも皆町風に、縫ひ針の茨木屋より嫁入とて、婿は八幡の岩清水、あびせませんと井筒屋の、亭主は送る朋輩の、太夫天神餞別を、持せ遣手の杉重に、樽の名酒をもり口や、さだの裘賣を見る事も、曲輪で成らぬたのしめ野に、紅葉たけ〳〵なべが茶屋、枚方樟葉是も又、「吾妻請出す山崎見ゆる、そッこで乘物たてにけり。吾妻乘物の簾をあげ、「是太郎樣。最早八幡も近いげな。かねて鯉樣道まで迎ひに出やんす筈。そこを此方から先越して、によッと押しかけてはどうござんしよ」。「八幡太夫樣。是はずんど晒落ませう」。「そんなら頓と菅笠で、供やら主やらごちや〳〵は、面白……」かる〳〵飛びおりて、「ア、氣が晴れたわッさりと。嬉しやそばで山見たも、勤の皮切こらへた故。憂汐ふんだは身のやいど。十四の冬より今年迄、夫に染たる風俗は、いかな家にも走り出て、遊女見じと目をつける。上から下る魚荷の戻り、歩き〳〵の高咄し。「扨々浮世は知れぬもの。江戸屋勝二郎と云ふては石火矢でも崩れまい、長者の家と云ふたれ共、咸陽宮も亡び時、一時の間にいとしぼや。彼も言はゞ金故。生中持たぬ我等しき寢覺が樂ぢや」といふ跡から、「科は何ぢや知れぬが、勝二郎は追放で、八幡はにへる己や見て來た」。「百兩や五十兩は彼でも取ッて退うか」。「何のいの。編笠さへ被せぬもの、請出された吾妻とやらは、どうなる事ぞ可惜物。やすうで此方へ貰ひたい」。何の彼のとの惡い沙汰、口々言ふて通りけり。(一四)』吾妻ふッと耳に立て、「太郎樣今のはどうぞいの。いやな沙汰でござんす」と、氣遣がれば供の下女、駕籠の者まで色違へ、辨當持もくひさげぢゆう、喉に詰りし餡餅の、案に相違の顏付なり。井筒屋も氣にかゝれど、氣落させじと、「これ〳〵粹の樣にもない。あれは人の法界悋氣。太夫樣を見知ッて、氣遣かけて面白がる。嫉で皆云ふ事。ぎえん直しに酒にせう。毛氈敷け」と勇んで見ても、どこやら體が明樽の、底の心は澄まざりけり。「あれ〳〵彼處へ泣き〳〵走ッて來る人は、勝二郎樣のお草履取、佐五介ではないかいの」と、言ふ所へ佐五介息もきれ〳〵。「なう太夫樣。ひよんな事が出來ました。私やなんと致しませう」と泣いて詞も無無りけり。「扨こそ噂に違ひはない。ちやッと樣子を咄してたも。泣いて居てすむ事か。佶と性根を附やいの」と、叱られて涙をとめ、「事の起りは皆惣兵衛め。旦那をいとしい〳〵と吐いたは己が慾。お金には御一門の封が付けて自由にならず、結構な茶入懸軸、お家の寶黃金の鷄まで、京で質に置くとて、なんとやら申す位高いお公家樣の姫君を、藤二郎が嫁に呼ぶ其物入との言立、その公家樣のお袖判を僞判し、金の取手はよみ人知らず。大内方より御詮索。科人は惣兵衛一味のあひずり。十人あまり粟田口にて獄門にかゝる筈。手代の業とは言ひながら、名指所は勝二郎。存せぬとは言分立たず金銀財寶山田畠、京大坂方々の、家屋敷まで取上られ、着の儘での御追放。何所をしやうどにござらうぞ。腹の内から今日まで、荒い風にも當らぬお身、さぞや途方があるまいと、思へばいとしう存じます」と、語れば一度に手を拍ッて、憫れ果てたる其中に、吾妻一人の物思ひ、「兎角私が不仕合はせ」と、餘の事言はず泣き居たり。(一五)』井筒屋も溜息つき、「お笑止とも氣の毒とも、いふた

○くらはするが放さぬか　拳をくらはせる義。
○夢くらふばくろふ町　支那の說凶夢を見た時に想像の獸「獏」に食はせて之を攘ふといふ、此故事から「夢くらふ獏」と掛かる。

(一四)いとしぼ「いとほし」の訛り
○我等しき　今いふ「是しき」、「あれしき」などの「しき」。我等風情の義。

(一五)法界悋氣　元祿時代の流行語。普通の「語氣」と同義。
○ぎえん直し　緣起直しの隱語。
○あひずり　連累。
○しやうど　先途の轉。

斗りで爲う樣なし。太夫樣は先お歸りなされませ。殘金二百両八幡の馬おりに請取る筈。惣兵衛とつうくつ致し、茨木屋をば私請合ひ、手形の上で今日お供仕り、斯樣の御難儀出來の所、うか〳〵八幡へ參ッても、二百両の金子、誰から請取り申さんやら。お笑止ながら太夫樣を、茨木屋へ渡しませねば、我等が手形消えませず、世間にはッと知らぬ内、早うお歸りなさるれば、私が爲と申し、太夫樣もお首尾よし。サア お歸り」と言ひければ、吾妻わッと泣き出し、顏をも上ず居たりしが、「むげない言分して下んす。歸れなら歸れで濟む。歸れば吾妻が首尾よいとは、爾うした吾妻ぢやないわいな。可愛い男の流浪したのを聞きながら、身の首尾を思ふ樣な、傾城ぢやと思ふて下んすは、曲がない、情ない。忘八の譯が立たぬとて、再度曲輪へ立ち歸り、身の耻は扨置いて、勝二郎樣の耻辱は、是が何と雪がれう。こなさんの請合ひは、私が命有る限り、みぢんも難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町でもあらばこそ。京の島原奈良伏見、茶屋風呂屋へも身を賣ッて、美事に譯は立てませう。世に落ちやうが何うしやうが、勝二郎樣の女房になる程の吾妻ぢや。ぢめんづくに賴むからは、車も是に僞りない。再度新町の勤めをのがれ、勝二郎樣の一分立ッて下さんせ。是手を合はせて賴みまする。ほんに〳〵、此よな事降湧うとは夢にも知らず、伊勢兩宮へ太々神樂、愛宕清水住吉樣へ金燈籠、八幡樣へ萬燈其外神々宮々へ、鳥居立ッての何のとて、金のいる事厭はずに、神佛への約束も、今では違へる身と成り果て、人間どしの遠契約は、騙りのやうにも思はんしよ。夫が悲しうムんす」と、歎き詫びたる口說言、眞實見えて哀れなり。(一六)』揚屋もさすが只者ならず、「よい〳〵

(一六)つうくつ　語原不詳。

○むげない　反語ながら矢張り「無下な」の義。「つれない」の意。

○ぢめんづく　地面盡の義か。「づく」は「腕づく」などの「づく」。大地を堅い物と見て、地面のやうに堅く誓ふなどの意(?)

○雫も　微塵も＝すこしも。

二言と御意なされな。義理詰になッてきた。茨木屋の手前は此太郎が請取ッた。手形一枚なされいでも、今の涙を手形にして、お前を爰で手放します。お身を何處ぞへ片づけて、二百両お立てなされませ。契約お違へなされても、此方からは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ。是から互の心底づく」と。切放れたる詞の末。「それは定か有難い。胸が些とはひらけた」と、伏拜みてぞ泣き居たる。時に向ふの堤の上、大勢人の喚く音。追放人の作法とて、八幡公文所の役人數多。手々に割竹大地を叩き、勝二郎を先にたて、兩手を引きはり、聲をかけて追拂ふは、忌々しくも凄まじし。憂き事知らぬ和子樣の、氣を奪はれ性根をとられ、起きつ轉んづ足たゝず、橋本の宿はづれ、三國境の板橋にこそ着にけれ。(一七)』荒けなき聲々にて、「サア此所より追放す。京大坂淀伏見、境をそへて住まひ叶はず、背くに於ては見逢次第打捨。何方へも失をれ」と、口々罵り歸りしは、硫黃が島に捨てられし、俊寛僧都も斯くやらん。往來の人も目を明いて、泣かずに通る人もなし。役人歸れば駈け付けて、「是私ぢや、吾妻ぢや。不慮な難儀が出來ました。去ながら大事ない。命が寶、袖乞非人の身となッても、二人一所に居る上は、堪能ではあるまいか。轡への出入も爰なお人の男氣ゆゑ、御苦勞かけずに埒明く筈。樣子は靜に物語る。哀しむ事もなんにも無い。けくで浮世が面白い」と、笑ふて見せて力をつけ、涙を隱せば顏をあげ、「委しい樣子は聞かねども、太夫が殘金埒あくとは、井筒屋殿の深切。生中禮は申さぬ。エ、面目ない此勝二郎は、下人の罰が當ッた。大賢人の新七が、意見を用ゐず勘當し、身の仇となる惣兵衛めに誑され、新町橋で新七を、足にかけて踏んだる罰。忽ちあたッて此仕合。

(一七)定か　乾度か＝必ずか。

(一八)堪能　飽きるほど充分。

○けくで　「結句で」、即ち今いふ「結句」の義。つまり＝歸する所。

身の先行のする事は、今生で思ひ切ッたぞ。先の事は知らねども、先は此世の暇乞と、思ふて損のいかぬ事。何れも然らば」と立ち出づる。井筒屋袖を引とめて、「何方へお出なさるゝにも、當分の御入用。路銀の餘り少分ながら、御懐中」と差出だす。手をつき一寸戴いて、志しは千萬両。金子は申し受けまい。親祖父の貯へを、冥加も知らず遣捨て、金の罰があたッて金銀に疎まれ、手ぶりになッたる我なれば、此度屹と身を懲し、一錢得難しと云ふ事を、我魂に思ひ知らせ、貧苦の修行の誓古の爲、金銀とては貰ふまじ、さりながら、はつとり煙草煙草入、煙管の餘計あるならば、一本所望申したし」。「ア、お安い事〳〵。煙管のらうは細くとも、お心を太うして、心中などあそばすな」。「言やるがくどい。不足なうて死ぬるこそ、ほんの誠の心中なれ。金に詰ッて心中する、勝二郎でない證據、藥も少々貰ひたい」。「實に是は御尤。懐中至寶の一包。藥屋は命堅い。石見の椽」と祝ひければ、遣手の杉が太夫樣へ、花色繻子の前巾着、人參いれてお餞別。仲居の初は延紙二折り、「ちよッと假寢もあるもの」と、あぢな所へ氣をつくる。駕籠の衆の仲間から、三尺手拭抱帶とて進上す。是はかの五尺いよ此手拭と歌に謠ひし手拭か。是れは又加賀菅笠。締を荒くと召ませとよ。げにも誠の志し。さまか土産の菅笠と、踊に踊りし笠よなう。それは吾妻の花嫁子、是は吾妻が身請の果。腰をよぢらす供もなき、紋日の夜床引きかへて、禿もつかぬ草蒲團。夜見世の太皷音たえて、山崎寺の鐘の聲。早こう〳〵と響けども、我迎ひにはいつ來うぞ。「お二人まめで中ようて、隨分無事で御座舟で、迎に參る男山、八幡の弓の弦きれず、便を待つぞ」。「待たるゝぞ」。「さらば〳〵」と泣く聲ばかり、耳に殘りて面影は雲に消えけり。(一八)』

初もめん

勝二郎

春の夜の夢驚かすくたかけの、其しだりをのむすぼほれ、とくる思ひはいつかはと、いはで心にかこち草。根引きにせんと言替す。身は捨草の捨てもせで、浮名は流れの淀河や。何をたよりに水鳥の、波にゆらるる世の習ひ、疎きは人の情なり。廣き世界は廣けれど、京や浪花の住ひさへ、せき留められし水車。月の影さへくる〳〵と、彼方此方に汲みわけられて、行けば丹波路戻れば大和。行くも戻るも二人連。女夫鳥のとぼ〳〵と、昨日の閨の花紅葉、今朝ふる霜に朽ちそめて、身をこがらしの森の下道。憂しほ踏むもあぢきなき、馴れし故郷の草も木も、今の名殘をとどめかね、まてまてと啼く吉原すずめ、よしみ〳〵の言の葉に、誑され渡る狐河。空に暮せし年月の、榮花は夢の盃の醉醒枕。それは若草身をうらみ草。なんの和女に飽いたでは無し。飽きも飽かれもせぬ中の、戀ひと命が寶寺。昔の里の寢覺には、伽羅で暖む床の内。起き別れゆく曉の、袖から袖に手をいれて、出口の風も寒からず、今の憂身の旅寢には、じッと寄せたる肌と肌、吹きわけて吹く山おろし。麓に立てる女郎花、りんきしんきとなまめきて、くねる心の男山。いとし男を古への世に引き返せ弓八幡。神に暇と伏拜み、東を見れば名にも似ず、月こそ出づれ朝日山。山吹のせに影見えて、(一)』渡ッた〳〵光る君の渡ッた。夢の浮橋六十帖を、渡り詰十帖と詠じた。一に一夜のお情の、夕顔の若ばえ。二に香たきしめて浮舟にかげろふ。紅梅竹川橋姫に手ならひ。我名床しきあづま屋で、これ樣

○金に詰まッて心中する勝二郎で無い云云　天晴れ普通の遊治郎とは違ッた魂、何處やらに大量も見える。
○腰をよぢらす　背し供揃ひの人夫は一種輕妙の歩き方で腰を捩ぢ振ッて歩いた所から、つまり其供人の形容として言ッた語。
○いつ來う　鐘の聲の「こう」の緣。
○雲に消えけり　此後の五言は「おくり」になッて次の「初もめん」の頭となる。

●初もめん
(一)春の夜の……言ひかはす　「くたかけ」は鷄の古言。「しだり尾」は垂れた尾。「むすぼほれ」はもつれる義。「とくる」は上の「むすぼほれ」の緣語。「かこち草」は實物の草でも無く、唯「かこつ」即ち愁ひ口說くとの義を草に言ひ做したもの。草の緣で「根引き」と出す。全體の意、「二人睦ましい春宵の夢を鷄などに破られもする。其鷄の尾のやうに結ばれ棄るる胸中、戀ひの中には苦勞も伴なふ。いつか其胸が解けるであらうか、それも流石に口に出しては言ひかね、忍んで心にかこちて居て、併し末は根引きにすると言ひ替はす」との義。

の忍び寢。世も忍ぶ、人目も忍ぶ道芝に、駕籠かるすべも白妙の、晒干すてふ槇の嶋。はんま千鳥も友を呼ぶ。我は伴なふ人とても、なき顔隱せ笠取山。隱すとすれど心なや、宇治の河霧たえ〴〵に、あらはれ渡る網代木の、河瀬の水に袖ひぢて、互に影をみづ鏡。「やつれさんした」。「やつれたぞ」。離れ〳〵のあの雲見れば〳〵、明日の別れが思はるゝ。憂き我が身はいろはの文字よ〳〵。袖に涙のゑひもせず、木の葉散りぬる木幡の里、徒歩で是ほど行く事も、はつめい月や一口、堤づたひの長繩手、續く里々山々も、皆近付の山なれど、今日の憂身は心から。さぞ見ぬ顔と袖覆ひ、袂を覆ひ笠覆ひ、空を覆へば冬の日の、最ど短かくはや暮れて、夜は長池の水の泡。水の澱みに我もとて、よどみ息らひ明さるゝ。(二)』

下の卷

奈良坂や木辻も戀の札所にて、女郎屋揚屋卅三間、昔の京の八重櫻。九重薫るこむらさき。小藤を爰の四天王。續く盛こそ無かりけれ。哀れや吾妻は義理合ひの、金の契約もだされず、此里一番名の高き、山城屋といふ轡へ、中年四年二百両、命がらりに身を賣りて、大坂の埒は明いたれど、又傾城とならざらし。竪横沙汰を聞きふれて、戀の大和の色好み。吉野の花も振り捨つる、三わの索麪喰ひ付いて、買ふ人餘れど賣る日は足らず、中にも立田の藤と云ふ、しなだれ男纒ひ付き、揚屋も諸分吉田屋の、仁三郎を定宿にて、二階を一間宛がはれ、命有たけ首尾有たけ、金有たけと勤むれば、四天王の名取をも、今の吾妻が下に見て、獨武者とぞ流行ける。(一)』藤も在所に稀男。吾妻に深く染附の、龍田や沖津白波の、太皷も連れず今日も又、通ひ木辻の吉田屋の、「仁三内にか。ヤア妓樣達歷々のお寄合ひ。おてき樣の待合。我等が座敷へも少貸して下されかし」と云へば薫小紫。「珍らしい藤樣の外の女郎をからんすか。男の心の一筋に、他へふれぬは傍から見ても、憎うない物なれど、こなさんと吾妻樣とは、あんまりで小腹が立つ。しんきのわく程浦山しい。見ぬが増ぢや。戀のめんめん稼ぎしや」と、はら〳〵立ッてぞ入にける。仁三郎忙しげにしよこ〳〵と立ち出で、「ヤア藤樣いつから茲に御鎭座。手でもお拍きなされいで、夢にもしらがの母者人。藤樣のお出ぢや。吾妻樣の御氣色も、今日はお快よささうな。申し醫者の名も起緣の物。始は西の京の道偏と申す醫者の藥で、どうへんに有ッた所を昨日から、三條の元喜と申す醫者で、めッきり元氣が見えました。御祈禱を本服院、息才法印を頼みませう。銚子〳〵」と手を拍く。(二)』「是は〳〵吾妻が氣色快いとは。あたまで善事聞き初めた。さりながらあの病氣は、彼の江戸屋勝二郎が、昔を忘れぬ物思ひ。根引に此方へ取りたれば、氣がかはッて達者になる。そこには氣遣ないこと。是に付けても一刻も早う請出したい。四年の年を三年遣ひ、ま一年の所を元金の貳百両で、請出さうと云ふからは、親方も不足ない所。エ、親子の衆がぶせいな。余所へ取られて此藤が、一分立たず死なねばならず。今日は金を突きつけて、是非とも詫びて貰ふ思案。耳を揃へて懐中した。是袖口から手を入れて、虛か誠か是見や」。「どれ〳〵。ホウ〳〵可愛らしい小判女郎。是はきつい詮索扨斷油とお恨みなさるれど、前髮もある私が、親程な山城屋。算用だても申しにくし。母妙慶を遣まして、割つ碎いつ言はせて、さらりッと埒

○ばかされ渡る狐河「ばかされる」の縁語「狐」。
○女郎花りんさしんさと生めきてくねる心の男山「りんさ」は嫉妬、「しんさ」はぢれッたい意。女郎花を婦人に比へ、それが「生めく」などの形容は古歌に既にあり、現に俊頼朝臣抔の歌にも「をみなへし生めき立てる姿をばうつくしよしと鯉の鳴くらん」などと見えた。是等を基として近松の此句も出きた。「女郎花がくねる」といふ事も古來からの言ひ慣らしで、是と言ッて捕捉の出來ぬ文意ながら纏綿の情緒をば巧みに飛くしてある。要するに、女郎花は暗に吾妻、男山の「男」は暗に勝二郎を指す。

(二)渡ッた渡ッた。光る君のわたッた　此所から句調が變はり、輕い亂れの所作になる趣向ゆゑ、それで調子も何やら輕い。此邊は地の句といふよりは寧ろ小唄の風情を持つ。
○光る君　即ち源氏物語の主人公光る源氏。
○夢の浮橋、夕顔、浮き船、かげろふ、紅梅、竹川、橋姫、手習、東妻屋共に源氏物語の帖の名。
○はんま千鳥　濱千鳥の延びた語。日本の諸ひ物には此例多し。今現に長唄の「汐くみ」にも「はんま千鳥」の語が見える。
○はつめい月やいもあらひ　初名月は八月十五夜の月の義。九月十三夜のに對して「初」と

いふ。十五夜の月の宴に芋を供へる所から「いもあらひ」を呼び起こした句。近代まで京坂には中秋を「芋明月」などゝ稱へた。裏の字綱は「見えた」「いもあらひ（一日）」に掛名。

◉下の巻

（一）小むらさき　其縁で「小藤」。

○盛　元禄の流行語。字の儘「さかり」の義。

○高き　其縁で「山城屋」の「山」。

○がらり　物など擲つ音。命を差し出す意。

○額城となら晒　奈良晒は大和奈良産の晒しの木綿。傾城と「爲る」と掛けた語。布の縁で、其下に「整横」の語が出る。

○三わの雲鬢　大和三輪には三輪明神があり、此事

では雲鬢を名産とする。

○藤といふしなだれ男禰ひ付き「しなだれ」「まとひつき」共に「藤」の縁語。

○揚げ屋も諸分け　吉田屋の揚げ屋へも諸の仕拂ひ及び附け届け拔よく渡ってあるとの義。諸分よしと掛けたもの。

（二）染め付きの龍田　龍田は紅葉の名所ゆゑ、紅葉の縁で「染め付き」と相結ばせた。

○白波の大皷　大皷は所謂幇間の隱語。波の音を賀物の太皷に比へる例により、白波立ち、皷の枕詞とした。

○逢ひ木辻「逢ひ來」と掛けたもの。

○しんきの湧く程　巖の湧ねるほど。

○樹ひの面桐稼ぎ

を明け。只今お知らせ申さん」と硯引きよせ墨をすり、鹿の卷筆妻戀鹿。鹿は春日の藤様め。果報者め金持め。あやかり者めと騒ぎける。（三）』「それは大慶先吾妻に逢たい。呼うでたも。何所にぞ」「いつもの二階に御座ります。これ、林之介。吾妻様呼びましや。吾妻様、太夫様。林之介」と、呼ッても返事もせず。「是はどうぢや。又例の、勝二郎といふ淀鯉を、思ひ出して泣いてかな。鯉が付いて居るさうな。鯉なら煎餅まいて見よ。いや手拍子を打って見よ」。心得たん〳〵たんと手を拍てば、心浮かねや身の勤、悲しい顔を見せまいと、わざとにこ〳〵わさ〳〵と、二階の口に立つを見て、そりやこそ鯉が現はれた。盃をさしみにせう。爰へちよくと御いり酒、甘い事ぢやと嗅きける。（四）』　吾妻二階に腰かけて「是仁三様。たんと口があがッたの。あんまり鯉々言はんすな。鯉も瀧へ登りつめ、今ではどうも下端がない。惣じて鯉と云はんすは、勝二郎様故かいな。彼様は八幡の人、八幡に鯉は有るまいが、合點がいかぬ」と云ひければ、それならば今日よりごんぼ様と申さうか」。「ヤア夫も大事か。加賀のごんぼと云ふこと有り、そんならいッそう毛ごんぼ様」。「追付日那の引抜ごんぼ」と座をもてば、「ヱ、憎い口や。敲ごんぼに仕たいぞ」と。二階降るも勇まねや、表面ばかりの笑ひ顔。いふて泣くより猶憂し。藤も彌々機嫌よく「今日は嬉しい事揃ひ。第一和女の氣色もよし。仁三親子の働きで、身請の埒が明たぞ。懐中した金子を里に殘して、和女の身と兩替して、一兩日に吉日極め、龍田へお供仕る。サア〳〵二階で酒々。吾妻はこれのお母へ、能う禮云ふて跡からおぢや。仁三此方へ」と手を引いて、奥の二階

へ上りける。（五）』　吾妻はッとけでんして、「夢見た樣な事どもやな。根引にするの請出すのと。取締もない僧上は、十人が十人で、思はれたさに云ふ事。床で帶さへ解かぬ身によもやと思ひ、頼みまするとこれ偽りしを、先は正直喜んで、はや談合が極まッたか。扨も胸をついた事。誰にどうと談合せんぬ。勝樣からは便宜もなし。サア今でも出ると云ふ時には、泣き口說いても叶ふまい。其際にならぬ先、とんと打ち明け云ふたらば、義理詰めに詰められて、思ひ切らるゝ事も有る」と、階子半分上りしが「いや〳〵ひよッと言ひ出だし、先に飲込みない時は、勝二郎樣のお爲まで、取り返しのならぬ事。ヶ云ふも厭なり言はねば悪し。罪深い事ながら、今の間にあのお人の、身に妨げも出來よかし。此病が募れかし。今夜の夜が常闇と、明けずにあッてくれよかし。身請の時が延したい」と、咎き天にも難をつけ、歎き恨むる世の憂さ。我身ながらも淺ましやと、とんと伏して泣き沈む。涙も階子を傳ひけり。（六）』　通ふ心や格子の前、耳にこたゆる謠の聲。一度は榮え一度は、衰ふる理りの、誠なりける世のならひ。住所求むとて吾妻の方に、吾妻〳〵」と、諂ひ忘れた顔つきで、我名を呼ぶは知った證と。行燈の影から表を見れば、戀し床しの勝二郎。飛びたつ樣に懐しさ。表には人目あり、夫から廻ッてかうと、指で敎へて招かれて、小暗がりをばそッと抜け、つツと潜れば縋りつき、「なう能う來て下さんした。逢たうてならなんだ」と、しッかと抱締め泣き居たり。よい衆の果の流石にて、貧苦を貧苦と思はゝこそ。「此形を見てたも。思へば〳〵不算用。和女の身を賣する程ならば、三百兩も、手に持ッたがよい筈。大坂の

しや　人の戀ひのみ見て居ず銘銘も戀ひを稼がうとの義。
○夢にも白髮の母ぢや人　夢にも知らぬと掛けた語。白髮の縁で「母ぢや人」。此「母ぢや人」は仁三郎が呼びかける意。
○起縁　縁起の轉倒。
○道偏、元喜　これを「どうへん」、「元氣」にわざとながら通はせた所非常に可笑味を加へる。「本服院」「息才法師」共に同例。
(四)御いり酒　「いり酒」は肉を酒などで煮たもの。ここでは「御入り」から掛かる。鯉の肉を煮り酒にする料理も有る。
(五)たんと口が上がッた　大分口が惡るくなッたの義。
○ごんぼ　京坂の方言。牛蒡の訛。
○加賀のごんぼ　牛蒡は加賀の名產で、京坂邊へもまはッた所から加賀牛蒡の名も出來た。
○引き拔きごんぼ　牛蒡は根から引き抽く物ゆゑの地口。暗に根引きの意を含む。
○たたきごんぼ　打ッて細かくした牛蒡。打擲の意に通はせた。
(六)僧上　元祿時代の流行語。大風呂敷き＝大言。
(七)一度は榮え…　吾妻の方に　此一聯謠曲の句。巧みに謠曲を配合し、勝二郎を呼び出す。
○だんない　「大事無い」の訛り。今も京坂でいふ。
(八)氣をたしなみ　血氣にはやるとの義。
(九)不道化　「道

親方へ二百兩渡さねば、井筒屋の太郎左衛門と、約束の義理が外るゝとて、差しも引きもなうきッと堅う二百兩に、賣らさいでもだんない事。此鈍さから此つら。何にも德は無けれども、坂田藤十郎が夕霧を、ま一度見たいと思ふたが、此紙子で手夕霧を仕る太夫、又逢ひに來たわいの。サア和女も爰で泣きや」と云へば、「ア、泣く分は夕霧に、負はせまい」と泣きければ、男も心しほ〳〵と、可愛や〳〵物眞似に、誠の涙を紛ぎらかす。(七)』奥二階より手を拍き、「禿衆。吾妻樣呼びましや」。「吾妻樣吾妻樣」と呼ぶ聲す。「それ人が來る。ア、しんき。どこへがな。是々火燵へ隱れさんせ」と、蒲團を明くれば勝二郎、「此夏爰の芝居へ、竹本が弟子が下ッて、重井筒を語ッた。サア是から夕霧、代ッて重井筒火燵の段。北濱邊のよい衆は、火燵に水を入れまする。紙子一枚の我等は迎もの事に、火焙になりたい」と、蒲團とッて引被る。仁三郎二階より障子をあけて、「申し申し吾妻樣。只今暦を詮索すれば、明日は天社きしゆく日。萬事揃ふた大吉日、銀はお身に附てなり、何に不足ない上は、善は急げ明日の朝、目出度う曲輪を出します筈。その用意なされませ。飮まうぞ〳〵。大きな物で飮でくりよ」と、障子引立て入にけり。火燵よりむく〳〵起き、「今のはなんぞ曲輪を出すとは善か惡か。氣遣な聞きたい」と氣をせけば、「サアされば夫故胸を痛める事。先度の文にも云ふ通り、龍田の藤が事いの。作病發しつ振ッて見つ、色々飽かるゝ工面して、退く樣に仕掛けても、煩惱の犬かして、爰の妙慶挨拶にて、請出す談合極まると、聞くから胸が騷ぎ出し、今に心が落付ぬ。どうした物で有らうやら、最早智惠にも能はぬ」と、泣くばかりこそ力なれ。勝二郎も泣出し、「扨も〳〵惡い事も、續けば續くものかな。五年以前に在所を出で、無量の憂さに遭ふたれども、諦らめつ慰めつ、心で埒を明けたるが、命かけた和女を、人の物になす悲しさ。二百兩といふ大敵には、弓鉄砲も叶はぬ」と、齒を咬ひ縛り歎きしが、「左右云ふ間に夜が更る。もう分別は無い所。和女も死や己も死う」と、若い同士は氣を嗜み、死を先立てゝ涙を隱す、歎きの色こそ哀なれ。(八)』吾妻死に身と胴を据ゑ、「是申し勝二郎樣。死ぬる覺悟に極まらば、死なずに免るゝ思案あり、こなさんは先お歸り、內を仕舞ふて夜中過、八ッの時分に又ござんせ、金調へて置ませう。其金持ッて丹波へ退き、來年私が年前に、迎ひに來て下さんせ。心安うて出らるゝ事、早う去んでござんせ」と、叫けば勝二郎、「それは至極の才覺。其金は借るか貰ふか。どこから出る」。「はて夫は搆はんすな。惡い樣には仕ませぬ。早う往んでござんせ」と、せがめば頷き悅んで、「是ぞほんの丹波越」と、不道化云ふて忍び出る。氣の愚さも育から、憂事知らぬ印かや。(九)』吾妻はほんの出來心。ふッと云ふたは云ふたれど、是からが大事の思案。火燵の櫓を談合柱。腹のつかへだく〳〵と、胸に踊るを按りさげ、「二階の客を刺殺せば、明日の難儀を脫るゝ德。金を取れば勝二郎樣の、お爲になる是が德。是程よい事有るものか。足元によい思案。こけて有るのが見えなんだ。殺して退う」と思ひ立つ。目の前ばかり背中を知らぬ、女の智惠こそ果敢なけれ。(一〇)』夜は何時ぞ臺所は、夜中を告る鼾も有り、更行く儘に恐氣立ち、膝の慄ふを踏締め〳〵。階子の口から覗いて見れば、客は醉ふて前後も知らず、仁三郎がうはき酒、いき倒れては性根つかず、「サア仕濟まいた」。階子三つ四つ上ッて見て、「サアこりや何で殺さう。刄物が

化」は滑稽の意わざと「不」の反語を加へ、それを反語にした戯幻の句法。

（一〇）こけて有るのが見えなんだ　名家の其邊に落ちて有ッたのが見えなかッたの義。

（一一）持ち添へみちのく　「持ち添へ見る」の掛かり。

「錦水」は古歌に陸奥の名物として「千束にあまる錦水」などと詠じた、其紅葉からの語、紅葉して紅くなるもの故、それを紅熱した火箸に取り合はせた。「枝珊瑚珠」も紅熱した色の形容。

無い。帯を解いて絞め殺さうか。いや緩りとする間はあるまい。煙草で燻べ殺さうか。酔ふて先へ「此方が死なう。何として能らうぞ。鋏刀でも剃刀でも、鉄物がな」と、座敷中を差足し、うろ〳〵尋廻り「ヤ思ひ付いたぞ火燧の火箸、火に焼いて喉笛を貫さば、刀も同然」と、蒲團をあげて手を入れ「熱や〳〵」と懐中の、服紗に持ち添へ陸奥の、からくれなゐの錦木や、枝珊瑚珠と焼け付けたり。「嬉しや冷ぬ間に……」と、立ち上らんとする所へ、仁三郎が母妙慶、「吾妻様まだ起きてか」と、によろ〳〵来れば肝潰し、袖の影に押隠し、「ヲヽかゝ様か。私もはや寝みまする。さめぬ間にこな様も、目のさめぬ間に暖かに、熱うして寝やしやんせ」と、狼狽挨拶跡先なり。（二）』妙慶更に氣も注ず「お前は果報な奴様や。曲輪で繁昌しつめて、間もなう根引きの松様。千年も萬年も藤様との、御中さめぬ様に遊ばせ。其いとしらしいお氣立では、さめまい〳〵。明日お目にかゝりませう」と、辭義を陳べて立ち歸れば、火箸は氷と成てけり。「ェ、いはれぬ長口上。焼き直さん」と、蒲團あげても火燧も冷たし。「ヱイ阿房らしい。なんぼうさめぬと云やッても、炭火まで冷きッた」と、吹いつ煽いつ氣をせく所に、二階より仁三郎醉覚の長あくび。客の脇指持ちながら、目をすり〳〵階子をおり「ヤア吾妻様爰にか。扨醉ひました」と下に居る。吾妻脇差に心づき、「それは藤様の腰の物。こなさんも先氣の通らぬ。客の刀物預るとは、渡世の客の事。藤様とは女夫になり、明日請出さるゝ今宵となり、心中はせまいし、その儘置いていかんせ」と、云へどもふら〳〵居睡りながら、「はて一夜でもお客の中は弓矢の禮儀、外されぬ」と、云ふ中に、脇差の柄を膝に押へて、「いかう更けたに寝ま

んせ」と、云へども拠には氣もつかず、明日御見なりませう。鹽茶を飲んで寝てくれう」と脇差の鐺を持ッて立つほどに、拠は殘れど下は見ず、目はそら鞘をぶらさげて、ぶら〳〵勝手へ入りにける。「ァ、〳〵有難い神佛の宛ひか」と、戴き〳〵ひッそばめ、立ッて見ても後より、又誰ぞ來る様で、危さ恐さ右ひだり。足もすわらぬ行燈の、我影に愕りして、わな〳〵慄ふ箱階子、ぎし〳〵ぎし〳〵鳴る音も、耳にこたへ胸にしみ、氣を押へ息をのみ、やう〳〵惱み登り付き、溜息吐たる女業、我身ながらも興醒むる、藤が臥したる北枕。「愛しや科も無い人を」と、恐しながら背中に腹、胸先に打跨ぎ、切先差あてぐうと乗る。乗られてふッと目を寤ます。「これ〳〵〳〵聲立てまい。此方に恨も罪もない。仮にも惚てくれた人、殺したうは無いわいな。殺さるゝ御身より、殺す我身が悲しい」と、涙は刃に傳ひしが「なう生けて置ては請出して、女夫になるが情ない。私には大事の男が有る。その男と縁切れる、戀路の仇となる故に、今刺殺す懐中の、小判も貧な男に遣たい。殺生の罪盗の罪、男の爲に つくる心。少しは恨を晴れてたも」と、又はら〳〵と泣きければ、得心やしたりけん、叶はじとや思ひけん。目を塞いで返事もせず、「ァヽ只今」とぐッと刺し、止目までは手も弱り、其儘捨て懐中の、小判を雨の缺に入れ、はしご下れば後より、つかみ立ッたるその塞さ。寒風肌も縮み胴ぶるひ、半死半生の手負、のり返ッてうんといふ、聲に驚き階子より、ばた〳〵ぐうど落様の、隅に屈んで慄ひ居る。手負は惱み苦しみて、續いて階子轉落ち、うめく聲に妙慶親子、家内の男女我も〳〵と駈出〳〵。「ァヽ南無三寶。藤様を切ッたは。切手が有らう」と、変彼處、尋ね探して様端に、人こそ引き出だせ

ば、「是は〳〵吾妻殿。それ取放すな。縛れ括れ」と立ち騷ぐ。「いかにも切るも私が切り、金も私が取ッたからは。氣遣しやるな遁げはせぬ」と、尤も器用な白狀。「先々龍田の一門衆兄御の方へ、注進をぬかるな」と追々人を走らせける。(一二)』 勝二郎は約束の、時分過ると紙子に股引。直に丹波の旅出立にて來て聞けば、吾妻が客を切ッたと町のもやつき。つッと入ッて、「コレ〳〵亭主。身は江戸屋勝二郎と云ふ吾妻が男。何科なりとも同罪にしてくれ」と、座敷にどうと座しければ、吾妻は泣いて目も明かず、「無分別な事をして、思ふが仇となりました」と、顔をさげてぞ居たりける。町の役人龍田より走り歸ッて、「手負の兄御、只今是へ御出で」と、いふを見れば古への手代新七。木綿布子も物さびて、「御免あれ」と座敷に入り、主從顔を見合せ、互にはッと驚く中、勝二郎赤面し、「面目なや耻かしや。其方に顔は合されぬ」と、兩袖を顔にあて、うづくまりてぞ隱れける。新七恨の兩眼に涙を浮め、大聲あげ、「ェ、聞こえませぬ旦那殿。我等に顔を隱さるゝは、面目ないか耻しい。コレその耻しがりが遲かッた。五年以前に新七を、耻かしいと思召ば、御身代は潰れませぬ。まッ斯有らうと存じた故、樣々の强意見。新町橋でお足にかけられ、踏れながらも御意見は、親旦那の御恩の報りたさ。女房お半はお身の上を苦に致し、氣病を煩ひ去年の春、終に空しうなりました。彼めも元は御家來。お主を苦にして相果つるは、下人たる者の本望。聊か侮やみも致さばこそ。親旦那のお影で、少のもとで家屋敷。在所龍田の親共も、餲ゑ凍へぬ程なれども、いや〳〵お主は流浪の身、家來の安樂道ならずと、家屋敷田地まで賣代なし、有銀十八貫目。御覽の通り我身には、碌な布子も着ぬ

(一二)器用な潔い義。

(一三)もやつきもやもやする意。混雜。

體ながら、親旦那の十七年忌は、內證で御前から、遊ばすと申しなし、恐らく江戸屋の追善と、笑はぬ程の法事を致し、御出世の願ひの爲、京都公家方。折々の付屆油斷も無く、殘る金二百兩いとしや吾妻殿。新町の殘金ゆゑ此所に勤と聞き、御兩人の氣を思ひやり、弟の藤五郎が請出す分で沙汰なしに、お二人一所に置ましたらば、貧苦の中のお樂、高いも低いも親たる身の、悅びと云ひ子の悅び、お前の御譏嫌よい顔を、草葉の影の親旦那に、見せましたい志し、御奉公の仕納めと存じ立ッたる所に、藤五郎は吾妻殿の、手にかゝッて死んだか。でかいた〳〵。此新七はお主の爲、心ざしの奉公は爲たれども、一命の奉公は其方に劣ッた。兄に優ッた忠の者。是々御亭主。只今申す通りに虛言は無い。兄が言分ないと云ふ證文を、致すからは別條はあるまい。夫とても是非處の作法、下手人を取るならば、水いらずに此新七、女房は死ぬる親はなし、一人の弟は相果つる、雲のうらを尋ねても、お主より外世の中に、大事の人は無きものを、隔てゝ下さる旦那殿、恨めしう思ひます」と、どうと伏して泣きければ。吾妻を始め亭主親子、町內近所の者迄も、誠の心を感じつゝ、皆々涙を流しけり。(一三)』 勝二郎飛んで出で、「ァ、過ッた〳〵。斯樣な身と成果てたも、其方を踏んだ下人の罰と、かね〳〵悔やみ歎いた。藤五郎を弟と知らいで、吾妻が殺したも我ゆゑぞ。主故に身上潰し、其體となッたを見て、此勝二郎が、いかに畜類なればとて、見ても聞いても居られうか。死ぬるにも死なれもせず、とてもの情に其方が此足にかけ、以前そちを踏んだ樣に、勝二郎を踏んでくれ。一つの罪も脫るゝ爲。さりとては新七、某を踏んでたも」と、足の下に背中を向け、手を合はせて泣きければ、

吾妻は縋ッて、「弟御の仇は私。刺殺して下さんせ。どうも生きては居にくい」と、歎き悔やむ聲々、新七は飛退り、「ア、勿體ない冥加ない。新七を新七と思召すが定ならば、御夫婦心を全うして出世を見せて下されば、踏殺されても大事ない」と、三人顔を差寄せて、聲をばかりに泣き居たり。かかる所に、八幡の神主紀の大夫より、御吉左右の早飛脚いきり切ッて案内す。「そりや吉左右とは悦ばし」と、狀箱聞くも疾し遲しと、封ぐ切ッて拜見す。「何々、江戸屋勝二郎事。家來新七數年の歎き感じ思召され。關白左右の大臣御憐愍に依ッて、八幡の本地舊の如く返し與へらる。追付歸宅あるべき」と、讀みも終らず八拜九拜、悦び踊り飛上り、はね上りたる淀鯉の、瀧の壺より涌出づる、しろかねこがねの鷄寶、ときは勝閧悦びどき、五畿内五ヶ國神々に、先願ほどきに悦びの、幣帛をあげ神樂をあげ、詣り納むる八幡山。此浪花津の惠方神、民安全こそ目出たけれ。(一四)」

(一四)跳ね上がりたる瀧の壺　共に鯉の縁語。○とき　鷄が時を報じて啼く聲。其縁で「かち閧」、「悦びどき」に移る。

(總評)　此一曲手代新七が誠忠な事實を主に描いたもの、其花として鯉大盡と吾妻とを加へた。鯉大盡は普通の遊治郎より多少氣象の確乎たる所を備へ、同じく吾妻も極端ながら凜然たる節を抱いて居た。是が淨瑠璃流の一種の無理、趣向は隨分亂暴なもので、後に吾妻に心を掛けて受け出さうとまでとり結めさ藤大盡が何ぞ料らん新七の弟であッて、實は忠義を貫くための廓通ひであッたとは今日から離れて考へては迚も立てるに忍びられた趣向でない。況んや吾妻の殺されかかッて、それと知ッて靜に殺された抔は頗る道理に外れた沙汰。何さま是で曲全體が面白くもなる、讀者も其案外なのに駭く、但し作曲の勞から言へば不倫の趣向で奇抜な現象を示したといふだけで、之を言ひ換へれば勞は實に尠く、隨ッて作者たる腕前も充分至り盡くしたとは言はれぬ。

文句の出來も翁の作としては尋常で、屈指第一とは言へぬ。さりなから勝二郎をして出沒謠曲を絶たしめず、其風采を宛然彷彿させた所は手際なもの。同じ手際な所は吾妻が火箸を燒く邊、其「さめる」「さめぬ」の問答兎角前後にもつれて奇想實に尋常で無し、忙中綽綽たる閑日月を備へた作家の詩才はたしかに是で見受けられる。

曾根崎心中 附、觀音巡り

實にや安樂世界より、今此娑婆に示現して、我等がための觀世音、あふぐもたかし高き家に、登りて民の賑はひを、契おきてし難波津や、三つづゝとをと三つの里。札所〳〵の靈地靈佛、巡れば罪も夏の雲、あつくろしとて鴛籠をはや、ふりはのこいぬ三六の。十八九なるかほよ花。今咲出しの初花に、笠は着ずとも召さずとも、照日の神も男神、よけて日まけはよもあらじ。頼み有りける巡禮道。西國三十三所にも、向ふと聞くぞ有りがたき。(一)

(一)仰ぐも高し高き家に」の縁で「高き家」を出す。仁德天皇御製、「高き家に登りて見れば煙ふり立つ民のかまどは賑はひにけり」の句を取つて「難波津」と出した。其故は此御製の出來た地は難波であつた故。○三つづつとをと三つの里　三十三所の義。觀音佛地に三十三所巡拜の事實が有る。○巡れば罪もなつの雲　罪も「無くなる」と掛け、「夏の雲」の縁で直ちに「あつくろし」と掛けた。○おりはのこいぬ三六の　鴛籠を「おり(下り)」と掛けた。こいぬ三六は何か時の流行の句に寄せたらしいがよく分からぬ。○十八九なるかほよ花　三六を受け、「三六十八の義。「かほよ花」、是は和歌などでは婦人の花の異名なから、此段では美人の義に用ゐ「かほよ」は「顔佳」に利かせた。(二)

一番に天滿の大ゆう寺。此御寺の名もふりし、昔の人も紀のとほるの、大臣の君が盥がきの、裏を都にほり江こぐ、盥汲み船のあと絶えず、今も弘督の檜びやうしに、のりの玉鋒えい〳〵。大坂巡禮胸に木札の普陀落や。大江の岸に打波に、しらむ夜明の、鳥も二番に長福寺。空にまばゆき久かたの、光りに映る我が影の、あれ〳〵走れば走る、これ〳〵又止れば止る。ふりの善惡見るごとく、心もさぞや神佛。照す鏡の神明宮。拜み巡りて法住寺。人の願ひも我がごとく、誰をか戀ひのいのりぞと、仇の惡氣や法海寺。東は如何に大敎寺、草の若芽も春過ぎて、遲れ咲きなる菜種や罌粟の、露に憔るゝ夏の虫。むのが妻戀ひやさしやすしや。あちへ飛つれこちへ飛つれ、あちやこち風ひた〳〵〳〵。羽と〳〵をあはせの袖の、染めた模樣を花かとて、肩に留まればおのづから、紋に上羽のてふせん寺。扨せんだう寺りつたう寺。天滿の札所殘りなく、そなたに巡る夕立の、雲の羽衣蟬の羽の、薄き手拭あつき日に、つらぬく汗の玉つくり、

(二)ほるの大臣　融大臣が上古此邊に江を掘り、鹽を焼て賣そまれた故事が有る。○弘誓の檜びやうし　弘誓の船は佛經の語。衆生を濟度として彼岸へ到着させる船。此段では上の鹽焼船を受け、「弘誓」と出し、「船」と續くべきを所を、前に「船」が有り重複する故に「檜」と避け用ゐた。○のりの玉鋒　「のり」は「法」と「乘り」と二つに掛けた。「えいえい」は聲を押す掛け聲。

稻荷の宮に迷ふとの、闇は理り御佛も、衆生のためのみなれば、是ぞおばせの廣德寺。四方に眺めのはてしなく、西に船路の海深く、波の淡路に消えずも通ふ。沖の汐風身に染む鷗。汝も無常の烟にむせぶ。色に憧れて死なうなら、しんぢ此身はなりしだい。扨實によいけいでん寺。緣に引かれて又いつか、こゝに高津のへんめう院。菩提の種や上寺町の、長安寺より清安寺。登りやすな〳〵下りやちよこ〳〵。登り下つ谷町筋を、歩みならはず行きならはねば、しよていくづをれて、恥づかしの、森で稻がはら〳〵〳〵。はツと返るをうち掻合せ、弛みし帶を引締〳〵、締てまつはれ藤の棚。十七ばんに住願寺。是からいくつ生玉の、本誓寺ぞと伏拜む。珠數につながん菩提寺や。早天王寺に六じ堂。七千余卷の經堂に、經讀む鳥の時ぞとて、よその待宵きぬぎぬも、思はでつらき鐘の聲。こんごん堂にかうだうや。萬燈院にともす火は、影も輝く蠟燭の、しん清水に暫とて、やがてやすらふ逢坂の、關の清水を汲みあげつ、手にむすびあげ口すゝぎ、無明の酒の醉さます、木々の下風ひや〳〵と、右の袖口左の袖へ、通る煙管にくゆる火も、道の慰みあつからず、吹きて亂るる薄煙。空に消えては是も又、行方も知らぬ思ひ草。人忍草道草に、日も傾きぬ急がんと、又立ち出づる雲の足。時雨の松の下寺町に、信心深きしんかう寺。悟らぬ身さへ大覺寺。扨こんだい寺大蓮寺、巡り〳〵て是ぞはや。三十番に三寺の、大慈大悲の顔にて、かくる佛の御手の糸。白髮町とよ黑髮は、戀に亂るる妄執の、夢を覺まさんはぐろうの、爰ならべし新御靈に、拜み納むるさしもぐさ。草のはすはなよにまじり、三十三に御身をかへ、色で導き情で敎

へ、戀ひを菩提のはしとなし、渡してすくふ觀世音。誓ひは妙に有りがたし。(二)』立ちまよふ浮名をよそに漏らさじと、包む心のうち本町。こがるゝ胸のひらのやに、春を重しひな男。一つ成口ものの酒。柳の髪もとく〳〵と、呼ばれて粋のなとり川。今は手代と埋木の、生醬油のそでしたたるき戀ひの奴に荷はせて、得意を巡り生玉の、社にこそは着きにけれ。(三)』出茶屋の床より女の聲、「ありや德樣では無いかいの。コレ德樣〳〵」と手を拍けば、德兵衛合點して打ちうなづき、「コレ長藏。おれは跡から往ぬ程に、其方は寺町のくほん寺樣、長久寺樣、上町から屋敷方、廻ッてさうして內へ往にや。德兵衛も早戻ると云や。それ忘れず共安土町の、紺屋へ寄ッて錢とりやや。道頓堀へ寄りやんなや」と、影見ゆるまで見送り〳〵、簾をあげて、「コレお初ぢやないか。是はどうぢや」と編笠をぬがんとすれば、「ア、先やはり着て居さんせ。今日は田舍の客で、三十三番の觀音樣を巡りまし、爰で晩迄日暮に、酒にするぢやとぜい云ふて、物まね聞きにそれそこへ、戻ッて見れば六かしい。駕籠も皆知らんした衆、やッぱり笠を着て居さんせ。夫はさうぢやが此頃は梨もつぶても打たんせぬ。氣遣ひなれど內方の、首尾を知らねば便宜もならず、丹波屋まではお百度ほど尋ぬれど、あそこへも音信もないと有る。ハア誰やらが……オ、夫よ。座頭の太市が友達衆に聞けば、在所へ行かんしたと、云へどもつんと誠にならず、ほんに又あんまりな。私はどう成らうとも、聞きたうもないかいの、こな樣それでも濟もぞいの、私は病になるわいの。虛なら是此つかへを見さんせ」と、手を取ッて懷のうち、恨みたるくどき泣き。ほんの夫婦にかはらじな。男も泣いて、「オ、道理〳〵。

○胸に木札の普陀落や　巡禮は胸に木札を下げ、普陀落や岸うつ波のといふ御詠歌を唱ふ。其御詠歌に基き、下に「大江の岸に打つ波に」と出した。此以後卅三所の觀音靈場の寺院の名を種種の手段にして出した。一番大ゆう寺から始めて、二番長福寺などの類。

○悋氣や法海寺　法界悋氣といふ語の有るのに據り、悋氣を法海寺に續けた。

○あはせの袖　羽を「合はせる」に掛けた。

○上げ羽のてふせん寺　上げ羽の「蝶」と掛けた。

○扨げによいけいでん寺　よい「景」と掛けた。

○ここに高津のここに「來う」と掛けた。

さりながら、云ふて苦にさせ何せうぞいの。此中おれが憂き苦勞。盆と正月其上に、十夜おはらひ煤掃を、一度にするとも斯うは有るまい。心の內はむしやらしやと、やみくみッちやの皮袋。銀ごとやら何ぢややら、譯は京へも登ッてくる。ようも〳〵德兵衛が、命は續く。狂言に、したらば哀にあらうぞ」と、溜息ほッとつくばかり。「ハテ輕口の段かいの。夫程にない事をさへ、私にはなぜに云はんせぬ。秘さんしたは譯があろ。なぜ打明けて下んせぬ」と、膝に凭れてさめ〴〵と、涙はのべをひたしけり。「ハアテ泣きやんな恨みやるな。秘すではなけれども、云ふても埒の明かぬこと。さりながら、大方まづ濟みよッたが、一伍一什聞いてたも、おれが旦那は主ながら、現ざいの伯父甥なれば、懇にもあづかる。又身共も奉公に、是程もゆだんせず、商ひ物の文字ひらなか、違へた事のあらばこそ。此頃袷をせうと思ひ、堺筋でかゞ一疋。旦那の名代でかひがある。是が一期にたッた一度。此銀もすはと云へば、着換賣りても損かけぬ、この正直を見て取ッて、內儀の姪に二貫目付けて夫婦にし、商ひさせうと云ふ談合、去年からのことなれど、そなたと云ふ人持ちて、なんの心がうつらうぞ。取りあへもせぬ其內に、在所の母は繼母なるが、我に秘して親方と、談合極め二貫目の、銀を握ッて歸られしを、此うッそりが夢にも知らず、後の月からもやくり出し、押して祝言させうと有る。そこで已もむッとして、やあら聞こえぬ旦那殿。私合點致さぬを、老母をだましたゝき付け、あんまりななされ樣。お內儀樣も聞こえませぬ。今迄樣に樣を付け、あがまへた娘御に、銀をつけて申しうけ、一生女房の譏嫌取り、此德兵衛が立つものか。嫌と云ふからは死んだ親父が、生き返り、申

○菩提の種や上寺町　菩提の種を「植ゑ」と掛かる。

○すなすな、ちよこちよこ　「すなすな」は「すらすら」と異體同種の語。

○耻かしの森　此邊の名所の名。歌などに詠む。それを字義其儘の「耻かしい」義に用ゐた。

○藤の棚　「しめて」「まつはれ」などの緣。

○いくつ生玉の是からいくつ「行く」と掛けた。

○數珠につながん　菩提寺や　菩提寺を「菩提樹」に掛けた。菩提樹の材を數珠の珠に造るゆゑ、數珠に繋がんと前に出した。

○經讀む鳥　鶯の異名。鶯の聲は「法華經」とて、宛から讀經するやうであるとて。

○鐘の聲「こん」と鳴る其響きの緣で「こんこん堂」。
○萬燈院　萬燈とある故、燈火の緣で「ともす火」と出した。
○蝋燭のしん　濤水　蝋燭の「心」と掛けた。
○思ひ草　煙草の異名。吹き亂れる薄けぶりもやがて空に消えて行くへも知れなくなるといふ意から、直に行くへも知らぬばかり深い思ひと轉じ、其思ひを緣で直に煙草の異名に移した。
○又立ち出づる云云　立ち出づる足といふ所を綾に「雲」を挾み、其緣で「時雨」と出し、「松」の「下陰」の意で「下寺町」と出した。
○信心深きしんかう寺　「信心深き信仰」の意。

すと有ッても嫌で御座ると、言葉を過ごす返答に、親方も立腹せられ、おれが夫も知ッて居る。蜆川の天滿屋の、初めとやらとくさり合ひ、女房がめひを嫌ふよな。よい此上はもう娘はやらぬ。遣らぬから銀を立て、四月七日までにきッと立て、あきなひの勘定せよ。まくり出して大坂の、地は踏ませぬと怒らるゝ。それがしも男の我、オ、畏まッたと在所へ走る。又此母と云ふ人が、此世が彼世へかへッても、握ッた銀を放さばこそ。京の五條の醬油問屋、常々銀の取り遣りすれば、是を賴みに上ッて見ても、折しも惡う銀も無し。引ッ返して在所へ行き、一在所の詫言にて、母より銀を請取ッたり。追ッつけ返し勘定仕まひ、さらりと埒が明くは明く。されども、大坂に置かれまい時には、何樣して逢はれうぞ。譬へば骨を碎かれて、身はしやれ貝の蜆川、底の水屑と爲らば成れ。我身に離れ何樣せう」と、咽び入りてぞ泣き居たる。(四)』　お初も共にせく涙、力をつけて押し止め、「扨々いかい御苦勞。みな私ゆゑと存ずれば、嬉し悲しう忝なし。さりながら、心確かに思召せ。大坂をせかれさんしても、盜みかやきの身ではなし、何樣してなりとも置く分は、私が心にある事なり。逢ふに逢はれぬ其時は、此世ばかりの約束か。さうした例の無いではなし。死ぬるをたかの死出の山。三途の川はせく人も、急かるゝ人も有るまい」と、氣强う勇む詞の中、涙に咽て言ひさせり。お初重ねて、「七日と云ふても明日の事。迚も渡す銀なれば、早う戻して親方樣の、譏嫌をもとらんせ」と云へば、「オ、さう思ふて氣が急くが、其方も知ッた彼の油屋の九平次が、跡の月の晦日、たッた一日入る事有り、三日の朝は返さうと、一命かけて賴むにより、七日まではいらぬ銀。兄弟同志の友達の、爲めと

○卅番にみつ寺　卅番に「充つ」と掛けた。
(三)こがるる胸のひらのや　胸の「火」と掛けた。
○春を重ねしひな男　「ひな男」は雛男の義。美貌で愛らしいとの形容。「春を重ねし」は艷咄しが多いなどの意。
○一つ成る口　すこしは酒をも呑み得る口。其緣で「桃の酒」と出した。「桃」の緣で又「柳」が出、「髮」と出した所から「解く」と出した。
○粹の名とり川　粹人の名を取るとの意。名取川は奥州の川の名。和歌などにも見えた。
○今は手代とうもれ木の云云　埋れ木は土中に埋沒して數千年の星霜を經て化して黑色になッたもの、今も

思ひて時貸に、貸したるが三日四日に便宜せず、昨日は留宅で逢ひもせず、今朝尋ねうと思ひしが、明日ぎりに商ひの勘定も仕舞はんと、得意廻りて打ち過ぎたり。晩には往ッて埒あけう。彼奴も男磨く奴。己が難儀も知ッて居る。如才は有るまい氣遣ひしやるな。ヤアお初。(五)』　初瀬もとほし難波寺。名所多き鐘の聲。盡きぬや法の聲ならん。山寺の春の夕暮來て見れば、先なは「コレ九平次〳〵。ア、不出來千萬な。身共方へは不屆して、遊山どころでは有るまいぞ。サア今日埒あけう」と、手を取ッて引き留むれば、九平次興醒顏になッて、「なんの事ぞ德兵衛。此連衆は町の衆。上汐町へ伊勢講にて只今歸るが、酒も少飲んで居る。利腕取ッて何樣する事ぞ。粗忽をするな」と笠をとれば、「イヤ此德兵衛は粗忽はせぬ。跡の月の廿八日銀子貳貫目時貸に、此三日切に貸したる銀、それを返せと云ふ事」と、云はせも果てず九平次かッら〳〵と笑ひ、「氣が違ふたか德兵衛。われと數年語れども、一錢借ッた覺えなし。聊爾な事を言ひかけ、後悔するな」と振放せば、連も笠をはらりと脫ぐ。德兵衛はッと色をかへ、「云ふな〳〵九平次。身が此度大難儀、何樣もならぬ銀なれども、晦日たッた一日で、身代立たぬと歎いたゆゑ、日比語るは爰らと思ひ、男づくで貸したぞよ。手形もいらぬと云ふたれば、念の爲ぢや判をせうと、身共に證文書かせ、お主が捺した判が有る。さう云ふな九平次」と、血眼になッて責めかくる。「ムヽウなんぢや。判とはどれ見たい」。「オ、見せいで置かうか」と、懷中のはな紙入れより取出し、「お町衆なら見知りもあらう。コリヤ是でもあらがふか」と、開いて見すれば九平次横手を打ち、「なる程判はおれが判。ニ、德兵衛。土に喰付死ぬるとても、こんな事はせぬも

陸前國などから盛んに堀り出す。すべて文章などでは隱論して草莽に伏す義。埋れ木の「木」と重ねる意で「生醬油」と出し、其醬油の味の縁で「したたるき」と出した。

(四)道頓堀へ寄りやんな　道頓堀は見世物など有る所。

○巡りまし　「まし」は「申し」の略。敬語。

○ぜい　「贅澤」の略。元祿時代の隱語。

○戻ッて見れば大かしい　客が戻ッて此所ゝ現在居る事ゆゑ德兵衛の姿が見えると事が大かしくなる。

○つんと　更に。

○のべ　延べ紙の略。即ち鼻紙。

○すみよッた　濟み居ッたの訛り。

○袷をせう　袷を

のぢや。此九平次は跡の月の廿五日、はな紙入を落として、印判共に失なふた。方々に張り出して、尋ぬれど知れぬ故、此月からコレ此御町衆へも斷り、印判を替へたわやい。廿五日に落とした判を、廿八日に捺されうか。扨は其方が拾ふて、手形を書いて判をすゑ、おれをねだッて銀取らうとは、謀判より大罪人。こんな事をせうよりも、盜みをせい德兵衛。エ、首を切らせる奴なれど、懇がひに免して置く。銀になるならして見よ」と、手形を顏へ打ちつけ、はッたと睨む顏つきは、けんによもなげにしら〳〵し。(六)』德兵衛くわッと胸せいて、大聲あげ、「扨たくんだり〳〵。一杯喰ふたか無念やな。ハテなんとせう此銀を、のめ〳〵と只己に取られうか。斯うたくんだ事なれば、でんどへ出ても、おれが負け。腕さきで取ッて見せう。コリヤ平野屋德兵衛ぢや。男ぢやが合點か。おのれ斯樣に友達を、かたッてたふす男ぢやない。サア來い」と攫みつく。「ヤアしやらな丁稚あがりめ。投げてくれん」と胸ぐら取り、打ち合ひ捻ぢ合ひたゝきあふ。お初ははだしで飛んで下り、「あれ皆樣賴みます。私が知ッたお人ぢやが、駕籠の衆は居やらぬか。あれ德樣ぢや」と身をもがく。せんかたなくも哀なり。客は固より田舍者。「怪我が有ッてはならぬぞ」と、無體に駕籠に押し入れる。「イヤ先づ待ッて下さんせ。なう悲しや」と泣く聲ばかり。「急げ〳〵」と一さんに、駕籠を早めて歸りけり。德兵衛は只一人、九平次は五人づれ。あたりの茶屋より棒ずくめ。蓮池まで追出し、誰が踏むやら毆くやら、更に別ちは無かりけり。(七)』髮も解かれ帶もとけ、彼方此方へ伏しまろび、「やれ九平次め畜生め。おのれ生けて置かうか」と、よろぼひ尋ね廻れども、逃げて行方も見えばこそ。其儘そこにどうと

爲うの義。「せう」は「してやる」などの「して」と同じ類、すべて其目的とする物を手ゝ入れる義。ここでは「袷を拵へやう」の意。

○かが一疋　加賀絹一疋。加賀絹は上品な絹。此時代での流行であッた。

○もやくり出し　「もや」は「もやもや」の「もや」、混雜、曖昧の意。「くり」は意味を强める下品な接尾語。「いぢくる」、「ひねくる」などの「くる」と同じ物。「雙方で「もやくり出す」は混雜し初めるの義。

○たたきつけ　銀でたたきつけ。

○樣に樣をつけ　非常ゝ敬重した體の形容。

○あがまへた　崇めたの延。

すわり、大聲上げて涙を流し、「いづれもの手前も面目なし、耻かしゝ。全く此德兵衛が、云ひかけしたるで更になし、日頃兄弟同然に、語りし奴が事と云ひ、一生の恩と歎きし故、明る七日此銀が、無ければ我等も死なねばならぬ。命替りの銀なれども、互の事とやくにも立ち、手形を我等が手で書かせ、印判をすゑて其の判を、前方に落とせしと、町内へ披露して、かへッて今の逆ねだれ。口惜しや無念やな。此如く踏毆かれ、男も立たず身も立たず。エ、最前に摑み付き、食ひ付いてなりとも死なんものを」と、大地を毆き齒がみをなし、拳を握り歎きしは、道理とも笑止とも、思ひやられて哀なり。「ハアかういふても無益の事。此德兵衛が正直の、心の底のすずしさは、三日をすごさず大坂中へ、申し分けは爲て見せう」と、後に知らるる言葉のはし。「いづれも御苦勞かけました。御免あれ」と一禮のべ、破れしあみ笠拾ひきて、顏もかたぶく日かげさへ、くもる涙にかきくれ〳〵、すご〳〵返る有樣は、目も當られぬ戀風の、身にしゞみ川流れては、其うつせ貝うつゝなき、色の闇路を照らせとて、夜毎に灯す燈火は、四季の螢よ雨夜の星か。夏も花見る梅田橋。旅のひなびと地の思ひ人。心心の分の道、知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑はしゝ。(八)』無慘やな、天滿屋のお初は家へ歸りても、今日の事のみ氣にかゝり、酒も呑れず氣も濟まず、しく〳〵泣いて居る所へ、隣の妓や朋輩の、ちよッと來ては「なう初樣。何も聞かんせぬか。德樣は何やら譯の惡い事有ッて、たんと擲れさんしたと、聞いたが眞か」と云ふも有り、「イヤ私が客樣の話ぢやが、踏まれて死なんしたげな」と云ふもあり、騙りを云ふて縛られての、僞判して括られてのと、碌な事は一つも言はず、問ふにつらさ

○まくり出す　「まくる」は「追ひまくる」の「まくる」。
(五)便宜せず　元祿時代の通用語。窮儉せず。
(六)初瀬もとほし難波寺　上の「阿初」と呼び掛けた名を承け、同聲で初瀬に轉じ、風雨一摘急に局面を變へた。句は是でといふ程でも無いが、手際ではある。
○聊爾な事　粗忽な事。
○けんによもなげ　本義不詳。
(七)でんど　出る所の訛り。裁判所の義。前の「淀鯉出世瀧德」にも見えた。
○しやらな　洒落なの義。しやらくさい。
(八)後に知らるる言葉のはし　必死の決心をした證據。後の自殺を遊に呼ぶ。

の見舞なり。「あゝいやもう云ふて下んすな。聞けば聞く程胸痛み、私から先へ死にさうな。いッそ死んでのけたい」と、泣くより外の事ぞなき。涙片手に表を見れば、夜の編笠德兵衛。思ひ詫びたる忍び姿、ちらと見るより飛立つばかり、走り出でんと思へども、奥には亭主夫婦、上り口に料理人、庭では下女がやくたいの、目が繁ければ左もならず、「えゝいから氣が盡きた。門見てこう」とそッと出で「なう是は何樣ぞいの。こな樣の評判いろ〳〵に聞いたゆゑ、其氣遣さ〳〵」。氣違の樣になッて居たわいなう」と、笠の内に顏さし入れ、聲を立てずの隱し泣き、哀切なき涙なり。男も涙に暮れながら「聞きやる通りの巧なれば、云ふ程己が非に落ちる。其内四方八方の、首尾はぐわらりと違ふてくる。最早今宵は過されず、とんと覺悟を極めた」と、囁けば内よりも、「世間に惡い取沙汰ある。初樣内へ這入らんせ」と聲々に呼入るゝ。「オウ〳〵あれおや。何も話されぬ。私がする樣にならんせ」と、裲襠の裙に隱し入れ、這々中戸の沓脫より忍ばせて、椽の下屋にそッと入れ、上り口に腰打ちかけ、煙草引き寄せ吸つけて、そ知らぬ顏して居たりけり。斯かる所へ九平次は、惡口仲間二三人。さどうまじくらぞッと來り、「ヤア妓樣達寂しさうに厶る。何と客に成ッて遣らうかい。なんと亭主久しいの」と、のさばり揚れば、「夫煙草盆お盃」と、ありべかゝりに立騷ぐ。「イヤ酒は置や。呑んで來た。扨咄す事がある。これの初が一客、平野屋の德兵衛めが。身が落とした印判拾ひ、二貫目の僞手形で、騙らうとしたれども、理屈に詰まッた揚句には、しなずかひな目に遇ふて一分は廢ッた。向後奴らへ來るとも油斷しやるな。皆に斯う語るのも、德兵衛めが、うせまッかい樣に云ふとても、必

○身にしじみ川　蜆川は此曲の前にも見えた。こゝでは身に「しみ」と掛けた。
○うつせ貝　蜆川の蜆の緣。中實の空になった貝。
○地の思ひ人　土地の遊治郎。
○わけの道　色欲の道。
(九)ありべかかり　手あたり次第に。
○しなずかひな目　不死甲斐な目の義。せめて一命を殞さなかッたのが甲斐(幸福)であったほどの苦しい目。
○うやまッかい　語源不詳。白白しく眞を僞にくるめる義。
○どうでのべが飛びたもの　「のべ」は延の義、首の隱語。どうせ首の飛んだ人間。

ず實にしやるなや。寄せる事もいらぬもの。どうでのべが飛びたもの」と、誠しやかに云ひ散す。椽の下には齒を喰しばり、身を慄はして腹を立つるを、初はこれを知らせじと、足の先にて押鎭め、押さへ鎭めし神妙さ。亭主は久しい客の事。善惡の返答なく、「さらば何んぞお吸物」と紛ぎらかしてぞ立ちにける。(九)』初は涙にくれながら「然のみ利根に云はぬ物。德樣の御事、幾年馴染み心根を、明かし明かせし中なるが、夫は〳〵いとしぼげに、みぢん譯は惡うなし。頼母しだてが身のひしで、欺されさんしたものなれども、證據無ければ理もたゝず、此上は德樣も死なねばならぬ品なるが、死ぬる覺悟が聞きたい」と、獨言に擬へて、足で問へば打ち頷き、足首取ッて喉笛撫で、自害するとぞ知らせける。「オ、その筈〳〵。いつまで生きても同じ事。死んで耻を雪いでは」と云へば九平次ぎよッとして、「お初は何を云はるゝぞ。なんの德兵衛が死ぬるものぞ。若し又死んだら其跡は、己が念比して遣らう。和女も己に惚てぢやげな」と云へば、「こりや忝なかろぞいの。私と念比さあんすと、此方も殺すが合點か。德樣に離れて片時も、生きてゐやうか。そこな九平次のどうずりめ。阿房口を叩いて、人が聞いても不審が立つ。どうで德樣一所に死ぬる。私も一所に死ぬるぞやいの」と、足にて突けば椽の下には涙を流し、足を取ッて押戴き、膝に抱つき憧れ泣き、女も色に包みかね、互に物は言はねども、肝と肝とにこたへつゝ、濕り泣きにぞ泣き居たる、人知らぬこそ哀なれ。(一〇)』九平次も氣味惡く、「相場が惡いおぢやいの。妥な妓衆はいな事で、己らが樣に銀遣ふ、大盡は嫌ひさうな。あさやへよッて一杯して、ぐわら〳〵一歩を撒き散らし、そしていんだら寢よからう。さ、

懐中が重たうて、歩きにくい」と、悪口だらけ云ひ散らし、喚いてこそは歸りけれ。亭主夫婦「今宵ははや火もしまへ、泊りの衆は寢せませい。初も二階へ上ッて寢や。早う寢や」と云ひければ、「そんなら旦那様、内儀様。もうお目に懸りますまい去らばでござんす。内衆も……」去らば〳〵と他ながら、暇乞ひして閨に入る。これ一生の別れとは、後にこそ知れ氣もつかぬ、愚の心不便さよ。(一一)』「ソレ釜の下に念を入れ、肴を鼠に引かするな」と。見世をあげつ門さしつ。寢るより早く高鼾。如何なる夢も短夜の、八つになるのは程もなし。初は白無垢死出立、戀路の闇の黒小袖。上に打かけ差足し、二階の口より指覗けば、男は下家に顔出し、招き頷き指さして、心に物を云はすれば、梯子の下に下女寢たり。釣行燈の火は明し、如何はせんと案ぜしが、櫻櫚箒に扇をつけ、箱梯子の二つ目より、煽ぎ消せども消えかぬる。身も手も伸しはたと消せば、梯子よりどうど落ち、行燈消えて暗りに、下女はうんと寢返りし、二人は胴を慓はして、尋ね廻る危さよ。亭主奥にて目を寤し、「今のはなんぢや。女子ども有明の火も消えた。起きて灯せ」と起されて、下女は眠そに目をすり〳〵、丸裸にて起き出で、「火打箱が見えぬと、探り歩くを觸じと、彼方此方へ這ひまつはるゝ玉かづら、苦しき闇の現なや。漸〳〵二人手を取り合ひ、門口までそッと出で、鎭は外せしが、車戸の音いぶかしく、明かねし折から、下女は火打をはた〳〵と、打つ音に、紛らかし丁ど打てばそッと明け、かち〳〵打てばそろ〳〵明け、合はせ合はせて身を縮め、袖と袖とをまきの戸や、虎の尾を踏む心地して、二人つゞいてつッと出で、顔を見合はせ、「ア、嬉し」と、死にに行く身を喜びし、哀さつらさ淺ましさ。跡に火打

○御吸ひ物　附き穂の無い此一句。紛らす工夫の見えて妙を極はめる。

(一〇)頼もしだてが身のひしで　先方の爲めに謀ッてやッた頼もしい所業が身の害となッて。

○死なねばならぬ品なるが　「品」は筋、理などの義。

○足首取ッて云云　實際の事實よは遠い形容ながら慘酷の覺期を巧みに短句で言ひ盡くした。

(一一)寢せませい　「ませい」は命令の語「ませ」の延。

(一二)此段細叙詳密。一句毎に肝をゑぐる。亭主が燈火の消えたのに心付いたところ、千釣の叙事法。

○車戸の音いぶかしく　「いぶかしく」は氣遣ひである義。車仕掛けの戸でがらめく故人目に立つかと氣遣ひになるとの意。

○死にに行く身を喜びし　一句奇聲。

●道行

(一)心もくれは鳥　心も「暮れ」と掛かる。續いて「呉羽鳥」を承けて「黒白無や」と出した。

ちの石の火の、命の末こそ短かけれ。(一二)』

曾根崎心中の道行

此世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀なれ。あれ數ふれば曉の、七つの時が六ッ鳴りて、殘る一ッが今生の、鐘の響の聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見上ぐれば、くも心なき水の音。北斗は冴えて影うつる、星の妹脊の銀河。梅田の橋を烏鵲の、橋と契りていつまでも、我とそなたは女夫星、必ず然うと縋り寄り、二人が中に降る涙、川の水嵩も增るべし。向ふの二階は何屋とも、おぼつか情最中にて、まだ寢ぬ火影聲高く、今年の心中善悪の、言の葉ぐさや茂るらん。聞くに心も呉羽鳥、あやなや昨日今日迄も、他に云ひしが明日よりは、我も噂の數に入り、世に謠はれん。謠はゞ謠へ。謠ふを聞けば、「どうで女房にや持ちやさんすまい。いらぬ物ぢやと思へども、實に思へども歎けども、身も世も思ふ儘ならず。いつを今日とて今日が日まで、心の伸びし夜半もなく、思はぬ色に苦みに、どうした事の緣ぢややら、忘るる隙は無いわいな。それに振捨て行かうとは、遣やしませぬぞ手にかけて、殺して置いて行かんせな。放ちは遣らじ」と泣きければ、歌も多きにあの歌を、時こそあれ今宵しも、謠ふは誰そや聞くはわれ。過ぎにし人も我々も、一つ思ひと縋りつき、聲も惜しまず泣き居たり。(一)』いつは然もあれ此夜半は、せめて暫しは長からで、心も夏の夜の慣ひ。命をおはゆる鳥の聲。明なばうしや天神の、森で死なんと手を引きて、梅田堤の小夜鳥、明日は我が身を餌食ぞ

や。「實に今年は此方樣も、廿五才の厄の年、私も十九の厄年とて、思ひ合ふたる厄祟り、緣の深さのしるしかや。神や佛に懸けおきし、現世の願を今爰で、未來へ廻向し後の世も、猶しも一つ蓮だや」と、つまぐる數珠の百八に涙の玉の數添ひて、盡せぬ哀つきる道。心も空もかげ暗く、風しん〳〵たる骨根崎の、森にぞ辿り着きにける。彼處にか此處にかと、拂へど草に散る露の、我れより先に先消えて、定めなき世は稻妻か、それかあらぬか「ヲ、怖は。今のは何と云ふ物やらん」。「ヲ、あれこそは人魂よ」。今宵死するは我れのみとこそ思ひしに、先立つ人も有りしよな。誰にもせよ、死出の山の伴ひぞや。南無阿彌陀佛〳〵」の聲の中、あはれ悲しや又こそ魂の世を去しは、南無阿彌陀佛と云ひければ、女はふろかに涙ぐみ、「今宵は人の死るぬ夜かや殘ましさよ」と涙ぐむ。男涙をはら〳〵と流し、「二つ連れ飛ぶ人魂を、他の上と思ふかや。正しう御身と我が魂よ」。「なになう二人の魂とや。はや我々は死したる身か」。「ヲ、常ならば結び留め、繋ぎ留んと歎かまじ。今は最期を急ぐ身の魂の在處を一つに住まん。道を迷ふな違ふな」と、抱き寄せ肌を寄せ、かッぱと伏して泣き居たる。二八の心ぞ不便なる。(二)』　涙の糸の結びまつ。櫻樹の一木の相生を、連理の契りに擬へ、露の浮身の置き所。「サア愛に極めん」と、上着の帶を德兵衛も、初も涙の染小袖、脫いでかけたる棕櫚の葉の、其玉はいき今ぞ實に、浮世の塵を拂ふらん。初が袖より劔刀出し、「若も道にて追手のかゝり、割れわれになるとても、浮名は捨じと心がけ、劔刀用意致せしが、望みの通り一所で、死ぬる此嬉しさ」と云ひければ、「ヲ、神妙頼もし〳〵。左程に心落つくからは、最期も案ずる事は無し。さりながら、臨終の時の苦患にて、死姿見苦しと云はれんも口惜し〳〵。此兩本の連理の木に、身體をきッと結ひつけ、潔よう死ぬまいか。世に類なき、死樣の、手本とならん如何にも」と、あさましや淺黃染。かゝれとてやは抱へ帶、兩方へ引きはりて、劔刀取ッてさら〳〵と、どうと座をくみ二重三重。搖がぬ樣に確かと締め、「能う締まッたか」。「ヲ、締めました」と、女は夫の姿を見、男は女の體を見て、『こは情なき身の果てぞや」と、わッと泣き入るばかりなり。(三)』「ア、歎かじ」と德兵衛。顏振り上げて手を合はせ、「我れ幼少にて實の父母に離れ、伯父と云ひ親方の苦勞となりて人となり、恩も送らず此儘に、亡き跡までも兎や角と、御難儀かけん勿體なや、罪を免して下されかし。冥土にましますご父母には、追ッつけ御目に懸るべし。迎へ給へ」と泣きければ、おゝも同じく手を合はせ、「こな樣は羨ましや、冥土の親御に逢はんとある。我らが父樣母樣は、息災で此世の人なれば、いつ逢ふ事の有るべきぞ。便りは此春聞いたれど、逢ふたは去年の初秋の、初が心中取沙汰の、明日は在所へ聞こえなば、如何ばかりかは歎きをかけん。親達へも兄弟へも、是からしやくりあげ〳〵聲も惜しまず泣きければ、夫もわッと叫びいり、流涕憧るゝ心意氣、理りせめて哀なれ。「いつまで云ふて詮もなし。早や〳〵殺して〳〵」と最期を急げば「心得たり」と、脇差するりと拔き放し、「ア、只今ぞ南無阿彌陀〳〵」と、云へども流石此年月「いとし可愛と締めて寢し、肌に刀が當てられうか」と、眼も眩み手も慄ひ、弱る心を引直し、取直しても猶慄ひ、突くとはすれど切先

(三)其玉はばき今ぞげに云云　棕櫚の葉の帶に似たのを形容して玉はばきとし、一轉して「塵を拂ふ」と承けた。「此浮き世の塵をはらふ」は此所では間接に命を終るの義を含む。○かかれとてやは抱へ帶び「かかれ」「かか〳〵」共よ似寄りの音でした文飾。上の句の「あさましや淺黃ぞめ」も同樣の句法。「かかれとてや」は「斯くあるべき事であれとの約束事か」の意。

は、彼方へはづれ此方へそれ、二三度ひらめく劔の刄。あッと斗に喉笛に、ぐッととほるが南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛と繰とほし刮とほす腕先も、弱るを見れば兩手を伸べ、斷末間の四苦八苦、哀と云ふも餘りあり。「我とても遲れうか。息は一度に引き取らん」と、剃刀取ッて喉に突立て、柄も折れよ刄も碎けと、剜りくり〳〵目も瞑き、苦む息も曉の、知死期につれて絶え果たり。誰が告るとは曾根崎の、森の下風音に聞こえ、取傳へ、貴賤群聚の廻向の種。未來成佛疑ひなき、戀ひの手本となりにけり。(四)』

(總評)　曾根崎心中其趣向は上乘といふ程で無いものの、道行の一段の文句に至ッては實に翁の作中屈指の一と言ッても苦しくない。德兵衛が必死となッた根元は些細な事で、是がために死ぬかと思へば多少一體の貫目を減少する傾きも見える。が、其趣向の短所をば文句の長所で補ッた。道行きの文は殆ど評するに言葉も無いばかり。其破題「此世の名ごり」から「水嵩もまさるべし」までは流暢婉轉、而も悲哀の意を深く含んだ。「一足づつに消えて行く」は翁の得意の筆法。「雲心無き水の音」から夜の物凄く、靜かに淋しい樣子を盡くし、場面に一層の味を加へた。やがて他所の歌で、當人の身に當たるのを引き、人魂を見せて凄味を添へ、怠らず婦女子の情の哀れにあどけない所を示し、怠らず情緒の濃やかな所を利かせ、遂に無殘な最期を出した所、息も吐かれぬ妙味有り、一字一句の曲としての瑕は有るにもしろ、一曲全體として日本の淨瑠璃中でも實に第一位の列に入る。

重井筒
●上の卷
(一)夜さこい　元祿頃から可なり流行し、弘化頃更に一氣焔を吐いた俗間の小謠の節の名。其調子は左のやうなもの。—「花の御江戸の兩國橋に、按摩さんが眼鏡を買ひに來た。よさこい、よさこい」。—「按摩さんが眼鏡を買ふのはよけれど、坊さんかんざし買ひに來た。よさこい、よさこい」。—「坊さんかんざし買ふのはよけれど、藝者が枕を買ひに來た。よさこい、よさこい」。—「藝者が枕を買ふのはよけれど、をしよさん刺身を買ひに來た。よさこい、よさこい」。凡そ此類。
○清十郎と鼠色　清十郎と「寢」と掛けた。

德兵衛重井筒

上之卷

夜さこいと云ふ字を金紗で縫はせ、すそに清十郎と寐たところ、すそに清十郎と鼠色。京の吉岡紙子染や、ぼてり書きか薄書きか。「正月前のきは〴〵に、旦那どのは外が内、おみき過ごしてうかうかと、妓衆といへば目が見えず、内にゐやんす内儀樣、こちとばかりに打ち任せ、誂へ物も節季をも、どう仕舞はんす事ぢややら、げしんの惡い旦那殿」。「やい三太そりやなんぢや。茶屋へ往きやろが妓衆を買やろが、旦那は旦那、こちとは紺屋の手間取り。何事もさらりッと、淺黄に云ふて居よいやい」。「オ、喜兵衛のいやる事なれど、吾身は元を知るまいが、ぢたい旦那の下染めはの、重井筒屋といふ、南の茶屋の弟で、是へは入聟。ちのみごもんを持ちながら、人のみる茶も搆ふにこそ。お内儀は結搆ぢや。柳煤竹にやッてぢやが、隱居の親仁がわせると、家内はしみこほり、山染になるわいの。彼の樣にほついては、頓て身代は、とくさ色でおろす樣に、成ッてのけう」と笑ひける。(一)』酒づけに水もつくかや我宿へ、かへり紺屋の德兵衛、いそがしげに立歸り、「これ庄助喜兵衛。埒があかぬの〳〵。是に未だ掛かッてか。何日ぢやと思ふ。今日は師走の十五日。中の島のそうぶつ物も昨日限の約束。谷町の蒲團もまだ持ッて行くまいな。兄貴から誂への、重ね井筒の暖簾も、遲いといふて腹立ぢや。女房どもは何處へいた。ェ、どんげな一言。己が言はねば最う夫ほど間があく。言

○吉岡紙子でめ　布帛の染め方の名。近代世事談に左のやうに見えた。—「憲法染め。明暦萬治の頃、京西洞院四條吉岡憲房といふもの始めて染むる。吉岡染めともいふ…」後世多少の異説も有るが、世事談の此説も全くの附會でもない。

○ぼてりがきか、うすがきか　「ぼてり」は今日も言ふとほり、肥え脹れた體の形容。「ぼてり書き」は墨太い書き方。「うす書き」は薄墨での書き方。いづれも染め模様。

○おみき過ごして…目が見えず　酒を過ごして色に溺れ、山衆即ちをやま達（遊女）とさへ言へば目も無く迷ふ。

○こちとばかり…

付も見廻しも、口は一つ目は二つ。是では水も呑まれぬ」と、云ふた所は見事なり。下人共はいつもの事。「お内儀様はやり屋町の兄様へ、ちよッと往ッて來うほどに、お前に問ふて蒲團地も持ッて往けとの事」といへば、「そんなら喜兵衛持ッていきや。庄助は提灯持ッて女房共を迎ひにいけ。夫坊主めが怪我さすな。負ふて歸れ」と言付くれば、「あい〳〵」いふもそこ〳〵ながら、皆々表に出でにける。(二)』　亭主も辻迄行くかと見えしが、三十斗の女房と、何やら咡きつぶやきて、連立ち内に入りければ、女は亭主と座を組みて、御家様顔して居たりける。年季の三太すッきりと合點せず、じろ〳〵見るを徳兵衛、「コレ三太爰へ來い。つッと寄れ」と膝元へ呼付け、「此奴はずんど利口者で、言ふなと言ふ事いはぬ奴。夫で人が可愛がる。近付に成る印に、何んぞ遣ッてたも」といへば、彼女「さうやらして目元が利發に見えまする。なんと顔見世見やッたか。札買やる錢やらうか。但し何ぞ余の物が欲いかいの」と云ひければ、「イエ〳〵私等芝居が見たけりや。六軒町の兄御様から、なんぼ往かうとまゝぢや。私や銀が欲い」といふ。「ム、銀持ッて何買やる」。「アノ銀貰ふてか。銀貰ふてから其銀で、よそ〳〵の娼婦がひとつ買ふて見たいと、遣らるゝぢや」と身をすくむ。「是はでかいた安い事〳〵。して誰れぞ惚れたのが有るか。サア言へ〳〵」と、問ひかけられて耻しがり、「私が惚れたのはいろはの中に有る」といふ。「ヤアそんならばいろは茶屋か」。「イエ〳〵太左衛門橋筋に」。「なんぢや太左衛門橋にいろはとは。ちりぬるをわか。よたれそつねな」とぎんじ返せば「それ〳〵其次のらむうげんだ」とぞ答へける。「是は上物上目利」と、豆板一粒はッとはずみ、「ヤイ今爰へ銀持ッて

且那どの　作者の語半分、内儀の語半分の句法。「げしん」、下心の義。

○やい三太…居よいやい　店の者の蔭口。紺屋だけに例のとほり、すべて紺屋の專門語を挿んで花を添へる。

○喜兵衛の…成ッてのけう　店の他の者の蔭口。

○ぢたい　地體と書く。元來の義。

○下染め　紺屋の專門語。染め上げる前に先づ色を掛ける事。此所では素生の意。

○ちのみ小紋　乳呑み小紋の義で、即ち「乳呑み子」に掛けた。此小紋の眞の樣模は今わからぬ。案ずるに今日の子持ち小紋か。

○みる茶　海松茶と書く。染め色の名。此所では人の

來る人が有る。此女子衆をお内儀様かと言はう程に、必ずいゝやと云ふなえ。扨此事を女共にも朋輩にも、微塵も云ふ事ならぬぞ。合點か」と云ひければ、三太郎うなづき、「勿體なや〳〵。云ふ事では御座りませぬ。若し重ねて云ひたい心できた時〳〵に、お前へ密と斷りませう程に、また銀をくださりませ」と、阿房な顔でも損をせぬ。やる粋よりは粋ならん。(三)』　時に表に「頼みましよ。紺屋の徳兵衛殿は此方か」と年ばい成る人體なり。「ヤア治右衛門様か。お入りなされ」。「御免」といひて通りける。あれ女房共。内々の治右衛門様。和女の判なら銀貸さう」と仰しやる。お目に掛かッて置きや」といへば、云ひ合はせてや彼女。「是はまあ〳〵御懇心な。尤家も商賣も、私の物とは申しながら、子なかなした中なれば、もう今では屋財家財、みな主の物で御座りまする。斯うお目にかゝる上からは私が受合。ふかしい事こそ此家屋敷相應に、三貫目や五十兩は、貸して遣ッて下さいやせ」と、つま〳〵合はせる辯舌に、口入くふた顔付にて、「ア、〳〵是には及ばぬ事ながら、徳兵衛殿はいりゑと聞く、斯ういたせば後の爲め。又も用を聞かう爲め。サア判を成されよ」と、手形を出せば徳兵衛、掛け硯引き寄せ「是和女の判」。「左らばまづ私」と、互に印判明白なり。「丁銀四百目包みの通り、吟味なされ」と受取渡し、「最う暮れまする。お暇申そ」。「ちとお盃致しましよ」。「重ねて〳〵。預けます。去らば」と云ひてぞ歸りける。「ざッと濟んだ。目出度し」と、銀懷に押入れ、「是三太。此女子衆を送ッて、ちよッと往ッて來る程に、門もしめて火も灯せ。其うちお辰が戻ッたら湯屋へ往ッたと欺して置け。必ず何んにも吐すな」と、口を止たる紺屋糊。「徳様早う」と出にけり。

「見る」と掛けた。
○柳煤竹　柳、煤竹共に染め色の名。柳は素直で主人に怖らはぬ意。煤竹は身も飾らず汚水に黒くなって働き居るなどの意。
○隠居のお爲わいの　此敬仰、本義ありたしかに分からぬ。
○ほついては「ほつれては」の轉。くづれてはの義。
○ねづみ色　染め色。身代を木賊で探りおろすと掛けた。
(二)酒づけよ水もつくかや　「酒漬け」は酒びたりで流石に稍飽いたであらうとの意。「水もつくかや」は「水も盡くかや」の義で、精も盡きたの意。
○ぜんげな　錢氣なの義。
○坊主め　わが幼い子を指していふ語。
○選らさうぞいやと　最早貰へると思ッて恥かしいやうで身をすくめる。
○でかした(出來した)。
(四)子なかなした　子中成したの義。元祿の通用語。子まで成したの意。
○紺屋棚　棚ゆゑ、「たな(餅)」より掛けた。
○德様早う　主人を迎る小厮の語。
(五)ぶらぶらと　暗に止の「提灯」の縁。
○しこため　今いふ「しこたま」の原語。「さらば充分澤山もらはう」との義。
(六)とがり聲　尖り聲の義。憤怒を含んだ聲。

(四)』　世帶持ッても色はなを、捨てぬぞ道理紺屋の妻。月もさえ行く夜嵐に「あゝ提灯もよいわいの」。宵寢まどひの小市郎、たけが背中にぶら〳〵と、「寮風ひかすな大事の子。萬年町にかへりしか」。問ひもせぬに三太郎。「旦那様はたッた今湯屋へ」といへば、「ヲゝどうで湯か茶か呑みにでござらう。ほふかいの男ぢやと思へば濟む」と恨みながら、小布郎が目覺すを、暖簾の奥の小坐敷に、瀟洒し寢入らせて、我も着物着換へんと、押入明くれば是や何んぢや。懸硯あけひろげ、夫婦の印判取り散らせり。これは〳〵と言はんとせしが、傍を見廻し押鎭め、「こりや三太郎。そちに大事の物やらう。火を灯して奥へ來い」と、云ふより早く「あい〳〵〳〵。去らばしこため參らう」と小行燈さげ入る有樣。下女手間取は見送りて「内儀様と旦那の中、彼方へさいへ此方へいひ、兩方で物を掴みをる。彼奴は、錠商ひ」と、錠屋の云ひがひなき、嫉みも下の役ぢかし(五)』　此家の隱居吉文字屋の宗德。代々傳はる紺屋の形と、共に兀たる頭をおろし、額にたえしふる毛抜き、くひ潰ね世帶の算用づく。此家屋敷家職をば、妹娘にやり屋町。姉にかゝりて隱居分。薪のしまつ燈心を、日暮れて一人によッと來る。内の者ども、「彼れお辰様。やり屋町の隱居様のお出で」といふ聲に、「おう」といふて立出づる。宗德とがり聲にて、「入聲殿はどこへぞ。節季師走内をあけて、出るとても出すものか。これ二人めの聟ぢやぞや。彼の孫の小市郎に、爺親三人持たしやんな」と、いふ顔の不興なれば優しくも女房は、夫の惡性おし包み、「何んの他處へ徃きやりましよ。方々のそうぶつもの、内外の者の手は足らず、今朝早々から仕事して、風ひいて頭痛がするとて、奥に寢て居られます。

お前は何しにお出で」といへば、「イヤコレたゞは來ぬ。たッた今和女が歸ッた其跡へ、堀江の口入治右衛門といふ者ぢや。此方の娘御聟殿兩判で、銀四百目貸しました。若い人の事なれば、後日の念に一寸知らせて置きますといひ置いて歸られた。聞くと己は目が眩ふて、一服の藥を呑みさいて來た。四百目といふ銀を、何にするとて借ッたぞ。喰ひ込んだか、けこんだか、夫婦の中の榮耀遣ひか。ェ、おとさしや、身代は得持つまい。おれらが談義參りして、一文投げる賽錢さへ、進せうか進せまいかと、たゝみ算置いて見て、たとへ算が合ふても、五度に三度は投ずにしまひ、傍にゐる同行衆がぐわら〳〵投る時には、錢を一文つゝんで、肩へ手を斯う振り上げ、投る顏で鹽の長次郎、錢は手にとまッた。斯う氣轉を利かせねば、過ぎにくい身代。四百目は何にした。いきはを聞かう」ときめらるゝ(六)』　女房扱は丁稚めが咄しに違ひなしと、思ひ當れば妬ましさ。いッそ云ふてのけうか。いや〳〵夫もむごい事。どうか彼樣かと咳くまに、まづ先立つは夫の可愛さ。「ヽ、親父樣なんぞと思へば仰山な。私ら夫婦が何に借錢しまいぞ。其銀はな、南の兄御の方に、曲輪から出たよい奉公人を抱へて、手つけ銀が遣りたいが、世間共に銀詰り、彼の傍は利も高し、殊に兄御は病中なり、私らが判では貸す人有るとの頼みやう。銀こそは成るまいし、判つく程は一門がひ。殊に私と他人なれば、猶しも義理はかゝれず、又用無心も有る物を、それで判をしました。内外の者も聞くぞかし。千里萬里も遠ふたか。あんまりな親父樣」と陳ずる心の優しさよ(七)』　德兵衛は女房の歸らぬさきにと足早く、門口に立ちけるが、内には舅の喚き聲。南無三寶と入りもせず、暫らく樣子を窺

ひける。鼻猶も納得せず、「ヲゝ、夫婦が言ひ合はせ、親を欺して身代潰せ。寝てゐるも虚ぢや何處へうせた」と穿鑿す。「はて何の留主なら留主と云はいでは。あれ曖蘢のあちらへ」と、指させば宗徳は、曖蘢打上孫の事は氣も付かず、老眼の何見てか、「ょゝまづ職人には似合はぬあの髪付が氣に入らぬ。頭痛のする寝様でない。又喰ひ酔ふたか。春は早々まくし出しや。彼の様な聟なら廿人や卅人は今の間にどッて見しよ。三日と一人寝させはせぬ」と呟き〳〵雪駄はく。内の者共「最うお帰りなされますか。送りませう」といひければ、「ヤイ道ならちと送ッて、夫れ言立に夜食喰はうといふ事か」と、門の戸明くれば、徳兵衛もがりの影に隠れしを、それとも知らで帰りしは、危かりける次第なり（八）』

入れ違ふて徳兵衛つッと通ッて羽織を後へひらりと投げ、じつごとのかくは見覚えたり。女房の膝元にむんづとあて、「こりや最前からの次第、門口に聞いてゐた。留主のおれを寝て居ると、親父の手前は男を庇ふ様なれど、職人に似合はぬ髪つきな男を、身換りに寝させたは念が入ッて忝い。入聟の事なれば、家屋敷家財にも、器栗ほどの疵は付けまいが、うぬが命に疵付ける。たッた今間男を引きずり出して見せうぞ」と、奥に飛込み、何かは知らずわッと叫ぶを胸ぐら摑み、宙に引ッさげ躍出で、ぐうと引据をよく見れば、こはいかに坊主天窓の小市郎、盆に買ふたる踊のかづら、奴天窓を振りながら、「嚊様恐い」と泣居たり。徳兵衛も仕舞付かず、詞なければ女房は、宵より積るうき涙。一度にわッと叫び伏し、消え入るばかりに泣きけるが、「なう徳兵衛殿。酷うござる。つらいやや。不義せう者と見据ゑたら、なぜ付きはッても居もせいで、元日から元日迄、よう往所も有る事ぞ。こ

○けこんだか　賦込んだかの義。損亡したかの意。
○おさましや　「うとましや（餽）」の轉。快くなくゐるの意。
○談義參り　寺の法話を聞きに參る事。
○鹽の長次郎　元祿時代盛んに流行した手品遣ひの男の名といふ。
○いきは　行き端の義。行き方の意。
（七）判つくほどは　一門がひ　判を捺すぐらゐは一門親族の甲斐に甘方がない。

（九）間をわたしたも　數を合はせたも。
○氏神さまのないれい　氏神の内證の義か。つまり、氏神の救助の意。
○房と挨拶切れぬげな　房は即ち阿房、德兵衛の馴染みの女。房と手が切れぬと見えるとの意。
○ねすりごと　不平の言葉。
○まぶられて　なぶられて。
○男男の恥よりも　男同士の恥よりも。

（一〇）是ほどの潮戸が無うて　今日のやうな場合たる關が無かッたため。

なたの留主の言譯に、ふッつりと事は欠く。隠居様の聲と聞き、傍に有ッたを幸ひに、此子に着せて間を渡したも、私が智惠では有るまい。氏神樣のないれいと、有難う思へども、恨み受ければ是非もなし。女房の口から推參ながら、云はば此方は人でなし。房と挨拶切れぬげな。よそ外でも有る事か、兄御の内の奉公人、しつける異見もすべき身が、客衆とやゝのかいになり、身代の妨げと、兄嫁御のねすりごと、聞きづらや聞きにくや。ァ、夫も道理又跡の月の騒動に、一家が寺へ退いての時、見舞にも往て見届けた。余の遊女衆はおし退けて、房一人を大事にかけ、爰らで心底見せ顔に、けば〳〵しい仕方とも、傍に居るは知ッた衆、此方より私が顔。阿房らしう見えたやら、まぶられて歸りしぞや。夫にあまり踏付けた、先に房を連れて來て、女共の女房の、印判までを引きさがし、納戸戸棚も見せさらし、是が嬉しからうか。男男の恥よりも、隠しても隠したい、女同士に恥を見せ、男は寝取られ、寝間ちやうだいは見捜され、阿房の數々讀みつくされ、是でも男の可愛いは、扨もいかな成る因果ぞや。今日の事が隠居に聞こえ、私は親に叱られながら、咎を負ふてゐる心。人間らしい氣があらば、三十日の一月を、せめて三日はろく〳〵に、寝物語りもあれかし」と、心一抔理をせめて、情も深く口説き泣き、ちぢの思ひぞ哀なる（九）』

徳兵衛一念發起して「ァ、誤ッた〳〵。悪人とも業人共、盗人ともかたりとも、我ながら重罪人。今迄も和女に恥。止めう〳〵と思ひしが、是程の瀬戸が無うて、うか〳〵と盡くした。我一人思ひ切れば、和女子供隠居のため、兄貴の身上我身のため、房めが後のためもよい。其所を知らぬ身でも無し。明日は伊勢の御線日。今宵の月に闇殺され、三世の諸佛の

御罰を受け、一人の親に冥途から、睨み殺さるゝ法もあれ。ふッつと思ひ切ッたぞ。今日の女も房では無い。人置の娘を一角で頼んだ。證據には其銀袋に有る」と取出し、「明日直に返辨し、向後房とは通路せぬ。今まで心を無下にもした、恨みもつらみも赦してたも。去迚は此德兵衛。女房の罰があたッた。畢を赦して呉れよ」とて、手を合はせてぞ泣きゐたる。(一〇)』女房にッこと打笑ひ、「エ、忝い〳〵。挨拶切ッた捨てたのと、幾度か聞いたれ共、銀迄見せての誓文、どんと心も落付いて、今日からほんの夫婦、皆悦んでたもや」とて、嬉し涙を流せしが、「迚もの事に年寄ッて一夜の心も休めた し。太儀ながら隱居へいて今の誓文一通り。聞かせまして下されかし。是は私が御無心、御恩に受う」と有りければ、「何が扨讓り受れば我爲めにも親同前。つひちよッと往ッて來う。「左樣ならさうして下さんせ。生姜酒して待ちませう」。ソレ生姜おろしや釜の下。たけは手樽をふッて見る。酒の通ひ路引換て、夫は北へと出でけるが、辻にてふッと思ひ出し、「南無三寶。義理に詰ッた女房のせりふ。尤もと胸にこたへしより、房が大事をはッたりと忘れたり。入相限りに待て待たう。此手筈が違ふては、生死の出來る銀、いや〳〵親父は明日のこと、ちよッと逢ふて」と立戻る。「ア、さうも成るまいか。たッた今誓文立て、殊に銀も手放したり。先こちらを仕舞ふてのけうか。ヲア、可愛や、房がどうぞ銀の首尾なッて、玉子酒呑む樣にしたい事ぢやと歎きしを、氣遣ひすなと諫めしが、氣の弱い女子なり。こちらはまゝよ」と又立歸り「思へば〳〵女共、生姜酒して待ちゐますと、手づから生姜おろしたる、志しも不便なり」と、辻をこえては又戻り、辻に立ッたりつくばふたり。行くも歸るも定まらず、何うせうか斯うしやうが酒、いりつく樣に氣がなッて、胸かきまはす玉子酒。心二つに打ち破ッて、君が方へと走り行く。後は涙の玉子酒。霜の白珠に……

中之巻

月ははや渡りそめして中橋や、六軒町のさよ格子。唐土の聖人ののたまはく、色の德には隣あり、向ひ兩かは輝かす、軒のともし火目印に、昨日も今日も明日の夜も、重ね井筒のつるべ繩、たぐりこいとのよすがらや。中に不便や房は憂き身の品〳〵を、心一つにはらみくの、他が勇めば力なく、片目で笑ひ片目には、涙を包む火鉢のもと。人まつ宵の火なぶりや。さよも小六もうき〳〵と、引きさき紙めひねりもとひで火廻しを……火斗ひのぎぬ。「房樣なんと」。「私は獨寢ア、いや〳〵し」。ひむく冷酒引舟火桶。雲雀鴨比叡の山の、檜の木の枝にそりや鳥指か。酉で無いぞや身は丙午。又房樣のいま〳〵し。男殺そといふことか。こちは祝ふて姫小松。緋縮緬とく人目のひまに、鬼も來るなとひつゝぎやゝひよ子ひしこひともじ。ヱイ酒落くさい。ふたせなか居もにさし出、飯たきは來て火吹竹。料理人まで冷し物。鶯籠の彦兵衛ひざがしら。柄杓緋緞子墓。ひらの蒟蒻緋紬。ひらのやゑきやうひごずゐき。「サア〳〵紙燭が皆になる。何と房樣。ヲアどうぢや」。どうぢや〳〵と詰め懸けられ、「ア、かしましい息が出ぬ。物が言はれぬ赦してたも」。「息が出ずば火屋へやれ。そんなら火箸で燒いて退け。南無三寶火が消えた。ヲア房樣の灰寄せぢや」と、どッと笑ひしてんがうも、明日の哀れと成りにけり。(一)』火廻しなかばへ飛脚屋が、「何も御用は御座りませぬか。ヲア房樣。京へ登す銀

(一)一個恩に受けう有りがたく思はう。
○たけは手樽たけは下女の名。
(一〇)色の德には論語の句「德不孤必有隣」を滑稽的に轉じた句。
○つるべ繩「井筒」を受けた語。更に緣で「たぐり」を出した。
○はらみく　孕み句の義。
○火なぶり　今いふ火いたり。火をなぶりいぢるとの心。
○さよも小六も兩人共に阿房と同樣の婦人の名。それらが愚快らしく火まはしを爲るとの叙事。火まはしとは　親世よりのさきに火を付け、それからそれへ何でも「ひ」ならば「ひ」の頭字又は緣の有る話を言ッて

願願に回はし、急いて差し當たり思ひ出せず、或ひは觀世よりの火の消えなどして負けになるを興がる遊戯の名で、それ故に「引きさき紙のひねりもとひで火まはしを」といふ。「ひねりもとひ」は「ひねり元結ひ」の義。

○火斗　此以後火まはしの應答で、意外な所で文句にをかしみの花が加へられた。

○房樣なんと　爵して居る房に他が火まはしを攻めかける心。房樣、此度御前の番であるが、火まはしは何を出すかの意。これを承けて房が「ひとりね」と答へた所は、流石に近松翁の手際で、火まはしの「ひ」に利かせた一方では房の胸中ひとり德兵衛を待つ情をも示した。以後すべて縱橫無盡のひづくし。但し甚しく巧みでもない。

○息が出ずば火屋へやれ　火屋は火葬場。死んだら火葬場へ遣れとの意。

（二）四つのかねてより　四つの「鐘」に掛けた。

○いんまに　「今に」の延。やがての義。今日も京坂の方言として殘る。

○まそッと　今すこし。

○とほんと　今いふ「ぼんと」と同義。茫然となった體。

○今夜の首尾を云云　金を出せず今夜の首尾が違へば一生京で籠の鳥の身となり、德兵衛と夫婦になる事はならぬと、德兵衛其人すら根掘り葉掘り深く知ッて居

も有る、御狀も有るとの御事。遣はされませぬか」と問ひければ、「ア、能う寄ッて下んした。未だ文を書きませぬ。まちッとしてから來て下され」。「それなら明日の便りになされませ。今宵は仕舞ひでムる」といふ。「尤もなれども今夜登して明日の間に合せねば、きつう叶はぬ大事の用。無心ながら、まそッとしてま一度寄ッて下さんせ。賴みまする」と詫ぶれども、返事もせずに出でにける。房は心も心ならず、日の暮れまでの約束が、初夜過ぎ四つの豫てより、思ふたつぽへ當りしと、門に出て北を見つ濱まで歩み西東、足も冷えて鐵釘を、胸に打たるるいくせの思ひ。「ヤア北から人が走ッて來る。そりや德樣よ」と走り奇り、見れば以前の飛脚屋なり。「お房樣か。どれ〳〵御狀は。舟が出ます」。「オ、道理〳〵此銀は、京の私がおや里へ、明日の日中に渡さねば、いかう詰らぬ銀なれども、今に先から來ぬわいの。定めしいんまに來う程に、まそッとしてから來て下され」。「いや最早來られませぬ。來てから今夜は出されませぬ」と、いひ捨てこそ歸りけれ。房は一人とほんとして、「今夜の首尾を違へては、一代京へ繫がれて、連添ふことも限りとは、ねほり知ッての上なれば、如才の有らう筈もなし。皆おか樣のさしこみと、思ふもぢたい此方の無理。身一つ胸を据ゑたれば、いッそ悲しい事もなし」と、內へ歸れば主の內儀、「房は今まで門にか。此寒いに物好な。そうじて此中うか〳〵しやる。些と心をしめやゝ」と有りければ、「さればあんまり他處が賑かさに、かうし祝ひに出ました」と言捨て二階へ上るてい、氣がゝりなれば目を放さず、をり〳〵心を付けゝるが、房は夫共白紙の、障子の月を明りにて、剃刀出しあはせ砥に、かゝらまじかは斯くとだに、「ま一度顏見て死にたい」と、思へば引かるゝ後髮、手もわな〳〵とぞ慄ひける。（二）』　主見付けて後より、「房それは何にしやる」。はッと驚き振返り、「ハア內儀樣の。何んぢややらびッくりとしました。余りよい月影に、額たれうと思ふて」と、紛らかせば打笑ひ、「オ、よい所へ來て仕合せや。幸ひ旦那殿髭剃ッてくれと有る。ちと其剃刀貸してたも」と、引ッたくり押包み、暫しは顏を打守り居たりしが、「ア、一昨日の煤はきに、たんと肩がつかへた。そろ〳〵揉んでたもらぬか」。「あい」と後に廻りしも、扨は氣色を見とられしと、悲しさこはさ彌增して、更に別ちも無かりけり。流石それしやの女房とて、世間ばなしに氣をゆるませ、「是なう房。いつぞ〳〵と思ひしが、序に和女に異見が有る。我も始めは勤の身。素人のいふことゝ、ひとつに聞くは曲がない。心しづめて聞いてたも。曲輪や爰の奉公は、樂みなうては勤まらず。無下なうせくでは無けれとも、夫にさへ猶かけ引有り、必ず妻子有る人と、末の約束せぬ事ぞ。男の間男同前にて、思ひばかいかぬ物ぞとよ。德兵衛樣とも今は挨拶切ッたと有る。オ、〳〵仕合はせ〳〵めでたい事。おたつ樣を離別させ、添ふて和女の本望ならず、いとしい人の身のひし、一門中の憎しみうけ、和女を鬼よ蛇よといふ。又圍はれて世を忍び、後家同前にくらしても、是がなんの手柄ぞや。若木の花はひとさかり。老木の枯れ葉色うせて、變るは男の心ぞや。余の遊女衆とちがふて、十の年から子飼にて、豆腐取て來い八百屋へ走れ、駕籠呼んでおぢや掃さうぢ、戸柵の鍵迄預けしは、ちひさいからの馴染だけ、我子の樣に思はれて、よい客もがな出世させ、下女の一人も連れさせたう。思ふはこちと斗りかは、皆親方は同じこと。わけもない事仕出して、むごい

るらしいものを、それに今俟ッても まだ來ぬとは、全く「おかさま」即ち其内儀の「御さしこみ」即ち邪魔を入れた故であらう。

○斯からましかは 斯くまだに 紙に「掛かる」を掛けた。斯ういふ結果に爲らうとは思はなかッたとの意。

(三)のべ のべ紙の略。即ち鼻紙。

(四)人事實はば 南敷け 此頃の俚諺かと思はれる。今日の「諺をすれば影さやら」の意。

○心得太郎兵衛 心得たから掛けた語。前に「心得太兵衛」の句もあり、是は同種類の再用。

(五)きはのあきなひあきをつめや 暮れに差し迫り、正月の事を賴む程の繁昌の勘めをあれば、成るべく決着ㇾ殿しくしろとの意。

(六)中橋掛けたの 普請中であッた中橋といふ橋が既に落成になッたかとの意。德兵衛を引きとめる手段、而も意外の所へ話しが飛ぶ筆の巧者。

○西國の御利生、舟三所の風景 京からの西國ㇾ各所舟三所の觀音が有り、信者が之を巡拜して幸福を祈る。其巡拜の御利生で病氣も安らかㇾなッたのであら

め見せてたもんなや。爲めのよい事あるならば、今でも暇をくれと言や。欲を放れた此證據。損と云ふて僅の事。不便な目を見やうかと案じ過しがせらるゝぞや。思ひも寄らぬ愁ひをかけ、必ず泣かせてたもんな」と、涙も聲もしめ〳〵と、殘る方なき恩の程、房は顏を上げもせず、たゞ「あい〳〵」としやくり泣き、のべの幾重を絞りけり。(三)」客かあらぬか表にて「能う御座りました」と云ふ聲す。誰れ樣ぢやとすまして聞けば、「いかう冷える人ごといはゞむしろしけ德兵衛樣さうな」と時に丁稚が門口より、「向ひの肥後屋から、房樣ちやッと送らッしやれ。お客は堺の……早う〳〵」と呼はれば、料理人不審を立て、「問ひもせぬお客の斷り合點がいかぬ。房樣はお隙が入る。ならぬ」と云ふを房聞いて、「彼れは何故に」と問ひければ、「ヲ、さればいの。彼の宿で德兵衛樣に逢やッた故、夫でやるなと言付た」。「ヱ、內儀樣のわけもない。夫はあッて過ぎた事。今は挨拶切れたし、德樣は愛になり、何んの氣遣ひ。堺の客は正月を賴まねばならぬ人。ひらに遣ッて下さんせ」と云ふも實と思はねども、「ア、夫もさう。是なう房を送ろぞや」と、呼はれば下にて料理人、「そんなら道ぢや駕籠へもちよッと寄ッてくれ」。心得太郎兵衛の婆樣と、喚いて使は歸りける。(四)」「ヲア身仕舞して早ういきや」。「いや夜もいかう更けますにぞ泉寄せける。「德兵衛樣遊んでお歸りなされませ」と、云へばとぼけた顏付にて、「誰れぢや房か。きはのあきなひ跡をつめや」とよそ〳〵しう、口にはいひて魂は、一つ駕籠なる番ひ鳥、飛立つ

ばかりに見えにける。色をさとッて女房、「是は夜更けて御太儀な。先づお上り成されませ。いかう冷える酒一つ。夫れ燗つきやゝ」と有りければ、「ア、置きや〳〵。もう歸る。此頃酒があたッて今も今女共、「生姜酒を食べさせうと、手づから生姜おろすやら、それがいやさにやう〳〵と、是へ逃げて參ッたに、又酒を飲めとや、やれ遁げん」と、出る所を女房飛び下り、立ちふさがり、「何の無理に進ませう茶でも一つ參りませ」。「いや〳〵此頃は茶があたりまする。今も今去る方で生姜茶をくれたを、やう〳〵と逃延た。是非歸して」といふ所へ、「ヤア德兵衛樣ようぞ〳〵。夜が寢られぬに夜とゝも話さう。ヤア爰へ」と呼びかくれば、病人といひ兄の命。異義も言はれず不返事に、もぢ〳〵してゐ上りける。(五)」「なんと中橋かけたの。欄干わたすばッかり。春は町中渡りぞめ。氣色も次第に快し。塞あいたら本腹せう。これといふが此夏の、西國の御利生や三十三所の風景、一々語ッて聞かせん。ヤアろくにゆるりと居や」と、果てしも知れぬ長咄し。德兵衛心もだ〳〵と、可愛や房を今まで待たせ、又宿屋でもあこがれん。早う立ちたさ氣はせいて、「いや申し。今宵は我等伊勢講、々中待ッて居らるべし。罷り歸る」と立たんとす。「先づ待ちや。今迄誰れが待つもの ぞ。まそッと咄しや」ととゞめられ、「いやいやり屋町の隱居へ、禮に參る約束、是非お返し」と云ひけれ共、はて齊は明日の事。ひらに」と云ふにでは お返しなされ下され」と云へども兄は聞き入れず、脫れぬかたの自身番。見舞たう存ずれども、これお戻しなされまい。「あいた〳〵」。冷える加減か俄に痲氣が起ッた。歸ッて

うの意。
○鎗屋町の隱居さまへ齋に參る約束　齋は僧家の食膳の義。ここでは僧への饗應。其齋に參同するとの意。
○あいたしこ　ああ痛を意味なく調子で延ばした語。
○氣がついた　扨は此方の胸中を悟られたなの義。それからわざと胡麻化す事になる。
○此方の德兵衛　此方の「德」と掛けた。
○重き心を輕口に　重、輕對照。
○涙くろめしまぎらなり　一句殘酷。
(七)内と外とに云云　心深く相思へば、其思ひも亦通ふかのやう。夢現とも無く蒲團を抱いて座ろに房の身かとも怪しむ。「涙にぬれて」の一語

養生致したい」。「ハテわけもない。夜氣に當たッてなほ痛まう。藥でもやらうか」。「いやもう藥も通らぬ。駕籠に乘ッて歸りたし。あいた〳〵」とうめけ共、内儀推して外へとては出すにこそ。「小座敷の巨燵に火をたんと入れさせて、泊ッて御座れ」といひければ。「いや〳〵。今年の巨燵はいかう人にあたります。今も今女共が、生姜巨燵をしかけて、やう〳〵詫言いたした」と心は先へ抜けがらの、何をいふやら譯もなし。「爰になり共寢せませ」と、蒲團打ちきせ表には、内儀手づから錠おろし、内外の者にめくばせし、そろ〳〵わきへ退く樣子。「ムウ氣がついた」とそらさぬ顔。「いや〳〵寒いに往なうより暖かにして泊ッたが、先此方の德兵衛」と重き心を輕口に、蒲團かぶッて行くふりも、涙くろめしまぎらなり。(六)』内と外とにひきあひの、心の駒の双手綱、房が思ひの通ふかや。夢とはなしに現なや。顔を並べて見る樣で、抱き付ばさよ蒲團。涙にぬれてひや〳〵と、髢解けて身にさはる、其夜のこゝちしみ〴〵と、身に引きまとひ寢て見ても、一人ころりはェらッちがない。心の内はむしやくしや枕。いッそ明けてものけてものけよかし。「ア、大ぬきの此蒲團。小六も寢つろさよも寢つらん。房も寢よう。引手あまたに、何處の誰れめと寢くさッた。打ちたい蹈たい擲きたい。えゝ〳〵〳〵蹈な蒲團に科もない。今は蹈んでも叩いても房に逢せぬ逢れぬか」と、巨燵にとんと腰も抜け、わけも涙に我身ながら、男の樣にも無かりけり。(七)』戀のねばなの屋根つづき、いつか思ひは山口やの、物干傳ひ忍びくる。他處の戀かと浦山しく、見れば雨戸の戸袋を、密と踏まへる足元も、ふるひ〳〵の目もくれて、「ヤア爰にかいの」。「房か。これは何うぞ」とばかりにて、巨燵

哀れを極はゆる。さよ蒲團は小夜蒲團。其「さよ」は添へただけの語、別に意味も無い。
○一人ころりは「ころり」は臥す體の形容。一人でころりと寢るとの意。
○らッちが無い　埒が無いの延。
○むしやくしや枕　ただの枕。翁新造の語。
○ものけても　もぬけてもの轉。即ちもぬけの床などの「もぬけ」で、其儘身だけ抜け出る意。
(八)ねばな　寢入り端。
○思ひは山口屋　思ひは「止まぬ」と掛けた。
○爰にかいの…事ぞなき　簡潔比類無い句。
○請けに立ち　請け人に立ち。
○明日ぎり　明日

を中に手をとッてたゞ泣くより外の事ぞなき。涙の中にも男の顔じろ〳〵と見て、「ア、いとしぼや。氣をもまんす故にやら、顔にたんと痩がたき。其苦は誰がさするぞい。皆私ゆゑとそれは〳〵忘るゝ事も有るにこそ。さりながら最う苦にして下んすな。斯う云へば、どうやらすねて云ふに似たれ共、微塵もさうした心もなし。私が京の爺樣、よしない者の請に立ち、明日切に銀立てねば私をやるとの判ぢやげな。私は爰へ身を賣ッて先きから連れに來た時は、二重賣り二重判、牢舍はかゞみにかけた事。成らぬ事をくど〳〵と、思ふは愚痴の至なり。先立ち死なんと剃刀を、手に取りは取ッたれ共、内儀樣に見付られ、得死もせずゐる間に、こな樣の聲はする。向ひがはより呼びにくる。嬉しや先で何事も、談合せんと今迄待ちぼうけになッたれ共、一目あへばこれ本望。末頼みない契りなれば、是れ限り〳〵と逢ふたび毎の觀念、今更めていふことなし。貞女を立つるお辰樣の、さげしみも耻かしい。中ようして下さんせ。互に生まれかはッたら、本妻定めぬ其先に、早う夫婦に成りませう。云ひ置く事は是れ斗り。サア〳〵戻ッて下さんせ」と、夫にひしとしがみつき、絶え入る斗りに泣きゐたり。(八)』「オ、聞かねど萬事至極した。さりながら其詞嬉しい樣で恨み有り、本妻有るは知れた事、同じ口でもろ共に、死んでくれと云ふてたも。京の便りを大事に思ひ、かたり同前の才覺にて、銀四百目かり出し、一時斗りは懷に有ッたれ共、兎かく二人に死脈がうつ。何處も彼處も一時に、汐のさいて來る如く、ばら〳〵と首尾惡く、素より理をもつ女ども。理屈を詰めて恨み泣き。いかな張良樊噲でも、道理に向ふ矢先は無い。銀も渡す。其場にて、みず〳〵うその虚誓文。と

かぎりに。
○二重賣り二重判　即ち所謂二重抵當。其犯罪で牢舍へ入る事になるのは鏡に掛けて明白な事。
○さげしみ　さげすみの轉。輕蔑。
(九)至極した　元祿の通用語。至極道理に聞き取ッた。
○ぢやうかいの「定かいの」の義。屹度であらうか。此一句は房の語。
○思ふが云云　此一句德兵衛の語。
○寢言がな　寢言でも。
○咄しさいた　咄しさしたの轉。「聞きさした」などの「さした」で、咄し掛けましたとの意。
(一〇)氣の通らぬ　氣の利かぬ。

ても遁れぬこの罰。佛神を待たず共、此方からあたッて埒明けんと、道から胴はすわッたり。死に直しは二度ならぬ。歎ち顏は曲もなし。手に手を取ッて莞爾と、死ね死なうと云ふてたも」と、巨燵に顏を打なげて世にあぢきなき涙の體。「ナウさう思ふてがぢやうかいの」。「思ふが不思儀か夫婦ぢやもの」。「眞にさうぢや辱い。嬉しうござる」と抱きあひ、聲を立てずの絞り泣き、炭火も消えて凍るらん。奥へかくとや聞こえけん兄の聲にて、「なんと德兵衛痛はよいか」と、ごつ〳〵せいて來る音す。「やれ隱れよ」と狼狽へて、房を巨燵に押入れ、蒲團かぶせて德兵衛は、上に凭れおほひになり、顏もきよろ〳〵成りにけり。程なく主立出で、「物いふ聲の聞こえたは、誰れで有ッた」と不審顏。「いや夫れは私寢言がな申したか。但しおまへが病ほうけて、そら耳でがな御座りましよ。返ッてお寢みなされ」と、言へば、「イヤいかう夜が寢にくい。咄しさいた西國の、物語して聞かせう」と、巨燵にあたるうたてさよ。「ヤア巨燵の火がうすい。コレ女房共、火をくわッとおこいて、火かきに二三ばい持ッておぢや」と呼ばはれば、「德兵衛ぎよッとして「申し〳〵。火の強いはお毒。御無用に遊ばせ」。「いや〳〵裾が冷える。膝節の焦る程なが此方はよい」と云ひければ、「ひらに夫れは火の用心と申し、膝のさらに火が付いたらば御身體の妨げ」と、云へども兄はこらしめと思ひ、意地惡るう、「火を早うもッておぢや」とぞせがみける。(九)』「ア、申し。お前は病氣で引籠もッて、世間を御存じムらぬ。此冬から何方も、火の強い巨燵すたりもの。北わき邊のよい衆は、大かた巨燵に水を入れるげにござる。重ね井筒ともいはるゝ身が、氣の通らぬ。巨燵に火を入れなんどとは、さりとてはお笑止な。アレおか樣、火は入らぬとおッしやるゝ」と、身をもがくその間に、火かきはこがるゝ紅葉葉を、盛ッたる如き池田炭、遠慮も內儀が巨燵に移し、「サアあたらんせ」といひ捨てゝ、臺所にぞ出でらるゝ。傍で見るさへ德兵衛、身もこげ渡る心地にて、「兄者人其火で熱うはござらぬか。いッその事に火あぶりに、ならしやれぬか。爰迄火氣が來まする。ちといけて消しませう」と、寄らんとすれば、其儘おきや」と、止められては巨燵より、胸を焦すは德兵衛。房は涙のうづみ火に、燒付けらるゝ身の苦しみ。蒲團の陰より手を出だし、裾に取りつき、耐へんとするに堪へがたき、地獄もかくやと不便なり。主も一旦こらしめの、さのみは哀れ思ふにや、「ア、暖まッたもう歸る。其方も寢みや」と立ちかへる。德兵衛兄ながら恨めしくや思ひけん。「迚もの事に眞黑に、焦る迄あたッてお歸りなされかし」と、いへどもさすが一言も、岩木をわけぬ人心。奥の一間に入りにける。德兵衛は小腹たち、やぐらも蒲團も一つに摑んで、取ッて投ぐれば咸陽宮の煙の中に、顏も手足も紅の、房は目斗じろ〳〵と、物をもいはず片息の、性根も亂るゝ斗なり。やう〳〵に抱きあげ、袂にあふぎ身をさまし、花生の水幸ひと、顏にそゝぎ口しめし、少し心もさはやげり。(一〇)』「サア兄貴迄が知られたり。なに面目にのめ〳〵と、人に面をまぶられん。いざ此所でじんじやうに」と、脇指取らんとせし所を、「さうさへ覺悟は極まれば嬉しい〳〵。さりながら、爰で中々思ふ樣によも成るまい。屋根傳ひに裏へぬけ、樽屋町の門へおり、宗門なれば日進樣の、御門で死なせてくださんせ」。「オ、尤〳〵。有難いこゝろざし。サアおぢや」と立ちけるが、「サア和女は法華おれは淨土。ねがふ所が別なれば先の行

○さのみは哀　一旦聽らしたが、それだけは又哀れに思ふかして。
○袂にあふぎ云云　袂で扇ぐところ巧みに其忍びな體を述べ盡くした。
(一一)鷲の峯　天竺靈鷲山の和名。前に佛經を出した緣。屋根を山に見立てた。
○三途の瓦ぶき　冥途にある三途川、その「河原」と掛けた。
●下の卷
(一)筒井筒　暗に屋號の井筒屋に通はせた語。
○月も袂にかきくもる　「わが袖の涙にやどる影とだに知らで雲井に月やすむらん」とある新田義貞の古歌などに趣向を借りた句。袂に涙がたまる、其量の形容として袂にさへ月

が映るといふ、その映るのさへ胸の曇りから搔き曇ッて見えるとの形容。
○朝の雲、夕の霜、うつぼ舟　共にはかないものの例。「あだしが浦」は仇し野などと同じやうな意。
○この岸彼の岸　うつぼ舟の縁。
○かき舟　牡蠣を取る舟かといふ。
○色駕籠　廓に通ふ駕籠。
○五、六、四、に、八、七　共に數の縁語。
○片岡、染川　共に此頃の俳優。思ひ「そめ」とも掛かる。
○ひだのせう　袂の「彈」と掛けた。「飛彈椽」の義で、此頃の芝居の義大夫かたりの名。
○おしまの心中　やはり近松の作、阿鳴の心中の戯曲。
○思ひにくれ竹　思ひに「暮れ」と掛けた。
○一足づつに消え失せて　曾根崎心中道行の條に此句と同樣の句も有る所から思へば、其奇警な妙句だけにそれを更に流用したかと考へられて面白くない。つまらぬ作者ならば知らず、翁とも言はれる人には稍似合はぬらしい。「死にに行く」も同斷。
○尋ねて高津の町　是も前と同斷。高津を「來う」に掛けた例は翁の他の作にも見えた。
(二)五逆のだいは　五逆の提婆の義。提婆は佛法に仇なした惡人。提婆すら天王如來となる。女人の穢れた身すら御經の功力により龍女は成

き端も覺束なし。宗旨をかへて一所にゆかん。今題もくを授けてたも。とく〳〵」と手を合はすれば、房は不覺の涙にくれ、私に淨土になれ共いはず、法華に成ッて下さんする。扨も嬉しい心やな。勿體ない事なれど、今まで毎日千遍づゝ、五年唱へた題目の、功德で赦したび給へ」と、互に合掌心をしづめ、こんじんよりぶッしんに至るまで、よくたもち奉る。南無妙法蓮華經。こんじんよりぶッしんに至る迄、添はせ給へ、添はせてたべ」。南無妙法の力を頼みに、しッかと負ふて登る二階や屋根の棟。鷲の峯ぞとひと筋に、這ふつ辿りつ傳ひゆく。道は三途の瓦ぶき。霜の劍の山さえて、爰に地獄の鬼瓦。左手も右手も恐ろしく、遁れ〳〵て行く末は、今ぞ冥途の門出でと、これをかぎりの立酒や。樽屋町にぞ迷ひゆく。(一一)』

下之卷　道行血汐の朧染

筒井筒ゐづつの水は濁らねど、今は涙にかき濁す、月もたもとにかき曇る。朝たの雲夕の霜。あだしが浦のうつぼ舟。身を無きものと知りながら、愛し憎しの戯れも、暫時此岸彼の岸の、假の現のかりばしや。藻に埋もるゝかき舟の、とまの隙間の燈火の、風を待つまの影よりも、明日迄待たぬ我が命、われと失なひ兩親の、育てし御恩はいかゞせんと、歩みもやらず泣き居たり。送り迎ひの色駕籠も、暫とだえは何處にも、馴染〳〵の寢入りばな。我が身は今宵散り果つる、名殘盡きせぬ濱川の、爰は竹田か夜は何ん時ぞ。五つ六つ四つ千日寺の、鐘も八つか七つの芝居。二人が噂世話狂言の、仕組みの種となるならば、我を紺屋の片岡に、何とか思ひ染川は、臺詞に泣いてくれよかし。包む袂のひだのせう。二つ遣ひの手づまにも、斯かるなりふり寫すとも、此思ひをばよも知らじ。去年のおしまの心中の、その井筒屋にわれが今、重ねゐづゝとしのづかに、いはれ岩井の半四郎。憂ひ臺詞の菖蒲草。露のお年も御身とわが、積る涙の車かや。西に嵐の吹き晴れて、空はさえてもわれ〳〵は、戀慕の闇のくらがりに、由なきことを仕出だして、東都のはてに名を流す、夫に劣らぬ歎きぞと、いとど思ひに呉竹の、節を習ひし上るりも、他の事よと慰みしが、今身の上に降る霜の、一と足づゝに消え失せて、死にに行く身のあぢきなや。見返れば人聲の、我れを尋ねて高津の町を、急ぎ遁るゝわにぐちや。頼みをかけし御經の、此三界の衆生は、皆是れ我子と聞く時は、親もろともに至るなりけり。(一)』南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。五逆のだいばは天王如來。龍女も成佛する時は、煩惱菩提となるぞ頼母し。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。六萬九千三百八十四文字を、たゞ此七字に治まりし、大曼陀羅やまだらゆき、雨にも風にも詣で來て、朝は現世夕は後世、此世彼の世のふたおもて、今宵ひとつに楢の葉の、影は浮世の塵芥。ともに命の捨場ぞと、大佛殿の勸進所。身を捨つるやうとなりにけり。涙に迷ふ其中にも、男は流石男にて、「なう世間を聞けば、女さきだち、男は跡に死にぞこなひ、見ぐるしき沙汰にあふ。無念の上の死耻ぞや。先づ我れから」と脇差を、扱かんとすれば抱き付き、「なう待ッて下さんせ。今死ぬる身と云ひながら、大事の夫が目のまへで、朱に染ッた體を見ば、氣もうろたへ目もくれて、どうしてか死なれうぞ。なから死して耻晒し、こな樣の死骸の帶とき、紐とき、うちかやし、詮議の有るをじろ

佛したもの義。龍女成佛の事實は法華經にあり、年八歳の少女が法華經の功力によって成佛したと記してある。

○六萬九千三百八十四文字　法華經全體の字數。

○大曼陀羅やまだちゆき　曼陀羅は梵語。淨土實相の圖の義。ここでは淨土彼岸の趣きを述べた所から法華經の意に用ゐた。「まだらゆき」は「はだれ雪」と同じもの。ぼたぼたと降る花瓣のやうな雪。曼陀羅の同音で「まだら」を出し、更に其縁で「雨にも風にも」を出した。

○こよひ一つに惚の果の　今夜一夜が終りになったとの意。惚は「陶る」と掛けたもの。

○なかから恋しく思ひ　「なかから」は「なかば」の轉。

○こなさんの死骸の…うちかやし　男が死んで女が死なず生き殘り、やがて檢視が有って男の帶など解き、紐など去り、打ち返し死骸を見て詮議するのを女の身として見て居るに忍べぬとの意。

○男は力なみだに迷ひ　力「無くなる」意に掛けた。

(三)近き甲斐なきちかのしほがま　千賀は千賀の浦、即ち隣前國關郡明神の鎭座ある所の浦の稱。其縁でつづけて鹽竈と出した。上の「近き甲斐」の「ちか」を承け「ちか」と重ね、「しほがま」の縁で更に「こがす」と出した。

○是は一興　「一興」とは普通に何か愉快らしい事のさらし　「なかば」の轉。

○こなさんの死骸の…うちかやし　男が死んで女が死なず生き殘り、やがて檢視が有って男の帶など解き、紐など去り、打ち返し死骸を見て詮議するのを女の身として見て居るに忍べぬとの意。

○男は力なみだに迷ひ　力「無くなる」意に掛けた。

(三)近き甲斐なきちかのしほがま　千賀は千賀の浦、即ち隣前國關郡明神の鎭座ある所の浦の稱。其縁でつづけて鹽竈と出した。上の「近き甲斐」の「ちか」を承け「ちか」と重ね、「しほがま」の縁で更に「こがす」と出した。

○是は一興　「一興」とは普通に何か愉快らしい事の

「今のは何處おや。ヤア知れた」。「其處か此處か」。「いや〳〵南に聞こえた」と、こだまの樂きは氣もつかず、皆生玉へと走りける。見付られじと德兵衛畑の中を西東、髪にかゞみ彼處に忍び、今は嬉し一所にと、房の死骸を尋ねよる、道も心も埋れ井戸。踏みはづしてがッばと落ち水の哀や。汲みあげて重ね井筒の心中と、御法の水をそたゝへける。

（總評）　丁稚の三太、よく金で口裏を引かれたり、口ぢめなどされる所實を穿ッて頗る妙。「阿房な顏でも損をせぬ。やる粹よりも粹ならん」は斬新奇拔の妙句、流石は翁と感せられる。

隱居の宗德、年老いて實實な體、物事にせこましく立ち至る老人氣質をよく示した。「薪のしまつ、燈心を」の一句で既に其風采も現れて居る上に、やがて入り來ッてから種種の吟味、時にをかしみをさへ加へて無上の出來であッた。之に對して夫をかばふ優しい女房の情、實意過ぎて哀れが深い。それをよくも酌み知らぬ德兵衛とよく照映した。女房の實の意見に迷ひが覺め、戸外に出て又一方の義理に迫り、前後かれこれと思案に暮れる所誠に是實際の情といふもの、敘し方は兎に角、趣向に至ッては批難も無い。

房の店へ德兵衛が來て種種家の者に引き留められる邊作者こゝに千萬の手段を盡くし、よく味を見せた。生姜酒から始まつて、生姜茶、生姜炬燵などと滑稽になッた邊はいつもながら自由な筆法で、やがて空しく引き留められた德兵衛の苦しい胸中に移り、忽ちにして房を

〳〵と、そもや見て居られうか。私から先きに」と手を持ち添へ、わが身に差しあて忍び泣き。男は力涙に迷ひ、及物持つ手もよわ〳〵と、女の膝に伏しまろび、おほひ重なり泣き居たり。(二)『石の鳥居の彼方より、女の泣く聲子の泣き聲。「南無三寶わが家の提灯、女房子供家來ども、見付けられては情なし。おばせの方で死ぬまいか」と、立ち上らんとせし所へ、はや道傍まで尋ねきて、問はいわづか半町に、たるやたらずも因果のへだて、百里も同じごとくにて、近き甲斐なきちかのしほがま、身をこがすこそ憐れなれ。妻のおたつは宵よりの、涙と霜に袖こほり、物いふ力も無き中に、「アレ夜明けも近付くか。鳥がいかう啼くわいの。ほかの驅落ち走り者と違ふて、明日尋ねうとは言はれぬ。死にに出た心中なれば、とくに命はもう無い人。淺ましや悲しやな。女房子のない人ならば、殺すまい死ぬまいものと、嘲や最期の悔み言。お房が恨みも思ひやる。思へばわれが有る故に、人ふたり殺すよな。位牌に向ふて言譯ない。冥途の旅を連れ立たん」と、下人がさいたる脇差に、取り付く所をもぎはなし、「これは一きよう。此子は愛しう御座らぬか」と、止むれが小市郎「嘆様死んで下さるな」と、歎く聲さへ身にしみて野邊の霜風さよあらし。下稚の三太もうろ〳〵涙。「心中といふものは、いかう寒いものぢや」とて、共に袖をぞ絞りける。德兵衛呵きて、「月は傾く。東はしらむ。猶豫ふて今の間に、見付られんは淺ましし。卒何事も宵より云ふた通りぞや」。「おう」と頷くばかりにて、涙に物を云はせつゝ、夫の膝をしッかと押へ、あをのき待ッたる口のうち、南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經と、ヒッと突きぬく一刀。わッと叫びし一ト聲の、哀果敢なき最期なり。

有りなどした場合ひに言ふ語。ここでは反語に用ゐた。それ故に此段では「是は珍事、奇怪」などといふ意。

○心中といふものは…寒いものぢや　一句あどけ無く、宛然小兒の語。是こそ百忙中の一閑筆。

○涙に物を言はせつつ　涙に暮れて物も言ひ得ぬ巧みな形容。

○南無妙法蓮華を一つ蓮華にと　一つ蓮華は未來二人共に同じ蓮座にと誓ふ意。前の妙法蓮華を承けて言ふ。

○御法の水をぞたたへける　前の法華經を承け、井の水を妙法の水と假定しての形容。ただ形容だけで、深く事實に關係を持つのでは無い。

忍び寄らせて場面を變へ、と思ふ内又主人が來て雜談となり、炬燵に忍んだ房を苦しめる所、高低互に往來し、事として不用なのは無く、最も變化の妙を極はめた。

道行きの段の文句は毎もほどの秀逸でも無い。ただ德兵衛の妻が道を尋ねて追ッて來た邊は双方共に一呼吸を爭ふ場合ひ、他とは變はッた趣向で、急激な叙事に味が有る。

五十年忌歌念佛

●上の卷

(一)通ひ車は…「通ひ車」は小町小町へ百夜通ッたといふ深草少將の故事。「閨の扇」は夏の日愛せられた扇子も秋風涼しくなれば不用となッて捨てられるといふ斑婕妤の戀ひの古詩に基づいた句。此邊すべて戀ひに關した風流の事實を唯照對させて並べたもので、それ故に「皆これ戀ひ路のよせがまち」といふ。

○よせがまち　戀ひ路の「寄せ合はせ」の意でかかり、「かまち」に轉じた。「よせがまち」は家などの入り口、人など先づ寄る(車寄せなどいふ類)所にある「かまち」の稱。其縁で「ねだ」及び「柱」などを出した。

清十郎　五十年忌歌念佛

上の卷

通ひ車は小町が仇の情に乘せられ、閨の扇は斑女が親骨にせかれ、形見の烏帽子は行平のいひかぶり。柏木の鞠、さんろが笛、古今其品變れども、皆これ戀ひ路のよせがまち。ねだも根強き門柱。其但馬屋の初色に、立つや浮名の濡れ草鞋。笠が能く似た菅笠の、重積もりて戀ひの淵。わきて流る和泉の國、水間の里の左治右衛門、畠つくりのたがらすや。鳶が產んだる高給取の、手代は主の代をも、清十郎と云ふ子を持ッて、老いの入前暮らし能き。正月着物はり磨瀉、延引ながら年頭に、娘はお俊嫁の名も、さん人づれの木賃宿。明日は出舟の名殘とて、道頓堀の芝居過ぎ、名所〳〵は大坂の、娘子達に交りても、うてず押されず手入らずの、田舍生まれのおぼこにも、父の乘りたる便船の、印は如何に錨綱、たぐり着いたぞ、日は傾く。いざ急がんとちよこ〳〵走り、鳥羽河口にぞ着きにける。(一)』　親左治右衛門苫打揚げて、「やあこりや〳〵。爰ぢや〳〵。ハレヤレ〳〵大膽な。暮れるまで大坂の町を、ふら〳〵と女の身にて何事ぞ。昨宵も東の横堀で、男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉んづして居たを、いくはなか見て來た。扱ひになりしやら、錢をついたも慥に見た。大坂の喧嘩は大方相場が極ッて、十文では事が濟む。喧嘩は賣り物和ごりよ達。若もの事が有ッたりとも、いかな九文さなかでも、堪忍ばし召さるな」と、眞顏に云ひしも殊勝なり。(二)』　二人の娘打ち笑

ひ、「さればいの。今日も一日芝居見て、それから爰の河口の、八景とやら見物して、つひ今になりし」とて舟に乘れば、左治右衛門、草履菅笠片付けて、「先々休めや」と云ふ所へ、向かふの舟の船頭來り、「和泉の國の左治右衛門殿は此舟にか。此方の舟の乘り手衆が、些お目にかゝりたい。播州姫路但馬屋の、勘十郎と云へば、合點ぢやげな」とぞ申しける。左治右衛門聞きも敢ず、「オ、知ッた〳〵。但馬屋の勘十郎殿。私が息子の朋輩衆。參ッてお目に懸かりませう」と、揚がらんとする所に、是へ見えしと勘十郎、「何と〳〵親父殿。扨も年も寄らぬわ。不思儀な所で逢ひました。先御無事にて一段。清十郎も息才で、商ひの用事にて此所へ上りしが、早下ッたも存ぜず、旦那も折々噂なり、何故に見えぬ」と云ひければ、「えい勘十郎殿樣。お久しう御座ります。嫁子共が申すにも、親父些旦那樣へ往かッしやれ。何かのお禮も申さッしやれと申しまする。オウ〳〵とは申しながら正眞の貧乏暇なし。物づくりの事なれば、いや大根時の綿時の、瓜を蒔くわ茄子をつくるわ。牛房畠豆畠。粟よ黍よ藍時よ。麥を蒔くぞ赤らむぞ。田を植えては草を取る。穗が出れば苅りまする。籾になればすりまする。米になれば焚きまする。飯になれば喰まする。何ぢやし唯居る間とて無く、御無沙汰」とこそ語りけれ。(三)』勘十郎打頷き、「尤も何方も暇は無し。シテ此舟に乘ッて、何方への下りぞ」と云へば、「先旦那へ春のお禮も申し、清十郎にも逢はんと存じ、是は妹お俊、あれはゆく〳〵清十郎が、留守をもさせんと存じ、おさんと申す娘分。連れて姫路へ罷り下る。迎もの事に御同道致さん」と云ひければ、「イヤコレ逢ひたいと云ふは其事よ。先下る事は入らぬもの。清十郎が沙汰を聞かれぬか。

○初色　青年妙齡の戀ひなどの謂。全くは是ぞと取りさめた意味は無く、むしろ其語の調律の流麗な所から何と無しに用ゐられた方に傾いた語。
○笠がよく似た菅笠の　此一句は元祿流行の小唄の一節で、他の同時代の物にもよく見える。
○雫、淵、わきて流るゝ、和泉、水間共に緣語。
○鳶　「たがらす」の緣。「たがらす」を烏に利かせた。
○高給取り　鳶の緣。「鷹」に掛けた。
○主の代はりをも清十郎　主人の代理をも「す」と掛けた意。
○入り前　收入。
○うてず押されず　田舍者であッて、大坂の娘子供に交ッても場うて、即ち場おくれせず、人にも押されず。
○いかにいかりづな　「いか」を重ねて綾を成した。其「錨綱」の緣で「たぐる」と出した。父の便船に二人の娘どもが急ぎ歸る體の敍事で、船の印を見さだめ、急いて河口まで着いたとの意。
(二)ゆふべも東の橋堀で…十文では車が濟む　田舍爺が世情を知らぬ體を示した詞。密賣婬婦が客を引くのを男と女と喧嘩するものと心得た意。「いくはな」は幾端の義。「扱ひになりしやら錢をついたもたしかに見た」は「喧嘩中なほりになッたと見えて錢をつき列へたのをたしかに見た」との義。
○喧嘩は賣り物…

扨々氣の毒笑止な事。旦那の娘お夏樣と密通して、お夏樣のお腹は茶壺を抱いたやうになる。それに立野の一門中へ、祝言が極ッて、嫁入道具も出來揃ひ、身共が道具を請取ッて、下り次第の嫁入り。彼の腹の土產物。聟から詮議があるは定。否でも應でも清十郎は、かたかなの木の空で、此樣に手を擴げ、引張鳶は知れた事、親兄弟も同罪なり。どうぞ嫁入の無い先に、身を引く思案がさせたさに、知らせまする」と嚇しける。(四)』親は在所の律義者。何の巧みの有りとも知らず、「ア、お前は如來樣。内々どうやら承り、氣遣ひ致せし折り柄なり、朋輩のよしみとて、御しらせ有り難し。年六十に餘ッて、火屋へ片足踏み込んで、一人の悴が木のそらで、引張凧になるのが、抑や見て居られうか。悴が命助かるやうに、御思案賴み奉る。さりとては誰に似て、げしんの惡い悴めと、どこで聞いてか云ふ事」と、泣いて口說くぞ憐なる。(五)』時に舟場に案内して、「姫路の本町但馬屋の、勘十郎樣のお舟は是か。難波橋の蒔繪屋誂へのお道具、今宵舟に積まんと存じ、銀子請取り申さん爲、參りたり」とぞ云ひ入れける。「あれ親父聞いてか。銀を渡せば道具が下る。道具が下れば嫁入が有る。嫁入があれば清十郎が引張凧。なんと爰が談合。身は國へ歸ッて旦那へは、道具屋が出來さぬ分で濟まし置く。あの道具屋の手前は親父から、百五十兩か八貫目、渡してさへ置いたれば、波風立たず嫁入が延びる。延びさへすれば清十郎、暇を取らうと走らうと、此勘十郎請取ッた。爰は親父太儀ながら、八貫目なんぞいの。田地賣ッても子の爲ぢや。出したが宜い」と云ひも果てぬに左治右衛門ぎよッとして、「エ、有樣は一口に八貫目、假令清十郎引張凧にならうが、からさけに成らうが、世が

堪忍ばし召さるな　猶前の老爺の詞。一轉して愈眞面目に爲ッていよいよ妙致を盡くす。大坂の喧嘩は十文と相場の付いて賣買の爲るほどの、言はば是れ賣り物ゆゑ、御前たち二人の娘たちに萬一喧嘩など吹き掛けたものでもあッたなら、やはり其格を押し、十文が一文半文欠けても決して堪忍容赦してやるなとの意。すべて賣婬の事實を普通の喧嘩と間違へたをかしみ。「和ごりよ」は和御寮」の義。御寮は婦人の敬稱で、今も地方により嫁を御寮人といふ所さへある。

(四)木の空…ひッぱり鳳　碟刑に處せられる事の形容。主人の娘と不義をした結果として

泥の海に成るとても、一文も銀は無い。ェ、此方はかはかみか。合點がいかぬ」と顔顰め、立ッてゐるを引き留め、(六)』「それは親父廻り氣な。然らば銀もいらぬ思案が有る。あの蒔繪屋に向かふて、此娘には搆ひ有ッて嫁入はさせぬ。道具は其方へ預けた。銀渡したら損で有らうと、一言言へば濟むぢやが成るまいか」と云ひければ、「ハテ銀さへ入らぬ事ならば、我子の爲ぢや申さいでは」と、表の間にぞ出でにける。(七)』「播磨の姫路但馬屋の、嫁入道具を請取ッた。蒔繪屋は御身か。身共は和泉の鈍百姓、土ほぜりでおぢやれども、但馬屋のお夏には、此方に先の搆ひが有る。外の男を持たせぬからは、嫁入道具を押さへた。勘十郎殿先刻にからせッばはゞきする通り、銀渡したら御損であらう。斷ッて置いたぞ」と、苦り切ッてぞ申しける。(八)』蒔繪師の手代冷笑ひ、「ハテサテ惡い工面な爲されやう。コレ娘に搆ひ有るならば、それは先との詰め開き。此方に搆はぬ事。どうでも是は廻し者。近比惡い仕方」と云へば、「ヤァなんぢや廻し者。オ、男ぢやもの廻しをせいで宜いものか。若い時は小相撲の、一番も捻ッた已ぢや。男につかふ詞が有る。廻しかいたかかかぬか。來い見せう」と、裾揭げ、胸を叩いて力みける。(九)』蒔繪師も聞かぬ者、片肌脫げば二人の娘、船頭舟方折り合はせ、先堪忍と取り付きける。勘十郎も分け入ッて、樣々なだめ押し鎭め、「塗師屋殿も惡い合點。道具は其方の、銀は此方の。銀遣らずに此方へ請取らうと云ふにこそ。其許と我とにあの仁から、一筆取ッて置くならば、我も旦那の手前が立ち、其方も下細工へ手間遣らいでも大事なし。身に任せて默ッて居や。コレ親父。なんと一筆めされうか。」「ハテお前の御了簡ならば何うなりとも。それお三お望み

重罪に處せられるとの意。

(五)火屋へ片足ふんごんで　火屋は火葬場。六十の高齡、片足は既に火葬場へ踏ん込んで居るとの意。今日いふ「穴ばたへ腰かけて」、又は「早桶も片足踏ん込んで」などと同義。

○げしん　下心と書く。元祿時代の通用語。ただの「心」と同じ義。

(六)からさけ　刑名らしい。が、まだ分からぬ。

○かはかみ　川神の義。即ちかッぱ

(河伯)小僧の義。朴訥な爺も何やら金子を望まれて心に怪しみ、或ひは相手の勘十郎がかッぱなどで無いかといふ意。

(七)かまひ有ッて　故障有ッて。

(八)せッぱはばきするとほり　「せ

次第に書きや」と云へば、勘十郎立ち寄ッて、「但馬屋のお夏祝言に付、搆ひ是あるに依り、嫁入道具押さへ留め申す所如件。但馬屋勘十郎殿。蒔繪師權之丞殿。清十郎親左治右衛門」と、好む通りに書きければ、親は悅び巾着あけ、墨黑々と押したりし、因果の程ぞ不便なる。(一〇)』一札卷いて勘十郎、懷中にしッかと納め、「サア埒は明いた。塗師屋殿。萬事は國より一左右せん。先お歸り」と云ひければ、塗師屋は船中一禮し、辭儀を陳べてぞ歸りける。「なう親父殿。此勘十郎が能い時に居合はせて、御身親子の仕合。道具さへ下らねば祝言は延引。其中には清十郎、暇を取らうが走らうが、氣遣な事は無し。勘十郎に任されよ。此舟今宵出ると聞く。然らば是に」と乘り移り、「方々此度下ッては、清十郎が爲惡しし。能い時分に便せん。其時必ず待ち入るぞや。數年馴染の清十郎。惡いやうには致すまじ、何れも去らば」と云ひければ、親子の者は舟より揚がり、手を合はせ涙を流して、「朋輩の好とて有難し、忝し。產の親の我らより、清十郎めが命の親。嫁も娘もやれ拜め、辨へもなき清十郎。弟とも下人とも、思し召して御意見なされ。美しくお暇取り、二度在所へ來るやうに、偏に賴み奉る」と、仇と知らぬ愚さの、親の情は子の爲に、藥と云へど是は又、毒を合はする左治右衛門。心は律義一杯に、煎じ詰めたる水間の里。舟は別れて下りけれ。(一一)』

中の卷

所さへ戀ひ知り顏に姫路とは、いつ名付けしぞ但馬屋の、お夏が父は九左衛門。國一番の米問屋。有銀箱も十づつに、六十近き月雪や、花も紅葉も算盤に、かかる親には似ぬ娘。お夏は深き濡れゆゑ

ッぱ、はばき」共に刀劍の名所。鞘と鍔と合ふ邊のしッくり固い所の稱。是から轉じて「せッぱはばきする」は差し迫ッて事を急くなどの義。

(九)わるい工面な爲されやう　惡い工夫をして斷りを言はれるものではある。

○まはしもの　もと間諜の本義。ここでは主に奸物の義。

○何ぢやまはしもの云云　田舍爺ゆゑ例の傳で世情を知らず、まはしものの語を誤解したをかしみ。普通に此時代下帶びを「まはし」と稱へた、それと早合點して大いに怒ッた體。「まはしかいたか」の「かいたか」、すべて元祿時代其後までも下帶びなどするのを「かく」

に、菩提心と意地ばりて、嫁入も背ものび〳〵の、それも戀ひする氣の前か。二人の親の顏までも、しかまのかちゞ播磨潟、國に浮き名や立ちぬらん。(一)』　今日は蚊帳の祝儀とて、萌黃の生絹六幅七幅。屋の內祝ひ賑へども、お夏は更に氣に染まぬ、心の內のもじのかや、色香を外に漏らさじと、「ア、己や風ひいたさうな」とて、鼻打ちかみて紛ぎらかす、忍び涙ぞ道理なる。心を知らぬ腰元共、「お夏樣と聟樣と、此蚊帳でしげらしやんしたらば、何な數蚊もけなりかろ。此方は蚊帳は及びもない。切て嫁入の紙帳なりと、あやかり度い」と口々に、「申しお夏樣。新らし蚊帳の御祝儀、少浮き浮きとなされませ。賑かに酒盛して、謠ひませう」と言ひければ、「ア、何をざわ〳〵しやるぞい。蚊帳が出來やうが、紙帳が出來やうが、此氣合ひで今やなど、嫁入する氣は微塵も無い。あッたら手間であの蚊帳を、生絹の衣にして着たい。只無常氣で可笑しうない」と、後を見れば父親は、內手代の源十郎に、帳を讀ませて算盤の「つぶ〳〵言やんな喧しい。先來て祝や」と赤飯の、強い目付きは我戀ひを、知ッてさうなと百千に、碎き割りたる胸算は、いかな算者も及ばじな。(二)』　斯かる所へ淸十郎、勘十郎、同道してぞ戻りける。九左衞門悅び、「ヤア能い所へ戻ッたわ。今日はお夏が嫁入蚊帳の祝ひ。此拍子ならば大坂の、仕合はせも宜かろ」と云へば、淸十郎庭に立ちながら、「旦那の病になされた、中國北國殘らずうッて、爲替手形濟みました。利合ひは高で貳拾四五貫目」と、目を合はする二人が中。無事な顏見て嬉しいと、心に心を言はせたり。九左衞門上譏嫌。「お手柄〳〵。お夏が嫁入はたゞ出來た。扨なんと勘十郎。蒔繪道具も出來つらん。跡から來るかどうぞ」と言へば、「お道具

と稱へた、是もそれと同じ用法で、つまり「まはし掛けたか」の義。

(一〇)銀遣らずに…請け取らうといふにこそ　代物だけただ取らうと言ッたならの義。裏に「其上では喙り立つもよし、さも無くては喙るに及ばぬ」の意を含む。

(一一)一左右　吉左右と同義。通知。

●中の卷

(一)所さへ戀ひ知り顏に姫路とは姫路の「姫」といふ名の艶な所からの形容。

○花も紅葉もそろばんに　風流の事も勘定づくで無くては理解せぬとの意。節儉で富みを成した形容。

○お夏は深き濡れゆゑに　「濡れ」は元祿時代の逆用語。戀ひの義。

○菩提心と意地は

も出來致し代銀殘らず渡し、職人の手前は濟みながら、不落去な事にて、道具を留められ下りませぬ」と、言ひも果てぬに九左衞門立腹し、「それは何うぢや。餘るほど銀は遣る。但馬屋九左衞門が娘の嫁入道具、留められう覺えは無い。惣じて此祝言、お夏が氣色に日限延び、漸々此度脇まで詰、今日明日となッて、道具が出來ぬ何のとて、此嫁入が延ばされよか。世間からは道具屋へ、銀渡さぬと評判せん。それにうか〳〵銀渡し、素手で戻ると云ふやうな、子供遣ッたも同前」と、算盤の割るほど疊を叩いて叱りける。(三)』　勘十郎迷惑さうに「御立腹御尤も。拙者もぬかりは致しませぬ。證文をお眼にかけ、密な所でお物語、致したい事ござる」と言へば、「オ、言譯あらばサア聞かう。源十郎も來て聞け。勘十郎此方へ來い」と、打ち連れ裏の小座敷へ、苦い顏して入りにけり。淸十郎奧を見て、「ハア、余所には嫁入が有るさうな。こちや洗足でも致しませう。やあえい」と沓脫ぎに腰をかければ、お夏つか〳〵走り出で、「又ねすり言ばッかり。おんなし口で可愛やと云ふ事がならぬか。意地の惡るい」と抱き付き、戀ひには涙もろいぞや。(四)』　淸十郎は懷手。「ア、思へば阿房な者。身の正直な勝手して、人の詞をまん誠に、世間の奉公する者は、わざ〳〵暇を貰ふては、春は親に逢ひに行く、此淸十郎は親里の近所に、十日廿日逗留しても、親の所に云ひ許の、女房分が有る故に、これに逢ふと思はれては、心中が立たぬと思ひ、親へ便りもせずに歸る。是にこりよどうさい坊。ほんに孫子に傳へても、主の娘と念比など、するがの富士と一里塚。及ばぬ事をエ、阿房な」と舌打ちしてぞ頭振る。(五)』　お夏涙を押し拭ひ、「御身と我身は實事にて、口說などする挨拶か。此度の祝言を、すき好

りて　餘り早く戀ひに身を持ち崩した極、終に菩提心を發したなどと意地な張り出し、嫁入りさへ身の長と共に段々延引するとの意。「背ものびのび」〇一句で年の老け行くのを歎す。

〇それも戀ひする氣の前か　嫁入りが延引するのも實は我儘な戀ひに溺れたいと思ふ氣の有る故、正當なのを裝ふのであらうとの意。此一句有るため、上の「菩提心と意地張る」事の皮相なのが明白になる。

〇二人の親の顏までもしかまのかちぢ　若若しい娘の祖行に兩親も顏を「しかめる」との意で掛けた。「しかま」は飾磨、即ち播磨の郡名。「かちぢ」は「かち色」と

んだる事でも無し。知ッての通り母樣は室の女郎。今の內の母樣に、あの弟が出來るまでは、我も室で育ちしゆゑ、母方が惡いの傾城の風が有るのとて、何處の嫁にも嫌はるゝ。これぞ宜い事幸ひと、猶女郎の風を似せ、人は隱せど我は只、母樣は傾城と、一季半季の者にまで、ふれ廻りたる村時雨、緣には付かじと願ひしに、あの立野の阿房面、敷銀に目が眩れて、嫁に取らうと嫌らしい。此お夏ばッかりは、云ふた事を違へるか。恨みも憂みも後を見て云ふたが宜い。惣じて御身もこんな時、どうなされ斯うなされの主あしらひが聞こえぬ。私から詞を直しませう。なう此方の人此方向かんせ」と、袖口から手を入れて、ほと〳〵叩いて抱き締むる。清十郎邊を見廻し「コレお前に聞こえぬ事が有る。此袖下は何事ぞ。若衆の前髮女の脇詰め。男が知らいで立つものか。できぬ仕方」と云ひければ「なうそこらを忘れるお夏で無し。今一度振り袖見せたさに、皆々お針が縫ふれど、祝ふて我も縫はんとて、片袖ばかり縫ふ顏して、これが尾か」と帶解いて、上衣を脫げば右左。振りと詰との片ちぐに、かたえは著み片枝は、開きそめたる花衣。二人前見る誰も皆、斯くぞ仕立てて着せまほし。清十郎は身を捩ち、手を合はせ「涙が溢れて忝し。夫程に此男を、不便に思し召さるるかや。冥加に盡きん勿體なや」と、取り付き拜めば手に縋り、「女房を拜むことかいの。これほど思ひあふた中、なぜに女夫になられぬ」と、しんき泣きにぞ泣き居たる〇(六)』「ヤア申しお夏樣。いつぞやお前に借りました、七十兩の小判の事。私が遣ふ金にてなし。朋輩の勘十郎。私商ひに損をして、平に願むと申した故、取り換へやらんと存ぜしが、思ひも依らぬ仕合はせして、損を遲めしと遣すがら

いふ染めを絞した地合ひの布、是は飾磨の名物也、古から名高い。飾磨の縁で「かちぢ」と出し、又飾磨の縁で「播磨がた」と出した。

〇(二)蚊帳の記儀　嫁入り支度として蚊帳を調へた其祝ひ。

〇しげらしやんしたらは　「しげる」は陸みさざめく義。此頃から宵永頃までよく行はれた言葉。

〇けなりかろ「食へないかろ」の約の轉。いかな蚊蚊でも喰が利かなからろの義。

〇算盤のつぶつぶ　つぶつぶは算盤の縁。今日のぶつぶつと同意。

〇こはい　赤飯の縁語。

〇百千、碎き割る、胸算、算者　共に算盤の縁語。

の咄し。最ういらぬ金子なれば戻しませう」と云ひければ、「ア、宜いわいの。母樣の讓りの金。何うしても大事ない。人の來ぬ間にあの蚊張の、開げんをせまいか」と、恐々慄ふ春風も、人目を忍ぶも內手代の源十郎、お夏樣旦那の呼ばッしやるとて出でけるが、はッとひろげし手もうたれず、呆れて立てば清十郎、お夏が裾を引き被く。お夏騷がず袖にて隱し、「コレ源十郎。其方も男ぢや引かせはせぬ。忍んで逢ふは清十郎。見遁しにして給らうか。沙汰をするならするぞと云や。幸ひ刀物も爰に有る。直に二人が死ぬるまで。ヤア助けて給るか殺しやるか。急度した誓文で、承らう」と弱味を見せず、攻付けられて源十郎、「沙汰して私德もなし。商ひ冥利隱密なり。偽りならば各より私が先さきに、清十郎が脇指にて、止めを刺さるゝ法もあれ」と、云ひ捨て歸る其舌も、引きいれず寄り親の、勘十郎に打ちあけて斯くと語りし不實さよ。二人は五體に冷汗の、露の命も消ゆるばかり、居直ッて溜息をつきも敢ぬに親手代。ばら〳〵と走り出で、お夏が小腕引き出し、清十郎も這ひ出れば、「其儘居れ身躰きせば、男共郷ちのめらせ」と取り廻せば、蚊帳の內に悄々と、晝の螢の影消えて、籠にやつる涙にて、「やれ女郎め。汝が母は流れの者。空事に身はまぶれても、心のたまかさ高尙さ。千人にも稀なりしぞ。いつ習ふて其徒ら。遊女の腹とて何方へも、嫁に嫌ふは聞きつらん。其袖下は何事ぞ。左樣な事をせんよりも、汝が額に傾城の娘と、なぜ看板は打ちをらぬ」と、齒切りをしてぞ泣きけ

るが、「やい丁稚め。不義一通りは許しもあり、十一の年から子同前に育てし奴。事に依らばお夏めと、一つにせまい物でもなし。在所の親めと云ひ合はせ、嫁入道具に邪魔を入れ、親方に耻かゝせ、但馬屋の家を覆へさうと巧んだな。口の明かれぬ事見せん」と、證文出し、「是見たか。汝が請狀にある親めが印判。妹とやら嫁とやらが文共合はせて吟味した。芥子程も違ひなし。覺えがあらう。あらうがな。主の寢首を掻かんも知らず。エ、憎や」と蚊帳越に、額を三つ四つ打はせて、涙を溢して怒りける。(九)』清十郎はッと驚き、親の印判妹の手跡とは云ひながら、親にさへ逢はぬ身が、夢程も覺えなし。在所の親を召寄せて、吟味もなされず、片手打ちのなされ樣。勘十郎め何所に居る。言はせねば堪忍せぬ」と、蚊帳より出づるを取ッて押へ、「ヤレ勘十郎源十郎は此九左衛門が兩の眼の代をする。其手代が詮索して、一札取ッたに胡亂があるか。暇をくれた。出て失せう。こりや女子共男共。彼奴がはひでに着てうせた、布子が有らう尋出し、引ッ剝いで着せ替へ、追ひ出せ」とぞ喚きける。(一〇)』お夏は斯かる有り樣を、目も當てられず涙にくれ、「云はば我身も脱れぬ科。余りと云へば親ながら、無得心なるお心や。人の譏も思し召し、少しは宥免あれかし」と、聲を揚げてぞ泣き居たる。「オ、酷いも憂いも知ッたれども、汝が母が遺言に、傾城の娘とて、侮られうかあさましや。未來の障は是のみと、返す〳〵も歎きしに、氣遣ひするな。よい婿取ッて、名を揚げさせうと請合ひしを、嬉しさうに打ち笑ひ、それで成佛〳〵とて、死んだ顔わすれかね、千兩付ける嫁入を止め、大事の娘を唆し、惑者になしたる恨み。但馬屋の九左衛門は、胴慾者酷い者と云はれねば、亡人の位牌に向

(三)大坂の仕合はせ　大坂から來るべき支拂金。
○うッて　手をうッての意。
○目を合はする…　言はせたり　際どい所の相圖。文氣經妙。
○不活去な事　よく落着の付かぬ事。
(四)よそには嫁入りが有るさうな　清十郎心で妬む儘の當て付け口。
(五)まんまこと　「まこと」を延ばして力を添へた語。「このたび」を「こんこのたび」といふ類。
○是にこりよどうさい坊　是に懲りろどうさい坊の義。「どうさい坊」の本字未詳。ただし今日いふ「ちやうさい坊」、「ちやうせい坊」などの原語であるには違ひない。今日の意味「ちやうさい坊」、「ちやうせい坊」は總じて人の口などに乘り、犬骨を折る者を冷かして言ふ語で、此「どうさい坊」と此段で是と同じ義に用ゐられた。つまりは清十郎自身だけ心中を盡くしても一方は何とも思はず、相手をばちやうさい坊にして嫁入りなどする、是によく懲りるがいいとの不平。
○念ごろなどするがの富士と一里塚　念ごろ「する」と掛けた。念ごろするは馴れ染める義。
(六)ふれまはりたる村しぐれ　「ふれ」を「降る」に利かせ、縁で「村時雨」と出した。但し、此「村時雨」は上に接しただけ、下には接せず、巧みな句法でない。

かふて云ひ分け無い。胴慾者には誰がなせし」と、わッとばかりに堪へかね、咽返りてぞ歎かるゝ。其間に下部ども、衣裳を剝いで振り袖の、汚れし綿衣に着せ替ゆれば、さしも美形の清十郎。山田の案山子とうぞ慄ひ、二目と見られぬなりかたち。お夏は「我も一所に」と飛び付くを、下女腰元、引き分け和め敎訓し、常の部屋にぞ伴ひける。(一一)』父は彌腹を立て、「勘十郎は何所に有る。何に恐れて引ッこむぞ。清十郎めが入れ物吟味し、衣類諸道具押さへ置き、追ひ出せ〳〵」と云ひ付け、奥に入りければ、心得ましたと勘十郎。半櫃簞笥掻き出ださせ、ぐわらり〳〵と打ち明けて、衣類引き出し取り散らすは、三途川の奪衣婆の、呵責も斯くやと憐なり。錠前を叩き破り、提げ物さしがへ取り出せば、包の小判七拾兩。「是は扨。此金子はお夏樣へ、母御よりの讓りの金。身が包ませて覺えあり、極ッた大盜人。首の有るは旦那の慈悲。叩き出して追ひ拂へ」と手足を取ッて引き出だす。清十郎大聲あげ、「ヤイ勘十郎。盜人する男で無し。汝が私商にあこ塩買ふて損をして、首縊らねばならぬ首尾。どうぞと談合したる故、お夏樣へ申して汝に貸す爲預ッた。戀ひする者の因果で、朋輩の譏嫌取り、追從したが身の仇となッたるか口惜しや。汝が損は入れ合はせ、今は金もいらぬといふ。察するに此度の、嫁入道具の代銀を、遣らずに汝が引ッこんで、我親騙ッて一札させ、人を害ふ工面とは、鏡にかけて知ッたれども、相よみなければ是非もなし。是を見よ。清十郎は破れ布子一枚で、非人の體にはなッたれども、心の内は紗綾縮緬。錦より潔よい。エ、憂いぞ。やれ恨めしい」と、齒嚙みをなして泣きけるが、「旦那にさら〳〵恨みは無し。十一才の彌生の花。いろはともちりぬ

○敷き銀　今いふ持參金。
○此そでしたは何ごとぞ　嫁いて夫を持てば振り袖を着ぬ習慣ゆゑ、お夏も嫁入りを嫌ふ情を示すためわざと一方を縫ふ振りして縫はずに置いた、其縫ッてある一方の袖下を見て清十郎が詰ッたもの。
○しんき泣き　辛氣泣きの義。ぢれて不滿足で泣く事。
(七)開眼　佛家の語。新佛など始めて供養する事。轉じては俗間すべて新らしい物を始めて用ゐる事の稱。
(九)流れの者　流れわたりの遊女の身の上。
○空事に身はまぶれても　虚で固めた所に居て、その邊に身は深く染みて居ても。

るとも。知らぬ者の是ほどまで、算勘商ひ讀み書きの、硯の海より山よりも、優ッたる御高恩。拳一つ當たらぬ身が、如何なる月日か今日の今日、主從の緣きるゝ、如何なる神の咎めぞや。今一度旦那の顏拜まん」と駈け入るを、情なくも男共、手取り足取り大道へ追ひ出し、門口はたと鎖けるは、詮方もなき次第なり。(一二)』　未衣更着の朧夜や、ねはんの雪の名殘の門。立ち留まりつ立ち去りつ、凍え狼狽へ佇めり。無慘やお夏は魂も、布子の袖に入るばかり。身は脫殼の力もきれ、若やと部屋を忍び出で、門の戸あけて密と出で、傍を見れば人影の、「お夏樣か」。「爰にか」と、云ふより先に抱きあひ、聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰ひ付いて、忍び音に泣くばかりなり。今の間の物思ひ、今一度逢はせ下されと、幾許の願ひをかけたやら、清十郎の清の字なれば、先爰の清水樣、京の清水、室の明神、書寫山伊勢の御しん樣、住吉樣金比羅樣、不動愛染太子樣、拜み賴みし驗にて、顏を見て有り難や。サア二人連れにて立ち退きて、如何なる遠國小借屋でも、二人遣ふを一人遣ひ、一人遣ふを手鍋でも、暮らされまいものでもなし。いざ立ち退かん」と有りければ、「いや夫では情の親方の憎しみも增るべし。在所へ歸り親共と、勘十郎めが善惡糺し、身の垢脫いて詫言せば、御譏嫌も直るべし。夫まで辛抱あそばせ」と、泣く〳〵和め慰むれば、「戀ひし懷しは身の氣隨。男の爲には憂き苦勞。厭はずながら唯一人、突き放して遣られうか。コレ此小袖と脫ぎ替へて、其布子を逢ふまでの、形見に着ん」と涙ながら、互に帶解き身を合はせ、片袖づつを脫替はす。肌睦じき志し。戀ひ路ならずば何故に、生まれて知らぬ木綿物。服紗の絹と引き締めて、顏と顏を見合はせて、わッと泣き入る

(一〇)はひで　這ひ出の義。始めて拳公に來た時を指す。
(一二)提げ物　印籠など腰に提げるもの。
○さしがへ　佩し換への義。別に用意して置く腰の物。
○あこ鹽　赤穗鹽の略。即ち播磨國赤穗の名產たる鹽。
○相よみ　證人。
(一四)衣裳の相違したためお夏と誤り、清十郎を一同が戸內へ引き入れる趣向。それで又下女の玉も清十部とお夏とを間違へる。

心底に、萬の涙こもるべし。(一三)』　物にて顏を押し包み、さらばやと云ふ所へ、腰元下女共、「お夏樣がござらぬ。裏よ井戸よ」とひそめきしが、門口明けて「こりや爰にぢや。ア、申しお夏樣。お前は惡い合點な。何方の爲にもならぬ事。まづ御入り」と衣裳を證に、清十郎を取り卷き、連れて內に入りけるに、お夏續いて入らんとす。「コレ清十郎殿。お夏樣が愛しくば、先往んだがよいわいの。男のやうにも無い人ぢや」と、耻ぢしめ突き出し押し出し、大戸をはたと鎖しければ、清十郎は詮方なく、部屋へ入る體にして、大釜明けて身を縮め、そろり〳〵と忍びいり、中より蓋をぞ閉にける。お夏は門に憧れて、入るべき便りを待つ所に、水仕の玉はそろ〳〵と、門口明けて「なう清十郎樣、清樣」と、お夏が袖をしかと取り、「ア、御身は戀ひ知らず。私が御身に絆されて、お主樣は袖になし、朝晩に心をつけ、しんぞ思ひを盡くせども、お夏樣に心中立て、一度も靡いて下されぬ。恨みの炎火吹き竹。なや十四五すッとんとんと擲ちたいが、噫愛しいが因果の種。人は落ち目の志し。コレ此餅は正月の、在所へ遣らうと思へども、君に何か惜しからん。恥しながら此玉を、喰ふと思ふて、賞翫して下さんせ」と懷中に押し入るる。お夏は色を知らせじと、じッと抱き付き締ければ、「オ、ぞッとするほどお嬉しい。恨みの雲も晴れ渡り、是で千倍〳〵。迚もの事に酒盃せう。酒取て來ましよ」と入る跡に、引ッ續いてつッと入り、部屋に駈け込み夜着引き被き、身を慓はしてぞ臥居たる。(一四)』　清十郎は斯くとも知らず、お夏は外に如何ぞと、釜の蓋あけ見廻せば、奥には人も寢入りばな。勘十郎は親方と、寢酒の相伴ひよろ醉ひで、夜着布團引き出し、常の所に臥しにけり。跡より又源十郎これも微醉

來りしが、「勘十郎最う寢たか些談合ある。目を寤せ」と頬杖してぞ寢轉びける。「いや寢入りはせぬ。ヤア咄せ」と夜着の中より煙草盆。寢ながら行燈引き寄せて、顏を並べて語りける。源十郎小聲になり、「其方が頼うだ鑒商ひの損銀。かの金子で濟まして、請取手形も餘金も、一所に上した。屆いたか」と云へば、「オ、過分〳〵。慥に屆き請取ッたが、其狀も請取も大事にかけ、笠の頂に入れ置き、其笠を道頓堀の群集に、芝居の木戸に預けて余所の笠と替ッて、詮議しても知れなんだ」。「夫は失せても大事ない。お蔭で萬事忝ない」といへば、源十郎「一だん〴〵。夫につき、清十郎めが諸道具、七十兩の小判まで、旦那が身共に預けられた。お夏女郎と清十郎が、盜み出した分にして、して遣る樣な工面がなと、分分すれど能はぬ智惠。汝が今度のおぞい仕樣、魔法でも叶ふまい。どうぞ思案は有るまいか」と云へば、勘十郎頷いて、「嫁入道具の代銀を、此方へ遣ふて損を埋め、まんまと間には合せしが、一度は大坂へ上す銀。あれをと胸に充てゝ居る。工面を聞け」と呼き合ふて吸ひ付ける、煙管の先にて行燈は消えて闇とぞなりにける。(一五)』 清十郎は幸と、釜の中より這ひ出る。酒に醉ひたる源十郎、とろ〳〵寢入る體なれば、勘十郎搖り起こし、鼻に手をあて仕濟ましたり。七十兩を盜み取り、預り手の此奴に、負せんものと分別し、密と起き出で源十郎を、我寢所に押し遣ッて、夜着打ち被せ差し足し、奥の納戸に入りにけり。清十郎は夫とも知らず「扨は彼奴らは寢入りしな、エ、憎さも憎し。迚も斯くなる憂き身なり。身代の敵。この首尾に、助けておめ〳〵戻られず、勘十郎めを刺し殺し、有り甲斐もなき我命。仕損ふたら浮世は闇」。跡先見えぬ出來心。內の勝手は覺

(一五)そちが今度のおぞい仕やう「おぞい」はもと「鈍」の義。それを反語で、鋭い、巧みななどの義に用ゐ做した。今も東京の近在では此義で用ゐる。

えの庖丁。心の錆もあら砥の研ぎ立て、尋ね寄れば高鼾。前後も知らずふしぎの本望。夜着引きのけて喉笛を、ぐッと刺れば源十郎。うんと云ふを引き起こし、肝先を一刀、又刺し通して息をとめ、耳に口を指し寄せて、「こりや勘十郎。まだ魂魄はよも去るまじい。能ッく聞け。朋輩に科を被せ、身の爲にせし報いの劍。名乘り合ふて殺さぬは、近比殘念至極ながら、讒訴したる此ゑら骨」と、腮かけて斬りさげ、「此胸から巧んだか」と鳩尾先を背中まで、思ふ樣にとどめをさし、死骸を夜着に押し包み、立上れば血おちて滑ッてのッけにどうと伏す。はッと起きて布團にて、足擦拭ひ靜々と、身支度して立ッたる所に、奥よりお夏は手燭の影、表へ出るを「これ〳〵〳〵。ム、其所にか」と走り寄り、血に滑ッて「ア、怖」と、聲を立つるを押し鎭め、樣子を呼き、「此上は。一所に退かん」と云ふ所へ、行燈さげて勘十郎。納戸の方より來る體、「南無三寶人違へ。よし是も己が身の、火を吹き消して車戸を、押し明け飛んで出でにけり。後れてお夏は詮方なく、蚊帳打ちあげ身を潛め、生きたる心地は無かりけり。(一六)』 此音に勘十郎走り寄ッて手燭をあげ、夜着引き捲ッて「ヤア源十郎が斬れたわ」と、呼ばはる聲に主下人、男女殘らず起き合はせ、「疑ひもなき清十郎、門の戸明いたは落ちつらん。引き入れあるか吟味せよ」と、上を下へと返せしが、「なうお夏樣がござらぬは。ヤア是ぞ曲者搜して見よ」と、二階內藏椽の下、湯室まで搜せども、蚊帳の內は氣も附かず、表の口に錠卸し、「裏を搜さん」。「もッとも」と提灯點して駈け惑ふ。お夏は我身の恐しさ、清十郎が氣遣ひさ。氣も逆立ちて散亂し、「南無天照太神樣。觀音樣氏神樣。死ぬとも二人一所に」と、胸を騷す折りからに、勘十郎が聲とし

(一六)前後も知らず不思議の本望前後も知らず「臥し」と掛けた。

○ゑら骨 鰓骨の義。願の意。

て「蚊帳の内を見なんだ。捜して見よ」と云ふ聲す。「南無三寶」と飛んで出で表には錠おりたり。裏には大勢充滿たり。跡へも先へも因果の網の、かゝる憂身は佛身の、直なる法も横町の、間の細路次蹴破れば、さッと開くも戀ひ路の念力。懸けし願ひの神力の、神變奇特毒蛇の口、脱れ出でたる如くにて、落ちんと契りにしの辻。東の辻に「なう我が夫〳〵」と、聲を限に往き返り。偖は俘となりけるかと、はや狂亂となる鐘の、響きの末に、「あれお夏〳〵と呼わいの。おう〳〵其所にか、何所にぞ。いや〳〵いや待て暫し。あれは我家に父の聲。我を尋ねて我を呼ぶ。親も懐しや、夫も戀ひしや。父は子をよぶ夜の鶴、我は夫よぶ野邊の雉子。追ッ駈け行かん夜は何時ぞ。鐘は幾つ。八つか七つか。曉風の辻行燈を吹き消して、道も心も眞くら〳〵。くる〳〵〳〵狂ひ亂れ泣き亂れ、亂れて諷ふ鷄の、玉子を渡る危さの、狂女となるこそ哀れなれ。(一七)』

下の巻　お夏笠物狂ひ

夜さこいと云ふ字を金紗で縫はせ、裙に清十郎と寢たところ、裙に清十郎と寢たところ、少くわん。觀ずれば夢の世や。寢て温めしほところ子。いつの間にかは浮かれ初め、三界を只家として、袖笠雨の宿にも、心とどめぬ假枕、流れにあらぬ川竹の、笹のをざさのびんざさら。花の手おほひ、お手をひかれた、是も熊野の修行かや。(一)』姉様のこれの、勸進柄杓の、笑顔よしとて柳が招く。柳の髪を何故に、浮世恨みて尼が崎。尼が崎とは海近く、なぜに汝はしほがない。節は哀に身はだてに、歌の念佛の歌比丘尼。(二)』向ひ通るは清十郎ぢやないか。笠がよく似た菅笠が。よく似た笠が。笠がよく似た菅笠がえ。笠を知邊の物狂ひ、物に狂ふも我ばかりかは。鐘に待宵鳥には別れ、戀ひする人の夜な〳〵を、氣違ひとてな笑ひ玉ひそ。(三)』傅へ聞く孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸にたき、白居易は又我子を先立てて、枕に殘る藥恨むは理りや。それは子故の別れの涙。親より子より我身より、最惜殿御のいとしぼや。それより便宜音信の、聲も聞かねば顔も見ず、我は秋鹿つまを戀ひ、かいろとなくと報せたや。なう〳〵あれなる御僧、我殿御返してたべ。何處へ連れて行く事ぞ。男返してたべなう。いや御僧とは空目かや。我も憧るゝ丸太舟。浮世渡る一節を、諷へや諷へうたかたの、小舟造りてお夏を乘せて、花の清十郎に艪を押さしよえくわん。(四)』觀音薩埵の誓ひには、枯れたる木にも花がさ。笠にさいたは椰の葉、腰に差いたも椰の葉。一枝二枝三日に三枚七日に七枚。起請誓紙の牛王のうらなく、灰に燒きつつ、互に呑んだる水も漏らさぬ、なか〳〵に引きもあはせぬ神心。熊野の神のお留主かや。足利箱根玉津島、貴舟や三輪の明神も、神とも覺えぬ。神ならば、尋ぬる人にあはせて見や。それ〳〵逢はせず逢はれぬは、皆僞りの御神と、誹ッても祈ッても、神の力も叶はぬかと、笠も髢もかなぐり捨て、狂ひ歎くぞ哀なる。(五)』共に濡らせる尼衣。二人の比丘尼も涙を押さへ、「我も尋ぬる人故に、假に扮せし修行の道。思ひ當たる事あらば、しらせ申さん國所、有樣語り玉へ」とよ。「嬉しの人の問ひ言や。國は播州姫路の者。尋ぬる夫の容形。姿は詞に語るとも、心は筆も及びなき、ぼんぢやりとして屹として、花橘の袖の香に、昔男の業平づくり。黑い羽織が好きすき油。鬢つき髪つき眞くろ〳〵。黑目勝ちなる眼の中に、鼻筋とは

●下の巻
(一)よさこい　此一聯の句は前の「重井筒」のはじめにも見えた。要するに此お夏清十郎の「歌念佛」に始めて出し、移して「重井筒」に出したもの。
○少くわん　本義未詳。
○觀ずれば　觀念すれば世は夢のやうである。慢子も成長しては忽ち浮かれ出して八方を飛び歩く事ともなり、宿りにも心をとめぬ事ともなる。
○流れにあらぬ…修行かや　「流れ」は「假り枕」から呼び出された。川竹は遊女たる身の上。竹の縁で「笹の小笹」と重ね出した。びんざさらは竹などで造り、手で鳴らす鳴り物。笹から呼び出した。熊野修行の比丘尼は手甲を掛けて廻國する、其手甲を艶に形容して「花の手おほひ」と言ひ做した。「御手を引かれた」は別に縁は無い句。ただ「手おほひ」を便りにして出た句で、多少艶な情致を含む。全體の意阿夏が狂亂となり、途に熊野比丘

を見て情熱をさわがせる氣味合ひ。熊野比丘も寢てあたためられた懷子であッたが、三界を家とする身になり、流れ歩きの假り枕の身なとッた。が、遊女たる身でもなし、びんざさらなど打ち鳴らし、手甲などして歩くとの意。此邊は詩の極致に近いもの、其一句一句を解釋する事は迚も出來ぬ。

(二)是また歌比丘尼に對する詩情で、玩味して意を悟るより他に術も無い。

○姉さまのこれの「是の」と重ねたのは唄の調子で、此頃の一節切りの歌などにも例は有る。

○勸進柄杓　廻國して勸進する時、柄杓を出して錢を承ける、その柄杓。

ッて櫻色。年頃は廿才余り。背高からず低からず、茶の湯ばん上打ち囃し、男の藝に一つでも、疵なき玉の盃の、酒もよい酒、かな文かき手の萩の露。轉び寢し夜の睦言は、己と汝が中ならで、岸の濱松根ほれても、漏らすまいぞや顯すな、變るまじきと末かけし、末の松山うらの波、上越す人もなかりしに、友朋輩の娘にて、犯さぬ罪の仇名を詫ち、世を憂きものに出で給ふ。今は我名を包みても、何な其甲斐夏果つる、扇の女の物狂ひ。其人の名は清十郎。有りし姿は替はるとも、まだ面影は殘るべし。敎へてたべの人々」とて、伏し沈みてぞ泣き居たる。二人の比丘尼縋り付き、「扨こそは他ならぬ。一つ流れの和泉の國、其人の爲にこそ。我は妹」。「我は嫁」。「親の歎きを宥めかね、倶に亂る我身ぞや。狂女と云ふも何故ぞ。其方は妹脊の忍ぶ草、身ははらからを思ひ草。同じ由緣の草葉ぞ」と、手に手を取りて泣き叫ぶ。物の哀れをとどめける。(六)』「なう淺ましや今里人の語りしは、但馬屋の清十郎は、人を害し科に依ッて、方々へ追ッ手かかり、長崎とやらんにて終に捕はれ囚人となり、あの松蔭の竹垣にて七日曝し、其後は但馬屋の、門口に獄門にかけらるゝと語りし故、切て余所目の暇乞ひに、是までは參りしが、御存じなきかいとほしや」。「何わが夫は捕はれて、終に首を斬らるゝとや。それは誠か今までは、狂氣の中にも若しもやと、賴む念力切れ果てゝ、同じ刀に斬られん」と、駈出るを二人の尼、「歎きは替らぬ我々なれど、最期に心亂れては、人の誹後世の爲、皆其人の仇ぞ」とて、泣く〳〵制し留むれば、はや先拂ひの警護の者、山賊夜盜の其如く、嚴しく固め引き出す。生きての思ひ死する罪。もと一筋の縛めの、繩目に遭ひて清十郎、引かれ出づるぞ無殘なる。や

○柳の髮を…あまが崎　柳の髮を何故に剃り落として尼となッたとの義。

○しほが無い　尼が崎は攝津の海濱。それ故に「ゑほ(潮)と出した。但し此「しほ」は情致、曲、風致などの意をも掛けて持つ。

(四)鯉魚　孔子の子。

○いとしぼや　いとしやと同義。

○えくわん　本義未詳。

(五)牛王　山城國祇園では牛王を祀る。是から出る護符を牛王といふ。皆ひなどの時は燒いて其灰を服する例が有る。

(六)ぼんぢやり　ぼッちやりと同義。肉合ひ宜しく付いた體。

○花たちばなの袖の香　「花たちば

らひの内に土壇を搆へ、高手を免し羽搔締。北向きに引ッ据ゆるは、目も當てられぬ風情なり。(七)』お夏は涙に目も明かれず、聲も立たねど伸び上り、「なう爰に居る是爰に。顏を向けて下され」と、呼ばはる聲も往來の、群衆の歎ぎ念佛に、紛ぎれ聞こえぬ哀れやな。不便やな清十郎。顏も容も痩せ衰へ、最期極る心にも、後世菩提も思はれず、お夏が歎き故鄕の、親兄弟は如何ぞや。お夏に知らせ今一目、切て面影ばかりでも、姫路の方をと見廻して、目と目をふッと見合はせて、お夏はわッと泣き出す。清十郎は聲立たず、膽より出づる憂き涙。刀の刄より先さきに、思ひに命絶えぬべし。涙を中のかけはしと、心通はす心の色。世に取沙汰の諺や。清十郎殺さばお夏も殺せ。生きて思ひをさしよよりも、思ひを生きて、生きて思ひをさしよよりも。エなまみだ、なまみだ南無阿彌陀。南無阿彌陀佛なまみだ〳〵。南無阿彌陀佛と回向して、皆々袖をぞ絞りける。(八)』清十郎涙を押さへ、「何れも有り難き御回向。千金萬金より、一遍の回向に增る寶なしと承はる。最期の悅び何事か是に如かん。然りながら、心にかゝるは此高札。主人の金七十兩盜むとは、身にとッて覺えなし。相人勘十郎を斬り殺さんと思ひしに、過ッて人違へ、脫るゝも業、悅びならず、殺さるゝも業、歎きにあらず。某生年廿五才、十一才の春より奉公し、主人養育情にて、商人の道一通り、藝能文字の元末まで、人並になッたるも、皆これお主の御厚恩。明け暮れ主の敎に任せ、親に孝行主に忠。唯正直を守ッて一言も、虛言を云ふまじと、每朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲さは、只今非業に死なんとは思ひも依らず。佛とも法とも一遍の、念佛申せし事もなく、今の悔やしさ詮方なく、高き山の

なの香を縁げばむかしの人の袖の香ぞするといふ古歌から來た句。
○黒い羽織り　「好き」から頂用して「すき油」と出した、翁のいつもの流暢な筆癖。「髪つき、髪つき」の「つき」も同前。「まッくろくろ、黒白」も亦同前。
○よい酒　酒狂などせぬ酒。
○轉び寢し　萩の露の縁語。
○末の松山　末の松山は奥州の山。むかし男女相契り此山を波が越すすまでは互ひに變はらぬと誓ッた傳へが殘る。それに基づいた句。
○忍ぶ草、思ひ草、草葉　共に縁語。

頂上にて、一杯の水を求むるが如しとは、此身の上に知られたり。此群聚の中にこそ、清十郎が一命に、替はらんと歎く人も有るべきぞ。必ず〳〵僻ことなり。存生へて追善し、菩提を吊ふ善根こそ、命を助け不老不死の、藥を與ふるよりも嬉きぞや。人々の回向をうけ、佛の御國に到らんと、思へば〳〵此世の絆は、ふッつと思ひ切ッたぞや。ア、思ひ切ッても切られぬは、愛し可愛のただ一人。よし是も夢の戯れ、頓證菩提、南無阿彌陀佛」と、潔よくは云ひけれども、お夏が歎き妹の變はれる、顔を尻目にかけ、覺えずわッと泣き出せば、お夏を初め二人の尼、警固の上下緣もなき、貴賤群聚に至るまで、皆々袖をぞ絞りける。(九)』　稍あッて清十郎、「如何に警固の方々。口乾きて苦きに、煙草一服所望したし。此群聚の其中に、姫路の人も有るならば、吸付けて給はれかし。情のお主の御手より、末期の水と觀念せん。如何あらん」と云ひければ、「苦からじ。それ〳〵」と、煙管煙草を出しける。お夏悅び、「なう我こそ姫路の者。一樹の蔭も他生の緣、況して一つ國なれば、未來も一つに生まるる爲、約束の煙りぞ」と、他ながら暇を、煙草吸ひ付け垣越しに、警固の者取次ぎて、清十郎にぞ渡しける。夫婦は物も云ひたげに、顔振り上しが咽返る、涙を中の關の戸にて、兎角の詞も出でばこそ。泣くより外の事は無し。(一〇)』　漸涙押留め、「人も多きに御身の手より、末期の一服を受る、この有難さよ、本望さよ。此煙草にて、十惡五逆の眠を覺し、充滿其願如清涼池と嘯きて、地獄餓鬼畜生修羅、此四惡趣の苦患を解脱し、吹き出す煙は沙羅林せんだんの霞と變じ、三寶供養の燒香となッて、三十三天に薫じ渡らば、日月は両の眼に入り替はり給ひ、梵釋二天に手を引かれ奉り、佛の御前に此度は、立ち別るるとも藻汐燒く、煙りは同じ鷲の山、兩全淨土で待つべきぞや。南無阿彌陀佛」と云ふより早く煙草追ッ取り雁首まで、咽喉の内へ押し込んで、眞逆樣にぞ伏たりける。警固の上下狼狽きて、それ殺すなと引き起こせば、色も變ッて目眩き、血は紅の瀧津瀬と、口に流るゝ風情を見て、「口惜しや後れたり。我こそ清十郎が二世の妻、但馬屋のお夏。人々の情には同じ土に埋みてたべ。南無大悲觀世音助け玉へ」と、立てたる抜き身の鎗追ッ取り、喉笛ぐッと突き貫す。二人の比丘尼抱き付き、「なう皆樣頼みます」と、泣けど叫べと囚人の、自害に各々仰天して、勞る人もなかりしは、是非に叶はぬ次第なり。(一一)』　城下に斯くと注進す。代官所の役人、馬を飛ばして駈け來り、矢來の内に飛んで入り、大聲揚げて、「ヤア早まッたり清十郎。汝朋輩の源十郎を、人違にて害せし段は白狀紛ぎれなしと雖も、盗人の科未だ分明ならぬ故、曝者となして成敗の日を延し、盗人の本人顯れなば、汝が命を助けんとの評議なりしに、近比殘念千萬なり。只今但馬屋一家を召し寄する。事の詮議濟むまでの命を生きんと思はぬか。狼狽者」と力を付け、二人が口に氣付けを入れ、樣々着病なし玉へば、お夏は少し息出づる。清十郎は心肺の、臟腑を破りし長煙管頼む方なく見えにける。(一二)』　程なく「但馬屋允左衛門、手代勘十郎、一家殘らずお召しに依ッて參りたり」とぞ訴ふる。斯かる所へ老いたる百姓遽ただしく狼狽へ來て、一目見るより、「南無三寶仕なしたり。まてむざ〳〵と一人は殺さぬ。仇を取ッて取らせう」と、堰きくる涙を押し拭ひ謹んで、「我らは清十郎が親和泉の國水間の左治右衛門。年寄りながら面目なや。其勘十郎めに誑され、お主を大事子が可

愛さ。由ない手形、なんぼう後悔仕る。夫に付其時分、娘子供が道頓堀にて取り逢へ歸りたる、笠を此比取り出だせば、頂きの下に此文有り、御詮議なされ。清十郎が科を輕め下され」と、涙を流して訴訟する。(一三)』「それ〳〵是へ」と取り上げて披見ある。「幸便にまかせ一筆啓上せしめ候。此度お夏樣嫁入道具の代金、百四十兩の內百廿一兩、爰元にて皆問屋へ相渡し、貴樣の損銀殘らず相濟し、則ち請取手形。殘金十九兩上し申候。追付御下り待入候。但馬屋勘十郎殿參る、同源十郎。何と此手跡相違なしや」と仰せける。九左衞門一見して、「相果てし源十郎が筆判、形ともに疑ひなし。サア返答あるか勘十郎。御前にて申せ〳〵」と責め付くれば、勘十郎少しも怯まず、「尤も我ら私商損金の立用に道具の代金。暫く取り替へ置きたれども、追付右の金は才覺して、道具屋へ濟まし置く。商ひの慣らひ掩り金の無き時は、氣轉を利せ、表裡を遣ひ、主人の金を手前へくはへ、自分の銀を主の銀にまはし、間に合はするは、世間共に手代の慣ひ、我らばかりに限るで無し。あの清十郎は朋輩を斬り殺し、金七十兩盜み取る。是も手代の慣ひか。三、殘り多い。最些と早う生まれたら、熊坂の長範か石川五右衞門が手代にせば、よい給分を取らう物を」と憎體にこそ申しけれ。(一四)』今を最期の清十郎眼をくわッと見開き、「やい〳〵勘十郎。廣い世界を汝が口から、世間手代の慣ひとは、ゑらが過ぎて聞きにくい。惡い事を慣ひと言ば、主殺し親殺し、屋燒强盜世間の慣ひと許さうか。人を殺せば我身も死ぬる。此清十郎が七十兩や、八十兩の金に替る命でなし。旦那の御恩お夏樣の情に捨てうと思ふ身を、汝が口一つにて、勘當させた其恨み、汝をたッた一討に仕舞うと思ふたに、

仕損ふて口惜し。三、無念な口をきかするなあ。〳〵〳〵我ら故にお夏樣の自害。御恩の旦那の憎しみも、嘸や增さらん情なや。此年ゆまでの御面倒、御恩を報ずる事もなく、御苦勞をかくる事、是ぞ黃泉の障となる。是親仁樣妹共」と、呼びむけ顏じろ〳〵と、云ひたき事の有りさうに、眼は動けど息切れに人腑絕ゆる兩眼より、涙ばかりを暇乞ひ。親子他人の隔てなく、皆々哀れを催せり。(一五)』左治右衞門涙を流し、「申し殿樣。勘十郎がお主の銀を引き負し、我らを証した確な證據出づるからは、七十兩も彼奴が盜みに極ッた。御詮議なされ、清十郎を御助け下され」と大聲揚げてぞ申しける。代官職聞き給ひ、「尤々。不便なれども清十郎は、人を殺せし白狀紛れなき上は、斷罪免るる處なし。又勘十郎が七十兩盜しと云ふには證據なし。然れ共勘十郎。汝一旦主人の金子をわだかまり、清十郎親子に無實を云ひかけ、迷惑させし不屆。もと曾汝が惡心より事起こッて、お夏も自害に及びたり。主殺しとも云ひつべし。きッと仕置きに行ふべきが、手を出して人も殺さず、盜人に極る證據なければ、慈悲を以て助け置く。命の代に髮を下し、出家して彼等が菩提を吊ふべきか」と仰せける。「ヽヽ有難し」と勘十郎、頭を地につけ三拜し、小刀拔いて髻より、ふッつと切ッて捨てければ、「ヤ、神妙〳〵。佛弟子となッたれば、假令實の科有ッても、彌〳〵命は取り難し。此上は汝が行末彼が後生の爲ぞかし。和睦して恨を晴させ、往生させよ」と有りければ、勘十郎一念發起して、「コレ清十郎。今は我も懺悔せん。彼の七十兩の小判は、此勘十郎坊主が盜んで、源十郎めに塗らんと思ふ折り節、斬れしを幸ひに其方に負せたり。恨を晴れて成佛あれ。跡吊はん」と云ふ所を、「扨こそ盜

人現れたり其奴縛れ」。「承はる」と踏み付け〳〵、腕捻あげ、はや切り繩にぞかけてける。「直に國中引渡し、獄門に切りかけよ」と引き立つれば、妄執も晴れつゝ清き清十郎、臨終顔も菩薩の數。廿五才の命は消えて、浮き名は今に殘りける。お夏も倶にと取り付くを、宥め伴なひ立ち歸り、其夏衣墨に染め、年忌〳〵の手向け草。花の帽子に修行の笠。笠がよく似た阿彌陀笠、彌陀の御國に生まれける。(一六)』

(一六)臨終顔も菩薩の數　臨終の顔も菩薩のやうに優しくあると言ひ掛け、菩薩は廿五菩薩とて其數廿五ある所から廿五才に掛けた。
○其夏衣　阿夏の名の縁語。

(總評)　質朴人に欺かれ易い佐治右衛門の人物はよく現れて居る。賣婬を喧嘩と誤り、勘十郎の舌に欺かれ、「まはし者」の語を早合點する抔何れも其風采は活動する。之に續いて阿夏の父九左衛門が金錢一方の肌合ひなのもよく描いた。阿夏清十郎纏綿の情致は頗る精を萃め、華を抽いたもの、脇明けの袖下など特に妙趣と思はれた。衣服の變はッた所から下人共が清十郎阿夏と見誤る所、又下女の玉が阿夏を清十郎と早合點する所、共に例の假空的事實、此時代の常ながら今から思へば附き穗無く思はれる。

「内の勝手は」の邊、源十郎を殺す邊の文はいつもながら擒縱自在、殆どよく熟した。同じく阿夏が狂亂になる所の叙事も巧みに出來た。殊に際立ッて見えるのは「玉子をわたる危さ」の一句。

下の卷物狂ひの條、是ぞといふ巧妙な文句でないが、調子何と無く沈んで、哀れが深い。清十郎の無殘の體を見て、局面一變し、前の靜かな愁歎に接して忽ち殘酷な悲哀となる所、照映はなはだよし、而も他の作と趣向を殊にし、情人のみ死に行く所、末期に相見て腸を斷つ所、一風變はッて珍らしい心持ちがする。

心中二枚繪草紙

上の卷

既に今年の酉のたち、戌の顔見世朝木戸を、曙深く提灯の、影きら〳〵と初霜の、翁の面のにこやかに始り呼ふ聲に引かれて、老いも若いも見る人は、余念馴染に御贔氣に、ようお出やッた朝日影、御代も御國も久方の、此日の本の慣らはしの、歌を種なる謠ひ物。天地を動かし鬼神を感ぜしめやかに、妹脊も猛き武士も、心やはらか饅頭や。菓子に火繩に番付けと、賣る聲にまで節籠もる、竹の紋つく道行きの、本を召せ〳〵目關笠。笠も預かる預けて御座れ。紅の絆け紐淺黄紐え。繁昌〳〵。イヤ此所繁昌毛氈敷島の、其難波津の冬籠り。今を春べの顔見世に、日もなが事の御退屈。はや今日のお暇と、散らし太皷の下とゞろき、明日はどうから唐錦、彩どる空は夕陽の、山は夕の雲の帶。腰の周の御用心。推すまい〳〵。おすまい日の入りくる人や歸るさや。花山の幕か袖續く、貴賤群聚は冬ながら、心ぞ彌生となりにける。(一)』中に家名も君が名も、世上に高き天滿屋の、お島と言ひて彼の里に、お初が跡繼ぎ隱れなし。此比あかしの貞と言ふ、馴染の客に揚げられ、今日は南へ連れて出づる。いづくはあれど曾根崎の、緣の芝居初樣も、定めし佛金色の、身あがりと聞く外題に引かれ、終日見物慰みて、芝居果つれば繋がせし、屋形に皆々乘り出だす。提重開き太皷ども、「なんと島樣。今日のさんろの道行きは、本で語ると直に聞くとは又格別。大盡樣のお慰み、舟の着くま

●上の卷
(一)戌の顔見世　酉の年も過ぎ、次ぎの戌の年の顔見世となッたとの義。顔見世とは其一年間勤める俳優を座で披露する事。
○朝木戸をあけぼの　朝木戸を「開け」と掛けた
○曙深く提灯の影　きらきらと　朝早く木戸を開け、暗さに提灯の影を見めかす義。
○きらきらと初霜　「きらきら」の縁で見めく意で「初霜」と出し、白髮などの形容に霜といふ所から「翁」と出した。
○翁の面　芝居の式で客の來る前に祝ッて翁の舞ひを行ふ。
○餘念馴染み　餘念が「無」と掛け

た。
○よう御座やッた　朝日影「よう御出やッた」は芝居の出方が客へ對して言ふ挨拶。同時に朝日が美はしく出たとの義にも掛けた。
○歌を稱なる諸ひもの　芝居ももと和歌から出たとの義。
○鬼神を感ぜしめやかに　歌の德は天地を動かし、鬼神をも感ぜしめるとの眞名の古言に基いた句。「妹背も猛き武士も」と同斷で、同じく古今集の序の眞名の句に據ッた「感ぜしめ」と言ひ掛け、直に「しめやか」と掛けた。それ「妹背」を呼び出す配りで、男女しづかに語らふ趣きを示したもの。
○心やはらか饅頭　古今集の序眞名之の語に同じく歌の德を述べて、猛き武士の心をも和らげるとある、それから來て、武士の心も和らぐとの義とした。掛け方は「やはらか」から直ちに「やはらか饅頭」としたので、「やはらか饅頭」は別段變はッたものでもなく、唯ふツくりと柔く旨く出來た饅頭の義。此饅頭から芝居の賣り物に敍事が轉ずる。
○火繩　烟草を吸ふ用に昔は芝居で火繩を賣ッた。
○節こもる　次ぎの「竹」の縁。
○竹の紋つゝ　當時道行きの段物は大抵近松が作り、竹本義大夫が演じ、之を出版して目印に竹本の縁で竹の紋を附けた。
○日せき笠　召せの同學の縁。目せ

で道行きを所望〳〵」と哄げば、「ィャこりや能かろ。己も島の一弟子で、徐程節は覺えたが、追ッ付け島を引ッ摑み、國へ連れて行ッとたりも、國元は堅い所、こんな遊びは成りがたし。此船中をぶら〳〵と、唯行くも愚痴の至り。大坂の名殘に些と聽聞致したし。皆つけやや」と言ひければ、供の丁稚が懷中の、本取出してお島に渡し「東西〳〵」。此所がさんろ草刈りの道行き。師弟連れ節東西〳〵」。「おきに戀ひ路の〳〵またいろは舟。惚れてほの字の帆が見ゆる。ほの字の〳〵誰に〳〵ほの字のはつか花。小すげしらすげ、いはますげ、此一むらは刈り殘せ、妻ごめの夜の床にせん。蝋の虫と諸共に、刈り取る鎌の鎖くも、聲きり〳〵す蟲。牛のくらにも音を泣きて、歸る家路を松虫や。さらば笹原笹蟹の、秋に染め糸繰り出だし、五百機立てし機織りや、其藤袴破るなと、泣くかいばらのつるさきに、野飼ひの駒の優しくも、古郷の風の北に嘶へて嘶けば、越路の雪に古郷の、空を慕ひて泣く犬の、べうのゆもとは那とかや。いかに言はんや久方の、天津雲井をあまさがり、賤の仕業はいつ君が、書にかくならで思ひきや、見しや聞きしや兎ばかりに、草も刈り兼ね忍び兼ね、涙をうけて硏ぐ鎌の、砥石も心碎けとや。夢にも斯くとしら玉の、玉世の姫は胎内の、未見ぬ子の別れぞと、つれなき母に誘はれ、行く道筋は多けれど、笛に誘はれ妻戀ふる、牡鹿の、その〻法の導き是なれや。互に夫と道芝の、縋るばかりの戀ひ草も、芽は繁りそふ母子草、千草八千草思ひ草。恐し鬼のしこ草に、隔つる中の垣根草。力草なく泣きかはす、心ぞ思ひ遣られたる。草ばし刈るな笛を吹け。野路に雨人が悔やみ草。毒の草をも身の上と、知らぬ手元の暗さには、蠹蠹草を思ひ出す。思ひ出で

ずや有りし夜の、亂あひにし枕には、桂草をぞ思ひ出す。彼のほの〳〵のほのぐらき、黃昏早く寢し時は、涉草を思ひ出し、人目思はで肌觸れて、起きつ轉びつさざめして、相撲取草を思ひ出す。通路遠き獨居の、玢女が閨の寂しさは、茶引き草をも思ひ出し、心細しや糸薄。えい〳〵〳〵風かと聞けば山の下には嵐吹く、嵐吹くさりとては嵐吹く。山をはなれて風と成り、風も昔に吹き歸れ」。(二)『丈編に、花色の羽織、岩荷の丸の紋付けて、編笠着たる男めが、道頓堀を乘り出すから、此舟に目を放さず、跡へ下れば走り付き、先へ拔ければ立留まり、付けて廻るは合點いかず。ありや〳〵又彼處に立ッたるは、喧嘩仕掛ける體と見た。獸ッて居るはひけた事。揚がッて一つ詰め開かん」と、脇指押取り出でんとすれば、島引き留め、「ハヽはでな人樣ぢや。私等が樣な者が乘ッた舟は、目に立つゆゑ、それに限らず皆見さんす。なまなか咎めて一本かたげ恥かこより、ハヽ彼方から見るなら、此方から も見て、鷹揚にして居さんせ」と、言へばせも更に聞き入れず、駈け上がれば續いて揚がり、見ればいよ〳〵情夫の男。「これ市藏」と、言はんとせしが目はじきして、「コレ申し此方は他國のお衆ぢやぞ。所の衆なら粹であろ。何を言ひ懸けさあんしよと、言ひ分けしてくだんすな。何方の爲にも惡いぞ」と、心を揉むこそ道理なれ。眞は肘は り雛面作り「是や編笠。五度や三度は堪へうが、何うした事に舟につき、女を乘せたる船中を、見るも大かた方圖が有る。それほど見たくば近く〳〵寄ッて見られに來た。ナヽ我存分に見けつかれ。見やうが惡いと兎さぬ」と、聲をなまッてりきみける。(三)』市

き笠は外行などに顔を覆すための編み笠で、元祿時代に流行した。
○紅のくけ紐淺黄紐え　共に笠の紐。「え」は節を付けて引ッ張り言ふ時に殘る音。
○繁昌毛氈　半疊毛氈と通はせた。半疊は此頃も芝居の語。疊一疊の半分だけの席。毛氈を「敷き」とも掛けた。
○難波津の冬ごもり　「敷き島」の縁で「難波津」と地名で承けた。顔見世は冬の觀物ゆゑ「冬ごもり」と出した。一體の句は應神帝の御宇に來朝した王仁の歌、「難波津に咲くや此花冬ごもり、今を春べと咲くや此花」から來た、それ故に次ぎの句に「今を春ゝ」と出した。
○今を春ゝの顔見世に　謙解前條參考。冬ではあるが樂しみ見る故、春のやうな心がするとの意。二三行の末に之を承けて「冬ながら心で彌生ひ」と出してある。
○日もなが事の御退屈　前の「春」を承けて日永と出した。「なが事」は「長くある事」の義。一轉して「長らくの御退屈」の意に移る。即ち芝居が「はね」に爲り、客へ挨拶を行ふ意。
○散らし太鼓の下とどろき　客を出す時打つ太鼓は櫓の下まで遠く響くとの意。
○明日はとうから　唐にしき「とうから」は疾うからの義、朝早くから見物に來るとの義。「とうから」の「から」から「唐にしき」を呼び出す。

郎右衛門も差當る意趣は無けれど、當分の妬ましさばかりなれば、口論しては如何ぞと、「イヤ申し別にお腹の立つ事とも存ぜず、我らも下地淨るり好き、折々警古仕るが、此さんろの道行きは、戀を含んだ節付けなるに、只今お嶋樣とやら、遊ばした淨るりの、節は少しも變らねども、情を御存じない故か、誠の心少うて、御眞實の無い故か、如何にしても道行きが、浮氣に聞こえて、底意に戀ひがござらぬ」と、片眼でお島を睨にける。(四)』　男あざわらひ、「サア吐すまい〳〵。島が淨るり能かれ惡しかれ、己が冷えにも熱氣にもなる事か。何うでも外に樣子が有らう。但し又己が言ふ、戀ひを含んだ淨るりの、語り樣を知ッたらば、只今爰で語ッて見よ。節が違ふと擲ち据ゑるが、なんと語らうか」。「何がさて御所望ならば語らいでは。則ちさんろの四段目、檢非違使が鹿島の事ふれ。島樣とッくとお聽きなされ。是やこなたへ御免ならう。是はお島ではござらぬ。お鹿島大明神より罷り出た、事ふれでござりや申す。惚じておかしまと申すには、上の客が卅三人、中の客が卅三人。拙者が樣な見る影もない、粕客がたッた一人。正月七日神前に於いて、おやおッかない誓紙を書く。其誓紙の文言に、斯樣に申し交はすからは、未來までも變はるまい、虚をつくまい隱すまい、勤の間外に深い深を持つまいと、申す起請を取交はすから、僞りは申さないと存じ、盡くすほどにけるほどに、只今は向臑から、でッかちない光物が飛んで出で、巾着の扉が八文字に開け、内の首尾が八角にわれ、神馬のお馬の牽頭にも、見捨てられ大恥をかいてござある。されどもおか島大明神。氏子を不便とも思し召さず、或時は、余國の大じんぐうに、身請の談合を仕かけ、或は紋日をかづかせ、ひき日の立て前跡から脱る禿頭、親里の合力なんどと申して、厄介しッ皆むくりこくりの上手ごかしに、むくり取られたとの御詫宣。無上しんれいしんたう加持。是是が眞實戀ひのある淨るり。島樣ようお聞きなされい」と、他ながらこそ恨みけれ。(五)』　男は二人が目色を見て、はて扨變ッた文句ぢやの。なんと、余國の大盡に、身請の談合とは珍しい事ふれ。これお島。和女は今のが面白からうが、此貞は耳に立つ。迚も所望しかかるからは、まあ一節所望致さう。お島とお身とが連節で、戀ひの籠もッた淨るりを、初段から切りまで、語り抜かせにや堪忍せぬ」と、ぎしみ廻れば、お島一人が氣を苦しみ、「コレ申し此方樣ほどの粹樣が、是は又氣のとほらぬ。彼人と私と譯あるやうに見さんしたさうなれど、みぢん左樣な事ではない。腹立てさんすを面白がッて、法界恪氣に言はんすわいの。おとなしうして、サア舟に乘らんせ」と、手を取れども聞き入れず、「いや〳〵。おッしやれな〳〵。他國から登ッて此大坂で、よねづかをも握る者が、通例の男と思ふか。何うでも斯うもで聞かにや置かぬ。語らせねや置かぬ」と、堪忍せぬ顔つきに、お島は難儀手に汗握り、「コレ爰な人も誰れか知らぬが余程な、勤する身が客に引かれ、芝居へ往ッたが珍しいか。舟に乘るが不思議なか。淨るりは其許より、私が能う覺えてゐる。晩に此方に見世へおぢや。能う合點のいくやうに、敎へて遣らう」と世話やけども、市郎右衛門も言ひ掛かり、「いや〳〵此方に習はいでも、此方の胸中にある淨るりは、此鼻が覺えて居る。お聽きやれ」と、扇を拍ッて、「扨もますらが此目の玉、ぐッと脱け出で、花人親王の、蜆川の御所の體、とッくと見屆候へば、まのの長者同前の、大銀遣ひに思はれて、金銀小袖を仕て貰

○彩る空「からにしき」の縁。
○山はゆふべの雲のおび　雲が夕方山の腰の邊に出たのを一帶の帶びよ見立てた。此句と前の句とは夕景の形容で、即ち芝居打ち出しの刻限である。
○腰のまはりの御の用心　前の句「帶び」の縁で「腰」と出した。芝居打ち出しの時の雜沓の形容で、掏摸などよ腰の佩び物を奪はれまいとの用心。
○推すまい、おすまい日の　雜沓して居る故。無暗に押しては爲らぬとの意。「おすまい」を重ね用ゐた、其下の「おすまい」の「まい」から「毎日」と掛けた。
(二)君が名　「君」は遊君の敬稱。
○堪げ重　提げ重

ひ、深い男を振り捨て登り詰めて揚句には、姫君を請出すとて、料理献立て表換へ、眞最中と見て候。兩人が中へ某が毒氣を吹き込み、男と女と不和になし、同士戰の口舌をさせば、姫君は見放され、はし〴〵のくら屋へ下り、後には濱の納屋の影、一本立ちにて候」と、語りけるこそ不思議なれ。「なんと此節に違ひがあるか」と言ひければ、「よい推量。追ッ付けお嶋を請けて見せう。なんぼ急いても張り合ふても、金で語る淨るりは、些と喉に詰らうぞ。こりや是見よ」と、お嶋にしッかと抱き付き、「なんと腹が立つか」と言ば、又扇の拍子を拍ッて、「あら不思議や。ますらが行ふ魔法の形。天上に現れ出で、異形は手を伸べ撿非違使がまッかうを、破れて退け」とはたと打つ。「ハア拍子に掛かッて麁忽〳〵」。「ヤア おのれ擲ッたぞよ。最う聞かぬ」と立ち上るを、嶋は縋ッて「なう情なや。コレ私が詫事ぢや。エ、供の衆氣が利かぬ。船頭衆賴みます。舟に乘せて下さんせ」と、泣き叫べば人々は、「折りも惡し塲も惡し。是非御堪忍〳〵」と、むたいに舟に抱き乘せ、櫂を早めて漕ぎ出す。猶船中より聲をあげ、「銀も持たいで言はれざる、戀ひの意氣地の淨るりだて、身が前では措いてくれ。おけ〳〵おけや」と、舟端敲き手を敲き、笑ふて舟は上りけり。市郎右衛門邊を見廻し、「ハア、我ながらしどもなや。氣が違ふたか南無三寶。一期と思ふ女房を、我物顔の見憎さに、苛つは戀ひの癖なれども、思へば口惜し斯うせいでも、三匁では彼頬を、うッけた事と思ひやせん。嶋が心の耻づかしや。氣遣かけし可愛や」と、見送る方もほの〴〵と、明石の客の乘る舟に、お嶋も隱れ嶋隱れ、蜆川へと……(六)』

中の巻

○沖に戀ひ路の云云　「風しむかしよ吹きかへれ」まで、此一曲は元祿時代流行の情詩であッた。戀ひに窶れて男女相想ふ情を叙べたもの。さして上乘の調べでもないが、流麗ではある。甚しい綾も、困難な掛りも無いと思はれた故、解釋をば省いた。
(三)はでな人さまぢや　「はで」は華美の義。花花しく血氣にはやるとの意。
○一本かたげ　「かたげ」は「擔げ」の義。刀など佩びひけらかしての義。
○恥かこ　恥搔かうの約。
(四)底意に戀ひがござらぬ　暗に阿島が客と同乘した

こがれ行く。其名は言はじ名を問へば、父は長柄の田地持ち。市郎右衛門が弟、善二郎なれど惡性者。人の意見も馬の耳、余所吹く風のぶう〳〵にて、夜歩き日歩きとぼしたて、歸れば小宿で衣裳を仕換へ、稼ぐ體をば親兄に、これみやの前大根を、荷ふて家路に戻りける。斯かる所へ下男つか〳〵と寄ッて棒鼻取り、「申し善樣。これお見忘れなされたか。毛馬屋の七兵衛。エ、お前は譯の惡い。術に依ッて待てならば、待つまいものでも無けれども、幾際か〳〵今日遣らう明日遣らう。假初ながら五百目余り、五匁も埒明かず、夫に夕も隣までお出でなされ、此方へは音信なし。あんまりな爲され樣。今日は親御樣へ直に申して、取ッて來いと旦那が申し付けました。斷りました」と入る所を引き留めて、「こりや聞えぬ。日比の己ぢや知らぬかい。五百目や壹貫目、今でも遣るは合點なれど、親父が手前をあぢにして、末永う出やう爲、少の銀を延引した。そちが差配で二三日何卒賴む。ヤアいつやらの紙花も、思ひの外に遲はり、面目ない〳〵。これも拂ひと一度に遣ろ。今改めてこりやばッとうちなほすわ」と、捻ぢて出だせし鼻紙の、しらごかしこそ笑止なれ。所へ駕籠の長介來り、「私が請合の菱屋の花代、津の國屋の料理代、合三百四十五匁六分。扨も〳〵せがまれます。其上お前は當てもない、花車や娘仲居にまで、仕着せをして取らせうと約束ばかりでまゐらぬ故。私がちゆうでも取ッたかと、毎日毎夜の使ひ立て。内はじやうぢゆう師走にて、何共迷惑仕る。今日は是非に請取りませう。それに成らずは親旦那へ、訴訟申す」といふ所へ、「五十余の女房綿帽子にて顔包み、「編笠嶋の笹屋の嚊でござんする。御人體とも覺えませぬ。我等が僅の商ひの元手も利くひの月を

ぞる、泥鰌汁のしゆらい代」。取り切る間は何所までも、着き纏はるゝ藤の棚、谷町からと言ふもあり、九間の駕夫が揚げ錢の、殘りも今日はすッきりと、取って九兩二分の銀。道頓堀の水茶屋の、或は温飩けんどんの、そばで聞くさへ笑止なり○(一)』善次郎もてあつかひ、「尤掛けは負ふたれども、節季でも有る事か、つきともない今日に限り、此樣にせがむのは。ふゝ合點ぢや〳〵。兄市郎右衛門の空氣者。天滿屋のお嶋にぐわらりと片鼻うちあけて、親父の譏嫌散々にて、半勘當の身となッた。夫を聞いて我までを、氣遣ふと見えたが、兄とは格別こんな銀。譯悪うする男でない。親父に言ふなら言ふて見や。一文にも成るまいが。遲うて此月一ぱいに、濟まそといふから虚はない。おうそう國嶋北南の、長柄で男と言はれたる、善次郎ぢやがなんと見た。僅貳百目內外で、捨てる善次が名ではない。親父に言ふて此善次を、勘當させて腹いるか。但は自然に銀取るか、勝手次第」と投げ出だし、立派に言へば掛け乞ひ共、「いかなれ虚は長柄川、砂にはよもや成るまいぞ」と、幾日〳〵の日切りして、皆々宿所に歸りける○(二)』親介右衛門は六十余、頭に積もるお霜月。講中お茶所の冥加錢、殘らず爰に持ち集まり、お勤め過ぐれば表に出で介右衛門言ひけるは、「何も講中有り難いと思召せ。毎年のお霜月、懶怠もなう上ぐる事。自力では叶ず、御恩德のお影なり。扨去年の通り此銀を、兄市郎右衛門に持たせて、京へ遣る筈なるが在所で沙汰も聞かれつらん。新地狂ひに身體あげ、方々の借錢堤際の田地をも、七百目の質に入れ、四貫めの手形したと聞く。斯うした性になるからは、一錢も持たされず、あの弟めは一日でも居らねば年貢の埒明かず、身共が登りませう」と言へば

弟は律義な顔つくり、「太義ながらさうなされ。ア、何れも。性の能い兄貴にて、年寄られて親父の苦勞でござる」と言ひければ、「夫は興がる今聞いた」と、頭を振り顔を蹙めける○(三)』介右衛門重ねて、「白銀五百目貳包。小判廿五兩壹歩合はせて四十切。改めて預ッた」と數讀揃へ懐中より、掛硯の鍵出し、引き出し開けて金銀取り入れ、錠おろし鍵を袋に入れにける。時に表へ駕の者「頼みませう」と言ひければ、「どれい」と言ふて妹のお吉より、市郎右衛門樣へ急な使ひに參ッたり。此文進せて下されませ」と高聲に言ひければ、「ア、爰な人高い聲さッしやんな。兄樣は昨夜から未歸られず。私が預り届けませう」。「お歸り次第頼みますると」と、言ひ捨てゝこそ歸りけれ。介右衛門聞き付けて、「お吉今のはなんぢや」。「イヤなんでも御座りませぬ」。「なんでも無いとは、己等までが一つになッて、親の目を抜き居るか」と、文捻ぢたくッて、「是何も。田地賣らせた女めが、市樣まわる身よりとは、はて扨々あたしたいるい。皆の手前も面目ない。待て己どうする」と、鼻紙袋へ文をも入れ、ぐる〳〵捲き、小撚より、細きお嶋と一命の、終る端とぞなりにける。講中も挨拶なく「男の子は何處もそれ、先づお暇申しませう。なんと太郎兵衛、若い衆が妓女〳〵と言ふほどに、何うした事と思ふたが、田地を賣ッて買ふ故に、それで遊女を米と書ふ。今講釋が聞こえた」と、堅い輕口言ふて歸れば、介右衛門も苦笑ひ、奥の間にこそ入りにけれ○(四)』善次郎は只一人、外の事は耳にも入らず、一心不亂に掛け硯の、銀に性根を奪はれて、徐りと立ッて錠前を、押して見引いて見捻ぢて見て、奥を覗き表を見、箱口取ッてもぢ上ぐれば、懐

○たぐりや申す　圖子を浮かせて言ふ故のもぢり。ムり申す」の義。

○忽じて　此以後すべて鹿島に托して、茶街の事を言ふ。其言語に滑稽の意を含む處に「おやおッかない」を承け、何とも付かぬ輕妙な語尾の句を用ゐ、口合ひきとりの綾をなす。

○向かふ圖からでッかちない物が　のに始み半分當て付けた語。

(五)鹿島の事ぶれ　常陸國鹿島明神で昔し人の運命の吉凶の神託が有り、それを承ッて廣く世に觸れ歩いた故事が有る、之を鹿島の事ぶれ」といふ。今此段ではそれに準へて暗に阿島の身の上に當て付ける。意迫ちすして情は深し、近松得意の妙致を顯はす。

○是やこなたへ御免なされう　鹿島の事ぶれが事ぶれを行ふ時、まづ言ふ文句、それを此所では其儘用ゐた。

○是は阿島ではムらぬ、御鹿島大明神より　阿島、御鹿島共に似寄りの「島」といふ島が有る所で、それとなく當て付ける意がよく顯れた。

ふてどうど打ち落とし、我とおびえて飛び上がり、種々樣々に盜み樣、工夫することぞ恐しき。「ヤア忝い。鍵の入ッたる鼻紙入れ、親仁が忘れ置かれたり」。引き解き鍵取り出し、まんまと明けて、鍵は元の紙入れに、初の如く納め置き、掛け硯の引き出し明け、二包の白銀を下懷へ押し込んで、小判は頭巾にぐわらりと入れ、裸壹歩を手に握れば、奥より親の聲として、「善次〳〵」と呼び懸くる、「あい」と言へども此壹歩。置き所に動轉して、口へ入れたり目へ入れたり、狼狽廻ッて釜の上なる、御酒德利へざら〳〵と移し入れ、親の前へぞ出でにける。(五)』 斯る所に市郎右衛門、内へ歸れど敷居高く、心措かるゝ家來まで、何も野畑へ出でたれば、誰に首尾問ふ便もなく、上がり口にとほんとして、寒さは寒し酒一つと、膳棚搜せど酒もなし、「ヤア荒神の御酒がある。冷でも一つ戴いて、胸のもや〳〵晴らさん」と、茶碗引き寄せつぎければ、「こりやどうぢや。酒の中より壹歩が湧く。寶の泉か有り難い」と、皆打ち明けて、「是は夢か現か。三寶荒神の御利生か、死したる母の御授けか」と、嬉しいやら恐いやら、分別に能ねども、「久々で金氣に逢ふた。先めでたう壹歩のうは汁吸ひませう」と、戴き〳〵ぐッと飲み、壹歩を紙に押し包み、懷に納ける。黃金は人の身を富ます、寶なれども此身には、命を刻む刄となる、善惡こそは哀れなれ。(六)』 所へ善次ひよッと出で、「ヤア兄者人お歸りか。推參な御意見なれども、お身持がさうでない。親父も譏嫌さん〴〵の上、蜆川の何處からやら、惡い所へ文が來て、親父が見付け、それそこな鼻紙袋に入れ置かれた。我らは南の御堂へ、親父の使ひに參るなり。跡で首尾ようなされ」と言へば、市郎右衛門は肝潰し、是はと呆れ居る中に、善次は密と後手

此邊も滑稽な文句。「でッかちない」は今も多少一二の地方言として殘る「でかばちない」の原語で、即ち「でッかい」の義、巨大の意。
○八文字　遊君の歩行の蹈み方、足の開き方の義から轉用した。「八角」は「八文字」と似た音の口合ひ。此邊市左衛門自分が阿島に溺れて首尾を惡るくし、落魄したとの寓意。
○大じんぐう　「大盡」、「大神宮」の雙方に掛けた。意味は今阿島を伴ふ相手の大盡客よ當たる。
○むくりこくり　「蒙古來」の音の轉。元冠以來此語流行し、すべてあくどく殘酷な、用捨せぬなどの義に用ゐ做した。
○無上しんれいしんたう加持　無上神靈神道加持の義。
(六)ざしみ　「ざしむ」の轉訛。「ざしる」義。ざつざつ角の立つ意。
○よねづかをも握るもの　「よねづか」は元米柄で、即ち杵の義。此所では「よね」即ち遊女の義にし、「よねづかを握る」で遊女あそびを爲るとの義にした。
○ますら　「ますらを(壯士)」の略。
○まのの長者　むかしの長者の名。
○扨もますら…一本だちにて候ふ　此一曲も阿島へ當てた唄。出來はわるい。
○撿非違使がまッかう　撿非違使が眞向の義。
○しどもなや　「しどけなや」の轉。埒も無いとの義。

に、御酒德利を隱し取り、表に出でて押し戴き、一さんに駈け出でし、心の内こそ可笑しけれ。(七)』 斯くとも知ず市郎右衛門、常々不和なる弟の、流石恩愛なればこそ、能くも知らせて有りけると、鼻紙袋の紐を解き、文を搜す所へ、親つか〳〵と出後に立ッて、「それは何する市郎右衛門」。「はッと驚き飛び退り、差し俯伏いてぞ居たりける。介右衛門聲をあげ、「己は天魔が魅れたか。佛罰が當たッたか。余の惡性は若い者、有らう事とも言はれうが、あれ掛硯の口明いたり。鍵を入れたる鼻紙袋、明けて我に見付けられ、仰轉するは盜人な。身が銀ならば親の慈悲、沙汰なしにもして遣らう。身の油にて講中が、御開山へ奉る、お茶所の銀ぢや盜人め。一文一字違ふても、己が生けて置かれうか。我等一人は緣者の證據。それ〳〵講中組中」と、呼ばはる聲に向ひ隣、一在所が駈け集り、どざまの詮議ぞ是非もなき。(八)』 介右衛門大きにせき、「ヤア何れもの目の前で、掛け硯を開かん」と、引きだし見れども金銀は、一錢とても無かりけり。介右衛門地團太蹈み、涙を流いて、「エ、口惜しや。何代か、此家にこごとの有ッた例もなし。歳六十に及んで、一在所と言ひ講中の、大口小口動する、己ばかりが恥と思ふか。盜人を捕らへて見れば我子なり。此手間で是ほどの、能い事を仕たならば、親の身ではどれほどの、自慢で有らうと思ふぞやれ。成人の子を持てば、親の心安めぞと、人も言ふに己には、寢た間も心休まらず、揚げ句に斯かる大事を仕出す、内で斯うした心からは、外で何かな仕置きつらん。誰に似て此根性、憎いが余ッて不便なり。不便の余りの憎さや」と、地そらを叩いて無念泣き。實に尤に憐なり。(九)』 市郎右衛門顏をもたげ、「鼻紙入れは明けたれども、金銀には手

●中の巻
（一）善二郎なれど　悪性者　名は善二郎と云ふが性質は悪であるとの形容。
○とぼしたて　女狂ひする事の隠語。
○これみやの前　是「見や」と「宮」とを掛けた。
○あぢにして　首尾うまく爲して。
○差配　世話。
○紙花　祇儀の雛頭。
○ばッと打ち直す　さらりと金を出し直す。
○花代　玉代。
○じやうぢゆう　常住の義。始終。
○節季　節季と同じことで。
○元手も利くひの…しゆらい代　元手も利の食ふ金での商賣であるのに、倒されては迷惑する。泥鰌汁の屋禮代を拂ッて〜れろとの義。利が重むのを「なをる」といふ。「それを泥鰌の縁にした。「集禮代」は元祿時代の通用語。今いふ代金と同じ義。
○九間　九軒町の事。九軒町は遊女街。
○とッて九兩二分の銀　取ッて「呉れう」と掛けた
○けんどんのそば　「けんどん」は蕎麥の一種。其縁で「そば（蕎麥＝傍）」に利たせた。
（二）つきも無い　附きも無い。
○うそは長柄川、砂には　うそは「無」を掛け、長柄川。砂床を縁に「砂」を出した。
（三）身體あげ　身の上をあがッたりにし。
（四）あたしたたるい　「あた」は國歌詞、忌忌しさを示

をさゝず、盜人は外に有らん。心を靜めて御穿鑿」と、泣く〳〵言へば飛び掛かり、喰ひ付きて「エ、腹の立つ。盜をする子を持ッて、なんと心が靜められうぞ。親の心を知らぬか」と、懷中捜せば以前の壹歩、「是を見よ」と打ちつけて、大聲あげてわッと泣き、「假令千兩萬兩でも、銀惜しいとは思はぬが、廢る己が名が惜しい。近比面目無けれども、今ならでは申さぬが、元我々が實子でなし、大坂のさる人の、四十二の二つ子にて、産屋より貰ひ守り育て、後に弟が出來たれども、夫には替へず可愛さに、育てるに從ひ性惡く、勘當せんと思ひしも、五度三度には限らねども、若や己が寢心に、養子と言ふ事知るならば、眞の親なら斯うあるまいと、我々夫婦を疎みやせんと、義理もあり不便もあり、殊に母が最期にも、弟より彼兄を、繼母に掛けて呉るなと、言ふて死んだは小耳にも、定めて覺えて居らうぞや。仁義も慾も身の上も、本子には忘るるに、其本子より己をば、大切にせし甲斐もなく、湯を沸して水いらずの、親の内で盜をする、是は如何なる性根ぞ」と、聲をあげて泣きけれども、子は覺えなき事ながら、言ひ譯も無きしだらとなる。親も道理子も道理。心に諂ふる哀さの、兩人の涙堰きあへず「兎角言ふも耻の耻。勘當ぢや。出て覺えよ」と押ッ取ッて、さん〴〵に打ちければ、杖は中よりふッつと折るる。飛び掛かッて踏む所を、妹下人縋り付き、泣く〳〵奥へぞ入りにける。（一〇）』　市郎右衛門涙をはら〳〵と流し、「何にも申す事は無し。親ならぬ親、子ならぬ子、眞實の親子にも勝ッたる御恩傷、いつか報じ申すべき。疾くにも斯樣に承はらば、如何やうとも孝行の、盡くしやうも有るべきに、口惜しさよ後悔さよ。產みの親は見ず知らず、養ひ親には不孝を爲し、此市郎右衛門めは、親の罰が當たッたり。切て心の念願にて、死して再度親子と生まれ、今の御恩を報じたき其しるし、此杖の片折れを未來の形見」と推し戴き、「いかに講中組中も今生の暇乞ひ。賴み申すは親の事。孝行盡くせと妹に傳へてたべ。死するとあらば御回向も、賴み申す」と言ひ置きも、涙ながら余所ながら、見置きながらのはしばしら。朽ち行く身こそ……（一一）』

下の巻

哀なり。逢ひ初めし一夜を懸ひの水上に、三夜四夜五夜十夜百夜。通ひ車の蜆川。璽はる瀨枕沈む淵。思ひ二つの中町や。更けて苦しむ待つ宵に、明くる詑しき別れ路の、憂きを續木の梅田橋。うめてさまぜと色茶屋の、色の出花の里ぞとは、さめぬ花香を汲みてしれ。實にや士農工商の、品數々の其中に、情で賣れば情で買ふ、歌人の評判つけ置きし、能き衣着たる商人も、誠を守る天滿屋の、亭主は外より歸りしが、「なんと女子共は仕舞ふたか。嶋は今宵はどうした」と言へば「嶋樣は今宵は長柄の市樣とて、馴染のお客が久しぶりで、近江屋まで見えまして、夫で嶋樣も近江屋へ、送りましたに」と言ひければ、「扨こそ〳〵。さう有らう。今宵丸屋のうたひ講に往ッたれば、町衆の話に、長柄の市郎右衛門と言ふ人、報恩講の銀を盜み、親の勘當うけて、白晝に在所を追ひ拂はれた。是も此方の嶋ゆゑぢやと、女夫池で聞いて來て、知らぬかと言はるる故、とッかはして戻ッた。前のおはつにくゝり果てた、家名の出るも迷惑。客を倒すがみめでは無い。商ひせいでも大事ない。それ早う呼び

す語。「舌たるい」は生ぬいた義。
(七)さうでない　今いふ「そでない」の原語。然るべくないの義。
(九)こごと　小言の義。此時代では批難の意。
○地そら　地空の義。地の面の義。
●下の卷
(一)うめて、さませ、色茶屋、出花、さめぬ、花香　共に皆茶の縁語。
○うたひ講　謠ひ講とて謠曲の會を素人が行ッたのが此頃に流行した。
○とッかはして　慌てて。「とッかは」は慌てる體の形容。
○みめ　美目の義。名譽。
(二)びらくら　件件の義。ここでは借財の諸口の義。
○さいさいごあんして　「さいさい」は再再の義。しげしげの意。「ごあんして」は「御座んして」の訛り。廓の語。すべて、しげしげ御出でなさッての意。
(三)是いて　是行ッての略。「是」は語びかける語。他の宅へ行ッてとの義。

に遣れ」と、喚き散らせば女房も、「ェ、皆も氣が付かぬ。こちに言はるゝ事かいの。又淨るりに乘しやんなや。早う連れて戻りやいの」と、女心の忙々し。(一)』譜代の下女は門より入り、「市様はお馴染ゆゑ、遣るは私が遣りましたが、勘當ともふんどうとも、知ッたらなんの遣りませう。たッた今も近江屋へ往て見たれば、嶋様はきつう醉ふて居さんして、何を言ふても譯がない。そんな事なら戻しませう。お初様のかの夜さり、二階の梯子を踏みはづし、己が胴骨踏まんした、形見の痛さが漸と、此頃止んだに勿體なや、又踏まれてはならぬぞ」と、駈け出してこそ走りけれ。斯くて弟の善次郎は兄に負せて銀盗み、所々のびらくらを仕舞はんと、此所へ來りしが、お嶋は酒に醉ひくづをれ、ひよろり〳〵となまになり、近江屋出でて濱筋や、今宵一つに三途川、越えんと思ひ詰めたれば、心にはたと戸をたつる、風呂屋の前にて善次に逢ふ。ひらりと躱すをちらりと見て、「コレ善次様〳〵。手が悪い」と、よろ〳〵と縋り付いて、「此方さんな聞こえやせんぞえ。前はさい〳〵ごあんして、何が恐うて逃げさんす。コレ兄嫁の嶋ぢやいな。たッた今まで近江屋で、兄さんと逢ふて居て、今日の様子を聞きやした。大事のおれが男が、勘當請けてござんしたりや。胸が痛うて些との酒で舌が廻らぬ。此方さんは弟の身で、なけりや譏嫌が能さゝうな。禮言ふ事がある。ござんせ」と、胸倉取ッて引いて行く。善次は「何れも頼みます。頼みまする」と仰向にそり、引きずらるれば下女男、「是は嶋様なんぞいの。サア内ぢや這入らんせ」と無理無體に押し入るれば、上り口にひよろ〳〵と、片身を頓と横に投げ、「水給や」とて伏しにける。(二)』夜こそ更くれど一町の、行燈仕舞へば天滿屋の、締

めたる門口夜闇に、善次は嶋が心根の、恐ろしければ格子の影、身を引きそばめ立ち聞きす。市郎右衛門は近江屋の、人目に急かれ云々と、死際の契約せず、便もがなと門に立ち、弟ありとも知らざれば、弟は兄があるとも知らず、傾く月に東向き暗き、格子を隔てにて、内の様をぞ聞きにける。亭主夫婦これを見て、「嶋はいかう醉ふたさうな。是いて休みや。お嶋〳〵」と茶を吸んで、「一つ呑や」と言ひければ、「あい〳〵。是や忝い」と戴きて、「眞に誠にお主たる身が勿體ない。大事に掛けてくださんす。是を思へば勤めの身が、心中などで死ぬるのは、お主へ對してぶしつけ、損を掛けるは身の罪科、さりながら死だ者が生き返り、其いり譯を言ふにこそ。命に替へる者はない。夫を捨てゝ身を果たすは、言ふに言はれぬ詰まッた事。憎まう者でもござんせぬ。斯う言ふて、私が心中する氣は無けれども、爰にも前の初様に、手ごりの事も有る故に、こりや前書の話ぞや。私が馴染の市様の勘當は、弟御の無實の難を身にかづき、所の住まひも爲らぬとよ。これはなんたる胴慾ぞや。私等が今の此勤め。伊達にも華美にも身の爲でも、一日片時なる事か。親兄弟のいとしさゆゑ、面白からぬ勤めをも、つらいと一度言ひ遣らぬは、親兄に苦を掛けまいため。斯ほど大事の親里の、貧苦を助けしお主なれば、御恩は更に忘れねども、生き身は死身。殊に又此比酒に當てらるる。若頓死でも致しなば、下された茶が末期の水」と、管まく體に紛ぎらかし、わッとばかりに堪へ兼ね、しやくり上げたる泣き上戸と、人目に見せし下心。市郎右衛門は忍び泣き、弟は身の悪顧みて、耻ぢて悲しむ悔やみ泣き。心は三つに替はれども、同じ涙に曇る月。時雨の暗夜の本意なさよ。(三)』人影見て

や町内の、犬吠え渡れば兄弟は、見付けられては悪かりなんと、東西へぞ逃げ去りける。亭主夫婦は氣も付かず、「管を巻かずと早う寝や。皆々仕舞へ」と言ひければ、「あい」と答へて箱梯子。上りかかッて「旦那様、内儀様。みんなさらばやゝゝゝ」と、言ひ捨て二階に上りける。下女は見上げて「ハテ小ぎびの悪い聲つきぢや。長兵衛門も能う締めや」。有明の消えぬ様に、油もたんと指いてたも。消えてもこちは火は打たぬ。己には火打ちが禁物ぢや。打音聞いてもぞッとする」と、證きてこそ臥しにけれ。稍鎮まれる小夜格子、市郎右衛門は立ち歸り、軒の下にてしはぶけば、お嶋は夫ぞと二階の窓。覗けど我が姿は見えじ、聲を立つべきやうもなく、柄つけの鏡差し出だし、星影映してひらめかし、爰に有るとぞ知らせける。夫も心得扇を抜き、聲立てられねば金物の、光に物を言はせては、招き合ひ〳〵、我と我身を抱き締めて、齒を喰ひ詰めて歎きける。深き思ひぞあおきなき。弟の善次郎嶋が詞に發起して、悪心を飜へし、兄の命を助けんと、爰彼處と尋ね歩き、元の格子に走り付き、兄は人ぞと立ち隠るれば、善次郎門を叩き、「長柄の市郎右衛門は、是には居られ申さぬか。近江屋にて尋ねば、はや歸られたと申さるる。御存じないか」と呼ばはりける。内よりは「喧しい夜更け廻つて、そんな人は知らぬ」と言へば、「南無三寶」と走り行く。斯くと心を語りなば、死で止みなん二つの命。隔て疑ふ因果と因果、定まる業ぞ力なき。「彼奴追ッ駈けて討ッて捨てん。いや〳〵見苦し。最期の邪魔」と心を鎮め小聲になり、「サア夜明も近づく、人立ちあり。一所と思へど詮方なし、我は在所の堤にて、最期の所は替はるとも、連れ立つ道は唯一筋。今より珠數を繰り初めて、一萬遍に終る時、夫が互の合ひ圖ぞや。追ッ付け待つ」と言ひければ、「合點しました。さりながら、同じ枕に死にたいなあ。心はついて往きやせう」。「オ、我とても其二階、顔を並べて死にたいなあ。心は跡に殘るぞ」と、憧れ出づる玉の緒の、互の目には見えねぞも、殘し置くのと連れ行くと、雨及に死する劉刀の、一刀の亂れ燒。亂れ心は……（四）」

（四）さらばやさらばや　告別の意。

○斯くと心を語りなば　弟が後悔しただけいと思ひ兩人の死が殘念に思はれる。曖昧を加へる無上の趣向。

❸血死期の道行

血死期の道行

死神の導く道や陽炎の、果敢なき虫も偶々は、朝の露に生き殘る。夫よりも猶あだくらべ。是を限りと百八の、數とる度に繰り盡くす、命二つを珠數二連。是が冥途の迎ひぞや。見送る軒と見返る野邊と、中に飛びかふ夜這星。行ッて歸らば言傳てん。出でて返らぬ魂の、憧れ添ふとは知らねども傍に夫の有る心。夫はお島を連れ立ちて、歩む心の伴連れは、目にちろ〳〵とまぼろしの、此は其人か實かと、抱き付けば仇し野や、風ぼう〳〵たる闇の戸に、「やれ市様は」「お島は」と、尋ぬる袖にふる涙、夜半の時雨となりにけり。（一）」是こそ曾根崎天神の、松と槻枯との連理の森。書き集めたる言の葉の、余所に聞きしも今は又、余所に嵐の身にぞ染む。お嶋も同じ我庵は、お初徳兵衛のそのあか月の、夢も破れてまだ間もないに、心中ずぐせの報の業か。夫のみならず親方や、親の苦勞と思ひは知れど、男死せて見て居られうか。女房先立て存生あらば、そりや犬猫も同じ事。同じ中にも鹿となり、鴛鴦と生まれて女夫池。生ける間もなく身を果たし、猶や藻屑に埋まんと、又一向の憂き涙、落ちて三途の川となる、男心もくれはてて、西か東か何處ぞと、月に向かへど我影の、映ら

（一）鹿となり、鴛鴦と生まれて　鹿、鴛鴦共に匹偶愛情の濃い故の引

用。
○あぢきなや云云　調律改まッて頓て悲しさ。文の至妙。

ざること不思議なれ。女も向かふ灯火の、壁にも窓にも障子にも、我影見えぬ怪しさよ。あぢきなや果敢なやな。實や人の物語りに、死する時節は人玉飛んで、其身の影の無きと聞く。「嘸やお島も」。「市様も」。かくぞ最期の近づくと、合ひ圖の珠數の念佛の、一萬遍も繰り詰めて、九千遍にぞ早なりぬ。心細くも便りなや。今千遍の命の内と、思へど我身は思はれず、先には如何いかにぞと、案じ衾はせる互の形、茫然とこそ現れけれ。夢か現か空蟬の、もぬけの玉とも知らばこそ。こは何としていつの間に、一所に死なん嬉しやと、縋れ取りつき絶り合ひ、誠の形影の人。歎けば歎き泣けば泣き、こひにせぐりの玉の緒の、己が思ひにたぐられて、一里の道は隔たれど、鏡に映す如くなり。(二)」月は白みてあかつきの、あれ明星も差登る。近づく最期一節に、一つ蓮と願へども、思へば〳〵我身の科、養子の親には疎まるゝ。實の親のありとても、親知らず子知らず。假令冥途で逢ふたりとも、何を證に誰をか見ん。悪業深き我身やと、聲をあげてぞ泣き居たる。お島が心の歎きには、一人の母の老いの世に、いつかお主が年明きて、切て一日片時なりとも、湯水取られて徃生せんと、是のみ一つの願ひなりしに、病で死するは是非もなし。いとほしや母様の、藥呑め灸せよ、身養生して勤めよと、大事にかけて下だされし、此體をば血に染めて、明日は堀江へ使ひたち、呼び寄せ母の目に見せば、死に入る様の歎きの顔、今見るやうで聞くやうで、思ひ過ごしの胸の中、五體の涙締め寄せて、手にも袖にもせき餘り、漲る滝に異ならず。爰にくゆるは吉原よ。あれにふすぼる梅田のはか。他の無常の煙を見るも、明日は我身も何處の雲、何處の煙と立ちのぼり、誰に此

骨拾はれん。冥土は六つの巷ぞや。迷はぬ案内彼の煙の、消えざる内に我々も、夫が臍指抜く形、嘱がまぼろし後れじと、用意の剃刀横たへて、「ヤア只今ぞ一足も、早かるな遅かるな。手に手を取らんと思へども、まだ死んで見ぬ死出の旅。連れだたうやら連れまいやら、逢はうやら逢ふまいやら、二度生きて生き顔を、見るは此世の限りかと、物をも言はず面影の、顔をしほ〳〵見合はせて、わッと消え入り泣き居たり。「ヤア後れるな忘れまい」。「南無阿彌陀佛」と喉笛に、がばと突きたて両手をかけて、くるりとえぐれば南方の、面影消えて無かりけり。無慘や二人はなから死に。男は女の姿を尋ね、女は「市様〳〵」と、のッつ返しつ苦みの、くらむ眼に手を伸べて、尋ね迷ふぞ不便なる。終に一そく切断の、經絡六脉絶えだえに、息の通ひ路ふッつと切れ、うんとばかりを此世の名殘。いざよふ月の朝霜と、一度に命は絶えてけり。弟善次は川端に、捨てし衣裳と書き置きを、拾ひ驚き駈け付けて、見れば疾なく事切れたり。「南無三寶」と歎けども、詮なし甲斐なし面目なし。切ては兄の報恩と、恥も骸も衣裳に包み、負ふて一先立ち退きける。扨こそ世上に此男、死んだ風説死なぬ沙汰。生死二枚の繪双紙に、懸ひ路の回向をうけにける。(三)」

（總評）　全體の文「出世瀧徳」ほどに鋭くないが、又それほどの無理な所も無い。破題の芝屋の叙事は名文とは言はれぬが、彫琢に過ぎず拙ではない。血死期の道行の文句、是ぞといッて秀れた句も無いが、何にしても上乘の作。作全體の調格自然に愁ひを含んで沈み勝ちであるかのやう、而も双方相離れて心中する趣きで双方の情懐を順順に隗無く書き分けたのは殊に道行の一段を得て賞目がやうやく加はつたといふだけに止まる。

趣向に至ッては取り立てて褒める所も無く。要するに此曲は平和な文たるに於いて優り、

（三）六つの巷　冥途の大道。

戀八卦柱暦

上の巻

から猫が雄猫呼ぶとて、薄化粧するはしほらしや。猫さへも夫ゆゑ忍ぶに、我身は何とから打ちの、綱より解けぬ契りぞや。じやれてそばへて手まり取れ〳〵。ま一つふたつみつ四つ、いつむつなゝつる八つる、こゝのほんほとをんえ。えいころ〳〵〳〵。ころり火燵にしなだれて、なづくも己が戀ひならん。それは昔の女三の宮、是はおさんの當世女。夫の名さへ春をもッては色香に鳴る、梅の暦の根本大經師以春とて、袴いらずの長羽織。家居も京のどうぶくら、諸役御免の門作り、名だかき四條烏丸。すでに貞享元年きのえ子の、十一月朔日、來ル丑の初ごよみ、今日よりひろむる古例に任せ、あるじ以春は未明より、禁裡院中親王家、五攝家清華の御所方へ、新暦を献上し、方々のめでた酒。嘉例の如く去年の如く、十徳着ながら炬燵にとんと高いびき。算用場には手代共、進上暦の枚包。江戸大坂のくだし暦。地うり子共の取りさばき、一門振る舞ひ祝儀の使ひ。竈の霞鱠の雪。春めき渡る摺り鉢の音。今日の霜月朔日を、元日とこそ祝ひけれ。(一)』おも手代助右衛門、此家のたばね綿の小紋の羽織、主も心を奥縞の袴もと渡りのこぶの皮。こはばッたる顔付きにて、「ヤ旦那はまだおやすみか。夜の中から方々の、勤めくたびれはお道理、申しおさん様、茂兵衛めが戻ッたら替はらうと存ずれど、どこにのらをかわくやら、二條むき御屋敷方の、進上暦がおそなはる。一息に

(一)から猫　もと猫は唐から日本に傳來したとてから猫と古言で言ふ。
○ななつる八つる　「つる」は「七つ」、「八つ」の「つ」から續けた言葉の延。
○ここのほんほとをんえ　「ここの」は九、「とをん」は十。「ほんほ」は掛け聲。「とをん」の「ん」は語調。「え」は感歎詞。
○えいころころ　「えい」感歎詞。「ころころ」、猫が咽喉を鳴らす音。
○春をもッて　「以春」の訓讀。
○どうぶくら　膈脹らの義。家が廣いとの義。
○嘉例の如く、去年の如く　文句何となく輕輕しく愉快の色を帶びた滑稽。

廻ッて來ませう。嘉例の通御一門衆お出でなされう。御臺所か姫君のやうに、猫ちやうらかしてムッてもすまぬ事。これ玉。同じやうにそれなんぢや。奥の臺子もしかきや。庭の小座敷も掃除しや。こたつに火を入りや。違棚のほこり拂ふて、すご六ばん將棊盤、ごいしの數もよんで見て、手水鉢に水入れさせ、手拭ひもかけかや。たばこ盆に切り炭いけて、膳立てをして椀ふいて、お給仕にさしあはふ、夕飯はやう喰ッてしまや」と、一口に千色ほど。「まだめんどうな其猫め、ぎやあ〳〵とほえるが能で、鼠一疋取りはせず、雄猫見てはびろ〳〵と、屋根も垣もたまらぬ。重ねて屋根でさかッたら、四つ足くゝッて西の洞院へ流してくりよ」と、なんの掛けも搆ひもなき、猫にまでしぶ口の、茶の間中の間すみ〳〵見廻し、「それ久三挾み箱。暦くばる家によッて御引きが出る。只取ると思ふな給分に引きつぐ、斷ッて置いたぞ」と、打ちつれ表に出でにけり。(二)』おさん玉が顔見合はせ、「なんと今のを聞きやッたか。同じ物の云ひやうで、茂兵衛のやうに物やはらかに、いふても事はととのふ。あの人も氣に如才は無ささうなが、おたいの顔が憎體に、けんどんに見えるゆゑ、詞もあいそが無ささうな、何と助右衛門、男にほしいか。肝いッてやらうか」。「ヱ、おさん様。いやらしい事おしやんすな。あんな男持たうより牛につかれたがまし。同じ手代衆の内でも、茂兵衛殿のやうな、かりそめに物云ふも愛想らしうて、いつ腹立つ顔も見せず、ほんにあのやうな男持つ女子は果報でござんす」。「ほんに言やれば然うぢや。猫にも人にもあひ縁奇縁。隣の紅粉屋の赤猫は、見かけから優しう、此三毛を呼び出すも、聲をほそめて耻づかしさうに見えて、こいつが男にして遣りたい。

(二)奥縞　今いふ唐棧。
○とわたり　外渡りの義。奥縞は舶來品ゆゑに言ふ。
○昆布の皮　地合ひの厚い形容。
○ちやうらかして　今いふ「ぢやらす」の原語。
○しかきや　仕掛けやの訛り。
○かけかや　掛け替へやの訛り。
○御給仕に云云　夜食の給仕と差し合はぬ前夕飯を早く食へとの義。
○茶の間　「しぶ口」の縁。
○御引き　牽き出物の畧の敬語。
○肝熬ッて　世話して。

(三)猫を評する所宛然婦女子の狀態眞に迫る。

又向かひのねり物やの灰毛猫は、にくらしいぶとうな形で、遠慮ゐしやくもなう、屋根の上を馬せめるやうに、こはい聲して此三毛を呼び出す。先度も下立賣りのかか様と、親子たッた二人ゐる、縁先の藏の屋根で、此三毛をかはゆげに、それは見られた事かいの、あんまりにくさに箒竹持ッて追ッたれば、おれをにらんだ目元のこはさ。こりや三毛よ。わるい男持つなよ。灰毛猫が濡れかけたら、一度が大事ふッてのけ、此さんが從者賛、よい雄猫添はそぞえ。かはゆや」と猫なで聲。にやん〳〵あまえる女猫の聲。洩れてやよそに妻戀ひの、雄猫の聲〳〵。三毛は焦れてかけ出づる。(三)』「ヤイたづら者、大ぜい雄猫の聲がする。あの中へいてなんとする。ヱ、氣のおほい奴ぢやな。こりや男持つならたッた一人持つ物ぢや。間男すればッけにかかる。女子のたしなみ知らぬか」と、抱きすくめても爪立ッて掻きつくをあいたしこ。放せば離れてかけ出づる。「ヤイまをとこしのいたづら者、粟田口へ行きたいな」と、後の我身を魂が、さきに知らせて祝ひ日に、追ッかけ奥に入りければ、玉もつづいて立つ所を以春むく〳〵起きあがり、後抱きにひッたりと「ヤア美くしい女猫どらへた」と、乳のあたりへ手をやれば、「ア、こそばあ。まだ乳はやらぬ。むごいぞえ〳〵。毎晩〳〵寢込みにお見舞ひまをせどうも、紫色に成る程つめらせます。ヱ、うるさや」と振りはなす。「ぞッこいやらぬ。本妻の悋氣と鎗鈍に胡桝は御さだまり、何とも存ぜぬ。紫色はおろか身中が、かば茶色に成るとても、君ゆゑならば厭はぬ。むごいぞえ〳〵。毎晩〳〵寢込みにお見舞ひまをせども、一度も本望とげさせぬ。我ゆゑに此以春、名をかへてかまたりの大臣。玉をいとる思案ばッかり、

(四)はッけ「はりつけ(磔刑)」の訛り。
○まをとこし 間男爲の義。
○粟田口 此頃京都で刑を行ッた地。
○こそばゆい「こそばゆい」の轉。〜すぐッたい。

(五)六尺どもの 記錄かさども。

今夜こそいやと言はさぬ。一つの利劍を抜き持ッて、彼かいていに飛び入るぞ。おうか〳〵」と抱きしむる。「どう成りとさしやんせ。こちやおさん様に言ふほどに。あれ阿さん様〳〵」。「やれやかましい其外おさんわにの口、くちのついでに口口〳〵」と、顔をよすれば門口より、「頼みませう」と臺にするゐたる鯛蛸。「あれお客が有る。退かしやんせ」「いや大事ない。蛸持參は女中客」といふ所へ、かご乘り物、下立賣りのお袋様、お出での由を案内す。「なむ三寶しうとめの古蛸。是はならぬ」と云ひ捨てて、逃げて奥にぞかけ入りける。(四)』程なくかごを舁き入るれば、おさん端まで出でむかひ「かか様ようござんした。どッ様はなぜおそい」。「さればいの。どッ様は、をとゝひ花のもとの、連歌の會に夜をふかし、少し風氣の有る上に、風早宰相様の朝茶の湯、いよいよお風を引きそへ、それで得ござらぬ。先々けふは毎年かはらぬ初暦。商賣繁昌めでたい〳〵。以春殿はどこにぞ。悦びであらうの」。「推量して下さんせ。御所方方々御嘉例の九献に醉ふて、裏の數寄屋にねて居られます。ヲヲ先奥へござんせ。りんやはつ御供太義ぢや。晩にはこちから送らせましよ。六しやく共いなしやや」と、親子伴なひ入りにけり。(五)』奉公を出過ぎぬ氣立朋輩の、下手につくも我からの。茂兵衛は早天より暦くばりてさき〳〵の、ぴん美酒の麹の花、ちろ〳〵眼にて立ち歸り、「あるいた事かな。七分休みや。御一門衆お出でなら、すぐに袴も着けてゐて、爰で一ぷくたのしみぎせる、さらば醉ひを醒まさうか」と、しばしくつろぎ休みしが、火燵の間より「これ茂兵衛。爰へおぢや」と呼ぶ聲はおさん様、はッと居なほり「たッた今歸り、少し酒氣もござれども若し急な御用もや」と言

ひければ、「さぞくたびれでは有らうが、急に咄す事が有る。爰へ〳〵」と膝もと近く、小聲に成り、「とッ樣の方にめんだうな事ができて來て、談合したいといふ事、耻ぢを言はねば理が聞こえず、知りやる通の御身體、下立賣りの居屋敷を、町衆の加判で、をとゝし三十貫目の家質に入れたげな。それでも昔の株の家、物入り續いて此春又町へもかくし、内證で八貫めの質に入れたを、前の銀方が聞き付け、それとは無しに此月の三日限に、家渡すか銀立つるか、返事次第に五日には目安あげると、足元から鳥の立つやうに、俄に町へ屆けたといの。いとしやとッ樣の家渡すも大事ない、目安付けるもかまはぬが、家一軒を兩方へ質に入れたが顯れては、此岐阜屋道順が一分がすたるとて、ほろ〳〵泣いてござるげな。それで色々あつかひて此三日までに、二貫百目の利をやッて事はすむに極ッて、其上で銀がない。漸と一貫目は黒谷のお寺で借り出し、まあ一貫目がッてもみしやいでも無いといの。以春樣に言ふたらばつひ埒は明くけれど、とッ樣もかゝ樣も聲に無心云ひかけては、大事の息女にひけが付くと、お年寄りの我がつよく、以春樣へは鼻息も知らす事が叶はぬ。助右衛門にいふたらば又例のしかみ顔、眉合に皺よせて、其足で以春樣にいふは定。我夫をさしおいて手代にいふは何事と、結句物に尾鰭が付く。此月末には去る御公家衆の御知行納り、三十兩戻る金が有る。是はおれも知ッてある。二十日程の間の事、賴むはそなたばかり。壹貫目調へて、親達の苦をはらしてたも。ェ、無念な。男の身ならば是式に、親達に苦はかけまい。娘生んだ親も損、女子に生まれた身も因果」と、しみ〴〵くどき續みける。(六)」　茂兵衛も一盃きげん、「はれやれ姫御前と申

(六)うつてもみしやいでも　打ッても、ひしやいてもの訛り。

す者はお氣がほそい。五十貫目百貫目でも有ることか、仰山さうにそれ程の、銀ぐる〳〵ぶッしやる事かいの。旦那の印判一つ問屋へ持ッて參れば、江戸爲替二貫目や三貫目常住取りやりいたします。物ならたッた二十日の間、お氣遣ひなさいますな。けふの内一貫目急度調へ進じませう。私が少しの間横道いたせば事がすむ。と言ふて盜みするでも無く、人の目をかすめる事。よし盜みすればとて、身の欲に付かぬは天道が明なり。おまへとてもお主。親の耻は娘の耻、舅の耻は聟の耻。ふたりのお主の耻をすゝぐは、ひッきやうお主の奉公。落ちついて奥へござりませ」。「ァ、嬉しい〳〵。物は言ふて見やう物。かかさまにもささやいて、お心を休めう。そなたに任せた。賴むぞや。こりやをなで共。お料理がよくば早うお膳出しませ」と、いさみて奥に入りにけり。(七)」　茂兵衛とッくと思案を極め、他人さへ賴まるる。つまる所が主のため。たとへ仕業はまがる共、必はさッぱりぬぐひうるしの刀かけ。主人以春の巾着を、明けてうばふも祭ふくさ。印判そッと取り出だし、いつの間にかは助右衛門、戻ッて後に有りどとは、見ず白紙を押ひろげ、文言銀目は跡にも書け、先印判をとしッかと捺す。背に目の無きうたてさよ。「茂兵衛それ何する」と、聲かけられてびッくりせしが、「ァヽ、助右衛門か。天道は恐ろしい。見付けられてのけた。壹貫目ほど入用有ッて、旦那の名代で銀を借る。此月中にあてが有る。二十日程の間目ねぶッてたもるか。そなたの氣では朋輩の、首切らるるもいとふまい。茂兵衛が科は極ッた。くくりなりと殺しなりと勝手にしや」となげ出だす。「ォ、いきすりめ。勝手にせいで置かうか。男共皆おぢや。旦那お出でなされ」と呼ばはれば、

家内の上下何事やらんと立ちわぐ。助右衛門鼻をしかめ、「旦那これ御らんなされ。おまへの印判盗み出し、白紙に捺す曲者。大經師の家をくつがへし、主を賣らうも知れぬやつ。請人に預けての、くくしあげて」とひしめけば、おさん親子ははッとばかり、肝にこたへ胸にしみ、色ちがへするばかりなり。(八)』　以春大きに驚き、「扨々日比ほどにもない、見ちがへた根性。惚じて所帶がたあきなひ事、二人にまかせ置くからは、事によッて主の印判、おすまい物では無けれども、助右衛門にも知らさぬは、私欲有るに極ッた。どうした心で印判ぬすんだ。助右衛門それ言はせて聞きゝや」。「ェ、なまぬるい旦那樣」と、たぶさを取ッてさざいから、二三十くらはせ、「ヤァぬかさぬか」とねめつくる。茂兵衛髮も解きむしられ、「オ、まだぶて〳〵、ふんでくれ。主の印判ぬすむとは、だいそれた此茂兵衛。さりながら今日迄茶屋の見世へ腰かけず、かるたの打ちやう存せず、人なみに着がへは持ち、足手まとひの妻子はなし、何を不足に私欲をせう。からだは粉にはたかれても、茂兵衛が口から云ひ分けせぬ。おさん樣、お袋樣。詑言云ひなど遊ばしたら、みらいまでのお恨み。ヤイ助右衛門、天道が物をおッしやれば、おのれがつらをぶち返し、ゆるして下され茂兵衛殿と、をがませいで無念なわい。くちをしいわ」と齒ぎしみし、顏をかたむけ泣きゐたり。(九)』　以春もさすがなじみの下人、「いか樣二十年見落としもない奴が、俄に惡心有る筈なし。云ひ分けせい〳〵」と、いへ共さらに返答せず、中居の玉はかねてより、茂兵衛に心をかけ、命も捨てんと思ひこむ、志しをや顯しけん。主人の前に手をついて、「是は皆私が頼みし事、茂兵衛殿に科は無し。岡崎にゐられますわたしが伯父

(九)さざいから蠑螺殼の義。鉄拳の形容。

樣、浪人のいとなみに暮らしかね、五百目餘りの借錢にこひつめられ、腹を切るとの便あんまり悲しさ。あの人を頼みまし、銀才覺してもらひます。じひ心あまッて身の難義、まッぴら御めん成りませ」と、誠しやかにいひければ、おさん親子は幸ひと、「玉出來しやッた。有り樣によう言やッた。人のためのしぞこなひ。殊に大事の祝日、つれそふ女房姑が一生の詑言、ゆるしてやッて下され」と、手を合はせても合點せず、以春彌腹を立て、「扨はうぬらは密通か。此大經師は禁中のお役人侍同事の町人。不義のうへに主の印判盗み出す大罪。けふは早日も暮れる。あす請人を呼よせ、段々せんさくする事有り。ヤイ男共、隣の明屋の二階へほひ上げ、下に急度番をせい。油斷するな」と言ひつくる。(一〇)』　おさん親子は有りやうに言ふて能かろか惡かろか、心定めぬうき草の、茂兵衛は下々にひッ立てられてわるびれぬ、根性ただしく哀なり。「女共もさびしからん。お袋こよひはお泊りなされ。舅殿の氣色見舞ひがてら、我等下立賣りへ參ッて萬事つぶさに咄しませう。それ女房共頭巾おこしや。コレ助右衛門。戻りは定めて夜がふけう。皆早うやすませ、門もしめて火の用心、傳吉提灯、七介こい、隣の明屋に氣を付けよ」と、いひ付け表に出でければ、助右衛門は方々の、かけがねしめて部屋に入り、臺所には有明の、四角明燈六角堂の、鐘こう〳〵とふくる夜や、おさんは母御をねいらせて、心もしめるねまきの露、玉が常の寢所の、ふとんもうすき茶の間の角、四しやく屏風の押しのくれば、玉は寢もせず寢所に、只つッぱりと起きゐたり、「ハァこれはおさんさま。御用が有るならお寢間から、お手を鳴らしはなされず、見ぐるしい寢所へ、何の御用でござります」。「ムウそなたも

(一一)うき草の茂兵衛　うき草の「藻」に掛けた。

○四角行燈六角堂　四角六角照對。

まだ寝やらぬの。別に用は無けれども、茂兵衛の難に逢やッたは、皆此さんが頼んだ事。それをもうして知ッてやら、岡崎の伯父にかこ付け、我身のうへに取りなし、言ひ分けしたもッた志し、あんまり〳〵嬉しうて、禮言ひに來たわいの。さきの世の姉か妹か。死んでも恩は忘れぬ」と、はら〳〵涙をこぼしける。(一一)』「是がまあ勿體ない。お禮うけう覺えも無く、おまへのお頼みなされたやうに申せしは、わたしが心有ッての事」。「いや〳〵わら、ぞうした分けやら存ぜねども、さッきのやうに申せしは、わたしが心有ッての事」。「いや〳〵わけを知らずには、そばから出て言ひ分けしやる筈がない」。「御尤〳〵。御ふしんの立つはず。そんなら慨悔いたしましよ。おれい私があの人に、骨身にしみて惚れまして、二年此方くどけども、器量に似合はぬ高尚な、固くろしい偏屈な生まれ付き。奉公の内いかな事、女子の手をも握らぬの、女子の顔は明いた目で、見る事もいやぢやのと、愛想づかしばッかりで、やさしい詞も掛けられず、ェ、聞こえぬ。きらはれた。にくい〳〵と思ふやさき、さッきの難義、見やッたの。玉が罰があたッた。よい氣味とは思ひしが、いや、さうでない。(一二)恨みといふも戀ひからおこッた憎しみ。戀ひこそは叶はずとも惚れたは定よ。爰で心底見せいではと、我身を捨てた此玉を、まだ不便とも思やるまいと、ほんに恨めしうござんする。それにまあ、おさん樣の前なれど、さもしい、きたない、臭怯至極な、旦那樣のお心。茂兵衛殿へのあたりは皆悟氣からおこッた事。わたしにきつう惚れたとて、透きさへあれば抱きついたり、袖引いたり。隙を取ッて爰を出よ。余所にそッとかこふて、在所の親も發はう。小袖やらう銀やらう。うるさや、いや〳〵、聞きともない事ばッかり。わたしが身さへ清ければ、

御夫婦いさかひさせまいと、今ならでは申しませぬ。余所の夜咄しにわざと夜をふかして、表の男部屋の二階から、此屋根づたひにあれあの引き窓の、縄をつたふてわたしが此寢床へ、大かた毎夜さござんする。あんまりで腹は立つ。見かぎりはてた旦那殿。しッかい盜人の行義か、おさん樣へ知らせまし、町中へも斷ッて、でんぐで恥をかゝせます。必ず恨みさッしやるなと、此女子にしかられて、すご〳〵と我家の、中戸を内からたゝいて、戻ッたぞよ〳〵と、おねまへござる後付き、をかしいやら憎いやら。かゝッた事ではござんせぬ。所にわたしが茂兵衛殿の肩を持ッたゆゑ、扨は二人が密通か、禁中の御役をして、侍ひ同前の大經師が家で、不義者めとのにくしみは、悋氣の當り、丁度判符が合ひました。今夜も慥に忍ばッしやるはしれた事。今宵こそ聲立てて、御前に告げうと、覺悟をきはめ、帶もとかずに此通。おまへも嘸お腹立ち。いかに家來なればとて、あなづッた惚れやうぢやと。思へば腹が立ちます」と、涙をながし語りける。(一三)』おさんため息横手を打ち、「扨も〳〵今の世の、賢女とはそなたの事。男畜生とはつれあひ以春殿。女房ひとりまもッてゐる、男としてはなけれども、あんまり女房を阿房にした、ふみ付けたしかた。涙がこぼれて腹が立つ。なう此上に無心が有る。そなたとおれと替はッて、爰におれを寢させてたも。いつもの格で以春殿がござる時、泣きつ恨みつくどかせ、今宵は玉のなびきやる顏で、夜のあくるまで抱いて寢て、内との者の見るまへ、幸かさは泊ッてなり、いき恥おかかせて本望とげたい。そなたのねまきのおひえも借して、寢替はッてたもらぬか」。「それはおやすい事なれど、召し付けぬ木綿夜着、お肌が冷えてたまる

(一一)せんど　出る所の意。裁判所。

(一二)あなづッた　なめたの意。

(一三)まもッて居る　守ッて居るの訛り。

まい」。「ェイなんのいの。昔の井筒の女とやらは、ねたみのほむらに鍉の水が湯となッた。男の恨みに身がもえて、寒さつめたさいとはぬ。ひらに頼む」。「そんならばともかくも、隨分ぬからしやんすな」と、なほ引きつつむ此屏風。火を吹き消して烏羽玉の、玉は奥にぞ入りにける。(一三)』科無き科に埋もれし、茂兵衛はつく〴〵と思へば、「玉が心ざし日頃つれなき此男を、女心に恨みもせず、仇を恩なる詞の情、耻づかしくとも面目なし。たとへ此まま死する共、一生に一度肌ふれて、玉が思ひを晴らさせ、情の恩を送らん」と、目ばかり出だすふか頭巾、明屋の二階忍び出で、おもやのやねを四つばひの、姿を人にとがめられ、又此上に盗人と、名をやうづまん柿ぶき、きのふの雨のかわかぬに、今宵の霧の淺じめり、足の踏みどもうはすべり、そろり〳〵と引き窻の、下を覗けばとこやみに、何のしやうどは見えねども、家の勝手は覺えたる、それを心の力なは、たぐる心も細引きと、共にきれ行く心なり。足音餘所に知られじと、柱をさすり壁をなで、目は明きながら盲目の、杖を失ふ如くにて、敷居を一つ二つ越え、三つ暦の細工所の、次ぎの茶の間に玉がねる、疊はいづく摺足の、屏風にはたと行き當たり、びッくりしたる膝ぶるひ、おさんもはッと胸さわぎ、身もふるはるる空寐入り。屏風そろ〳〵押しやりて、夜着にひッしといだき付き、ゆりおこしゆり起こし、ゆり起こされて驚きの、今目のさめし風情にて、頭をなづればちりめん頭巾。「ヤア是こそ」とうなづけば、男はけふの一禮の、聲を立てねば詞なく、手先に物を言はせては、ふしをがみ〳〵、心のたけを泣き涙、顔にはら〳〵落ちかかる其手を取ッて引きよせて、肌と〳〵は合ひながら、心へだたる屏風の中、縁の初めは身の

●中の巻

上の、仇の初めと成りにける。既に五更の八聲の鳥。門の戸けはしくとん〳〵〳〵。「旦那お歸り」。はッときえ入るね所に、汗は湖水をたゝへたり。「やい〳〵戻ッた。明けやい」と、よばはるは以春の聲、助右衛門目をさまし、「どいつらも大ふせり」と提げて出でたる行燈の、光顔を見合はすよぎの内。「ヤア おさん樣か」。「茂兵衛か」。はあはあゝ。(一四)』

中の巻

京ちかき、岡崎村に分限者の、下屋敷をば兩隣、中に挾まるしよげ鳥の、浪人の巣のとりぶき屋根。見るかげ細き釣あんどう。大平記講釋、赤松梅龍としるせしは、玉がためには伯父ながら、奉公の請に立つ、他人向きにて暮らしけり。講釋果つれば聞き手の老若、出家まじりに立ち歸る。「なんと聞く事な。講釋五錢づゞには安い物。あの梅龍ももう七十でも有らうが、一りくつ有る顔付。ァ、よい辯舌、楠湊川合戰、おもしろいどう中、仕方で講釋やられたところ、本の和田の新發意を見るやうな。いかい兵でござッたの。いづれも明晩〳〵」と、ちり〳〵にこそ別れけれ。(一)』大經師助右衛門駕をさきに押し立て、「梅龍宿にお居やるか」と、あけんとすれば、門の戸は早しめたり、「ハテ門しめた。しめぬとて盗人に取らるゝ物も有るまいが」と、わるゝばかりに戸を叩く。梅龍内よりつこど聲、「かしましい何者ぢや。此家につんぼは無い。講釋なら明日來い〳〵」。「イヤ講釋聞きたうない。大經師以春手代助右衛門ぢや。急にあはねば叶はぬ」と、しきりに叩けば、「せわしない。あくる間も有る物」と、によッと出でたる糟尾の兀僧。紙子の廣袖革柄の大脇差し、「ヤア助右殿。夜中にけは

しい。なんの用でござる」と言へば、「何の用とはをさめ過ぎた。此中毎日人を越し、そなたが請けに立ッた玉が事に付き、用が有るといへども、酢のこんにやくのと我まゝいふて、顔出しもせぬ請け人が、どこの國に有る事。此月朔日あくれば二日の曉、旦那外より歸りの門口、すりちがふて手代の茂兵衛めが、内義おさんぢよろをそゝのかし走出て、『やれ〳〵』といふ内に行方がしれぬ。内を詮義すれば、玉めがね所におさんぢよろと茂兵衛めがねた躰にて、玉めはおさんのねまに入れかはッてねてゐた。しかれば主人の内義の、間男の中立ちした玉めなれば、同罪はのがれぬ。おさん茂兵衛を尋ね出すまで、請け人といひ内證は伯父姪ぢやげな。そなたに急度預けに來た。ふたりの者がはり付けなれば、玉は獄門。慥預けた。そりやかご入れ」と、舁き込む所を梅龍棒ばなつかんで二三間押し戻し、「これお手代。此赤松梅龍の姪などを、むざと前垂奉公などに、出す物ではおりない。二親も無いやつ。漸伯父が太平記の講釋、暮れ六つから四つ時分まで、口を叩いて一人に五錢づつ、十人で五十錢の席料をもッて露命をつなぐ、す浪人の伯父が力には、絹氣をひッぱらせて、腰元奉公に出す事もならぬ。大經師の家は常の町人とはちがひ、國王大臣も一年の鏡となさるゝ暦の商賣。日月のめぐりを明かにしるす物なれば、ひッきやう日月に奉公さすると觀念して、大經師御手代衆參る、奉公人たま、請人赤松梅龍と、判をすゑたは姪が不便なればこそ。國許では人なみに、武士の眞似をして、鉢坊主の手の内ほど、米も取ッた此梅龍。預け者には請け取り渡しの作法が有る。此家わづか三間にたらぬ小借屋。めぐりにほそ溝ほるや堀らず、薄壁ひとへぬッたれ共、身が爲の

(二)出す物ではおりない「おりない」は「おりやない」の略。「おりやない」は「おぢやない」の轉。「おぢやない」は「おぢやらない」の轉。即ち厶らぬとの義。

○鉢坊主　鉢を叩いて錢を乞ふ乞食坊主。

○米も取ッた　祿を取ッたの義。

○千早の城廓　眞に講釋師たる口吻。一體の語氣凜凜しく、快極はまる。

(三)あた　輕蔑の義の感歎詞。

千早の城廓、六波羅の六萬騎にも、落とされまいと思ふ所に、どこへ見ぐるしいかご舁が泥脛。改めて渡せ」と、辯舌は講釋、事の道理は太平記、かたちは安東入道が、理屈をこねるも斯くやらん。(二)』

「あた仔細らしいおどしだて。置いてもらほ。武士でも侍ひでも、此助右衛門はなん共ない。あらためて請け取れ」と、かご打ち明け、高手小手の縛り繩、ひッ立て引き出だす。玉は涙に目も顔も、水より出でたる如くにて、「伯父樣面目もござらぬ」と、わッと叫びし顔を見て、鬼の樣なる梅龍も、涙を咽につまらせて、齒がみをなすぞ道理なる。玉は恨の身をふるはし、「コレ助右衛門。物には了簡品も有る。おさんさま茂兵衛殿一所にのいての上なれば、間男でないといふ云ひわけなけれども、かう成りくだッた始まりは以春樣の惡性と、そなたの心の佞人から。おさん樣に惚れた間男といふはそなたぢや。腰元のかやをだまして、何やかや取らせて賴んだを知ッてゐる。もう言はう〳〵と思ふたれど、いや〳〵人のそこねる事、とかくおさん樣に疵さへつけねば能いと思ふて、此玉が急度目になッて、おさん樣のそばを、一寸もはなれぬ樣にしたによッて、かやめもいひ出す折りが無かッたやら、わしをけぶたさうにして、そなたの文を燒いて捨てをッたも見てゐる。それをたねに思ふて、針を棒に取りなして、此樣にしなした、おのれをはりつけに掛け、かやめがまづ此樣にしばられ、獄門にかゝる奴なれど、此玉が慈悲心ひとつで助かッた。此頃是を言はふとすれば、言ひけし〳〵人で無しめ。慈悲が仇になッたか」と、かッぱとふして泣きければ、「ふんばりめ。血迷ふて何ぬかす。請け人慥に預けた」と、いひ捨てて立ち歸る。(三)』梅龍飛びかゝり、頸のくぼ引ッつかんで引

きあぐれば、足をふまん立て、「コレなんとするとは縛るさへ有るに、町人の分でなぜ本縄にしばッた。急度うッたへて、おきめにする奴なれど、御免なれとぬかして解きをるか〳〵」と締めつくる。「あいたた。只の町人とちがふて、禁中のお役をすれば、本縄にかけても大事ない。解いてほしくば其方で解け」。「ヤアうぬめは縄付けて預るさへ、昔からない作法に、禁中の御用を聞く町人は、本縄かけても大事ないとは、どこから出た掟ぢや。上をかろしめた慮外者。どうしても大事ない」と、かごの棒引きぬいて、力に任せ七つ八つ、かた息になるほどぶちのめされ、「おのれ助右衛門をぶッたぞよ」。「ヤ、ぶッた。身がぶッたがあやまりか、御さばき所で埒あけう。サアうせう」と引ッ立つれば「そんなら待ちをれ。解いてくりよ」。「ヤ、解かせいで置かうか。まひとつ棒をくらふか」と、きめ付けられて、ふしやう〳〵に縄ひッばぢき、「こりや儕に預けた。所の庄屋にも斷ッて歸るぞ。一寸でも取りにがしたら、請け人共に首が飛ぶが合點か」。「まだおとがひを聞き居るか」と、ほうげた三つ四つくらはせて、玉が手を引き内に入り、かけがねはたと締めにけり。(四)』かごの者共可笑がり、「今のはいかう痛みませう。がごでお歸りなされ」といへば、助右衛門顔をかかへ、「此はず〳〵。今年は爰が金神に當ッた。それで、是ほほだたり。殊にけふは土用の入り、それでか跡がきつうよむ。曆の事はおされぬ」と、減らず口して歸りけり。(五)』むすばれてなまなか辛きみだれ髪の、おさん茂兵衛は夢にだに、戀ひせぬ中の戀ひとなり、うれて走し其日しも、茂兵衛が肌の紙入れに、たッた三歩のかねてより、思ひもあへぬ旅の道。

(四)おきめにする　掟にするとの義。

(五)ほほだたり　方位の祟りに利かせた句。金神の居る方角に於いて事を爲れば禍を招くとの口傳。而も口の蹤らぬ漫稱。意外の波瀾。

○ぎよむ　ほてる。

おさんの肌着代なして、白むく一重けんばうに、裾模樣有る藍に鷺、足に任せて奈良ざかひ、大津伏見をうかゝへ、夫婦にあらぬ夫婦のさまの心耻づかしく、顔打ちあげて顔と顔見合はせ、顔をあかめては涙の外に詞なし。「なう茂兵衛殿。とてもわしらは今日あッてあす無い身。命を命と思はねども、いとしや玉はどうなりやッたと案ずるは是ばかり。只ゆかしいはとッ樣かか樣。なんぼ思ひあきらめても、逢ひたうござる」とむせ返り、歩みかねて泣きければ、「ヤ、逃ひたいはお道理。我とても、お目かけられしお主筋。お名殘惜しさは同前。爰が彼玉が在所岡崎。あれあの行燈の出た所が則ち伯父の宿。是にたよッてお里の便宜、玉が噂も、聞かうと存じ參りしが、內の首尾を聞き合はせず、案內するも麁忽なり」と、軒に立ち寄りうかがへば、內には玉が泣く聲の、わけも聞こえずくどき事、伯父梅龍が聲として、「ヤイ玉、此本は是伯父が毎夜講釋する、太平記二十一卷目、尊氏將軍の執權、高の師直といふ大名、鹽冶判官といふ、これも歷々の武士の妻に心をかけ、末代まで惡名を殘し、鹽冶判官もそれゆゑ命を失ふたは、もと侍從といふ女が中立ちからふこッた事。おさん殿と茂兵衛と、眞實の間男でないに極ッても、ふたりつれて欠落めさッたは定よ。此二人にいづ方で逢ふたりとも、萬一爰へ尋ねてござッたとも、かならず〳〵物いふな。見ぬ顔せい。斯ういへばつれない、水くさい樣なれど、さうでない。間男といふ浮き名のたッた二人の中へ、中立ちと言はるゝ其方と、三人寄ッたそぶり成りとも、人に見られては、そりや一つ穴のいたづら狐。一所によッたは、扨こそ玉が中立ちで、おさん茂兵衛が不義は極ッ

たと、いひ立てられては彌科がおもうなる。爰をよう合點せい。つれなうあたるはおためぢやぞ。此事ゆゑに其方も繩目の耻にあひ、此如く預けられた。しかれば同罪はのがれがたい。首を切られ手足をもがれ、ためし物になるとても、主と頼んだ人ゆゑ命惜しむな。梅龍が姪ぢやぞ。最期を清う死んでくれ」と聞こゆれば、玉が聲、「それは氣遣ひさしやんすな。とうから覺悟極めてゐる。伯父ひとり姪ひとり。わしが死んだら伯父樣の、さぞ便なうおぼしめそ。茂兵衛殿はどうしてぞ。いとしいはおさん樣。どこにどうしてござるやら。常がはかない正直な、心知ッた私なれば、何かに思ひやります」と、泣き入れば梅龍も、「オ、そちがいとしいはおさん殿。身は下立賣りの親御達の、歎きが思ひ遣らるゝ」と、内に伯父姪くどき泣き、外に二人が立ち聞いて、涙をもらす戸の隙間。聲なき冬のきり〴〵す、壁にすがりて泣きゐたり。(六)』　血筋が結ぶ親子の契り。おさんの親道順夫婦、娘の浮き名かくれなく、命がつらき老後の耻。人に面も合はされず、月出ぬさきの心の闇。黒谷の菩提所へ、かちの夜道の夫婦連れ。小孺がさげし風呂敷や、つゝむ涙にとぼ〳〵と、行き過ぐる軒の下、二人しく〳〵泣く聲の、耳に留まれば立ちどまり、「おばゞ。あれ合點のいかぬ。何者やら」と、うとき老眼すかして見る。行燈の影に茂兵衛見付け、「あれおさん樣。下立賣りのおやぢ樣」。「アウとッ樣かいの」と走り寄り、取り付く所をついと退き、「ヤイ畜生にとッ樣と、云はるゝ覺えは無いわいや」と、わッと泣く〳〵振りあげて、打たんともがく杖の下、母はあこがれ火を吹き消し、娘を袖におしかこひ、「なうおやぢとの。おさんめは逃げました。もうこらへて下され」と、影をかくすは母の

(七)月出ぬさきの心の闇　心は闇で、月が出ぬ前のやうであるとの義を奇妙に言ひ做した奇句。
○黒谷　「闇」の縁。

慈悲、打つ杖は父の慈悲。心かはると子や思ふ。哀はおなじ涙の闇。まよひの上の迷ひなり。(七)』道順不覺の涙に暮れ、「道順が未來もはや知れた。ひとり娘の事なれば、聟を取ッて家を繼がする筈なれど、近年諸國の銀もすまず、家屋敷きをも人手に預けるひッそくの身。此跡を娘に渡し、苦勞さする可愛さに、一代切りに家を捨て、嫁入させた親心、さきとてもその合點、道順が娘ならば、拵へいらぬ、みやげもいらぬ。育てた親に見込みが有り、娘の心がみやげぢやと、したはれた根性に、畜生の魂がいつのまに入れかはッた。うらめしや情なや。池にすむ鴨や鴛鴦を見よ。軒に巣をくむつばくらも、雌一羽雄一羽、めをとつがひは生ある物のならひぞや。てて親さま〳〵の毛色をうむは、犬猫ならでどこに有る。親は犬にはうみ付けぬ。猫になれとはたがそだてた。畜生に對して詞はかはさぬ。是は我ひとり言。とてもかうなるからは山の奥にも身を隱し、のがるるだけはのがれもせず、京近邊をうろたへ、今のまにめしとられ、洛中を引き廻され、親が大事にうみ付けて、撫で育てた體を、鎗でつかれて死にたいか。躰にも耻が掻きたいか。生けうが死なうが此道順は、悲しいとも思はねば、涙一滴こぼれねど、ばばの泣きやるが悲しい」と、わッとばかりにこらへかね、余所をも耻ぢず大聲あげ、めをとは老いの息切れに、むせ返りてぞ歎かるる。(八)』　茂兵衛はひれふして、とかうの詞なくばかり。おさんは母にいだき付き、「ふたりに不義のあやまりは、みぢんほども無けれども、ほんの因果のまはりあひ、云ひわけ立たぬ品となり、京洛中に畜生の名を流し、罰のあたッた此上に、誓文立てんやうも無し。とッ樣のお腹立ち、かか樣のお恨みも、私可愛い上なれば、來世

をかけて形見の詞。我々は天の網、とても遁れぬ命の内、親達に逢ふからは、木の空にさらされて、かばねを鎗でつかれても、思ひ置く事ござらぬ」と、くどき歎けば、「まだぬかす。其鎗でつかせまい木の空へあげまいと、思ふて胸をこがすわやや」と、又たえ入りて泣きしづむ。母の涙の數珠袋、ふくさ物取り出だし、「コレ一歩二つ白銀もすこし有る。いとしやいかう肌うすな、路銀に盡きて脱ぎやったもの。是を茂兵衛に渡して、かごに乗せて京の地を、一足も早う立ち退いて、かならず〳〵悲しい事、聞かせて泣かせてたもんな」と、泣く〳〵渡せば押しいただき、「忝うござんする。中に着た淺黄ちりめんは、奈良の町で賣りはなし、此上に着た蓋に爲、此秋かまへの下されて、未來までもかゝ樣の、形見と思ふて着ますれば、寒いとも覺えず、見付けらるるをそれぎりの、命の内は袖乞ひでも、賴みないは後生の事。これは其まま留め置いて、死んでの跡の弔ひに」と、歎けば母も「ァ、悲し、また死ぬ用意ばッかりを」と、つきぬ涙の露霜の、白きを見れば夜も更けて、出でたる月はさえながら、親子の袖ぞ時雨ける。(九)』茂兵衛は掻きくれて、物をも言はず居たりしが、「我ら男の面をさげ、かやうのわざを仕出だし、のめ〳〵ながらへ有る事も、おさん樣のお命を何どぞと存ずるゆゑ。お宿許へおさん樣を御同道なされ、御命助けて下されば、科を私ひとりに受け、物の見事に死にましたい。御了簡頼み上げます」と、手を合はせ泣きければ、「ァ、おろかしい事いふ人ぢや。われひとり生きながらへ、言ひ分けが立つほどなれば、ふたり生きても同じ事。取りちがへうがどうしやうが、以春といふ男持ちながら、そなたと肌ふれ寐たは定。かたちは生まれかはッても、此惡名を創られぬ。其方はいかう狼狽が來たさうな」と、耻ぢしめられて茂兵衛も「アッさうぢや。ァあれ三條通の車の音、夜明けといふてほどもない。行く先あてどは無けれ共私在所、丹波の栢原まで落ちて見るばかり。ァ暇乞ひなされませ」と、いへども親子一生の生死をあらそふ今はの別れ。月出ぬ先は顔見えず、いッそ思ひ切るべきに、見かはす顔は見きられず、なまなか月も恨めしく、母はもだえて「コレおやぢ殿。脉のあがッた處に病ひも、もしやと藥は盛ッて見る。天にも地にもたッたひとりの大事の娘。見付けらるる程殺さるる。手ばなして遣られうか。どざれ、をぢうば附き添ふて、死なば親子一時に」と、氣も狂亂のくどきごと。道順も嵯峨へかねて、「それはおしやるまでも無い。いかなる大病難病でも、くすり一味の加減にて、助かるも有るならひ。息の絶えた死人でも、二十四時は待ッて見る。唐天竺日本國の、名醫の藥を浴びせても、天下の法を背くといふ、大病には叶はぬぞや。たッた一つの賴みには、以春の方へ手を入れて、心をなだめ見るばかり。もし其内召し取られ、すは最期といふ時は、白髪あたまを大地の底へすり付けて、命乞ひも身がはりも、願ふといふは其時よ。なまじひ親がかくまふと、聞こえてはさきに我が立ッて、ゆるしたうても赦されぬ。親下人にも見放され、憂きめをすると聞こえては、げにはさきにあはれみ有り。ィおさん、畜生よ犬猫よと、叱るとて恨むるな。願かけぬ神も無く、祈らずといふ佛も無く、三光天を拜むとて、七十になる道順が、朝毎垢離を取る時は、物身の骨はこほれども、娘が御きめに逢ふならば、此苦しみを百千萬、かさねても物の數かはと、こらへて月日を拜するは、あの月天子の照覽有り、利生は無下にはよもなるまい。茂兵衛たのむ。

煩はすな。コレ爰に銀子一貫目。家質の利足のたし銀に、黒谷の和尚樣より借ッたれども、世間はッて何にせん。家を町へつき出だし、寺へ返す此銀、遣るといふては遣られぬ。もらふといふては貰はれまい。道順が涙にくれ、うろたへて落といたぞ。落した物はひろひ徳。罰があたれば落とした者。ひろふた者に罰は無い。おばばおぢや。歸らう」と、夫婦せきあげむせび入り、二足三足立ちされば、おさん茂兵衛はわッと泣き、銀取り上げて額に當て、「あんまり深い親の慈悲、却ッて冥加が恐ろしい。なうとッ樣かか樣」と、呼びかへせばふり返り、「なんにも云ふな。なんにも言ふな。さらば〳〵」の泣き別れ。父が歸れば母が留め、母が歸れば父が留め、おさん茂兵衛は歩みかね、名殘惜しさに立ちどまり、小高き土手にのびあがり、二人見送る影法師。賤が軒端の物ほしの、柱二本に月影の、壁にあり〳〵うつりしは、うき身の果ては捕らはれて、罪過のがれぬ天の告げ、母は驚き「なうぢい樣。情なや爰にはりつけが」。「悲しや おばは。おさん茂兵衛が影法師。天道の力にもかなふまいとの知らせか」と、又絶えかねて泣く聲に、内より玉はくぐり戸明け顔指し出す其影の、同じく壁にうつりけり。「あれ又爰に獄門が」、淺ましや此首の、其名は誰と白露の、「玉ではないか」。「おさん樣」。「さらば〳〵」の聲の中、はや黒谷の後夜の鐘、生滅々と響き來る、果ては寂滅爲樂ぞと、名殘悲しき……(一〇)』

(一〇)柱二本と云云 二人の顔が柱に映じた所を磔刑の形ちに似たとの形容。

●下の卷

下の卷

春立つと去年の雪消を其ままに、かすむも山の奥丹波。軒のつららも溶け渡り、谷の水音したん〳〵、ぼん〳〵〳〵となる鼓、とくわかに御萬歳と、御代も榮えましますあり興有るあら玉や、年立ち返るあしたより、水も若やぎ木の芽もさし、榮えけるは、誠にめでたふ候ひし。京のつかさは關白殿、おりゐのみかど日のもくだいり。王は十善神は九ぜん。よろづやす〳〵、浦やすが木のもとにて、正月三日の寅の一天誕生まします。若えびすあきなひ神と顯れ給ひて、あきなひ繁昌まもらせ給ふは、誠にめでたふ候ひける。やしよめ〳〵、京の町の、やしよめ、賣ッたる物は、やしよめ、賣ッたる物は何〳〵、大鯛小鯛鰤の大魚あはびさざい、はまぐりこ、〳〵、はまぐりこうと、賣ッたる物は、やしよめ。京の町の、やしよめ、そこをば打ち過ぎ、そばの棚見たりや、そばの棚見たりや、豆に小豆大根蕪加賀のごんぼ毛ごんぼ、からしの粉さんせうの粉、からい胡椒めさいの。やしよめ〳〵、京の町のやしよめと、賣りためて千貫、つなぎ立てゝ萬貫、恵方の御藏づッしり納めて、家も福福。ぢい樣ばゞ樣とゝ樣かゝ樣、わこ樣ひめごぜ産みならべて、ふく〳〵ふく〳〵、ほゝんほんとぞ囃しける。(一)』「オ、めでたい〳〵。よう祝やッた。とゝ樣かゝ樣御無事な萬歳祝ひましよ」。猶御壽命は百包み、盆に入れてさし出だす。おさんの顔を不思議さうに、「ハア是は奥樣。お久しうござりまする。御譏嫌よう變はッた所で正月をなされまする」。「ア、つがもない。わしは萬歳に近付きは無いわいの」。「なんの私らを見覺えはなされますまい。毎年お庭で舞ひまして、おまへはお上に結搆な布團敷いて、腰元衆づらりと並べて御見物なされました、京烏丸大經師の奥樣よう覺えて居りまする。田植ゑが御すきでござりました。なんとひとつ舞ひましよか」と言へば、おさん胸とどろき、「めか

(一)とくわか 偲若の義。春の舞ひの名。
○「御代も榮え」から「ふくふくふく、ほほんほん」まで萬歳の口上。
○やしよめ 萬歳が言ふ祝ひの掛け聲。
○はまぐり子 ただの蛤蜊と同じもの。此時代の通用語。
○めさいの 「召さいな」の轉。買ひたまへの義。
○ほほんほん 鼓の音。

どの強い人ぢやの。毎年の事でもこちはすきと覺えぬ。必々いづかたでも沙汰してたもんな。わしが里のとッ樣此所へ去年からひッそくしてござるゆゑ、此頃やうやう見舞ひに來た。此在所でわしは島原の傾城が、請け出されて來てゐると、庄屋にも誰にもいふて置く。もし人が問ふたりとも、島原で見た女郎ぢやと言ふてたも。少し樣子も有るほどに、京ではなほ沙汰なし。頼むぞや〳〵。さらばまちッと祝はう」と、錢ざし拔いて五六十、半紙二枚にもらすなと、わが名を包めば惜しからず。「ハァかさね〳〵おめでたい。二三日中に京へ出まする。烏丸へも參り、御嘉例の如くお手代衆、助右衛門樣茂兵衛樣とおさかづき致ましよ。御ぶじな通り咄しましよ」と、出でんとすれば「なう是是、その烏丸で猶かくしたい。ァ、酒にゑふたら忘れてひよッと言やればわるい。此春はもう烏丸へは行かしやんな。來年めでたうわしが上ッて祝ひましよ。烏丸の代に爰で盃出したいが、をりしも酒をきらした。是で飲んで下され」と、二三匁の豆板二つのませぬ樽の口ふさぎ。「ハァなんの是で申しませう。本の樽より結句木樽に醉ひました」と、うまい目に逢ふ萬歳の、舌つづみうッて出でにける。(二)』 おさんもうき世恐ろしく、うッかりとなる所へ、茂兵衛も色あをうして立ち歸る。「ェ、きり〳〵戻りはせず、此身になッて惠方參りどころか。たッた今毎年京へ來る、得意の萬歳が來て不思議立ッたを、につこらし虛ついて、いなせる事はいなせたが、どうやら爰にもこはげが立ッて長う居らりよと思はぬ」と、かたれば茂兵衛も呆れはて、「サァ〳〵盆も正月も一時に來ました。天知る地知るでこッちこそ見知らね、今の萬歳の格で、栗賣りの柴賣りのと、丹波から京へ出る者は多し。あれ

(三)めいよな事　めんえうな(面妖)事の義。

(四)せいもんくッされ　誓文腐れの轉。誓ッての意。

(七)しら泡　馬が

が言ひ是が聞き、知れたも不思議でござらぬ。助右衛門めを始め旦那の一家が、隣在所に宿取ッてゐるげな。其上たッた今但馬の湯入りを乘せて通る駕舁きが、めいよな事を云ひました。大經師のおさんがおく丹波にかくれてゐる樣子が知れて、京のお役所から爰の代官所へ解狀がついて、在々を尋ねる其使ひの早駕を乘せて、おいの坂のおり口から二里の間を一貫四百、七百づつあたゝまッたと、たッた今言ふて通りました」と、身をふるはして言ひければ、「ハァなんとしやう。今までが不思議の命。されどもとッ樣かか樣の、歎のほどがおいとしい。一日でもながらへるが孝行。今夜の中に退かうでは有るまいか」。「いかにも〳〵。かのお心ざしの一貫目、二百目つかふて、殘る八百目、此家ぬし助作に預け置きました。大事のお慈悲の此銀を、こなたとわたしが急度だかへて死ねばとて、人の寶になす事は冥加に盡きると思ひ、今寄ッて申したれば、追ッ付け持ッて行かうと申す。此銀を腰に付け、丹後の宮津に兄弟同前の者が有り、そこまでどうぞ退きませう。それまでに運盡きて、死ぬる期に極ッたらば、日頃申す通り惡緣と思ふて下されませ。私ゆゑに大事のお身を、捨てさせました」と涙ぐみ、打ちしほれて見えければ、「又おなじ事ばかり。それはたがひの因果づく、ただ忘れぬは二人の親。扨いとしいは幼なじみの以春樣。こなたも私もみぢん濁らぬ此心。言ひ分けして死にたい」と、又さめ〴〵とぞ泣きゐたる。(三)』 家主の助作案内もせずつッと入り、「ヤァ新六樣さッきは御出でなされた。預りの八百目只置くよりはと、少し手まはし致し急にはどうも調はぬ。一兩日待ッてもらひましよ。こなさまもあんまりな。あの樣な傾城殿請け出した上に、銀つかふと

噴く嚏。其縁で「あはれ」と出した。

●道行乘合鞅

（一）つひに行く道とは知れど　伊勢物語りの歌、「終に行く道とはかねて知りしかど昨日今日とは思はざりしを」から來た句。歌の意は、人間一生に必らず冥途には行くものと知ッて居るものの、扨臨終となッて思へば、其今日あすの旦夕に死なうとも思はれなかッたため坐ろに命も惜しまれるとの義。

○杖とも柱ごよみ　杖とも柱とも頼むとの柱から柱暦へ掛けた。

○惠方、金神、月ふさがり、八十八夜、露（梅雨）、十方ぐれ　共に皆暦の縁語。「十方ぐれ」は梅雨外他に雨の多く降る節の稱。

（二）かのへ申、きのへ子、あやふ日、ほろぶ日、姫はじめ、きさはじめ、くち開き、天一天上、五水、八專、まび、かん日、さだむ、くろ日、彼岸、船渡りよし、井戸ほり、盤ぬりよし、田がりよし、冬至、ちいみ　共に暦り縁語。

○なんのかのへ申　何の「斯の」と掛けた。

○丸いをごけに角の蓋　をごけは「麻笥」の義、即ち麻を入れる器。句意は釣り合はぬ事の形容。

○まを　眞麻の義。普通の麻。

○あやふ日　陰暦で中段の語。物事を爲るに危い日。ここでは「不義者と言はれる程に身を危くさせた」との義。

○ほろぶ日　陰暦で中段の語。「あや

いふ樣な、むかしの心おやめなされ」と云ひければ、「いや是助作さん。あのさんの入り用では無いわいな。皆わしが入り用ぢや。勤の身はな、全盛するほど世間が張ッてつらい物でごんす。念頃な客から借ッた銀で、今宵中に借やさねば分けが立たぬわいな。其代りにあのさんの勘當がゆりて、大坂へ行なんしたら、夜でも夜中でも言ふてごんせ。八百貫目や八千貫は、せいもんくつされ利なしでやんす」と言ひければ、「あの通り〳〵。近頃御苦勞千萬ながら、どうぞ頼み存ずる」。「ム、いかにも聞きとどけた。それほど急なと知らなんだ。七つ過ぎ暮れまでに、急度持ッて來ませう。めをとの衆の請取りとる。必ず内にござれや」。「オ、いごきもしませぬ」と、約束かたき、銀がかたきと知らざりし、身のなる果てぞ淺ましき。（四）』「扨々とろりと一ぱい參らせた。今の傾城の物まね。芝居御すきの一德。銀請とると其ままかけ出して急いだら、夜の中に七八里は心やすいみや津に落ち付き、切渡の文珠の法印樣に、母方の縁あれば、たのむに引きはなされまい。そろ〳〵用意」と帶しなほし、身拵へする中に、かな棒の音、人足しきりに近付きたり。「ヤア氣味わるい。ハアなむ三寶口惜しい。助作めに出しぬかれた。おさん樣。もうのがれぬ。未練な働きあそばすな」。「オ、覺悟した。合點ぢや」と、表を見れば取手の役人、助作をさきに立て、「とッた〳〵」。とッた〳〵とみだれ入る。茂兵衛おくせずつッと出で、「見ぐるしいお侍ひ。合ひ口一本ささぬ町人、手向かひは致さぬ。悴の時より柔術當て身を誓古して、すはといはば腕はほそくとも、お待ひの五人や七人は、慮外ながらきやッと言はせてのめらせやうも知ッたれども、もとのおこりは主人の勘氣。主人に手向かふ同前と思ひ、手向かひは仕らぬ。此女中に付き申し分けあれども、それもいらぬ物。不義ならば不義にして、ヤア尋常にくくれ」。「とッた〳〵」とひッぷせ〳〵高手小手。顏色變ぜず縛られし、男も女もけなげさに、取手の武士は我を折ッて、哀と言はぬ人も無し。（五）』おさん冷しき目の中にて、助作をはッたとにらみ、「ェ、さもしい土百性。おのれ少しの欲にめでて、よう訴人しおッたな。申し殿樣あいつに八百目の銀を預け置きました。かうなッた身に金銀はいらねども、是は親のなさけの銀。京へのぼして黑谷へ、上げて下されませ」と、言ひもきらぬに助作にが〳〵しき顏付きにて、「ア、恐ろしい女め。いつおのれに。粒三文も借ッた覺えは無い。五十日ばかり家借して、宿賃の米の味噌のと算用したらば、二三百目もくる筈ぢや。八百目あづけたとはいきがたりめ」と、あらがふ所を茂兵衛繩取り引ッ立つ助作が横腹はッたと蹴倒し、「是式のめくさり銀、おのれ風情に佯りを言はうか。よい〳〵。おのれに呉れた。八百目の銀うぬが根性相應に、現世は長者と悅んで、閻魔の前で算用せい」と、面骨三つ四つ踏み付け〳〵、さらぬ顏にて居たりけり。（六）』斯くと聞くより助右衛門嬉しげに走り付き、「私は此度お願ひ申しあげし、御領内助作がいとこ、京大經師以春手代助右衛門と申す者。御苦勞千萬に、おさん茂兵衛御からめ下され、我々主從本望大悅仕る。繩付き二人請取り早々のぼり申したし、お渡しなされ。下され」と謹んで述べければ、役人氣色をかへ、「そいつ引きのけ。推參至極な。繩付きを渡せとは。おのれに頼まれ取りはせぬ。京都より解狀によッてからめ取る。すぐに京の牢屋へ引き渡す。殊に段段せんぎ有るもの。慮外をぬかしたらおのれも共に、からめる」

ふ」と同じく惡日。○ひめはじめ　陰暦の語。正月、ひめ(縻)を供へるに吉といふ日。又の義は馬の乘り初めに吉といふ日。ここでは始めて新枕を交はす事の義。○きそはじめ　着衣始めの義。陰暦で、始めて新衣を着するに吉といふ日。○くらびらき　陰暦で正月十一日の稱。商家此日まで庫を開かず、此日始めて儀式を張ッて庫を開き、商賣を行ひ始めた。ここでは駒の「鞍」から掛けた。○天一天上の五すゐ八專　別に引き掛かる意味も無く、只句調で暦の語を用ゐただけに止まッた句。拙極はまる。八專と出した所でやうやく「ま日」と出した。

と叱られて助右衛門、もみ手をして退く所へ赤松梅龍、早駕にて駈け付け、首桶ひッさげつか〳〵と出で、われらは大經師以春が下女、玉と申す者のうけ人すなはち伯父、赤松梅龍と申すもの。此たびおさん茂兵衛かけおちの事、ゆめ〳〵兩人の不義は無く、此玉がよしなきことばを聞きちがへ、嫉妬の心あまッて、間ちがひのあやまりにて、思はず不義の虚名を取る事、せんずる所玉めが口からなすわざ。科人は一人、すなはち玉が首討ッて參るからは、兩人の命御たすけ下さるべし」と蓋を取れば玉が首。おさん茂兵衛は一目見て、「はや先だッたか果敢無や」と、きえ〴〵とこり成りにけれ。代官の役人手を打ッて、「ハア、早まられた梅龍。此兩人のめしうどは、科の實否定まらず、京都に於いて中立ちの女、其玉を證據にせんぎあらば、事の次第あきらかにあらはれ、兩三人共に助かる事も有るべき物を、肝心要證據人の首をうッて、何を證據にせんぎ有るべきしるべもなし。殘念〳〵。二人の罪過極ッたり、首も一所に京都へわたせ。早々罪人引きませい」。「うけたまはる」とひッ立つれば梅龍つッ立ちじだんだふみ、「ヱヽ〳〵はやまッた。しそんじた。七十に及ぶ梅龍が、でかしだてして一生のあやまり。むざ〳〵と腹切るもひとり物に狂ふに似たり。相手がな欲しやなあ。ヤア助右衛門よい相手、おのれを切ッて人を殺したあやまりと、共に罪科に行はれん」と、するり抜いて打ち付くれば、まつかうをしてやられ、あけに成ッて逃げたりけり。「首を取らずに置かうか」と、かけ出づるを大勢取り付き、「狼藉させぬ。粗忽させぬ」と抱きとむる。「狼藉合點ぢや。はなせ〳〵」と駈け出すも、とまるは老いの力にて、とまらぬものは科人を、引きゆく駒も目になみだ。轡にかゝるし

八專は雨の降る節の稱で、十二日有り、其中八日を純粹の八專とし、別に四日を「まび(間日)」即ち純粹の八專で無い日と定めてある。「まびも無し」は此所では運命が迫ッて隙間も無いとの義。○かん日　坎日と書く。陰暦で、外出を忌む日。○さだむ因果　「さだむ」は暦の中段の語。物事を定めるのに吉といふ。ここでは「定まる」の義に用ゐた。○くろ日　陰暦で、黒星の付く日の稱。ここでは「苦勞」の義に通はせた。○二季の彼岸　彼岸は暦の節の稱。春秋二季にある。ここでは佛經の語、未來の世やがて出るべき所を彼岸といふ所から其

ら泡の哀れを殘す……(七)』

道行乘合靮

騎る人も騎せたる駒もつひに行く、道とは知れど最期日の、けふかあすかの我身には、我のみ消ゆる心地して、あまたの人の命乞ひ、それを杖とも柱ごよみの紙破れて、むかふそなたは都の惠方。ふたりが身には金神と、思ひ返せば胸ふさがり、月ふさがりの駒の足。隙行く駒の世のたとへ。八十八夜は及びなき、年は十九と廿五の、名殘の霜と見あぐれば、空に知られぬ露の雨、はら〳〵ほろ〳〵繩めに傳ひ、鞍つぼにつたふ涙の十方ぐれ、なく〳〵ひかれ行くすがた、よその見る目も哀れなり。(一)』人目盗みてあらはれて、不義ぢやのなんのかのへ申、今日はあしたのきのへ子と、知らであふ夜の其むくい、世上の口にうたはれて、合はせて見てもあはぬ中。丸いをごけに角のふた。まを績みためて綯ひまぜて、今は我身のしばりなは。そしりを受けん情なや。おさん茂兵衛に言ふやうは、「よしなき女の悋氣ゆゑ、何の科無きそなたまで、あれ不義者とあやふ日、遂に命のほろぶ日、ゆどの始めに身を清め、新枕せし姫始め。かのきそ始め引きかへて、引かるゝ駒のくらびらき。思へば天一天上の、五すゐ八せんま日も無し。只何事もかん日」と、聲も涙に搔きくるゝ。茂兵衛やう〳〵顔をあげ、「こはおろかなりおさん樣。火に入り水に入る事も、さだむ因果とあきらめて、せめて未來のくろ日をのがれ、二季の彼岸にいたらんと、念じ給へや南無阿彌陀、南無阿彌陀ぶを帆にあげて、共に弘誓の船乘りよし、ぐれんの井戸ほり焦熱の、地獄の釜ぬりよしなや」と、急がぬ道をいつの間に、こ

義に用ゐた。弘誓の舟に乘ッて彼岸に到るとの趣きが佛經にある所から、其下に「弘誓」云云と出した。
○船のりよし　陰暦で、船のりに吉といふ日。暦のはゞめに記してある語。弘誓を承けて用ゐた。
○ぐれん　紅蓮と書く。もと佛經の語。地獄界の一。
○井戸ほり　「船のりよし」と同ゑく、井戸ほりに吉とて昔しの暦に書いてあッた語。
○地獄の釜ぬりよしなや　「釜塗りよし」は「井戸ほり」と同ゑく、竈を塗るに吉と昔しの暦に書いてあッた語。ここでは「地獄」を承け、「ぬりよし」から直に「よしなや」と掛けた。
○死出の田長　杜鵑の異名。「死出の山」の同聲から「死出の田長」と出した。杜鵑の鳴く頃田を刈るとの縁から「田がりよし」と出した。
○田がりよし　昔しの暦の語。田を耕す事の吉といふ日。昔しの暦のはゞめに記してあッた。
○ちいみ　血忌みと書く。昔しの暦の下段の語。結婚、鍼灸、雇人などに忌む日。
(三)わうまう日、はんげしやう、寒の入り、爪取りよし、金性、土性、木性、ひらく日、くゑ日、かのこ、嫁取りよし、元服よし　共に皆暦又は三世相の縁語。
○わうまう日　往亡日と書く。暦の語。ここでは苦思に「逢ふ」と掛けた。
○はんげしやう

ゆる我身の死出の山、死出の田長の田がりよし、野邊よりさきを見渡せば、過ぎし冬至の冬がれの、木の間〳〵にちら〳〵と、拔き身の鎗の恐しや、「あれでそなたの身をつくか」。「是でそもじを殺かや」。ちいみも今はいつはりと、二人は顔を打ち合はせ、くどきこがれて泣く涙。馬の尾がみや浸すらん。(二)』　またさえ返る夕嵐。雪の松原此世から、かかる苦限にわうまう日、島田亂れてはら〳〵〳〵。顔にはいつのはんげしやう。しばられし手のつめたさは、我身一つの寒の入り。涙ぞゆびのつめ取よし、袖に氷をむすびけり。つく〴〵物を案ずるに、我は釼の金性の刃にかかる約束か。わしは土性墓の土、何とてはかにうづまれず、つひに木性の木の空に、かばねをさらし、名をさらし、なんど小歌に作られて、強きおきめに粟田口。けあげの水に名を流す。おさん茂兵衛が新聖靈。耻づかしながら手向け草、おなじ罪科の下女が名の、玉は冥途に通へども、魂魄此世にとどまッて、共に浮き名はくだすとも、冥途は主從一途にて、娑婆で手なれし玉がわざ、無間の釜で茶をわかし、ゆききの人の回香請け、我身の悟りひらく日。ア、なげくまじ今更に、何くよ〳〵とくゑ日の、悔やむもよしな引きよせて、結べば露の命にて、とくればもとの道芝に、やがてゐのこや五里六里、十しも過ぎて是ぞ此、小川通は三途の川。籠の町さへ近付くは、見物群衆とり〴〵の、こよみが噂繰りかへす。思へばわしが嫁取りよし、我が昔のげんぶくよしの、日とりもよしや蘆に鷺。裾の模樣も繪にうつし、筆につらねて末の世に、かたりつづけて聞き及ぶ、道順夫婦群衆の中を押しわけ〳〵、「おかせるつみが重ければ、又慈悲といふ名がおもし。はりつけにも獄門にも此ぢいばばを替はりに立て、二人を助け下され、やれおさん、可愛や」と、すがり付けば警固の者、寄ッたらぶつと追ひはらふ。黒谷の東岸和尚衣の袖をまくりあげ、韋駄天の如く飛び來り、「出家に棒をあてたらば、五ぎやくざい〳〵。サア　おさん茂兵衛。此東岸和尚がたすけた」と、持ッたる衣を打ちかけ〳〵ひぢを張ッて立ち給ふ、役人頭腹を立て、「罪科極ッたる囚人を助くるとは、上をかろしめたる御坊のしかた。叶はぬ〳〵。それ衣ひッぱげ」と、どッとよれば、「ア、是々、出家侍ひさとりは同前。助くるといふ義理三は世に渡る衣の德。愚僧が念願相叶ひ、二人が命下さるれは、是現世をたすかる衣の德。もし又罪に沈んでも、愚僧が弟子になすからは、未來をたすかる衣の德。未來でも現世でも救かるといふ文字二つは無し。サア　助けた」と呼ばはる聲、諸人わッと感ずる聲。道順夫婦の悦びの、聲は盡きせず萬年暦、むかしこよみ新暦、當年未の初暦、めでたく開き始めける。(三)』

〔總評〕　此一曲實に近松翁の傑作の一で、遙かに等倫から抽んでた。主人以春が下女の玉に戀慕する所、猫から直ちに轉じて筆行き輕く、而も此戀慕の一條が後の大混雜を釀す抑もの起原だけ頗る際立たせて拔け目が無い。下女どもが猫に就いて喋喋する所、まことに婦女子の情をよく描いて遺憾は無く、姑の入來の邊まで應接に遑の無い程の自由な筆であッた。阿三の請ひに男で茂兵衛が引き受け、終に敵役助右衛門に發かれ、肝を据ゑて阿三に頼まれた事を明かさず、意外に玉に中裁せられ、それが元で阿三が玉の寢所へ至り、終に豫想外の結果となる所、一點の無理も無く、蠶が絲を吐くやうな、それからそれと自由を極はめた。

半夏生を書く。陰暦の節の名。
○寒の入り　暦の語。小寒の節になる事の初。
○つめ取りよし　爪を取るに吉との日。陰暦のはじめに記してあッた。
○ひらく日　陰暦中段の語。建などが開くとの日。ここでは、悟りを開くとの義。
○ふた日　陰暦の語。ここでは「侮い」に掛けた。
○侮やむもよしな　「よしな」は「由無し」の略。
○ゐのこ　亥猪と書く。陰暦で、ゐのこの餅を供へる冬の儀式。ここでは「居る」と掛けた。
○嫁取りよし、元服よし　共に陰暦の語。
○萬年暦、むかしとよみ、新暦、初暦　全體が暦の筋ゆゑ暦で結んだ。

講釋師梅龍、其理屈ばる所、よく人物の風采を現し、之に對して助右衛門口前ばかりの強さも宛然好物の本相を盡くした。阿三茂兵衛兩人が阿三の親に面會する所は非凡の出來、一言も無い。父母其人は髮はッても愛同じ趣きを書き變へて巧みに示した筆行き、息もつかれぬ妙致が有る。「血筋が結ぶ親子のちぎり」から中の卷の終りまでは實に此妙境の要所で、一言一句として金玉で無いのは無い。

下の卷のはじめでは中の卷の悲哀を承けて萬歳の滑稽を示し、直ちに其萬歳に見知られたといふ所から種種の混雜を續出させた。助作を助右衛門の弟といふのは簡畧に人物を理解させる無比の手段で、梅龍が玉の首を取ッたのは其人物の剛毅な處を實にして示し、前と相應じさせた。

道行の文句は至妙のものでもないが、巧みではあッた。他と局面を變へ、必死に臨んで案外に命の免された趣向、やや無理な叙事も有るが、大目にも見られる。

要するに曲全體から言ッて此曲は翁の作中屈指の列には確かに入る。文の妙に至ッては道行きの段は「曾根崎心中」より劣る。

堀川波の鼓

上の卷

●上の卷

（一）扨も行平三歳が程　むかし行平朝臣が須磨の浦に遊ばれた頃、鹽の姉妹を寵愛し、之に松風村雨の名を命じて手許に付けられたとの故事を叙したもの。
○ゆふだすき　「言ふ」から掛けた。
○濡れもの　「雫」の縁。卑な人の義。

扨も行平三歳がほど、御徒然の御舟遊び。月に心は須磨の浦。夜鹽を運ぶ海士處女に、姉妹撰ばれ參らせつゝ、折りにふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るゝ須磨の海士の、鹽燒衣色かへて、かとりの衣の空燻きなり。夫は鹽燒くあま衣、是は夫の江戸詰めの、留守の仕事の張り物や、妹のお藤は折りよくも、幸ひの里歸り、「サア手傳ひ」と木綿襷。糊つけ絞る兄弟の、袖乾した風俗は、國に名とりの濡れ者と、聞こえしもさる事ぞかし。「いやなうお藤。必ずお主の氣に入ッて、いつまでも奉公しや。男やなんぞ持ちやんなや」。身につみてこそ知られたれ。彦九郎殿とは樣子ある夫婦故、嫁入の時の嬉しさは、譬へん方もなかりしが、小身者の悲しさは、隔年のお江戸詰め、お國に居ては毎日の御城詰、月に十日の宿直番、夫婦らしうしッぽりと、いつ語らひし夜半もなし。然れども主は侍ひ氣。斯う勉めねば侍ひの、立身がならぬとて、心づようは言ひながら、去年六月の江戸立ちには、又來年の五月にお供して、下るまでは逢はれぬぞや。無事で居よ。よう留守せよとの貌つきが、目にちろ〳〵と見るやうで、ほんに忘るゝ隙もない。不斷戀ひしてゐるやうで、いつか〳〵とまつの木に、衣張結び細引きの、ゆふて思ひや晴らすらん。（二）』妹のお藤打ち笑ひ、「姉樣それは榮耀ぢや。私がやうに根から男のない身でさへ、見ん事堪忍しますぞや。殊にお屋敷行

（二）勘忍　元祿時代の通用語。辛抱。
○まつの木　「待つ」から掛けた。

義づよく、此様な親里でも、一夜泊りも法度なり。姉様なら死なしやんせう。人が聞いたら笑ひなしよ。アレ奥に皷の譽古がある。高い聲さッしやるな。しッし〳〵」を張り物に、かいまみ覗く皷の手に、心も乗りて連れ合ひを、虚の空なる戀ひ衣、松に打ち繋け干す内に、曲も終りの懸け聲。ヤア籠こそ今は仇なれ是なくば。忘るゝ隙もありなんと。讀みしも理りや猶思ひこそは深けれ。(二)』「あら嬉しや。あれ連れ合ひのお歸りぞや。いで〳〵迎ひに參らう」と走り寄れば、「コレ姉様。エ、正體ない彼は庭の松の木よ。彦九郎様は江戸にぢやわいの。氣が狂ふたか」と耻ぢしむれば、「エ、愚なお藤。なんの氣が狂はうぞ。男の留守の徒然の、切ての心慰みに、爰は所も因幡の國。松としきかば歸り來んと。謳ひつ皷の頼もしさ。あらたのもしの御哥や、立ち別れ因幡の山の峯におふる、まつとしきかば今歸り來ん。夫はいなばの遠山松、これは懐かし君茲に、須磨の浦端の松の行平。立ち歸りこば我も小蔭に、いざ立ち寄りて、磯馴松の懐かしや。松に吹き來る風も狂して、夫の留守居の淋しき折りから、皷に心を慰さむなり。吾妻戻りも早近々の、風の便りの風もすずしの絹袴。洗ひて春の閑なる、影に程なく干上りて、物干竿の、よい仕事して嬉しやな。江戸の男を是からは、松風きかん」とののめきける。(三)』一子文六奥よりも、「コレ申し母じや人。内々御聞きなされたる皷の御師匠。宮地源右衛門様呉今譽古も御仕舞ひなり。次手ながら知人に、御なりもや」とぞ申しける。「オ、然れば〳〵。先刻より然は思ひしかども、張り物にしかかりて遅ばり參らせし」と、襷も解いて身繕ひ、座敷にこそは出でにけれ。源右衛門膝を正し、「我等は京都堀川下立賣りに住ひの者。

(二)前から續いて此寡婦が夫を慕ふ事の切なるを叙した。皷の唱歌につれていよ〳〵思ひを増した體。
○松とし聞かば歸り來ん　百人一首にも見える古歌、「たちわかれ、いなばの山の峯に生ふる松とし聞かば今歸りこん」から來た句。それに破題の行平の故事をかちませた。
○君ここにすゑここに「住み」を掛けた。

御家中の方々へ、皷の指南仕り、ゆく〳〵は御奉公の望みも叶ふべき樣子により、折り折り御當地へ罷り下り、壹年半年五ヶ月三ヶ月、逗留仕り候へども、未だお連れ合ひ彦九郎殿には、御近付きにも成り申さず、此頃御子息文六殿皷御所望に付、師弟の契約致せしが、中〳〵御器用千萬。嘸お袋の御滿足推量致し候」と、慇懃にこそ申しけれ。女房會釋し、にッこと笑ひ、「母と仰せ候へば、彦九郎も私も年寄りに聞こえ候ふが、もと此者は我等が實の弟を、連れ合ひ養子に致されまし、僅か御扶持の小身者。先只今は御家中の、然る方へ預け置いて候ふが、何とぞ御師匠樣の御世話にて、皷の一番も拍ち習はせ、御直の御奉公に出し度きとの念願にて、連れ合ひ留守の内なれ共、祖父御が御頼み申されたり。此五月には連れ合ひも御供にて歸られん。其時分は一番も、拍ッて父御に聽かするやうに。一しほ頼みあげます」と、挨拶差配しと〳〵と、物やはらかで屹として、姿なら面體なら、京のどなたの奥樣にも、誰が否とは因幡山、國育ちとは思はれず。(四)』妹お藤も立ち出でて、「私は藤と申して、是なる者の妹にて、御家中に奉公勤め參らすが、文六に御念頃、お嬉しうこそおはしませ。姉の連合彦九郎殿、留守の事なり小身なり、間所とても無き儘に、洗濯萬に至るまで、斯樣に親の所にて、致す譯にて候へば、文六皷の譽古まで、此所にては何事も、御不自由に候はん。彦九郎殿が戻られては、内へも申し入られましよ。ソレお盃でも持てこいやい。父樣はお留守か、獨り女子がはいでなりや。お客が一人あッても不都合な事ばかりの。ア、ほんにえへえへ。お羞づかしや」と會釋する、日元は姉に劣らじな。「いや何もお構ひなさるるな」と、挨拶とり〴〵なる内に、下女は心得酒肴、取り揃

へてぞ出だしける。女房お種は酒好きにて「オ、是は氣が付いた。浪人の親なればお肴はなくとも、お慰みに一つ」と言へば「御用もあらんに。近頃是は忝し。まづ夫より」。「いや其方よりお辭義なし」。「然らば文六殿より」と、言へども流石酒好み、手まづさへぎる盃の「毋甲斐に私から。お燗を見て」と引き受けてさらりと干し、文六にぞ酌しにける。「我等は嘗て飲ぬ」とて、ちよッと飲んで「お師匠へ、慮外ながら」と禮をなす。源右衛門戴きて、素より上戸の家の者。舌皷たん〳〵〳〵と打ち、「ッヽ〳〵。天晴御酒かな〳〵。拙者も深うは下されぬが、少し御酒を好む故、方々吟味致せども、是には中々京酒も及びなし。色よし香よし風味よし。御亭主樣の御心まで、御懷かしう候」と、酒挨拶の客振りの、よきも過ぎては仇となる、先の見えざるうたてさよ。「直に是を文六殿、返盞申す」と言ひければ、「爰は毋がおさへまし、あひを致してあげませう」と、又引き受けてついと飲し、「酒が御氣にいッたらば、一つ飲ッて下さんせ」と、置かせもあへず盞取り、「何が拔下されん」と、たんぶと請ひて一息のみ、文六にぞ戻しける。今度もちよッと口付けて、「憚りながら、伯母樣へ上げませう」と酌する所を、「はてさて如何に呑めぬとて、余り素氣ない。一つ呑みや。毋があひを仕ませう」と、たぶ〳〵受けてつッと干し。「毋の身で我子のあひを賴みます」と、又源右衛門にぞ酌しにける。「扨は御内義樣には、少御用つ重ねませう。ヤアおあひを賴みます」と、目出度上の目出度さに、江戸の父御の名代に、爰はひとおと見請けたり。颯々しき事ながら、お手元見ん」と突き戻す。妹は笑止がり、「いや〳〵深うは飲られず、殊に此頃あてられて、氣色も勝れぬ折り柄なれば、姉樣もう置かしやんせ」と、餌からたッて止むるが、張り合になる上戸の癖。「エイ何言やる。お肴もない酒なれば、呑んであげるが御馳走」と、得手勝手より易へ銚子。客は手皷一曲の、「是では一つ」と酌し巡る。盃とッては天晴な強者の交際。賴みあるなかの酒宴かな。〇五〕」盃數遍傾ける、日も晩景に及びしかば、妹の主人の屋敷より中間來ッて、「コレ申しお藤女郎。迎ひに來ましたか。太義ぢやの。姉樣去らば歸りませう。お客樣へも無禮ながら、儘ならぬ奉公人。又重ねて」と辭義を述べ、暇乞ひして歸りけり。文六もおとなしく「私も旦那の屋敷。今宵は客もある筈なり。お暇申し候はん。祖父忠太夫歸らるゝまで、御師匠樣は此所に、今暫時御座なされ下されい」とぞ申しける。「源右衛門は、兎も角も、さりながらお袋樣と、さしで是には如何なり。あの御座敷へ參らん」と、其座を遠慮し立ちにけり。お種は文六送ッて出で、「是なう其方は內へ一寸立ち寄ッて、祖父樣にお歸りなされ」と申してたも。我も又戻りたい。りんを迎ひにおこしてたも」。「心得ました」とうち答へ、主人の屋敷へ歸りける。〇六〕』

門さし時の町はづれ、女主人の年若き、夫は永の吾妻の留守。心慥かに持つ爲と、一つ過する酒好み、亂れぬ顏もほかつきて、重たき頭撫で懶や、向かふ鏡によせいあり。殿待ち顏の夕べかな。同じ家中の合ひ役人。磯湯床右衛門は病氣とて、江戸供免され在國せしが、下人も連れず潛戸あけ「御見舞ひ申す」とつッと入る。お種はッと鏡を退け「忠太夫は今朝ほどより出られ、御親父に用は無し。和女樣ゆゑ憧れ舟、人目の岩に波堰きて、碎くる磯邊床右衛門。今年

〇あげません「あげませう」の原語。
〇たんぶ　たッぷり。

五）舌つゞみたんたんと　皷の縁の文飾。
〇色よし、香よし　暗に艷な意を含んだ句。

（六）さしで　さしむかひで。

（七）ほかつきて　ぼかついて。
〇よせい　餘情の義。
〇殿まちがほの夕かな　暗に艷な意をまた含む。

お江戸を勤むれば、御加増あるは知れた事。武士の立身振り捨てゝ、虚病を搆へ願ひをあげ、御國に止まるも皆君故と思し召せ。病氣も虚で虚ならず、戀ひが病のお種樣。假の情のお藥をちよッと一服頼みます。拜みます」とぞ抱き締むる。女房少し酒には醉ふ。「エ、嫌らしや面倒や」と、振り放して退きけれども、身の毛も立ちて怖しく、ぢわ〳〵慄ふて居たりしが、「こりや侍ひ畜生め。彦九郎殿とは念頃なり、人間の道に反くと言ひ、御家中の後指。殿樣のお耳に立たば、身躰の破滅となるが知らぬかや。小倉彦九郎が女房ぞ、侍ひの妻なるぞ。推參な事をして、必ず我を恨みやるな。沙汰はせまい。サア歸りや」と、苦々しくも言ひければ、「いや〳〵〳〵。人の譏りも身の耻辱も、思ふて仕舞ふて上の事、よし御承引なきからは、こなたと爰で刺し違へ、上方に流行る心中と、國中に沙汰をさせ、倶に耻を晒さんと、覺悟を極め來りし」と、刀を拔いて胸倉とり、「どうぞ〳〵」と威しける。

（七）』女心の誠と思ひ、犬死にと言ひ無き名を取るも口惜しゝ、誑さばやと分別して、「ム、是は眞實か」。「オ、殿樣の御勘當請け、歩に首打るゝ法もあれ。僞りはない」と云ふ、「扨も嬉しき御心底。何しに無下に致すべき。されども爰は親の家、今戻られては如何なり。明日の夜にても我等が内へ、竊と忍んで下されなば、打解け思ひ晴らさう」と、しとゝ叩ッてぞ誑しける。無智無學の床右衛門、一言に詐されほろりとなり、「忝い御情。此上はあこぎながら、とてもの事に今爰で、ちよッとちよッと」と縋りしを、「聞きわけなや」と逃げ廻る。襖の彼方に源右衛門、鼓を打ッて聲をあげ、「那淫の惡鬼は身を攻めて〳〵、劍の山の上に戀ひしき人は見えたり。嬉しやとて攀ぢ登れば、劍は身を貫す。

○戀ひが病まひの阿種さま　病まひの「種」と掛けた。

（八）ぢやれぢや　戯れである。

（九）だくつき　ごたつき。

○つけざし　酒席の語。差し付けて盃を差す事。

磐石は骨を碎く。こはそも如何に恐ろしや。なう怖ろしや〳〵」。「人が聽いた。そりや〳〵」と、怖されて床右衛門、「今のは何も皆ぢやれぢや。嘘ぢや〳〵」と言ひ捨てゝ、走ッて表へ逃げてけり。

（八）』無慘やお種は氣も据わらず、「羞かしや京の客。今の荒増聞き給ひ、欺して云ふとはそも知らず、心の蔑しみばかりかは、家中一ぱいする人の、世間の沙汰を如何せん。胸のだくつき堪へ兼ねて、下女呼び起し酒の燗。表も閉めてもう寢よと、獨り酒汲み憂さ愁さ、忘るゝ内も忘られぬは、江戸の夫の事ばかり。涙にいとど朧夜の、月さす椽に人音す。「ヤア是は源右衛門樣。お前は那處へお越し」と言へば、「イヤ女中ばかりは遠慮に存じ、罷歸る」と立ち出づる。柚をひかへて、「扨はお前は今の事。御耳に入ッたるかや。勿體なや恐ろしや。彦九郎と云ふ男を持ち、眞實に云ふべきやうは無し。當座の難を逃れんため、欺して申した分の事、御沙汰なされて下されな。偏に頼み參らす」と、手を合はせて泣きければ、源右衛門も詮方なく、「いや聽いたでもなく聽かぬでもなく、余り傍から聽きにくく、謠ひを謳ひ紛ぎらしたり。申しても安大事。拙者は他言致すまいが、錐は袋と外よりの、取沙汰は存ぜぬ」と振り切り出づるを縋りとめ、「然りとは酷い御詞。御身樣も若いとの。我も若い女の身、實の斯うした事聽いても、隱し蔽すは世の情。此分で去せては、私心落ち付かず、云ふまいとある固めの盃、取り換はして」と銚子を取り、濃茶茶碗に丁ど献ぎ、つッと干して又引き受け、半分呑んで酌しければ、「こは奇らしいつけざし」と、押し戴いて呑んだりけり。（九）』お種も余程醉ひはくる。男の手を慥と取り、「コレこな樣。迚も夫ある者のつけざしを、參るからは罪は同罪。何事も沙汰

する事はなるまいぞ」と詰めければ、「いや早斯る迷惑」と、飛んで出づるを抱きつき、「ェ、余り戀ひ知らず。扨もしんきな男や」と、兩手を廻して男の帶。解けばとくる人心。酒と色とに氣も亂れ。互ひに締めつしめられつ、思はず誠の戀ひとなり、「サア此上は今の事、沙汰はならぬが合點か」。「オ、〳〵余所かと思へば我身の上。此事を隱さいで、なんと……」障子を押し明けて、轉寢枕苟の、緣の端又因果の端。うたてかりける契りなり。(一〇)』漸更け渡る時しもあれ、父の成山忠太夫、下人も連れず立ち歸り、門の戸荒く敲いたり。お種はッと耳に入り、酒の醉ひ醒め目も覺めて、我身を見れば帶紐とき、男と添ひし亂れ床。南無三寶淺ましや。床右衛門めが不義の沙汰。世間の口留め爲ん爲に、態と戲れ仕懸けしまで、慥に夫は覺えしが、其後は酒に醉ひ。夢現共わきまへず、酒を禁れと常々に、妹が異見を聽き入れず、我夫ならで一生に、覺えぬ男の肌觸れて、身を汚したか淺ましや。女の罪の第一にて、未來は愚か此世の耻。親兄弟まで名を捨つる、身をいかにせん悲しやな。夢になッてもくれよかし」と、咽び上げてぞ泣きゐたる。歎の音に源右衛門、目を覺し起き上り、是も同じく醉ひまぎれ、男たる身の道を背く。はッとばかりに目を見合はせ、互に「羞かし〳〵」と、面煩氣にも泪ぐみ、差し俯向いてぞ居たりける。(一一)』忠太夫は待ちかねて、猶荒氣なく門叩く。「あれ父樣に見られては、死なねばならず如何せん」と、此所彼所に這ひ隱れ、下女が臥したる夜着の内、狼狽入れば飛び上り、丸躶體にて「喃悲しや。うらが寢た懷ろへ、盜人が這入ッて、雪の肌を荒すわ」と、喚き廻る勢ひに、行燈を踏み倒し、戀ひ路の闇の暗がりと、唄ふは物か是も亦、由なき事の迷ひなり。

(一二)』表は切りに聲を立て、「明けよ〳〵」と叩くにぞ、お種も男も震ひ叫き、後手に袖を引き、我身で男を押し隱し、懸け金明けて、「父樣か。サア御入り」と言ひければ、親にては無かりけり。床右衛門、覗隱し、手を指延べ兩人が、袂を一つにしかと取り、「サア不義者證據をとッたる」と。聲をかくれば南無三寶と、潛戸鐺とさしけれども、捕ッたる袂放さばこそ。詮方なくも源右衛門、腰の脇指するりと拔き、二人の袖下斬り離し、戸を引き明けて逸散に、我が屋をさしてぞ逃去りける。床右衛門は袖下を懷中に捻ぢこんで、戸をこぢ明けて内に入り、「去とは御内儀曲がない。人には免す下紐の、我にはなぜつれないぞ。此事隱してくれならば、今宵のお情頼みます」と、暗がりに手を擴げ、尋ね廻るぞ怖ろしき。立ち舞ふ内に躶身の、下女にはッたと行き當り、「こりやこそ爰に」と抱きあふ。下女は勝手は覺えたり。我寢所へと逃げ行けば、「こは忝し有り難い」と、夜着引ッ被ぎかッぱと臥す。下女はいやがり捻ぢ合ふ間に、「お種樣のお迎ひに、りんが只今參りました」と、提灯ともし來ける。火影にすかし床右衛門。よく〳〵見れば下女子、「エ、勿躰なや。いま〳〵し。鰯で精進おちやうとした」と、跡見歸らず逃げて行く。暗夜のうつゝぞうつくしや。(一三)』

中之卷

扨も見事なおつづら馬や。七つ蒲團に曲录するて、蒲團ばりして小姓衆を乘せて、海道百里をはなでやる。花もさき手の供道具、素鎗片鎌十文字。からのかしらの紅の、衣は紅梅魚は鯛、云ふも管鎗人は武士。奴が今朝の朝酒の、天目さやにかぶろさや。ふれ〳〵ふれや白雪の、富士も淺間も跡に

●中の卷
(一)此一節海道くだりの大名の供行列を叙した。愉快に、花やかな行列ゆゑ、破題の句調も小唄の節にした。即ち「扨も見事

な」から「はなでやる」までは小唄の格。
○おつづら馬　海道くだりに大名が伴ふ馬。背に蒲團を七枚重ね、曲泉をさへ置く。
○はなでやる　花で遣るの義。花を飾つて打たせやるとの義。
○花もさき手　上の句の「花」を受けて、同音を重ね、「さきて（先手）」を「咲き」に掛けた。
○いふも管鎗　口に言ふも「管」である、人の中では武士が第一といふ所から掛けた。
○天目さや　此時代茶碗よりは天目を用ゐて飲み物を飲んだ。天目は今日の丼に似たもので、伴奴が朝酒を呑んださいふ、其酒の縁で天目と出し、直ちに「天目ざや」と轉じた。「天目鞘」は形ち天目に似た鎗の鞘の稱。
○かぶろざや　是また鎗の鞘の一種。
○ふれふれふれや　此句は此時代流行の句で、「降れ降れ小雪、たんばの小雪」といふ歌さへ有る。それらの意で此所でも用ゐた。一方に於いては鞘を「揮る」に掛けた。
○名を望月　名を「持ち」と掛けた。「望月」は駒の一稱。貫之の歌、「あふ坂の關の清水に影見えて今や引くらん望月の駒」から基づく。「關より西」の「關」は此逢坂の關の義。
○風もなぎなた　風も「和ぎ」に掛けた。武士は鎗を立て、醫者や儒者は薙刀を立てた儀式ゆゑ、薙刀を見て

見る。道も長柄の數鎗の、鞘にかゝりし夕告げ鳥。關より西に隱れなき、名を望月の引馬や、轡の音のしやん〳〵りん〳〵しやりりん〳〵と、心拍子に乘りかけは、六番がしら使ひ番。侍大將奏者番、旗大將の跡先に、續きて靡く旗棹の、世時治まり四方め海、波靜かにてあまつ空、風もなぎ刀見えたるは、醫者よ儒者よと物識りも、知らぬもなべて行列に、舌をまく串挾箱、引きもちぎらぬ持弓の、重籐塗りこめ其數は、いざやしら木にそば黑の、弓に靱に矢籠矢箱。二重の覆ひきせながの、其具足櫃甲立て。立ッて程なき東路も、一歳越えし國の留守。七つ何事七つ道具の、臺笠たて笠馬印。これぞと名にし大鳥毛。御めしの駒も乘り換へも、己が古鄕の北風に、勇んで嘶ふ勢ひや。跡におさへの對道具、國久しかろ目出たかろ。さこそ嬉しからう殿。君々たれば臣も又、しん樽の酒ざさんざや。濱松の葉の散り失せず、萬代不易國入りの、國こそ久しかりけらし。（一）』　家中の上下親妻子に、一年ぶりの對面に、彼方此方の悦びづかひ、祝儀土産のとりやり持ち。中間小者に至るまで、ざゞめき渡るぞ賑しき。中にも小倉彦九郎、數年の勤め舊功によッて、東發足の刻抜群の御加增給はり、若黨下人彌增して、一子文六お種兄弟、悦びあふ事限りなし。爰に主人の妹聟、政山三五平と云ふ馬廻り、是も此度歸國なりしが、お種の方へ使ひを立て、「先以て道中何事なく御供にて、久々にて御對面。さぞ御滿足候はん。此方とても同前たり。扨何がな土産と志し候へども、さして變はりし品もなし。是は關東麻とて名物の麻苧。如何しくは候へども御留守の間お種樣、具苧をおうみなさるゝと、道中すがら家中の沙汰。罷歸り承はれば、御當地にても其沙汰故進上致し候」と言ひもあへぬにあなたの是は誰樣より、こなたの是は何兵衛樣、お種樣へのお土産とて、送るにつけても女房は、心にこたへ取り沙汰の、夫の心も付くやとて、顏を見れども、夫は然せる氣もつかず、「それ此方も荷をときて、相應に土産物見合ひて送るべし。ヤア忘れたりまづ舅殿へ參らうぞ。それ〳〵袴」「あい」と云ふて女房は、聽て奥にぞ入りにける。すり違ふて妹のお藤、する〳〵と走り出で、袖に取り付き、「これ彦九郎樣。エ、おまへは曲もない。お江戸まで二度進じた、文の返事はなぜなされぬ。私心は猶此文に細さの事。分別きはめ書きましたれば、否でも應でも合點してもらはねばなりませぬ」と、封ぜし一通姉聟の懷ろに押し入るる。彦九郎苦い顏して、「ヤア其方は狂氣めさッたか。尤も姉を呼ぶ時分、其方の談合もあッたれども、緣なければこそ姉と夫婦と定まりて、十何年と云ふ年月を重ね、子まで養ひ置いたる中を、いかほどに思はれうが、去ッて其方に添はんとは此彦九郎は得申さぬ。斯樣な文は手にも取らぬ」と、投げ付け表に出でにける。姉のお種奥より見て、つか〳〵と出で、文を拾ふて懷中す。「いや其文は大事の文、人には見せぬ」と取り付くを、礑と蹴倒し棕櫚箒木おッとッて、散々に打ち伏する。「あれよ〳〵」と云ふ聲に、文六下女共駈け付けて、「何事か存ぜねども、御勘忍」と縋り付き、箒を擇れば、荷物に附しはなねぢ引きぬき、顏も頭も破れてのけと、連け打ちにぞ打ッたりける。お藤は聲あげ「なう痛や死ぬるわなう。助けてたべ」と泣き叫ぶ。文六はなねぢに取り付き、「コレ母樣。いか樣の事か存ぜねども、詞にてお叱りもあるべきに、荒氣なき打擲。叔母樣目でも眩ふたらば、何と言ひ譯なされん」と、苦〳〵しく言ひければ、「イヤ打ち殺しても大事

ない。姉の夫に執心懸け、江戸まで文を遣ッたるを、たッた今慥に聞き、今も拾ふた是見よ」と、封じめ引き切りさッと明け、「是が嘘かある事か、姉を去ッて暇をやり、私が夫婦になろと、生爪放して入れたる文。是が嘘か讀んで見よ。えゝ憎くや腹立ち」と、飛び懸かり、髻を取ッてくる〳〵と、手に捲まいて膝に敷き、「親にも子にも換へじと思ふ、稚馴染の我夫。一年隔てし永の留守、月よ星よと待ちうけて、漸々と今朝殿御の貌、見たぞ嬉しや來年までは、一つに寢臥もせうものと、悦ぶ矢先におのれめは、姉を去れの離別のとは、ようも云ッた畜生面。生けておくも腹立ちや」と、目鼻も別ず打ち叩く。「なう是には言ひ譯だん〳〵あり、取りさへてたべ人々喃。息も絶ゆる」と叫ぶにぞ、「先言ひ譯を御聽き」と達てさゆれば姉お種、「サア〳〵言ひ分けが立たぬからは、此度は命を取る。言ひ譯あらばして見よ」と、とッて引き立て突退けしは、斷り道理至極なり。(二)』 妹苦しき息をつぎ、亂れし髪を搔き撫で〳〵、涙をおさへ、「此言ひ分けは姉様と、差し向かひに云ふ事ぞ。皆々次ぎへ」と言ひければ、何れも立ッてぞ退きにける。「ヤア仔細らしうせずとも、言ひ譯を聽かん」と言へば、妹涙をはら〳〵と流し、「コレ姉様自らが彦九郎様へ狀を付け、姉様去ッて下されと、言ふてやッたは姉孝行。こなたの命が助けたさよ。云ふに及ばず覺えが有らう。皷の師匠源右衛門と、念頃してござらぬか」と、云ふ所を飛び懸かり、口を押さへ「コレ默りや。假初ながらやす大事。何を見て然は云ふぞ。證據を出せ」と言ひければ。「オ、證據までもない事よ。此腹には四月になる、子は誰が子にて候ふぞ。下女の林に買はせられし、下し藥は誰呑むぞ。人は知らぬやうなれど、家中一ぱい是沙汰で、今も今と

髻者か儒者かといふ意。
○重藤　弓の名。藤を繁く卷いたもの。
○そは黒　弓の一種。縁ゝ黒漆をかけたもの。
○甲だて　甲を掛ける具。
○名にし大鳥毛、名にし「負ふ」と掛けた。大鳥毛は駒の毛色。
○北風に勇んで「越鳥巣南枝、胡馬嘶北風」の古語に基づいた句。
○しん樽　新樽の義。「臣たる」と掛けた。
○ざざんざや　さざめき興する意。「ささ」を承けた同聲の飾り。
(二)とりやり持ち　「とりやり」から「鎗持ち」に掛け、下の「中間」を呼び出す。

て方々から、麻苧の土産に來りしも、彦九郎様に知らせの爲、鼎屓の方から氣をつけに、來たものなりと私は見た。こなた一人で親兄弟、男の武士まで廢ッた」と、聲を上げて泣きければ、姉は兎角の詞もなく、常の異見を聽かざりし、酒が敵とばかりにて、泣くより外の事ぞなき。(三)』 妹せき來る涙を抑へ、「なう其悔やみがもう半年遲かッた。此妹が心の物思ひ、最早姉の名はすたる。切て命が助けたやと、とり〴〵様〴〵思案して、彦九郎様との縁切れて、暇の狀さへ遣らせなば、海道の眞中で産ませても大事ない。命に障りはない筈と、果敢ない女子の思案から、姉の男に熱心と、淫奔者に身をなしたも、姉様ばかりの孝行ならず、お果てなされた母様へ、孝行と思ふゆゑぞとよ。おいとしや母様の、御臨終の二日前、兩人を枕の右左。遺言のお詞を、よもや忘れはなされまい。其方等二人は幼いから、女子の道を敎へ込み、讀み書き縫ひ針糸綿の道も、それでは耻ぢ搔かず。第一女子の嗜みは、殿御もッてが大事ぞや。舅は親ぞ小舅は、兄よ姉よと孝をなせ。外の男と差し向かひ、貌をも擡げて見ぬものぞや。惣じて夫の留守の中、男とあらば召し使ひ、一門他人おしなべて、年寄り若いの別てなく、此嗜が悪ければ、四書五經を宙で讀む、女子でも役に立たぬぞや。此遺言をそち達が、論語と思ふて忘るるなとの、御詞が骨に徹み肝に殘ッて得忘れぬ。姉は父御のそんをつぎ、後紐から酒を呑む。藤よ母になり換はり、異見をせよと其跡は、早息ぎれの窶れ顔、身に付き添ッて忘られず、朝夕位牌に向かへども、此遺言をお經と思ひ、一遍づつは繰ッて見る。姉様は早忘れてか、此世の妹に歎をかけ、來世に御在る母様の、屍に苦患が掛かるわ」と、口説きつ恨つ聲をあげ、伏し沈み

(四)そんをつぎ　「そん」本義未詳。
○うしろ紐　幼少の義。幼年には附け紐を衣の後ろに付ける故。

て泣き居たる。姉は詞も涙にむせび、好みし酒も今思へば、前世の業の毒の酒。無明の酒の酔ひさめて、自害せんと思ひしが、夫の顔を今一度、見たい〳〵と思ふより、今日と延び、翌日と暮れ、世間に恥を晒す事、我身に悪魔の魅入かと、返らぬ愚痴の繰り言に、兄弟縋り抱きあひ、聲を惜しまず歎いたる、世に是非もなく哀なり。(四)』時に門外喧がしく、口論有るか先習しと、兄弟奥に入りければ、彦九郎妹のゆらは、長刀をとりのべて、兄彦九郎を追ひ懸け来り、「コレ兄様、妹とは言ひながら、政山三五平と云ふ侍ひの妻なれば、義の立たぬ事あれば、兄とても免されず。いかに、いかに」と申しける。彦九郎確と睨み、「ヤアこざかしき女郎めが。兄彦九郎に向かッて、義の立たぬとは推参千萬。仔細を言せ言さずば長刀持ッたる腕ぽしともに、捻お折ッて呉れんず」と、大きに憤ッて言ひければ、ゆらから〳〵と笑ひ、「ヤアしほらしい腰抜け殿。様子を云ふて聞かせ申さん。こなたの内儀は藏の師匠、京の宮地源右衛門と密通して、御家中此沙汰まッ最中。それ故土産に麻苧を遣はし、氣を付けても女敵をも得討たず、聽かぬす顔る腰抜の彦九郎。其妹とは添ひ難し」と、夫の政山三五平、我に暇をくれられて、兄が腰が立ッたらば、其時は立ち歸れ、元の如く夫婦にならんと、離別して来たッたり。是腰抜の兄御。わが夫に添はせうか添はせぬか。其方の一心一つぞ」と、長刀取り延べ閃かし、弛ば切らんず勢ひなり(五)』彦九郎横手を打ッて、「ヤ、是は珍事を聽くものかな。其源右衛門とやらん、音には聞けども面は見ず、遂に家内へ出入りせず、證據やある」と問ひければ、「ヤ、三五平ほどの者が、證據を取らで云ふべきか。即ち朋輩磯邊床右衛門。氣色を見てとり、見舞ひにもてな

し、兩人忍び合ひたる夜の、兩袖切ッて取ッたるが、御家中取沙汰ある上は、隠しても隠されず、いかに朋輩の念頃とて、直には此事知らされず、夫の三五平殿に注進ある。コレ御覽ぜ」と懐中より、二人の袂を投げ出だし、「是にも何と疑ひか」と、色をちがへて申しける。彦九郎取りあげ見て、「男の袖は知らねども、女の衣裳に覺えあり。こりや妹。たッた今其方が、恥辱を雪いで得させんず。此方へ來れ」と打ち連れて、座敷にこそは還りけれ。家内の上下是を聞き、鳴りをひッそと靜めし時、主人少しも騒がず、「女房共來れ。悴文六來れ」と、詞少なに呼びければ、何れもすはや大事ぞと、そろ〳〵夫の前に出で、頭を下げて居たりしは、身も冷え渡り魂消え、息を閉ぢたるその中に、無疵や種は心にも、巧まぬ不慮の悪縁の、身の錆刀夫の手で、刃に掛かるは覺悟の前。頓て遂ばんと永の留守、辛抱盡くせし甲斐もなく、去年發足の前の夜の、枕が限りの枕とは、今殺さるゝ今までも、思はざりしと思ふにも、今一度夫の顔見たやとは思へども、涙にくれて目も開かず、差し俯向いてぞ泣き居たる。主人兩袖投げ出だし、「妹ゆらが言ひ分、定めて何れも聞きつらん。女言ひ譯ないかいやい。ヤ、さこそ〳〵返答はあるまじき。扨不義は中立ち同罪たり。藤は中立ち知らぬか」と言へば、「ア、愚なり彦九郎様。中立ちをする程ならば、斯様に恥を見るべきか」と、又さめ〴〵と泣き居たる。「扨は下女めが中立ちならん。其奴呼べと呼び出だせば、がち〳〵〳〵身は震はし、「ア、御勿躰なや。私はなんにも存じませぬ。此間お種様。人に隠して子墮藥を、買ふてくれとおしやりまして、一貼を七分宛、三貼を貳匁壹分で買ふて參ッたばッかり。然りながら旦那様のお聞きなされた

ら、高い物を買ふたと叱られうかと思ふて、錢はしかけでやりました」と、何を云ふやら譯もなし。彦九郎はッと愕き、「扨は懷胎仕たるか。やい文六、おのれ若年なれども是程家中の沙汰といひ、何として源右衛門、疾に討ッては捨てざるぞ」。「いや我等も今朝承はり、家來どもに申し付け、渠が旅宿へ討手に遣し候へば、二三日以前に京都へ歸り候」と言へば、「ム、是非に及ばず。それ持佛堂に火を灯せ、女立て。持佛へ來れ」と言ひければ、女房泪を押しのごひ、「未來の末の後の世まで、御憎しみのあるべきに、持佛堂へ參れとは、流石馴染の御情。いつの世にかは忘るべき。其の御心を此年月、知ッて愛しき我夫を、袖にしての不義では無し。夢見たやうな身の上の、間に憎い奴もあれど、いへば卑怯の未練の死。夫の刀の先するは、如何とは存ずれども、是は我身の言ひ譯なり。免してくだされ。コレ御覽せ」と、胸押し開けば九寸五分、膽さきに切羽まで、刺し貫してぞ居たりける。哀れなりける覺悟なり。(六)』 藤文六はあッとばかり涙は胸にせき來れど、萎れぬ主人の顏に耻ぢ、齒をくひしばり歎きゐる。彦九郎刀を拔き、取ッて引き寄せ、ぐッと刺し返す刀に止をさし、死骸おしやり刀を拭ひ、しづ〳〵仕舞ふて立ッたりし、武士の仕方のすゝどさよ。今朝脫捨てし旅衣裳、又おッとッて笠草鞋。刀追ッ把り、「コレ文六。我は是より番頭へ訴へ、御暇申し捨て、直に京都へ馳せ登り、女敵を討つ間、儕は足弱引き連れて、一門方へ立ち退け」と、言ひ捨て出づれば、藤文六、ゆらも同じく引ッ添ふて、倶に行かんとせり合ひたり。彦九郎大の眼に角をたて、「町人風情一人に、おのれらを召し連れて、此彦九郎に彌耻を與ふるか。壹人にても付き來らば、勘當なり」と憤りける。各〳〵一

度にわッと泣き、「それは余りに情なし。我等が爲には姉の敵」、「我爲には母の仇」。「いや我爲には兄娶の、敵を見捨てて置かれうか」。「然りとては連れてたべ」と、三人一所に手を合はせ、聲をあげて泣きければ、夫も今はつゝみかね、勇める容顏悄〳〵と、「さほど母姉兄嫁を、大切に思ふほどならば、など最前に衣をきせ、尼にせんとて命をば、なぜに貰ふてはくれざりし」と、空しき體に抱き付き、わッと叫び入りければ、殘る人々諸共に、泪もつれて立ち出づる、物の哀や武士の、身こそ仇なる慣ひなれ。(七)』

下の卷

寺御幸ふや富柳堺町、相の東は玉敷きの、御垣に搆ふ五つ緒の車、烏丸両が室。衣新釜西小川。油さめが井堀川の、岸の平砂を白波に、照らせば今も夏の夜の、下立賣りのほの〳〵明、六月七日祇園會の、長刀鋒の刄先に、打ちかちどきの鷄鋒と、門出を祝ふ力紙。拳を固め四つ辻に、四人彷徨立ち居たり。常さへ賑ふ上京の、折りしも今日の祭り客。下へ〳〵と朝霧の、ひまに門掃き打ち水の、かかる姿を咎むやと、西と東に行き別れ、立ち憩らへる折りからに、豆腐商ふ商人の、きらずきらずと聲高に、賣る辻占の耳に立つ、心後れとなりやせん。南無三寶と橋詰に、各々寄れば向かふより、白川石を商ひに、賤の嚊らが馬追ひ連れて、連れを呼ぶさへをなじ名の、「お藤や。今日はあきなひ早終ふて、祭りに行かうと氣が急いて、馬に沓さへ打たなんだ」。「ヤ、然れば同じ事。今朝は少し寐過ごして、こちらも沓を打たずに來た。誰も今日は皆打たれぬ。寧そうたずに此分で、とッとと引いて

(七)さほど母姉…くれざりし　義理故に涙を呑んで妻を殺した愛着の胸中此一言に盡くし得て、悲哀の情趣一入深い。
○涙も連れて　奇妙な句。但し斬新。
○物のあはれやもののふの「物の」、「もののふ」、同聲の綾。
●下の卷
(一)寺、御幸、ふや、富、柳、堺　共に京都の町名。「ふや」は鉄屋町。
○玉敷きの御垣　禁裏の御垣。
○五つ緒の車　宮廷用の車。車の簾の縁と編み目の革との間に二條の革の風帶を垂げたもの。
○なぎなた鋒　京都祇園會には薙刀

歸りやいの」と、どッと笑ふて通りける。(一)　京童の口ずさみ、家々ごとに朝もよひ、萬に心もみ瓜を、刻む音さへ比叡の山、峰に響くと傳へたる、洛中の今朝のあながまと、心亂るるばかりなり。中にも藤は小聲になり、「いづれも何と思し召す。最前の豆腐屋が、きらず〳〵と賣ッたるさへ、心に懸かる其上、今の石賣嚊共が、馬の沓が打れぬ。打ずに引いて歸れとは、如何にしても氣懸りなり。其上世間に同じ名の、あるは習ひと言ひながら、折りしも悪う壹人をば、お藤と呼んだは何事ぞ。味方の心後れては、仕損ずるは定のもの。天道よりの御しらせ。又翌日の日もあるものを、今日は延引せまいか」と、言へば皆二の足にぞ成りにける。斯かる所へ西橋詰の髪結床より、さばき髪の若い者、楊枝嚙へて來りしが、友と覺しく行き逢ふたり。「ヤア是は早々から髪も結ずに那處へ」と云ふ。「然ればされば。祭に行く今日の曠。月代剃せにいッたれば、扨も切ッたは〳〵。あら髪剃の刄は、釼。天窓うちを切りちや〳〵くッた。渠奴が手に懸けては、幾人でも切りさうな。是を見よ」と言ひければ、「ハア、切ッたり〳〵。」是で客に行ッたらば、祇園祭ではなうて、軍神の血祭ぢや」と、笑ひてこそは別れけれ。(二)』四人嬉しき辻占の、「今のを聽いたか」。「聽きました」。「ヤア破軍がなほッた。仕濟した」と、漫に笑ふて勇みをなす、心底思ひやられたり。「いざ此運に乘ッて討たん。時刻延ばすな用意せよ」と、帶締め整し身を輕め、内の勝手を知らざれば、爰にて談合無益の沙汰。女二人は堀川おもて、小見世に上ッて障子蹴破りつッと入れ。我々親子は立ち賣りの、門口より中戸を蹴破り込み入るべし。面體を見知らぬぞ。人違へさするな。神妙に意趣を述べ、物の見事に討たんずる。は

鋒の山車を引く。○鷄鋒　同じく祇園會に引く山車の一種。「うち勝ち」から「かちどき」に掛け、「時をつくる」といふ縁から「鷄」に掛けた。すべて此邊祇園會の盛況を叙した。○きらず　豆腐の一名。今日は豆腐がらのみを云ふ。○辻うら　「きらず」といふ音「切らず」と聞こゆる所から、仇を「切らず」と惡い辻うらが立ッたと思はれたとの義。○白川石　京の白川山から出る石。京都で敷き石などに用ゐる。色白く、ざらつき、御影石に似た。○沓さへ打たなんだ　沓を穿かせなかッたの義。此「打つ」が又仇を「擊つ」の辻うらとして利かせ、前の「きらず」と同じに格にした。馬子の子に阿藤といふのも同じ例。すべて一種の趣向の修飾。(二)もみ瓜　今の胡瓜もみ。ここでは氣を「採み」に掛けた。○ひえの山　「冷」に掛けた。○あながま　ああ喧しいとの古言。辻うらなど其他賑はひ過ぎて耳に立つほど喧ましいとの意。○さばき髪　ほぐした儘の髪。○されば　されば云云　此一段また好い辻うらを聞く事になる趣向。(三)破軍がなほッた　破軍は破軍星、勝負を主どるといふ星の名。其星の光りの向かふ方を劍さきと稱へ、其劍さきのさした方角では勝利が爲らぬとの口

やまッて欺し討ち、卑怯などと云はするな。合點か」。「合點ぢや」。「心得たるか」。「心得た」。「ヤア込み入らん」と突ッ立つ所へ、あれ見たか油の小路を此方へさし、らふそく鞘の鎗印、知行ならば三百石。甘余りの若侍、茶宇の袴にもじ肩衣。若黨三人挾箱、對の奴草履取り。十枚のりの付紙臺、足打ち早め敵の門。物まうと云ふも訛り聲。内より下人がどれいと答へ、溝端につくばへば、何かは聞こえず漸暫し、頭をふり廻ッて口上演て、進上臺を差出だせば、下人は受取り腰屈め、其儘内に入りにける。文六天窓をかいて。「エ、拍子に乘ッたる先を折る。如何はせん」と悶きしを「いや〳〵屈する事なかれ。屋敷方か御所方か。囃子を勤めし禮物と見請けたり。返事を聞いて返る分。隙はいるまじ待ッて見よ」と、云ふ内に以前の下人立ち出で、是へと言へる氣色にて、主人内へ入りければ、若黨中間草履取、鎗を軒端に立懸けて、皆々内に入りけるは、事緩かに見えてけり。(三)』外より樣子を窺はんと、立ち寄り見れども中戸を閉め、人音ばかり聞こえし所に、托鉢の道心者。はッち〳〵と門に立つ。下女の聲して「忙がしい通りや」と、きごつなげにも高聲なり。悄然通る法師を呼びかけ、「コレ〳〵御坊。御身が衣の破れまはッて見苦しさよ。此金子を放捨する。新らしいを買ふて夫を是に脱いでいきや。非人に取らせ喜ばせん」と、小判壹兩與ふれば、夢かと思ふ顏つきにて、「ア、是は如來樣」と、頂き頂き伏拜み、「夫なら御意に任せませう」と、古着は脱いでぞ通りける。彦九郎打ち顫ひ、辻なる門の片蔭にて、頭巾引ッ込み阿彌陀笠。上に衣を引ッ張ッて、暖簾の褄よりさし覗き、豫て覺えし普門品、本望遂ぐる身の祈禱。案内撿見の便りとも、力を添へて只賴め。「妙法蓮華

傳。此所では破軍星の劍さきが直ッて、よくなッたとの意。

(四)はッちは　即ち鉢坊主が鉢を叩いて「鉢」と呼ぶ事。

○きとつなげ　今いふ「さとちない」の原語。

○如來さま　坊主だけに如來さまといふ。作者の用意極はめて密。

經觀世音菩薩、普門品第廿五、爾時無盡意菩薩。即從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩。以何因緣名觀世音菩薩」。「ヱ、喧ましい獸りや。遣らう」と走り出る。下女が手の内うらをふて、「申し女郎樣。早々からの御客さうな。誰樣で御座る」と問ひにける。いづれ下部の口まめに、「あれは田舍の御侍ひ。これの旦那殿の鼓の弟子。お國の殿樣から鼓故に御加增があッたげな。是も師匠の御蔭ぢやてて、今度禮に御座ッたが、旦那樣へ銀十枚、內儀樣へ壹步五つ。私等までつらりッと、三百宛あたたなッた。汝身の一日朝から晩まで、咽喉の穴の痛いほど、觀音經を讀みやッたとて、三百は貰やるまい。さらりと經を取り措いて、手鼓なりとも拍ッたがよい。今からでも鼓を拍ちや」と、聞はす詰りの口早に、言ひ捨て內に駈け入りける。(四)』彦九郎打頷き、「樣子は聽いたり。今かッでも、鼓をうてとは吉左右よし」と、皆〳〵呟き勇みける。時を移さず客人は、上下脫いで脇指ばかり、編笠被き只壹人、傍りを忍ぶ風情にて、立賣りを東へ、洞院南へ下りける。人々一所に擧り聚う「是は叶と推量するに、只今の侍が下人共を殘し置き、外に鎗も置きながら其身は是にゐる體にて、祇園會の山鉾を見に行くと覺えたり。七八人の下人共留ッて在るからは、中々容易く討たれ難し。如何はせん」ととりぐ〳〵に、小聲になッて談合す。文六耐へぬ若者の、「斯樣に云ふてはいつまでも、本望遂ぐる時節はあらじ。下郎共あらばあれ、めざす敵は只壹人。助太刀あらば撫で斬りの、それからは運次第。いで切り入らん」と、駈け出づる。「やれ待て思案できたり」と、押し靜めて彦九郎、又門に立ち、緩蹤あげ、「コレ申し顏みませう。先程是より編笠召して、お出でなされた殿達は、山鉾見にがなお出でならん。三條上る室町で、喧嘩しだして大勢に、取り卷かれてござりまず。お知らせ申す」と呼ばりりける。是はしたりと下人共、はら〳〵と駈け出でて、「三條とはどちらへ行くぞ。室町とはどちらへ行く。北か西か」と追ッ取り刀、我劣らじとぞ走りける。「ヤア此方の謀略當たらずと云ふ事なく、運のさかり刻限先勝の時至れり」と、衣脫ぎ捨てふはと捨て、親子の脇指兩人の、女に渡せば心得て、鍔打ちならしばッこんで、鉢卷きりゝしく抱へ帶、からげし膝口しろ〳〵と、小足を踏んで立ッたるは、男優りと言ひつべし。(五)』「南無正八幡大菩薩、神力威力を添へ玉へ」と、心中に祈念して、二人の女は堀川口。親子は立賣り西東へ、立ち別るゝと見えけるが、中戶障子を蹴破ッて、ばら〳〵と駈け入ッたり。思懸なき家內には、下女も下人も「あら怖や」と、裏口さして逃げ出づる。「あれこそ宮地源右衛門」と、お藤に聲をかけられて、安閑たる源右衛門。立ち上ッて二階階子、中端上ッて腰打ちかけ、拳を握り左右を睨んで扣へしに、隙間もあらせず二人の女兩方に引ッ添ふたり。彦九郎大音あげ、「我こそ小倉彦九郎。妻女種と不義の段露顯に仍ッて、女は先月二十七日に刺し殺す。妻敵やらぬ」と聲を掛け、扱き打ちにはたと切る。「左知ッたり」と足をあげ、階子に手をかけえいやッと。二階へ上るを追ッ縋い、上らんとせし所を、源右衛門が女房、かけたる長刀おッとりのべ、上げはたてじと切り結ぶ。下人共は物合ひより、桿棒杖よ箒木よと、支ゆるも枷となり、ためらふ內に源右衛門、むしこより手を出だし、軒に立ッたる鎗おッとり、上り口より差下ろしに、上らば突かんと云ふ儘に、眞下しにぞ突きかけたる。彦九郎哂笑ひ「何のおのれが鼠突き。鼓の

(五)追ひすがい　追ひすがりの轉。

○上げに立てじ　上げはせぬ。

胴こそ握るとも、鎗の柄握る習ひは知らじ。身の好いたる細工鎗、手並を見よ」と、蛭巻よりかッし
と切ッてぞ落しける。「もの〳〵しや」と腕の力、碁盤片手に振り上げて、こりや我は固より武士な
らず、鎗持つすべは知らねども、鼓のお蔭でうつことぞ覚えた。此碁盤請けて見よ」と、狙ひすまして
礑とうち、双六盤将棊盤とッては投げ〳〵、後には火入れ烟草盆、風呂釜茶碗枕箱。ぐわらりとうち
あけ手に觸るを、はらり〳〵と投げたるは唯降る雨の如くにて、寄るべきやうもなき處に、妹のおゆ
ら表へ廻り、辻の門に手をかけて、柱を傳ひ貫木ふまへ、おだれより這ひ上がッて抜き打ちに丁ど切
る。源右衛門詮方なく、四尺扉風を倒しかけ、上よりとッて押さゆれば、刎ね返さんと挑みあひ、終
に脇差椀取ッたり。其隙に彦九郎、階子を上ッて餘さじと、追ッ立て〳〵切り結ぶ。手ひぞくなれ
ば叶はじと、大道へこそ飛んだりけれ。追ッ續いてひらりと飛び、橋の上まで切り出づる。四丁町
よりすは喧嘩と東西の門を打ち、掫き殺せと聚まッたり。二人女房大音あげ「訴へ申した敵討ち。
外の人には搆なし。聊爾をするな」と聲をかけ、門の左右につッ立ちけり。二人は爰を大事ぞと息
休めては打ち合はせ、命限りに火を散らし、花を亂して切り合ひしが、されども彦九郎侍ひの身で、
町人を見苦しやと思ひけん。其身は然のみ働かず、打ち懸くれば追ッ拂ひ、二三度揉ませて是まで
と、射る矢の如くつッと入り、弓手の肩先右手のさがりに、ざんぶと切ッて打ち落とせば、いぬるに
ぞうと臥したりける。文六やがて飛懸かり、母の敵と切りつくる。藤が爲はは姉の敵。受取れと丁
と打ち、同じくゆらは兄嫁の敵。恨の刀と礑と切る。四人一所に乗り掛かッて、一度に止めを刺い

○ちやんぎりしッきり　山鉾の囃子の鳴り物。鉦の音。「しッきり」の「きり」の縁で「切ッたりや」と承けた。

たるは、前代未聞の振る舞ひなり。壹町集り棒突き竝べ「敵討ちとは申しながら、町内の念の爲、腰
の物を預ッて、有無の御下知有るまでは、外へは落とし申されず、會所へ取ッて押し込めよ」と、四人
の男女打ち圍ひ、徐々と歩み行く。見事さ立派さ心地よさ。世上にはッと囃し立て、言ひ渡したる
山鉾の、ちやんぎりしッきり切ッたりや。討ッたり敵妻敵討ち。咄の通りまッすぐに、言へば言は
るゝ舌三寸の、操りの御評判とぞなりにける。（六）』

（總評）　爺の作としては上乘のものでない。酒に醉ふて心ならぬ褄重ねしたといふ不快
な脚色、但し末期の覺悟の潔さで幾分か雲晴れた心もち。其他に取り立てゝ言ふほどの所も
無く、文句と言ッても際立ッた箇所には乏しい。

卯月の紅葉

廿二社巡り

古き都や浪華潟〳〵。廿二社詣で急がん。戀ひといふ其根源を尋ぬれば、神と神とが肌觸れて、抱き寄せ給ひし腹帶の、解けてほどけて世に溢れ、産み弘めにし人種の、次第〳〵に孫嗣ぎて、色の道には發明な、町の小娘若嫁の、眞似る芝居の女形。髪の結ひぶり小利口に、ひッくる〳〵〳〵曲輪樣。今は向かぬと縫ひ箔の、夫にはあらぬはくのふう。風呂の煙りのたち居まで、姿似せれば心も俱に、染まる紫縮緬の、小皺のよりし姥嗅まで、情こめたる此時代、年經て爰に磯の神、古道具屋のふるかくな、堅ぢの父の親の手を、水離れせぬお龜とは、一人娘の命をば、萬代祝ふ名なるべし。(一)』正五九月の神參り、殊に此頃我親と、初元結ひの我夫。聟と舅の挨拶の、中に節たつ早苗月。皐月の雨は神心。夫の身の上安穩に、田畠を濕す其如く、苗代水に堰きかけて、惠めやあまの川崎の、大權現を伏し拜む。此御神の君が代を、聞くも語るも有り難き。蝦夷か千島や朝鮮國、琉球筵敷島の、此日の本の外までも、御威光四方に飛梅の、天滿の社に手習ひ子供。書いて上げたる龍虎梅竹糸屋の小糸。姉は十三妹は十二。殿御欲しさに宿願かけてえ、月の參りは廿五日。やッさ、ありや、そりや、こりや堀川の惠比壽殿。北野は天滿と御一體。荒人神と音高く、轟々と鳴る神も、よもや破らじよもや裂けじの、幼な馴染の女夫同士。此神明に祈らばや。扨六番は曾根崎の、宮の木立もいつで

卯月の紅葉

●廿二社巡り

(一)廿二社　畿内にある主な廿二の神社。其名は各本文に出て居る。

○今は向かぬと縫ひ箔の夫にはあらぬはくのふう　要するに元祿の此時代既に縫ひ箔の流行が癈れた所から、小娘など時樣を悅び、古風を嫌ふ意を示した。「はくのふう」は箔の風の義。

○風呂　前の「ふう」を承けた同聲。

○たちゐ　起居の義。烟「たつ」と掛けた。

○小皺　縮緬の縁。

○磯の神　「ふる」の社などと古歌にもある。「ふる」の枕詞。

○ふるかくな　古格なの義。

○水離れせぬ　たゞ離れぬの義。阿龜の龜の縁で水と出した。

○萬代　龜の縁語。

(二)飛び梅　天滿社にある名木。四方に威光が「飛ぶ」と掛けた。

○掛けたえ　「えは引いた口調。

○なたてがましき　名立てがましきの義。名は浮き名。

○ころころ　鞠のころがる義。「ここのつ」に掛けた。

○さん　鞠のはづむ義。「と」を「に」に掛けた。

○來うぞ　「高津」といふ地名に掛けた。

○時き樹に似たる松原　古歌「ときき樹に似たる松のむらだち」といふ句に基づいた句。

○いくつとは無き生玉の　「いくつ」「生玉」共に同聲の綾。

ろよりか、なたてがましき天滿屋お初。他所に聽くさへ身に蜆川。水の流れの勤めの憂き身。どうで女房にやもたれぬ中の、死ぬる生くるは愚の沙汰よ。己は夫をと願ふぢやないが、男故なら命も身代も取ッてゆけ。どこらへの、ここらでの。お手を引き合ふて二人の死骸。茲に梅田の橋に寢てッ、夢を津村の新御寮。人の祈りは樣々の、大明神や其次は、仁德帝の宮所、拜み巡りて十番に、數も願ひも三つ寺の、正八幡に早つきぬ。道頓堀の糸竹や、太皷の聲にひかされて、心も足もしやな〳〵しやなら。一寸立見の手鞠の曲はひいふうみい。よういつむなな八よころ〳〵。とんとはづむも可愛らし。明日も來うぞの惠比壽橋や。惠比壽橋越えて、見たや見せたや難波橋。難波の今宮是からは、野道の風の冷しさに、傘も帽子もはれ〴〵と、雨の袂に吹きたまる、身も冷々と心よき肌を締めさせ、しめて貰はば此方からも、じッとしめ〳〵、空も濕りて五月雨の、雲のすずしの帷子の、衣紋繕ひとりなり直し、鬢搔き撫づる差櫛の、蒔繪に似たる松原は、安井の天神是ぞとよ。天王寺には十五社の、鎮守を一社と伏拜み、扨十四番十五番。南東の門前の、「牛頭天王に我願ひ、幾つとはなき生玉の、玉の光りの透き通り、神は見通し言はずとも、心の底の只ひとつ。夫を頼みに北向きの、八幡宮の御盟ひ。世々に高津の坂道を、登ればさッさ下ればさッさ。さッさ三六十八番、茲も難波の大君を、唐土人の褒め詞、咲くや此花今はとて、梢も青き夏木立。西を遙かに百舟の、入り江の秋の海面に、沖津白浪さばけて忍べ。碎けて遊べ中よい月に、戯れ遊べえい〳〵。遊べえい〳〵えい〳〵、、、、、照る〳〵月。月てる〳〵君と、寢たらば何とよござるまいかの、照る〳〵月月や。月讃の

旭の神明額きて、あをのく顔に當たる日を、袖で簪の玉造り。稻荷の宮居茲も又、伊勢の内外の内平の町太神宮よといろ〳〵の、諸願の種を上町の、座摩のおたびの廿二社、拜み納むる袖神樂。處女子ならぬ御子町に、問ふべき占のあればとて、まだ日の足も南へと、駕の息杖息つがず、走らせてこそ急ぎけれ。(二)』幼き時より氣に入りて、幾春秋をふりと云ふ、年季の下女を身になして、匿す事をも語りしは、黒格子の土戸かや。上手と聞きし神子の門。「ああ申し。些と口寄せを頼みませう」とぞ案内ける。弟子の小女郎心得て、「お通りなされ」と戸を明くれば、お龜は一間に入りにけり。暫らくあッて立ち出づる、神子も余程見えるもの。「ア、能うお出でなされました。大坂のお衆で御座りますか。お供の爰へ上ッて先づ扇いで上さッしやれ。お茶持ておぢやや」と待遇は、藍黒格子の若神子の、口と口とも寄せまほし。「して先御用の事ありとは、生き口か死に口か」と言へば、「いや然ればとよ。頼み度きとは生き口なるが、海山隔てし方でもなし。只二三里の道を越え、五日六日の便りもなし。何がな期がなくよ〳〵と、案じ詫びたる御身のほど、寄せてたべ」とぞ仰せける。(三)』神子は合掌目を塞ぎ、「珠數をくりひく梓弓。神下ろしして寄せにける。「天清淨地清淨。内外清淨六根清淨。天の神地の神家の内には井の神。庭の神かまの神。神の數は八百萬。過去の佛未來の佛。彌陀藥師彌勒あしく。觀音勢至普賢菩薩智惠文珠。三國傳來佛法流布。聖德太子の御本地は、兩全淨土三界の敎主世尊の御事なり。此御敎への梓弓、釋迦の子神子が弦音に、引かれ誘はれ寄り來り、逢ひたさ見たさに寄り來たよ。喃懷かしの合ひの枕や。我懷かしとは覺束なみの、寄り來る

○玉の光り　生玉の縁。
○すきとほり　玉の光りの縁。
○見とほし　すきとほりの縁。
○頼みに北むき　頼みに「來た」と掛けた。
○さッさ　歩く時の掛け聲。
○三六　さッさと同聲の縁。
○咲くや此花　王仁の歌「難波津に咲くや此花冬ごもり今を春べと咲くや此花」に基づいた句。王仁はもろこし人。歌は仁德帝を稱し奉ッたもの。それ故に「大君をもろこし人の褒め詞」云云と出した。
○おたび　御旅所の略。
(三)ふり　春秋を「經」と掛けた。
○身になして　眞身のものとして。
○黒格子の土戸

人は誰ぞいの」。「誰とて二人思ふ身か。一つ寢臥しの双股竹。與兵衛を夫と思へばこそ」。「問ふて給ッて嬉しやの、問はれて今の恥かしや。扨世の中の憂き節はなう、我が善きに人の惡しきがあらばこそ。破れ車でわが惡い。とは言ひながら扇の影の立烏帽子。舅といひ元は伯父。跡嗣の約束なれば今では親子ぢやないかいの。何しに粗略にするものぞ。在所の生みの親達より、猶孝行を盡くせども、圓い續桶に角の蓋、心が合はねば是非もなし。恨みも仇も外になし。憎いも辛いも只獨り。おもきが上の小夜衣よ」。「なう恨ありとは私が事か。おの樣の女房よ。仕方の惡い事あらば、なぜ殺しなりともなされずして、何か恨みのあるぞとよ」。「オ、二世と契りて最愛いもの、和女に恨みのあるべきか。小夜衣とは親ならぬ、親の手かけの茨草。目をつく樣に家の内を、立てうと伏せうと儘にして、影言中言咡へ口。立ッてはふすべ居ては譏り、何がな見出さう聞き出さう。目に角立てる仁王顔。物には阿吽ある故に、道具中間の商ひに、損もする又德もする。搖れば落つる木の葉の露。我身にかかる商賣の、夫に如才のあるべきか。「又しては〳〵道樂者でのら者で、在所へ戻せ去なせとて、額に墨も入れたもの。丁稚に物を云ふ如く、内の手代やにはだからの、侮り者になし果てて、あの女めが弟を、内へ入れうと云ふ巧み。町内からも小柴垣、ゆひ立つれども世の中の、藥の炙は身にあつく、毒な酒は甘いとや。何を言ふても氣に入らず、牛は嘶き馬は哮へ、理に非は落つる左繩、ゆひ甲斐もない身なれども、在所に歷と親もあり、敷金してあの下主めに、使はれう筈はない。エ、口惜しいわいの。腹が立わいの。舅の家を出るからは、下主めたッた一打に、仕舞ふてのけ

此謎意味未詳。但し神子の家は黒格子であッた。
○よッぽど見えるもの　よほど鑑定に長けたもの。
(四)神おろし　神を請け降して神詫を聞くといふ事。「天清淨」から「誰ぞへの」まで神子の語。それから阿龜と神子との應答になる。
○あしく　阿閦佛の略。
○智慧文珠　文珠菩薩は智慧で名の有る所から智慧を冠らせた。
○逢ひたさ見たさに寄り來たよ　神子に口を寄せられて今此所へ來たとの意。神子がつまり先方の口を引き出す心もち。
○合ひの枕　夫婦もしくは情人の隱語。
○我なつかしとは云云　我を懷かし

いとて呼んだ人は誰か分からず覺つかないが、扨誰であるかとの義。「覺束な」から「波」と掛け波の縁で「寄り」と出した。
○誰とて二人思ふ身か　誰と聞くまでもない。自分は二人の男に心を寄せる身でないの義。
○一つねふし　一つ根節の義。
○わがよきに人の惡しきがあらばこそ　自分がよくて人が惡るい事は無い。人の惡るく我身に當たるのは自分が惡るく先方へあたる故である。
○破れ車でわがわるい　「わ」は「輪」と「我」との雙方に掛けた。此所洒落の文句。
○おのさま　己れ樣の略。先方を指していふ語。
○ふすべ　煙べの

うか。いや出所へ連れて出て、首に繩を掛けうかと、樣々思案は仕たれども、家の名を出す夫のみか、和女と縁が切れうかと、是が第一悲しうて、情ないやら無念なやら、弦なき弓に羽拔け鳥、立つもたたれず、居るも居られぬ家の内。和女に心引かされて、破れ暦にあらねども、仇な月日を數へたよなう。粉糠三合有るならば、入り聟すなと云ふ事は、我身の上の譬へかや。十貫目と云ふ敷き金を、あの女めにちやかさりよかと、涙が飜れて口惜しいわいなう」。「おいとしや〳〵。あの今めと云ふ奴を、出入も止めうと思へども、母樣の存生より、ゐたる者の事なれば、なま若い私が身で、出過ぎた事と扣へしが、此秋は母樣の、十三年忌も仕舞ひまし、ふッつと出入りを禁めさせん。して此間五七日は、河内へ歸りて御入りかや。そよとの便もない事は、扨は我にも秋風かや」。「ア、何しに和女に秋風の、立田の山の初紅葉。古郷へは錦を着て歸ると申す。今すご〳〵と此姿、何とて在所へ歸られん。晝は生玉天王寺、天滿ふば瀬に河口を、終日歩む時もあり、或ひは芝居で日を暮らし、旅店に命を養ひて、暮るれば和女が懷かしく、人目忍びて門に立ち、軒の下なる長持に、窃と隱れて折り折りは、若も二階の格子から、顔も見えるか聲するかと、蓋を明け方近づけば、立ち出で歸り夜毎には、猶しも思ひ深草の、しぢに通ひし車長持ち。巡り逢ひたや語りたや。語るに盡きぬ生き口も、今は是まで梓弓、引いては歸る習ひなりとも、暫しが程とせめて留むる甲斐もがな。甲斐こそなけれ縁あらば、あふも不思議あはぬも不思議。逢はずば何を玉の緒も絶えなば絶えね」と伏沈み、死したる人に逢ふ如く、名殘を包む涙の袖。寄り來るよりの生き口は、神上りして醒めにけり。(四)』親の異見

義。いぶすやうにいぢらしく意地ぬる義。
○物には阿吽あるゆゑに　阿吽は梵語、「阿」は出る息、「吽」は入る息。ここでは相對の義で、善惡、成否、盛衰、興廢、榮枯などの意。
○内の手代やにはだからの　此一句本義未詳。
○敷き金　今いふ持參金。
○ちやかさりよか　「ちやかされやうか」の約。「ちやかす」は無茶苦茶にする義。
○故郷へは錦　朱買臣の故事、錦を衣て郷に歸るとの事實から出た句。一方では前の「紅葉」を承けて「錦」と出した。「立田の山の初紅葉」の「初」は深い義が無い。强ひて言へば埋め草だけに止ま

は直なれど、傍の取り做し横時雨。どこをせうどにさして行く、傘屋與兵衛は在所へも、面目なしと戻り兼ね、心は有頂天王寺。御子町に迷ひ來りしが、お龜は神子に一禮して、立ち出づる門口に、下女が見付て「あれ與兵衛樣」。「どれどこに」。「是はお龜か」。「與兵衛樣か。余まり便宜もない故に、生き口寄せに來ましたが、なぜに戻ッて下されぬ。己りやどうならうと搆はぬ氣か」と、繾り付いてぞ泣き居たる。「オ、おれとても和女に心が引かされて、在所へも得歸らず、大坂中を立ち迷ふ、雲介同前の身持ちとなり、今日は河内へ行かうかと、小堀口まで行ッたれば、親父とかまの今めとが、是も在所へ行く振りで、跡から來たをちらりと見て、漸々遁げて戻ッたが、おれを見たか知らぬまで。怖い事ぢや」と語りける。「はて見付けられたら大事か。恨みも腹の立つ事も、私に免じて下さんせ。昨日は私が氣晴らしとて、父樣と半四郎の心中狂言見たれども、余の事は耳へもいらず、半九郎お染が最期の臺詞。此方の胸に皆堪へ、二人死ぬなら死にたいが、こな樣死んで下さりよか。どうか斯うかと思ふて居て、四郎五郎が不心中。面白いとて笑へども、私や一日泣いてゐた。泣いてばッかり居たわいの」と、袂に取り付き聲を揚げ、十五になるやならずにて、夫を思ふ眞實の、歎きの涙ぞ奇特なる。(五)』「あれあれへ見ゆるは親父ぢやないか。葛籠笠は今めぢやは。逢ふてやかまし。茲御免」と、神子の門にぞ隱れける。親長兵衛は手代を連れ、大汗流いて來りしが、今大聲上げて「ヤア是はお龜樣。廿二社巡りとて、あぢな所へ來てござんす。如何に男を持ッたとて、若い姿してびらしやらと、あんまりほたへさッしやるな」と、嚙み付く樣に夕立の、鳴る雷の如くなり。お龜ははッと怖

る。
○しぢに通ひし車　ながもち「しぢ」は牛車と書く。むかしの車の轅の棒。むかし女の許に通ふとて、其車のしぢに毎夜の數を刻み付けたなどいふ歌が有る、それから後世すべて此故事を比喩に用ゐ做した。ここでは前に「長持ち」とある縁で、車から直ちに「車長持ち」に轉じ、車の縁でまた「めぐり」と出した。「車長持ち」は長持ちの一種、車の付いてあり、運轉に自由なつくりのもの。
○生き口　死人でなく生きた人を口寄せに寄せる事。
（五）せうど　先途の轉。
○さして行く　「さして」は「傘」を指してと方角を指して

ろしく、「今日の次手に母樣の、十三年忌の口寄せに、ちよッと寄ッた迄の事。して父樣はあの人連れて、何方へ」と言ひければ、「オ、さればこそ與兵衞めが、在所へは戻らいで、町の會所の帳箱に、入納めた讓り狀。身が使ひと詐ッて取ッて行んだと年寄りから、斷りが云ふて來た。彼奴に讓る讓狀、取ッて何になる事ぞ。家を棒に振りをるか。但しはどうぞ公事工みか。日頃は此所な女子と、いひ事小言が絶えねども、五分〳〵に聞いて居た。彼奴が惡いに極まッた。河内の親に言ひ渡し、直に堺を明けんため、來ればあれで見付けたが、此邊へは失せぬか」と、うそ〳〵見廻し神子の門。「こりや爰にけつかる」と、引き出だせば與兵衞は、被き管笠身に纏ひ、うろ〳〵出し其風情。お龜はわッと泣き出だす。笑止千萬哀れなり。（六）『掴みづらのと異名をつけ、八町まちへ名を立てて、オ、心の直な跡取樣。斯うした事をなされても、是でも家が立ちますか。コレ與兵衞樣。やあ與兵衞殿樣」とぞ喚きける。與兵衞は指うつぶいてゐたりしが、顏を上げて「コレ女姦しい。エ、恨めし親父樣。あの家屋敷家財まで、私し夫婦へ讓りの約束成れば、親子と存ずる故不肖の事も堪忍し、心一ぱい働けども、何をするのもお氣に入らず、在所へ歸れ戻れとは。ヽ〳〵道理かな〳〵。家屋敷家財まで、今が弟の傳三郎に、取らせるとある讓狀。此與兵衞が聞いてゐる。明日でも親父樣。若しもの事も有ッた時、町衆が立ち合ひ讓狀を披いて傳三郎に跡式取られ、此與兵衞がすご〳〵と、生きて在所へ歸られうか。是誰が業ぞ。其女めとの談合ならん。此事を某には、誰が知らせたと思ふぞや。汝が弟の傳三郎。今まで汝れら一本と思ひしに、

して、との二つに掛かる。
○有頂天王寺「有頂天」と掛けた。
（六）日頃はここな女子と云云「此所な女子」は阿今の事。日頃は阿今と與兵衞をいさかひが絶えなかッたが。

奇特にも傳三めが、天道が怖ろしさに、知らせまするぞと告し故、後日の證據に取ッたるぞ。汝は汝と思へども、然り迚は親父樣。可愛い娘の男なり、甥子とは申さぬか。爾うはなされぬ筈なり」と、聲を上げて泣きければ、お龜は傍にひッ添ふて、「母樣生き世の折りならば、彼等に口を利かせうか。母樣は此世になし、伯母樣と言へば目は見えず、夫婦は誰を便りにせん」と口說き歎くぞ憐れなる。（七）』長兵衞眉を顰め、「是は夢々覺えなし。汝を町へ弘めして、直に出した讓狀。身が目を塞がぬ其内は、年寄り行事も封を切らぬ書き置きを、傳三が知らう筈がない。讓狀を奪ひ取ッて、親に難題言ひ懸け、今兄弟に無實をいひ、大坂に置かぬ公事巧み。おのれ獨りが智惠でない。サア讓狀が物を言ふ。三つ釘輪で讀んで見よ」と、懷中へむさぼりつく。「いやこれ親父樣。でんぢで披く讓狀。後の證據に封も解かず持ッたれば、こなたの手へ渡さうか。權柄になさるるな」と、もぎ放せば、こづかを取り引き伏せ〳〵、踏んづ叩いつ、散々に、打擲し、引き起いて讓狀。奪い取ッたる有りさまは、目も當てられぬ次第なり。「オ、成程。身が判封の儘、只今披く是聽け」と、封を解いてぞ讀みたりける。「北久太郎町心齋橋表口五間半。裏ゆき町並貳十間家財殘らず。娘お龜聟與兵衞夫婦に讓り申候。外より異亂少しもなし如件。これ見よ」と、與兵衞が目に差付くるを、よく〳〵見れば紛ひもなき、我方への讓狀。「ヽヽ、南無三寶。扨は傳三郎めが賢人面を見せかけて、我を取ッて壑さん爲め、裏の裏を喰はせしを、知らではまりし悔やしさよ。詐かられし口惜しや」と、齒咬みをなして泣き居たり。（八）』長兵衞も憤りの涙。「こりや臭怯者。人な恨みそ。皆汝れが誤りぞや。母なき

娘が大事に思ふ、聟が何とて憎からん。皆根性のひがみから、親にも恨み出來るぞ。恨めしの心や」と、讓狀を與兵衛が面に打ち付け、どうど伏し、大聲上げて泣きければ、妾はいきッて、「咎もない傳三郎に、言ひ覆せ仕やるな」と、哮りかかッて憤りける。娘は我親我夫、中に立ッたる遣る瀬なさ。傍で泣くやら叫めくやら、往來も止まるばかりなり。神子町中がをり合はせ、「人が群る。何事ぞ。早々通りや」と叱りける。「ア、御尤〳〵。御町の妨げ御免あれ。ヤアおのれ在所へ駕で送らせん」と、ひがやすな與兵衛を引き立て駕に押し込めば、「何の面目在所へは行くまい」と、駕の左へつッと抜けた。親も續いてつッとぬけ、又引ッ捕らへて乘せれば抜ける。親子くる〳〵〳〵出つ入りつ、どこぞの機に長兵衛、駕をぬけるを町人共「エ、面倒な」と押し込んで、駕舁き上ぐれば、長兵衛「ヤアこりや違ふた〳〵」と、叫けど更に聽き入れず、大坂の方へ舁いて行く。お龜は歎き焦れしを、下女や手代が手を引いて、和め歸れど立皈り、留まり見皈り呼び懸けて、息をばかりに泣きかはす、山時鳥皐月雨。涙の雨もふる道具やの、聲ばかりして俤は、隱れ傘屋の憂き名殘。別れ別れに成りにけり。(九)』

中の卷

花聟と名にこそ立てれ下草や。娘ぞ家のしん齋橋、女夫の間はかさ鵲や。笠やお龜は夜より、寢られぬ目元落ち窪み、思ひ染みたる身の大事。中よき下女にも語らねば、誰も斯くとは白無垢を、仕立つる縫ひ目大針に、二度と着まいと思ふにも、涙先立つ折り柄に、町内の娘友達二三人、「お龜樣内にかへ。今日は五月の十七日。とうからの約束、三十三番連れ立ちませう。ヤア拵へさんせ。出さしやんせ」と、何の氣もなく誘ひける。觀音樣と聞くからに、「未來の緣も嬉しけれど、父樣も留守なり、これも仕立て仕舞ひたし。今日は連れになりますまい。よう拜んでや」と言ひければ、「夏白無垢がいる事か。詣らしやれ」と云ふもあり、「よしか置かしやんせ。今のおぢやッて見やッたら、留守明けたとて喧ましからう」。「ほんにお龜樣も能い姑母を持たんした。こちらばかり廻りませう。與兵衛樣とこな樣と。一つ蓮と拜みませう」と、云ふて出づるも常なれど、思ひあればや身にぞ浸む。(一)』斯かる所へ與兵衛は今朝まで浮か浮かさ迷ひありき、心も空に行くともなく、我家の門を徘徊す。お龜はちらと見るよりも、「コレ誰もない大事ない。これ喃これ」と呼ばはれば、笠をも取らずつッと入り、二人ひッたり抱き付き、臥し轉びてぞ泣きゐたる。漸あッて與兵衛、「ム、此白無垢を仕立つるは、死ぬる合點か嬉しや」と言へば、「オ、さればとよ。是は斯うはして置けども、是非に叶はぬ其時は、私が方から知らせを仕う。必らず夫まで短氣な心持たんすな。こな樣いかう狼狽てぢや。心を納めて下さんせ。ひよんな心を持つまいぞや」と、力を付くる其中にも、遉がは年も童氣の、「いッそ連れ立ち走りたい」と、また縋り付き抱き寄せ、引き寄せ〳〵歎きける。有り樣こそは不便なれ。下女のふりは差し心得、門に立ちて西東、心を注けてゐたりしが、「あれ鼬堀の伯母御樣。鵲が見える」と駈け入れば、「こは何とせん伯母樣の、目は見えねども内の者が、見付けやせん」と、見世に立ッたる賣り佛檀の、戸を明けてこそは隱れけれ。程なく駕を舁き入れて、伯母も下るれば、お龜は「是はようこそ」と、手をひき奥に入りければ、供の女は駕舁きに、錢をわたしも歸りませう。晩方迎

(九)ひがやすな意義不詳。

●中の卷

(一)家のしん齋橋　心齋橋は大坂市中の橋。ここでは家の「心棒」の義から掛けた。

○かささぎや　七夕かささぎの橋といふ故句有る所から前の「橋」を承けて出した句、續いて似た音で「傘屋」も出た。

○白無垢、二度と着まい　共に最期を覺悟した趣きの伏線。

○卅三番　卅三番の札所めぐり。

○一つ蓮　暗に最期に思ひ當たる句。哀れ一入深い。

(二)錢をわたしも　錢を「渡し」か

ら「私し」へ掛けた。

○入りへ　「へ」は内室を「おへ（御家）さま」などいふ、其「へ」。即ち「いりへ」は嫁の義。

○まんろく　元祿の通用語。公平な沙汰。

○からもの　唐物の義。舶來の名品の義。

○しゆうさへならぬほどに　「しゆう」は主の義。主人。主人も爲し能はぬほどに。

○汐を踏ませて　窮命させて。

○まゐりたや　冥途へ行をたいとの義。即ち死にたいの意。

ひに參りませうと、云ふて其儘歸りけり。をばは溜息はッと吐き、「爰のは未だ戻らずか。今朝こちへ來て與兵衛が噺をめさッた故、あるにもあられず氣遣はしく、扨こそ見舞ひに來たろぞや。總じて入へ入り婿に、小言のあるは慣らひなれど、和女や與兵衛が親々は、伯母が爲には兄弟なり、和御りよ達は甥姪なり。どちらに贔屓偏頗もない。まんろくを云ふ時に、皆與兵衛めが惡いぞや。胸前垂れに草鞋がけ、親の辛苦ひとつにて、仕出いたる此身代。夫を學ぶが子の作法。何であらうぞからものや、しゆうさへならぬ程に、ぞべ〳〵と着飾ッて謠ひ講の俳諧の、若いそなたを女房にもッて、内の茶が呑み足らぬか。茶屋へもちよこ〳〵遣ふと聞く。異見をすればいぶりを出し、商ひは袖にして、小路隱れの家出のと、聞く度ごとに此伯母が、胸には釘を打つ如く、言ふさへ泪が翻るゝぞや。これなうお龜。年はいかねど男を持てば大人役。夫の身持ち惡ければ、女房の名が出るぞや。戻ッたりとも寄せ付けず、江戸長崎へも追ひ下し、汐を踏ませて人にしや。とは言ひながら與兵衛めは、氣の弱い生まれつき、無分別の出ぬやうに、女夫あひをよう爲ややう。内に惡魔のある事も、憎い者はいけて見よ。是も世上の不肖ぞかし。ァ、濁ましや此伯母が、年は寄る、目は見えず、つれあひには放るゝ、子は養子なり、嫁掛がり。明日が日往生申しても、骨を拾ふて眞實に、泣いて呉れるはぞや。お袋が此世にならば、是ほど苦勞は聽かじもの。恨めしの娑婆世界、片時も早うまゐりたや」と、咽入り〳〵或ひは憐れみ或ひは叱り、甥子を思ふ誠の泪。與兵衛もあまりび出で、ものは言はれず手を合はせ、拜めばお龜は詈をあげ、只「伯母樣を母樣と思ふて、賴む」とばかりにて、縋りあひてぞ泣きゐたる。理りすぎて憐れなり。(二)』伯母は涙のひまよりも、懷中より縮緬一卷き取り出し、「これ此緋縮緬は、今は此手は渡らぬとて、此前人に貰ひしが、色變はりしか知らねども、若い者は嗜みの善し惡しにて、常まで思ひ知らるる」と、渡せばお龜かたじけなしと、夫諸共戴きて、跡まで清く顯はせし、心の色の緋縮緬、縮む命の果敢なさよ。時に亭主立ち皈り、見世の道具を見廻す間に、「あれ爻樣の」と言ひければ、與兵衛裏へそろりとぬけ、細目に明いたる倉の戸を、明けて內に窃と入り、くろろをはたと落としける。長兵衛は不讖嫌顏、「ヤア伯母御出でなされたか。手代共は一人もをらぬ。何處へうせた」と言ひければ、お龜聞きも敢ず、「はて忘れさしやんしたか。一人は河內のをぢ樣へ、一人は尼ケ崎へ買ひ物にやらしやんした」「オ、夫を何の忘れはせぬ。未だ歸らぬか野良共」と、表裏を見廻して、「是は〳〵。男切は一人も居ず、倉に錠も下ろさぬか。扨々無沙汰千萬」と、つぶやきめが談合に、「參る」と云ふて出でけるは、苦々しくぞ見えにける。(三)』お龜は樣々心亂れ、「伯母樣。些とお息み」と、奥の間にこそ入りにけれ。無殘やな與兵衛は網代の魚の如くにて、倉の窓より顏出し、「水にても湯にても、切めて茣呑みたやな。烟管火繩は懷中す。お龜來らば火が欲しや」と、咽喉乾かし待ちけるが、「ヱ、思ひ付たり」と、倉の案內覺えたり。水晶の根附け尋ね出し、芝を少し押し

(三)今は此手はわたらぬとて　今日此類の品は舶來しなくなッたとて。

○くろろ　くるる戸の器の轉。

○すりゆ　拘摸めの義。罵る意。

當てて、入日の窓に差し向かへば、實に炎天の酷陽の氣。水晶に火移りて艾燻り出でけるを、火繩に移しやす〳〵と、莨に氣をぞ休めける。お龜は伯母を寢いらせて、庫をほと〳〵敲きける。與兵衛顏を差出し、「是は何たる不仕合。云ふ事爲事間に違ひ、獨り網に罹りしは、如何なる因果」と泣き口說く。お龜は思案や仕たりけん。「斯うなる上は一心を据ゑ壁を破ッて逃げ出だし、二人連れにて在所へ行き、今兄弟と公事をせん。此暗ら紛ぎれに早う〳〵」と言ひければ、「ヽ、我も爾う思ふ故、壁は余程崩せしが、壁下地の大竹を切る音の響きては、如何あらん」と云ふ所へ「あれ〳〵芝居の替はりの太鼓。サア此間が能からう」と、脇指拔いて切り破る。音も嵐の三右衛門、替はり〳〵と打つ太鼓に、隱れて余所には知れざりけり。(四)』今が弟傳三郎斯くとも知らで來りしが、「旦那は留守か。お龜樣は奧にか」と、裏へ通ッて後ろより、遠慮もなくしッかと抱く。「エ、暑くろし誰ぢやいや。ム、傳三郎か。主といひ主ある身に、此樣な無作法は、覺悟なうては成らぬ筈。其根心が聞きたい」と、騷がぬ顏で裏問へば、「ハヲ根心とて別はなし。與兵衛の白痴めは、どうでも玆には置かれぬ談合。君さへ合點なさるれば、しづが聟になるぢやげな。但し阿房がお好か」と、猶理不盡に抱き付く。「オ、聞こえた。扨はかの讓狀も、其方が欺して取らせたか」。「如何にも〳〵。町儀が何とも濟まぬ故、手盛りにさせて喰はせたる才覺を御覽ぜ」と、言ひも果てぬに、「オ、それを聽かうと云ふ事よ。あれ間男よ」と聲立つる。口に袂を捻ぢ込んで、絞め殺さんとする所を、與兵衛壁より這ひ出で、むんずと組んで拽きければ、お龜は奧に逃げ入りける。「おのれ不義者しんじやうの敵」と、摑みついて組合

(五)しづ 賤の義。自己の謙稱。すこし生意氣な語氣を持つ。

ひしが、傳三郎は剛力者。非力の與兵衛を取ッて投げ、足をもためず逃げ失しは、殘念なりける次第なり。喧がしきは何事と、亭主皈る折節に、手代も皆々立歸り、裏へ通れば與兵衛は、南無三寶と起き上り、狼狽廻ッて切り明けし、倉の壁へ這入る所を、長兵衛飛び懸かり、兩足摑んで引きずり出し、「ヤレ與兵衛めこそ倉の矢尻を切ッたれ」と、呼はる聲に驚き、伯母はお龜に手を引かれ、「そも實事か」とばかりにて、惘れ果てゝぞゐたりける(五)』「道具はあるか吟味せよ」と、鍵投げ出すを手代ども、戸を明け內に走り入り、「何も道具は違ひなく、是ぞ不思儀」とふすぼッたる、火繩艾を取り出すは、詮方なうぞ見えにける。親ははら〳〵涙を翻し、「如何なる天魔が入り換はッたか。町衆を騙ッて讓狀を取り出だし、大耻辱かいたる昨日の今日、親の倉の矢尻をきり、此火繩の火は何にする。ヤレ罰當りめ。八百屋お七を見をらぬか。聲山立てゝ町へ聞こえ下で濟まぬ穿議になれば、如何なる仕置にあふとか思ふ。そこを切ても不便さに、高い聲も得爲ぬわい。是でも己が心には、伯父を憂しと恨むらん。本氣ではよもあらじ、碌な死にをせまいかと、却ッて是が不便なり」と、涙を流し目を震はし、色を違へて憤りける。お龜涙を押さへ「これ與兵衛樣うろたへまい。言ひ譯をなされ」と言へば、「イヤ證據もない言ひ譯、見苦しげに何かせん。皆我々が不運なり。如何樣になるとても、親をも人をも恨みとは、思ふまいぞ思やるな」と、一聲云ふたばかりにて、誰がもの云ふても返答もせず、歎き沈みし有り樣は、目も當てられぬ風情なり。日の內は外聞惡し、表を閉めて追ひ出せと、「蔀下ろして情なく、引き出せば伯母お龜、「喃今暫し」と取りつくを、捥ぎ放し椀ぎ放し、門より外へ押し

出し、潜戸をはたと指しければ、内には妻の叫ぶ声、外に夫の忍び泣き。涙に曇る十七夜、月に別れて出でにけり。〈六〉』宵より二階に引き籠もり、待てど暮らせど其人の、そよとばかりの音便も、早九つの鐘の聲。書き置き涙に文字消えて、先へ死んだもましならめ。萎れ佗たる折り節に、竊かに人の足音す。そッと二階の障子をあけ、覗けば夫も掻き暮れて、互ひに聲も立てばこそ。點頭合ひたるばかりにて、泣きくづをれしぞ憫れなる。用意仕置きしさしがへに、夫の白き帷子繻絆に結びさげ、下ろせば下より受け取りて、死ぬる覺悟と心得ける。南無三寶酉町より、新町戻りの駕に提灯。走ッて近く車長持、蓋をあけてぞ隠れゐる。漸遣り過ごし出でければ、いつかは釘を放しけん。むしこをはづし帯結ひ下げ、傳ふて下りん其用意、夫は長持拽き出し、心を砕く二階には、消ゆるばかりに蜘蛛の、糸に懸かれる身の命。露の便りの危ふさよ。憂さよ怖さよわな〳〵と、震ひ傳ふを抱きおろし、二人が顔を見合はせて、息つぎ胸を鎮めしが、此頃途絶えし添ひ寝の床、懐しなつかし懸ひしやと、互にひしと抱きしめ、歯を喰ひしばり息をつめ、顔と顔とを打ち合はせ身を悶えてぞ歎きける。町の夜番が時申し、又長持の蓋あけて、抱きあひてぞ忍んだる。夜番は物に心をつけ、けはた〳〵。二階のむしこをはづいて、上から帯がさげてある。長持ちもしく門を叩き立て、「これ起きた〳〵。出してある。盗人さうな」と叫くにぞ。家内一度に目を覺まし、二階へ上がれば娘はなし。「お龜様が見えぬわ。そりや提灯よ釣り鐘よ。八つ過ぎや八間屋。河内よ堺よ川口よ」と、足元へは氣も付かず、手分けをしてぞ追ッかけける。夫婦は際き間に長持より、そッと出で邊を見、先立ち失せし

（七）さしがへ　別に用意の挿し料の刀。

○時申し　時刻を知らせる事。
○はづいて　はづしての轉。

○提灯よ云云　慌てた體を巧みに叙した。

心中の、戀ひの移りの香をとめて、梅田橋へと、志し、二三町こそ走りけれ。〈七〉』

末期の道行

○今捨つる身にも恐ろし犬の聲。辻を隔てて見返れば、あれで生まれし町所、家の馴染も十五年。其春夏の此月は、祝ひ月とて物忌まひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、其死に恥ぢも包ましく、其方の髪亂れずや。いや我よりもおの様の、鬢撫で附けて掻きなでて、死んだ跡までよい殿と、人に言はせまほし明り。今宵の月を月々に、待ちしも遂に引きかへて、冥途の使ひ我々を、待つらんものと掻きくれて、涙曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つるとも、仮令佛になるとても、必ず契り米屋町。本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町。うまれ變りて又いつか、娑婆の便りの備後町。思へば我も元服し、私も若いに鉄醬つけて、のがれし寮の河原町。三途の瀬戸の淡路町。超ゆれば親の古里の、名にも別るる平野町。曙近き時太皷、ゑう〳〵修町これやこの、修羅の太皷の聲きかと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつつ泣くばかり。聞けば私も母様の、三十過ぎての初子とや。其讓りかや馴れ染めて、一夜離れた事もなく、夜すがら枕に子鳳のないか。是も産まずの數ならば、根を堀る竹の伏見町。高麗橋の西東。床も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮き世小路の細き聲。唄ふてかへる其歌の、品あるなかにも來ぬ人を、まつほの浦の夕和に、やくや藻汐の身を焦す、夫は吾妻の物語、耳に聞きたるばかりぞや。和女と我は涙速津の、貴賤群集の見るめかる、尼ヶ崎町くわしよ町に、はや北濱や中の嶋。明日は天滿の橋々

（一）言はせまほし　明かり「言はせまほし」から「星」へ掛けた。
○契り米屋町　契り「結め」と掛けた。
○同じ安土町　「同じ土」に掛けた。
○備後町　「びんご」の「びん」を「便」即ち「たより」に利かせた。
○のがれし寮の河原町　大人となら ずに死ねば寮の河原へ行くとの俗傳。既に元服もし、鉄醬もつけた故、寮の河原へ行くのは免れたとの義。

賣りて、梅田の梅田の堤をそめし、紅葉傘屋のな女夫の心中。男廿一お龜は十五、年にあはすりや惡戯〳〵ぢや。サア繪双紙え。余所の口の端。ア、余所ごとに買ひ求めては慰みし、此身の果てを讀み賣りに、誰が節つけて田舍まで、唄ひ流さん蜆川。水も濁りて此世へは、いつ歸りすむ根なし草。ゆんでは無常の燒き草と、惜しからぬ身は惜しからず、灰となさうか此肌。煙りとなるか此形ち。惜しやいとしや悲しやと、引き合ひし手を猶締めて、涙の限り泣きつくす。社の小烏川千鳥、合法鳥も聲さびて、早東雲も近付けば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば網舟の、目にやかからん行く先は、早曾根崎の神主の、朝淨めする折りなれば、今は詮方夏草の、人目堤の下かげを、爰ぞ夫婦が最期場と、泣く泣く息らひ立ちにけり。(一)』お龜は夫の顏を見て、連立つ冥途の道とは知れど、今今生の別れとて、言ひたい事の何やらが、胸にはあッて口へ出ず、倦くほど顏が見て死にたや。心なの短か夜と、身を投げかけて泣きゐたり。「ア、愚かや愚痴や淺ましや。永き來世があるぞかし。さりながら心に懸かるは其方の父御。二人とも無き獨り子を、憎や聟めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、是罪障となるぞ」とて、共にひれ伏し泣きければ、「いや父樣は男氣の、思ひ諦め有るべきが、愛しや在所のお袋樣。姑母なりとて一日の、給仕へした事もなく、大事の子をば娶故に、失なふた殺したと、お叱りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母樣の、力と成るはこち女夫。さぞ今頃は泣き悲しみ、眼でも眩ぬか。どうしたと、胸に塞がる是二つ。又母樣の十三年、觀音經を書きませう。佛になッて下さんせと、墓に向かふて約束の、是が違ふた何やかや、斯くまで重き罪科の、閻魔の前には黑鉄

寒の河原から「河原町」と掛けた。
○瀬戸の淡路町 淡路の海に瀬戸が有る故の掛かり。但し拙な句法。
○どうどう修町 太鼓の音のどうどうから道修町と掛けた。
○伏見町 竹の「節」と掛けた。
○立ち君 辻君。高麗橋邊の辻君を咏じ入れた。
○まつほのうらの夕なぎに 「來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに燒くや藻汐の身も焦がれつつ」といふ定家の歌に基づく。
○みるめかる 鹽の枕詞。

の、帳に付くと聞くものを、能い所へよも往かじ。火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行かうかと、是のみ猶も迷ひぞ」と、聲も惜しまず歎きける。(二)』遉が男は力をつけ、「一途に行かうと別れうと、皆一心の向け樣ぞ。氷の地獄火炎の地獄、劔の山へ登るとも、取り交はしたる手は放さじ」と、心強くは言ひけれど、まだ莟む花、出づる月。玉のやうなる若い者、若い女の頑是なさ。和めらるるも和むるも、分けて分かたぬ涙なり。「あれ早東も白うだり。サア念佛」と云ひければ、「心得たり」と懷ろより、髮剃二挺取り出し「これも母樣の額たれとて讓りなり。私はこれで死にたい」と、泣く〳〵出す其なかに、向ふの野道を人通ふ。「あれよ〳〵」と心は急く、二挺の髮剃一つにとり、「南無阿彌陀佛」と引き寄すれば、お龜は常々信仰の、「南無觀世音菩薩樣。母樣の戒名敎譽授綸信女。一つ蓮に導き給へ、南無觀音樣觀音樣」と、手を合はせて待ちければ、男は目眩れ差しうつふき、只泣くより外の事ぞなき。「エ、憂き目を見せて何事」と、夫の手を取り我が咽喉に、押し當つれば思ひきり、「南無阿彌陀佛」と笛のくさり、髮剃の刄も折れよと一擦りは擦りしが、若き者の悲しさは、とどめの急所を知らずして、未だ息絶えず悶ゆるを、疵の口を隱さんと、抱への帶をくる〳〵と、二三遍引き廻す、憂き目のほどぞ不便なる。「我も軈て追ッ付かんと、咽喉にあつる髮剃の、刄は鋸と折れ碎け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれども、貫りつべうはなかりけり。「南無三寶」と髮剃すて、傍に拔きおく脇差の、鞘をもッて引きあぐる、鍔は重し手は弱る。はづんで剔る勢ひに、脇差ぬけて麺の口の、井出の水草の漲ッて、ざんぶとこそは沈んだれ。「エ、しなしたりこは如何に」と這ひ

下るる堤の露。翻れし血に足滑り、池へぞうど落ちたりけり。池は深くて泥土深く、底の脇差探ねかね、浮きぬ沈みぬ漂ひしが、今を最期の眼にも、夫を思ふお龜が心、引き揚げんとや思ひけん、はふ〳〵岸によると見えしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へぞうど落ち、互に助け引き揚げんと、抱き上ぐればどうど臥し、掻き上ぐればかッぱと伏し、心ばかりを力にて、「喃與兵衛樣〳〵」。「お龜お龜」と呼び交はす。絶え〳〵切るゝ息の下。此世からなる地獄かや。哀れ果敢なき有り樣なり。疵の口に水入ッて、女は生年十五歳。時も皐月の菖蒲さく、沼の泡とぞ消えにける。夫も死なんと脇差を、尋ね漂ふ朝嵐。里人折りあひ「すは心中」と飛び入り〳〵、夫婦をとッて引き上る。女は死して池水も、みな紅に名を留む。男は生きて生き甲斐の、甲斐もあるかや蜆川。跡白波とぞ成りにける(三)』

(總評) 全體普通の作。今一息と思はれる所が多い。文句は道行のはじめが一寸面白いばかり、その外には目立つ所も少ない。死に方は弱の癖ながら殘酷きはまる。

上の卷

(一)此曲は前の「卯月の紅葉」の末を取り、些し筆を加へて更に上卷とし、再度の心中を演じたもので、それ故「あとおひ心中」と名づけた。「あはれはかなき有りさまなり」までは「卯月の紅葉」と同文ゆゑ、別にここでは改めて評註を加へぬ。

あとおひ心中

卯月の潤色

上之巻

末期の道行

今捨つる身にも恐ろし犬の聲。辻を隔てて見返れば、あれで生まれし町所、家の馴染も十五年。其春夏の此月は、神月とて物忌まひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、其死に恥ぢも包まじく、其方の髪亂れずや。いや我よりもおの樣の、鬢撫で附けて掻きなでて、死んだ跡までよい殿と、人に言はせまほし明り。今宵の月を、待つらんものと掻きくれて、泪曇りの十七夜、二八が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つるとも、仮令佛になるとても、必らず契り來屋町。本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町。うまれ變りて又いつか、婆娑の便りの備後町。思へば我も元服し、私も若いに鉄醬つけて、のがれし褒の河原町。三途の瀬戸の淡路町。超ゆれば親の古里の、名にも別るる平野町。曙近き時太鼓、どう〳〵修町、これやこの、修羅の太鼓の響きかと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつつ泣くばかり。聞けば私も母樣の、三十過ぎての初子とや。其讓りかや馴れ染めて、一夜離れた事もなく、交はす枕に子胤のないか。是も產まずの數ならば、根を堀る竹の伏見町。高麗橋の西東。床も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮き世小路の細き聲。唄ふてかへる其歌の、品あるなかにも來ぬ人を、まつほの浦の夕和に、やくや藻汐の身を焦す、夫は吾妻の物語、耳に聞きたるばかりぞや。和女と我は浪

華津の、貴賤群集の見るめかる、尼ヶ崎町くわしよ町に、はや北濱や中の嶋。明日は天滿の橋々賣りて、梅田の梅田の堤をそめし、紅葉傘屋のな女夫の心中。男廿一お龜は十五、年にあはすりや、悪戯〳〵ぢや。ヤア繪双紙え。余所の口の端。ア、余所ごとに買ひ求めては慰みし、此身の果てを讀み賣りに、誰が節つけて田舎まで、唄ひ流さん蜆川。水も濁りて此世へは、いつ歸りすむ根なし草。ゆんでは無常の焼き草と、惜しからぬ身は惜しからずと、灰となさうか此肌へ、煙りとなるか此形ち。惜しやいとしや悲しやと、引き合ひし手を猶締めて、涙の限り泣きつくす。杜の小鳥川千鳥、合法鳥も聲さびて、早東雲も近付けば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば網舟の、目にやかからん行く先は、早曾根崎の神主の、朝淨めする折りなれば、今は詮方夏草の、人目堤の下かげを、爰ぞ夫婦が最期場と、泣く泣くやすらひ立ちにけり。お龜は夫の顔を見て、連れ立つ冥途の道とは知れど、いま今生の別れとて、言ひたい事の何やらが、胸にはあッて口へ出ず、倦くほど顔が見て死にたや。心なの短か夜と、身を投げかけて泣きゐたり。「ア、愚かや愚痴や愚痴や。永き來世があるぞかし。さりながら心に懸かるは其方の父御。二人とも無き獨り子を、憎や聟めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、是罪障となるぞ」とて、共にひれ伏し泣きければ、「いや父樣は男氣の、思ひ諦め有るべきが、愛しや在所のお袋樣。姑母なりとて一日の、給仕へした事もなく、大事の子をば娶故に、失なふた殺したと、ふ叱りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母樣の、力と成るはこち女夫。さぞ今頃は泣き悲しみ、眼でも眩ぬか。どうしたと、胸に塞がる是二つ。又母樣の十三年、觀音經を書きませう。佛になッて下さんせと、墓に向かふて約束の、是が違ふた何やかや、斯くまで重き罪科の、閻魔の前には黒鉄の、帳に付くと聞くものを、能い所へよも往かじ。火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行かうかと、是のみ猶も迷ひぞ」と、聲も惜しまず歎きける。さすが男は力をつけ、「ひとつに行かうと別れうと、皆一心の向け樣ぞ。氷の地獄、火炎の地獄、劍の山へ登るとも、取り交はしたる手は放さじ」と、心強くは言ひけれど、まだ萌む花、出づる月。玉のやうなる若い者、若い女の頑是なさ。和めらるるも和むるも、分けて分かたぬ涙なり。「あれ早東も白うだり。ヤア念佛」と云ひければ、「心得たり」と懐ろより、髪剃二挺取り出し、「これも母樣の額たれとて讓りなり。私はこれで死にたい」と、泣く〳〵出す其なかに、向ふの野道を人通ふ。「あれよ〳〵」と心は急く、二挺の髪剃一つにとり、「南無阿彌陀佛」と引き寄すれば、お龜は常々信仰の、「南無觀世音菩薩樣。母樣の戒名數譽授綸信女。一つ蓮に導き給へ、南無觀音樣觀音樣」と、手を合はせて待ちければ、男は目眩れ差しうつふき、只泣くより外の事ぞなき。「ヱ、憂き目を見せて何事」と、夫の手を取り我が咽喉に、押し當つれば思ひきり、「南無阿彌陀佛」と笛のくさり、髪剃の刃も折れよと一撮りは撮りしが、若き者の悲しさは、とどめの急所を知らずして、未だ息絶えず悶ゆるを、疵の口を隱さんと、抱へ の帶をくる〳〵と、二三遍引き廻す、憂き目のほどぞ不便なる。「我も聽て追ッ付かんか」と、咽喉にあつる髪剃の、刃は鋸と折れ碎け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれども、貫りつべうはなかりけり。「南無三寶」と髪剃すて、傍にぬき置く脇指の、鞘をもッて引きまぐる、鍔は重し手は弱る。はづんで剔る勢ひに、脇差ぬけて樋の

口の、井出の水草の漲ッて、ざんぶとこそは沈んだれ。「ェ、しなしたりこは如何に」と這ひ下るる堤の露。翻れし血に足滑り、池へどうど落ちたりけり。池は深くて泥土深く、底の脇差探ねかね、浮きぬ沈みぬ漂ひしが、今を最期の眼にも、夫を思ふお龜が心、引き揚げんとや思ひけん、はふ〳〵岸によると見えしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落ち互に助け引き揚げんと、抱き上ぐればどうど臥し、掻き上ぐればかッばと伏し、心ばかりを力にて。「喃與兵衛樣〳〵」。「お龜〳〵」と呼び交はす。絶え〳〵切るる息の下。此の世からなる地獄かや。哀れ果敢なき有り樣なり。(一)』朝出の土民が見つけ出し、「ャレ心中」と呼ばはる聲に、里人をり合ひ、池に飛び入り引き上ぐれば、女は死して眞蔦草。筵や席に死骸を埋む。男は淺瀨ながら、「死ぬ。殺してくれ。死なしてくれ」と、泣き叫ぶ間に絲者一門駈け付け〳〵、北久太郎町心齋橋、古道具屋の跡取、聟養子と取り〴〵に、見物人の山をなす。斯くてはすまずと與兵衛を駕籠に打ち乘せ、ながらへし甲斐も有るかや蜆川。跡白波とぞ成りにける。(二)』

中之巻

廣がりし浮き名は何とすぼめても、傘屋夫婦の心中と、歌に謠はれ繪に賣られ、或ひは狂言淨瑠璃の、三十五日に早なりぬ。父長兵衛は一人子を、敢なくなせし其悔やみ。聟與兵衛が疵も又、勘堀の伯母諸共に、傷二兄弟引き連れて、河内の親の手に預け、天王寺の塔門を、大坂の方へ歸りしが、下女のふりは神子町を、見遣りてわッと泣き出し、「申し伯母御樣、お今女郎。今までは物見見物參り、又は此よな時節でも、お龜樣も打ち揃ひ、びらり帽子に加賀菅笠、大振袖の後帶。如何な者でも見返りて、お供に付いた私等まで、ほんに肩がいかッたに、大事の花を失ふて、物足らずなお供には、歩けを足を引き戻す。何時やら爰の神子町へ、夫がお供の仕納めか。冥途の道の一人旅。誰がお供しませうぞ。お振如何ぢや斯うぢやと愛憎らしい聲付きが、耳に殘ッて有る樣な、元結一筋紙一枚。買はずに貰ふて遣ふたもの、お龍樣に別れてから、五分で買ふた塵紙を、涙に拭ひ上げた」とて、口說き立ててぞ歎きける。「伯母も涙の乾かぬに、又云ひ出して泣かしやるか。實に何時ぞや口寄せに、此神子町へ來たと聞く。それも斯うなる約束かや。最期の時は親伯母に、云ひ殘したい事もさぞ。問ふて取らせんいざ去らば」と。冥途の闇の黑格子、辻が元へぞ立ち寄りける。(一)』神子の內には心得て、茶を持て出る煙草盆。文庫の蓋に梓弓、おくより神子も立ち出でて、「御祈禱か口寄せか。お心ざしの精靈は、目上か目下か。古い佛か新佛か。神降し致してはお十二銅が一包。御さき除が百二十。お望み次第」と云ひければ、「ァゝ〳〵禮錢は何程なりとも、三十五日の新精靈、竟血の上で死したる人。能う寄らッしやれ寄り給へ」と、各珠數に手を掛けて、聽聞することぞ哀れなれ。「千早振る御さき除の道淨め。天滿淨とは水火の淨め、地清淨とは家內の淨め、內外六根清淨とは世に亡き魂の道知邊、六道四生の淨めぞかし。忝なくは座せぞ、神と佛は夜と晝、娑婆と冥土は日光月光、出るも入るも同じ道。娑婆往來八千度、釋迦の子神子が梓弓、此弦音に寄り來たは、梅田に屍さらしなや。伯母樣の手向け有り難や。懷しの父御前。合ひの枕の與兵衛樣。忘れがたなき古へは、生き

(一)廣がりし、すぼめても　共に「傘」の縁語。

○下女のふり　「ふり」は下女の名。「卯月の紅葉」に名は見えた。

○「卯月の紅葉」に對し、此度は阿龍の口を寄せる巧みな趣向。

(二)屍さらしなやをば標　屍「晒し」と掛け、「更科」に轉じ、嫉捨山の意

で「を世」を掛けた。
○目の見えぬ我なれば云云「わが心なくさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て」といふ謡曲の歌に思ひ寄せた句。
○えぼし寶 口寄せの語。親子の隠語。
○まはされて 迷はされて。

口寄せた我なれど、今死に口に寄り人が、語りたいぞや問はれたやなう」。「梅田に屍さらしなどは、我名月の面影よなう。姪一人伯母一人。何とて我に知らせもせず。不慮の死にをめさったる。目の見えぬ我なれば、をば捨山か恨めしや」。「山の枯木の一本立ち。母なき身には伯母様を、灭とも地とも頼めども、ふぢの水柱茅屋の雨。人こそ知られ屋の内に、直ぐで立ッたる人は無し。先へござった母様の、第三年も立たぬ間に、出船は遠く入り舟の、親しうなるは世の慣。烏帽子寶の親父様。家の今めに廻されて、此方等女夫は雨夜の星。何所に有るやら無いやらで、死なねばならぬ内の様、語れば親の懺悔なり。下された緋縮緬。形見になれどの端縫ひか。我名は苦の下紐も、與兵衛様はかいとほしや。六尺だけに存生へて、二度憂き死になされうかと、是が迷ひとなるわいなう」。「や、伯母が歎きもそれ一つ。心中の作法にて、死に損なひし片々は、試し物になると聞く。與兵衛が疵を養生し、本復したる其後に、試し物になるならば、伯母は何とならうぞや。和女も伯母が可愛ゆくば、片時も早う一道に、取り殺してはなぜたもらぬぞ」。「いやなう世間の心中と、夫れは違ひがあら金の、金銀づくの勘めの身、奉公人や主ある人、娘子なぞの添はれぬ中、狼狽へ死ぬ心中は、人殺し同前の罪に沈むも世の作法。幼稚馴染の此方女夫、比翼連理の中はよし。何不足は無けれども、家では誰が黙を打つ。大鏃の犬めらに懲り果てて、死ぬる身を云はば、面々じかいとも、心中の外の心中ぞや。町衆在所世間へも、此歎きを云ひ分けて、與兵衛様の命を助け、道心出家させまして、朝晩回向が受けたやなあ。そこに蹲踞ふ兄弟の、犬どもを追ひ出して下さらば、

○すでさいて 能で差しての義。ここきおろしての意。
○今の冒葉おのづから憎憎し、阿鳴の冒葉自然にやさし、嬰方の反映甚だ妙。

○紙ばしり 神子が紙を引くと精霊が去るとの説傳。

千僧萬僧百萬僧の、とひ弔ひにもます鏡。冥土の曇りが晴らしたやなう」。「いや是なうお龜様。女夫の衆が此今を、すでさいて飲む様に、言ひたいがひに云ひ籠めて、死んでもまだ云ひ足らぬか。榮耀が余ッて此方衆が、ほたへ死にめさるゝを、己兄弟が知ッたか。それに何ぢや兄弟の犬めらとは。私や犬ぢや黒犬ぢや。試し者になる與兵衛の、身體をがり〳〵〳〵と嚙んでやろ。梅田堤で和女の死骸、嚙まいで殘り多いわいなう」。「なう死人に妄語はなきぞよ。恩を知らぬは犬畜生。身の皮剝いでも母様の、御恩を思はば幡天蓋、袈裟の一重も上げはせず、着衣裳までもむがり取り、家一杯に荒鼠、父御を誑す見苦しや。それに弟の傳三めが、旦那優りにとぼし立て、提灯に釣り鐘と、主ある我が袖褄引き、與兵衛殿を失ひて、夫婦になッて家の跡、繼がうと云ふたを忘れたか。此方等夫婦は下人にて、今兄弟は旦那顔。車は海へ舟は山、皆逆の憂さ愁さ。語れば親の恥晒し。云へば詞のくずいをの、夜の衣の我夫の、命を助け出家となし、家を晦ます黒雲を、除はば晴るる胸の月。守りの神とゆふつげ鳥の、別れは又の逢ふ瀬あり。今は返らぬ三途の川。影は留まらず手に取られず、冥土の使ひ繁ければ、浮世の名殘是まで」と。梓の弓の弦に、弦走りして失せにけり。(二)』伯母は涙に沈みながら、神子の前とも思はれず、「これ長兵衛の邪見者。亡者の寄り口聞きやッたか。我は其方の姉ぢやぞや。身こそ貧なれ一文一錢、合力は受けまいし、何輕薄が言ひたかろ。現在弟に殿様付け、內外の者に追從するも、母のない姪子共、可愛がらせう爲ばッかり。月に一度しいて、二度三度とは往かねども、家のさだつも見て取ッた。此摑み頬兄弟が、お龜女夫を踏み付けに、せこめ廻

すと云ふ事を、盲目でさへ知ッて居る。其方に二つ眼は無いか。但知ッての指圖か。お龜は其方が死なした。お龜を返やしや姪返やしや。如何に妾が可愛いとて、我子に思ひ返るとは、酷いぞや憂いぞや」と、堙き上げ〳〵泣き叫び、傍なる竹杖追ッ取りて、姪の敵と長兵衛を、散々にこそ打ッたりけれ。傳三も今も縋り付き、「是れ申し伯母御樣。人中と云ひ女中の身。如何に弟御なればとて、近頃非道千萬」と、捩ぎ放す手を振り解き、「ヤア非道とは誰が事。其非道と云ふは己等兄弟。同じ女子と生まれても、己等とは違ふたぞ。善し惡しは嚙み分ける。エ、扨此伯母が手前兎も角もするならば、お龜夫婦を引き取ッて分立ッて商ひさせ、公事みやしても己等に、がや〳〵口を利かせうか。貧の病ひに肩身もすぼり、可愛や氣弱な甥姪を、踏み付けにさせたよなあ。切て片眼見ゆるなら、起ち居素振に氣を付けても、斯う闇々とは死なせまじ。其胴慾な心からは、二人が死にゝ出る體を、見ても見ぬ顏仕兼まい。恨めしの者共や」と、盲目打ちに擲り打ち〳〵。聲も惜しまず泣きけるが、「不便やお龜が存生に、己等が奢る面戯きたからう擲たかろ。若い身なれば齒切して、堪へた心思ひやる。是はお龜が打つ杖」と、折るゝばかりに四つ五つ。又ちやう〳〵と擲ちつけて、「今は打ッても擲いても、死んだお龜が歸るにこそ。由なき罪を作りし」と、杖をからりと投げ捨てゝ、前後不覺に伏し沈み、聲をばかりに歎きしは、道理責めてあはれなり。(三)』至極に詰り一言も、傳三兄弟顏を下げ、ふしめになれば長兵衛も、漸〳〵泪を押し止め、「道理とも尤もとも、皆某が誤りなり。此上は身に替へて、與兵衛が命を助け、出家させ、娘が願ひを立て申す。落居の後は今兄弟、家を追ひ出し申すべし。外聞と云ひ親の身で、のめ〳〵生きて居る心。伯母御推量遊ばせ」と、又さめざめと泣きければ、「オ、夫はせめても其詞、違はぬやうに賴むぞや。ハア神子殿へも面目なや。いつぞや爰へ生き口寄せに參ッたげな。美しい娘こそ、今大坂の口の端に、かかる梓も緣ならめ。拜んで下され賴みます」と、出づれば神子も門送り、「いとしぼ樣や」と諸共に、思ひの數も百廿。袖に涙を包み錢、繋がる因果や巡り行く、月にも日にも秋風と、捨て果てたりし與兵衛が、生き甲斐も無き身なれども、親伯母の心默止されず、髮剃りこぼし發心遂げ、妻の菩提も我後世も、助け給へと云ふ文字、其名を助給法師と改め、二度難波の故鄕へは、蹈み返さじと足曳きの、大和の國平群谷、大念佛派の庵室に、知邊を求め閉ぢ籠り、妻の位牌の手向草。悠悠たる谷に下りては、去此不遠の水を荷ひ、盤々たる山路に薪を拾ひては、十萬億土の月をよぢ、霜に憧れ霞に伏し、櫻が閉す柴の戸も、躑躅にあけて今年も早、卯月中旬になりにけり。(四)』相住みの道心は、二三日以前より、石山參りの留主なれば、助給一人佛前に、心も細き鐘の聲。靈山の雨の世捨て人。捨てても捨てぬ面影は、夢ともなく現とも、無き人爰に有り〳〵と、昔を見るも歸るさ知らぬ、死出の旅〳〵。露の仇駕籠急がん。こひと言ふ其たう網にからまれて、浮かみもやらぬお龜とは、外には人も水くらき、澤邊の螢稻の戸の、影かあらぬか簾のひまに、漏るは卯の花白妙の雪のな。振り袖ちら〳〵とな、ありし昔に奈良團扇。風かろ〳〵と駕籠舁きが、昨日の旦那今朝の幻。夢の浮き橋一つ橋。跨げぢや合點ぢや。跨げぢや合點ぢや。手にも取られぬ朧駕籠。姿の山に肩替ゆる賤が袂も幽なる、折り節助給は念佛に氣を屈し、忙然と眠

(三)公事みやしても　裁判事にしてもの義。「みや」は「宮」、公事を「くじ(神戯)」と通はせ、其緣で捨て詞に「宮」と言ふ語を添へ、「公事のみやのと立ちさわぐ」などの口合ひを此時代では用ゐた。既に前前の曲にも例は有ッた。「宮」に特殊の義は更に無い。

(四)一言も傳三一言も「出ぬ」と掛けた。

○落居の後は　落着の付いた上は。

(五)たう網　今いふ「とあみ(投網)」の義。

○人も水暗き　人も「見ず」と掛けた。

○雪のな　此邊小唄の調子。「な」は捨て詞の感歎詞。

○山中へ駕籠が來

た、其出端の形容としての飾りの有る文句。道心の身と爲ッて、死した情人に會ふ、事實からして既に虚構。

○わさわさと　落ち着かずいそいそする體。

○楢の葉の水　といふので暗に亡者たるを知らせる。用意緻密。

けざし、物に化されたる如く。うッかりとして表を見れば、山家に見馴れぬ女中駕籠、不思義と思ふ氣も付かず、身をも所も打ち忘れ、ぼんとしてぞ居たりける。細谷川の小石原、息杖の音かまびすく、川瀬が鳴るか空耳か、女の聲にて高々と、「北久太郎町古道具屋、傘屋與兵衛樣と申すお方は、此邊では御座らぬか」と、尋ぬる聲と諸共に、駕籠は庵に近付きたり。助給は元より魂魄に、氣を奪はれたる夢心地。「ヤ、是々其與兵衛は爰ぢや〳〵」と、扉を上げて打招く。「ヤレ〳〵嬉しや。彼處ぢやげな。駕籠の衆頼みます。最些急いで下さんせ」と、譏嫌よげなる高笑ひ。程なく駕籠は庵室の、柴の戸口に昇き据ゆる。簾を上ぐれば妻のお龜、にこやかなる絲の眉。芙蓉の目元わさ〳〵と「扨も熱い事かな。それそこな楢の葉の水一つ。下さんせ」と、汗押拭ふと見えにける。「いや〳〵水はいらぬもの。釜の下を焚き付けう。して先今日は駕に乘ッて、何處へ徃きやッた事ぞ」と云へば、「されば観音樣の御縁日。此方樣と爻樣と、中の能うなる願立てに、二十二社廻り仕まして、其次手に神子町の、黒格子お辻の方へ、在所の衆が呼ばしやんして、一寸逢ひに寄りました。去年此方樣の生き口を寄せてから近付きになり初めて、再々私を呼び出して、爻樣にも伯母樣にも、折り折りは逢ひまする。神子殿さへ合點なれば、何時逢はふと儘なるに、なぜ此方樣も折り折りは、呼び出しては下さんせぬと」と、そぞろに咽ぶ恨みの涙。世に亡き人と氣も付かぬ、夫の心ぞ哀なる。(五)『ム、先駕籠は預からう。爰へ通りや』と呼びければ、「嬉しや誰もなささうな」と、裙を掻い取る身も輕く、かりめの簾捲き返す。駕籠は亂れて失せにけり。助給内に案内し、「これ見や

(五)てきてき　刻む音の形容。此邊所作事に當てる文句。

○秋茄子嫁なそしる　姑は無し「秋茄子は嫁に食はすな」といふ俚諺が有る。此諺の意は、秋茄子は茄子の最も美味なもの故、姑が嫁を憎むあまり、其美味は嫁に味はせたくなく思ふとの義。一説、秋茄子は身を冷やすもの故、子など産むべき嫁に食はせるなと姑が注意するともいふ。兎に角秋茄子は其日偶姑や嫁に縁の有る所から此句を成した。

○火箸は二本國中に　火箸は二本と

今は此身持。結構な事は無けれども、浮き世の世話を余所に見て、藁の褄かみぶすま。先盜人の恐れなく、寢覺が能い」と云ひければ、お龜は庵の體を見て、「ア、ほんに扨も氣樂な住ひぢや。釜一つ鍋一つ。谷から水を汲んで來て、山から柴を折ッて來て、米ごし〳〵と洗ふて、俎板に白瓜菜刀取ッて、てき〳〵〳〵てき〳〵〳〵。ヤてき〳〵〳〵。ヤてき〳〵〳〵。相伴は如來樣。火吹き竹は一本。火箸は二本國中に、恐いと思ふ今めは居ず、此方樣と只二人、寢たけりや宵から長枕。寢ともなくば起き通し、誰が叱らうとも思はばこそ。世界の樂とは此住家。女夫一所に居る內に、切て一日片時でも、斯うした暮らしは爲もせいで、今是が何になる。何ぼ此住まひでも、女房がなうては些と事が缺けませう。鍋蓋と女房は無うて叶はぬ筈なれど、鍋蓋あッても女房が無い事の缺けぬは不思議ぢやまで、ほんに忘れた其筈ぢや。道具と女房は有り合はせ、尤もぢや〳〵。いい、いい、いい、いい、道具屋の娘ぢやもの」と、とんと背けて身をすねて、口舌仕掛くる目元なり。(六)』色氣を離れた道心も、何樣やら心浮いて來て、「ヲヽいかう口が上ッたの。斯うして居ても面白い事、芥子ほども持ちませぬ。胡散な事が有るならば、拷問なされ」と云ひければ、「それ其口が憎いわいの。此方覺えがござらぬか。鼬堀の伯母樣の、開けばあの與兵衛は、家の茶が飲み足らぬか、茶屋へもちよこ〳〵遣ふと有る、其詞を覺えてか。夫から尋ぬる折りもなく、今で胸に溜まッて居て、穿鑿せうばッかりに、今日は遥々來ました。茶屋で此方のまゐる茶は、新造の振がつめ茶か、但は白の白茶か、風呂で焚いた煎じ茶か。私がやうな潤茶は、爻はした詞も醒め切ッて、水臭うて呑まれまい。互にこ

いふのを「日本」に掛けた。「二本」は上の「一本」に對しての語。

(七)茶屋でこなたのまゐる茶は　茶屋でこなたが飲む茶は自家の下女のふりが立てた詰め茶か、さうではあるまいの義。「つめ茶」は煎じつめた茶かといふ。

○白の白茶　「白」は此時代流行の語。「白人」の略。即ち惡所場もの。「白茶」は色の薄い茶。「白」の縁で「白茶」と出したばかり、他に意は無い。

○風呂で焚いた煎じ茶か　元祿時代風呂屋女とて風呂に居て色を賣る婦人が行はれた、是に當て通はせて、「風呂で云云」と出した。

○その原や　「その原や伏屋に生ふるはははきぎの」とある源氏の歌から基づく。

い茶の初昔、私は忘れは仕ませぬ」と、衣の袖にひッたりと、抱き付いてぞ泣きにける。助給打ち笑ひ、「ェ、こうにも立たぬ悋氣ぢやなう。今は左樣の色茶もなく、只お茶湯で暮らします。去らば釜を焚き付けて、お茶湯一服供へませう」と、火打ち箱引き寄せて、はた〳〵と打ちければ、お龜すッくと立ち上り、「なう熱や堪へがたや。愛着戀幕の迷ひの火炎。緣に引かれて石の火の、身を焦す淺ましや。是までなり」と駈け出づる。「我を捨てて何處へぞ。暫し〳〵」と縋れども、影も形もなき人の、ありとは見えてその原や、伏屋に立てる我妻の、位牌に隱れ消えにけり。(七)』「ヤレお龜。女共。お龜〳〵」と尋ぬれども、木靈ばかりに姿もなし。「ま一度顏を見せよかし。情なの人や」とかッぱと伏し、消え入り〳〵歎きしが、漸々に正氣つき、「ア、狼狽へたり南無三寶。思へばお龜は死したる者。扨は魂魄止まッて、まざ〳〵詞を交はせしか。不便の者の心や」と、又咽び入るばかりなり。「ェ、口惜しや淺ましや。去年一所に死ぬるならば、迷ふとも共に迷ひ、浮かむとも共に浮かむべし。つれなくも死に後れ、中有の闇に迷はせし。今出家とはなりたれども、智識智者の身でもなし。文盲不學の青道心。念佛回向なしたるとて、亡者の功德によもならじ。今日は卯月十七日、此命日の明けぬ間に、今宵の中に自害して、來月のむかはりは、未來で一所に付き添はん」と、胸を定めて死を急ぐ、戀ひしき人は先にあり、此世に殘す心はなく、泪も溢れぬ死に用意。無殘と云ふも愚なり。(八)』「ヤア待て暫し、大坂の伯父在所の親。恩深き伯母のあり。狂亂したりと歎きをかけ、不孝の罪も恐ろしや。一筆づづの書き置きを殘さばや」と、佛前の經机引き寄せて、油も細き燈火の、消ゆる間近き

我命。心あまりて事足らぬ、筆のすさみぞ哀なる。かゝる所に相住みの道心、石山より立ち歸り、「何と助給御無事なか。今下向致した。やあえい」と、平包みどうと下ろして休みける。助給はッと思ひしが、ィヤ此坊主はいろはのいの字も讀み書きならぬ幸ひと、「まめで下向羨ましい。今にいかい參りか。在所の文を書きかけたる間に、温湯も沸いてある。洗足して休息あれ」と、云ひつゝ筆を早めける。道心何の氣も付かず、「オ、搆はずと遊ばせ。扨石山の繁昌、京大坂がうちあける。ヤア夫に付き戻りがけ大坂へ立ち寄り、此方の里へ見舞ふた。在所にも何事なく、長兵衛殿もお息才。鼬堀の伯母御から、念比の言傳。進上物を渡さう」と、平包押し開き、「來月の十七日はお龜樣のむかはり。供物になされとて、これ菓子が二袋。お齋でもなされうばと、大坂の名物ひの上の切り荒布。嵩高なばかりで錢安の物なれど、是齋にも非時にも重寶な、一分が二つ届けます。梅雨も近付く土用前。喉の疵が發ッたら、此藥を參ッて隨分命延ばはッて、伯母樣の後世菩提賴むとある言傳て。是は又白縮緬のしゆきん帶。衣の上に能からうと、氣の付いた伯母御樣。必らずおろかになさるるな。幸ひ文の次手なり。皆々慥に届いたと、念頃に遊ばせ。愚僧も一宿仕り、樣々御馳走忝ないと、一寸入れ筆賴みます。言傳てどもは明日。長道中の草臥、我等は最早休みます」と、我事ばかり言ひ仕舞ひ、奥に入りてぞ臥しにける。(九)』　此間に助給は書き置き細々と書き納め、伯母よりの贈り物、一づに取ッて押し戴き〳〵、位牌の前にも供養して、暫し絶え入り歎きしが、「扨も〳〵有り難や。益にも立たぬ甥一人。ある時は氣を痛ませ、心を盡くさせ身を碎かせ、苦勞の上に苦勞を掛け、一日盡くせ

●下の卷

し孝行なく、不孝第一の某を、勘當不興も爲給はず、如何なる合ひ緣奇緣にや、親も及ばぬ御厚恩。送りも遣らず自害して、又もや歎きを掛けん事、不孝の上の不孝の科。日月の怒りを受け、堅牢地神は大地を破り、奈落に沈め給ふべし。罪業深き此身躰」と、我と我身を搔き抓り喰ひ付きて、聲を上げてぞ泣き居たる。良更け渡る野寺の後夜、八聲の鷄も啼き交はす。明方も近付きたり。後れじものと位牌に向かひ、「これお龜。去年の五月に伯母御より、緋縮緬を下されて、御身と我が肌廻り、自害の耻を隱したり。時しもあれ今宵又、白縮緬の縡け帶。是れも二人が申し受け、永き形見と身に附けん。我も受け取る受け取れ」と、位牌のひれに結び附け、端を右手にしッかと絡み、斯う持ッたる心こそ、最期は後れ先立つとも、手に手を取ッて行く道は、只一筋の白縮緬。伸ばさぬ時刻只今」と、髮剃り取ッて押し當てしが、「ア、思へば〳〵名殘惜しの伯母御樣。身を達者に長生きし、後世弔へとて只今も、お藥までも下されし、志しを無下になす、御恨み御免あれ。神も佛も御慈悲に、我等を地獄に沈めても、伯母御の二世を助けてたべ、南無阿彌陀佛」と剃刀を、咽にがばと突き立てて、笛のくさりを刎切ッたり。まだ死に兼て目眩く、苦痛はせじと追ッ取り直し、人脉筋を四つ五つ、聲を掛けて刺し通し、うんとばかりにかッぱと伏し、反ッつ返しつのたれを打ち、苦む中にも妹脊の印、お龜が位牌に抱き付き、むかはり待たぬ花橘。昔の人と短夜の、雲隱れして世の人の、袂しほる藻鹽草。書き置きに名を殘しける。(一〇)』

下之卷　助給書置

堅地の長持ち嫁に傳はり、出來あひ半櫃風呂の下の霞みとなる　此一對の句、巧みでない。堅牢な製の長持ちは親の代から子の嫁にまで傳はり、又出來あひの、さして丈夫でもない半櫃は風呂の下に焚かれて霞み(即ち烟)となるとの義。前句の掛かりから言へば老少不定、因果數寄を述べた意でなければならぬ。

○そめいろの山　佛說、須彌山といふ高山。

○湯水も咽喉に錠前の　「錠前」で交通を遮る義を利かせ、湯水も咽喉に通らぬとの意を示した。掛け硯には錠前の有る所から、「錠前の」で「かけ硯」を出し、續い

古道具屋與兵衛入道助給。末期に親伯母の御方へ、申し殘す書置の事。つら〳〵思へば老い木却ッて春を迎へ、蕾める花の先に散る、世の慣らはし。かたぢの長持ち嫁に傳はり、出來合ひはん櫃、風呂の下の霞となる。老少不定の堺會者定離の掟。末世一代教主の如來も、免れがたしと思し召せ。それ一河の舟に棹を指し、一樹の蔭の合ひ宿りも、他生刼の緣と聞く。況や親となり子と生まれ、伯母と言はれ甥となり、一日養育の御恩は、そめいろの山より猶高しとこそは承はる。況て他年の御面倒譬へを取るに物なし。殊に去年五月の十七日、不慮の御難儀かけ商ひ。命を捨つる身の損銀を、他目には榮耀者呆氣者、氣違ひ者と人の譏り世の嘲り、親伯母の御歎き存ぜぬ我にも候はず。然れども生きて居られぬ心の中。今更申せば人を損ふ毀ち家の、立つ方もなき夫婦の者。涙で暮らす朝夕は、湯水も喉に錠前の、懸け硯の海替へ干しても、書き盡くされぬ我身の上、二人が胸に埋もれ木の、身にならずして誰人か、推量には及び申すまじ。其節お龜諸共に、相果て申すほどならば、二度の歎きは掛けまじき。迚も助かるほどならば、存生へ出家成就して、御恩の伯母樣情の親、百年の御壽命過ぎ目出度く、往生あそばさば、御菩提を弔ひ奉ることそ、順道とも孝とも申すべけれ。去年はお龜が憂へを見せ、今年は我等が歎きを掛け、お心を苦しめ申す事、罪に罪を塗り長持、孝行の元直に外れ申すなり。さりながら子弟主從父子夫婦五倫の親しみ何れおろかは無き中に、妻となり夫となり、偕老同穴の枕屛風、鴛鴦の襖障子、疵も破れもなき契り、今捨て賣にはなりがたし。殊にお龜と我等事、從弟同士の水入らず。鼠入らずの竹戸棚、釘も離れぬ中と云ひ、去年最期の折り柄も、一所

と思ふ頼みにて、廿才に足らぬ女の身、清く相果て候ひしに、我等思はず存命し、六道の辻に只一人。今や〳〵と左こそ待ち兼ね申すにや。現に現れ夢に見え、幻に來たり歎く様。見る度毎に片蹤も、存生へて有る心、思ひ遣らせ下されとよ。今は此世に亡き妻を、二度娑婆に堀り出しする、小道具屋の身にもあらず。無常の風の荒道具。身蓋揃はぬ離れ物。浮世の直打ち更に無し。輪廻の塵の置き古し、無明の夜市に賣り、賣り下げられんよりはと、今宵亡妻の忌日を期して、去年お龜が死した掛け、廿二歳一睡の夢を拂ッて、晴月己が眉間に施し、今月今日剃刀る剃刀。縁と縁とを合はせ砥に掛け、廿二歳一睡の夢を拂ッて、晴月己が眉間に施し、今月今日剃刀の、刃に滅し畢んぬ。悲しきかなや。娑婆に親伯母冥土に妻。未來に憎現世に慈悲。中に憂身を挟箱。何時の世にかは一對の、一つ蓮に生まるべき。是も因果の車長持ち。轟く穢土は假の宿。有漏路無漏路の中休み。割り籠辨當茶辨當。剃げぬ間の鬢れなれば、誰か端に殘るべき。たと〳〵此度ながらへても、重ね簞笥の引き出しの、一重足らぬ如くにて、お龜なければ甲斐もなし。去年一度に死したりと、思し召し切り給ひ、歎きも悔やみも御留め、只佛壇に指向かひ、夫婦の御回向有るに於いては、六尺扉風の隔てもなく、眞直に受け取り、先立つ妻の跡繼ぎとなり、共に三途のかは葛籠。一荷に手を取り打ち渡り、西方淨土に一文字。越ゆるは下品下用櫃。忽ち上品臈棚に到らんと、思へば最期急げども、返す〳〵も伯母御様。御名殘惜しき椀家具。法界ほかいの御回向、偏へに頼み奉る。南無阿彌陀佛彌陀佛と涙を染めて書き留む。毎日評判朝暮の供養。佛法繁昌の回向を得るも、其身の果報と承る。

○因果の車長持ち　因果の「車」と掛けた。
○穢土　佛經の語。此娑婆世界の稱。濁世と同じ類。
○有漏路　佛經の語。一般の凡俗。
○無漏路　同。大悟大達。
○三途のかはつゞら　三途の川から「葛」と掛けた。
○下品、上品　佛經の語。上根、下根と同義。
○ほかい　勝手道具の名。「法界」を受けた同屋。

て硯の「海」と出した。「かけ硯」は掛け子に爲った作りの硯。
○孝行の元宜　口調眞に古道具屋。
○水入らず、風入らず　似た音の文飾。

（總評）「卯月の紅葉」に接する作とて、事實もわざわざ似通はせた。「紅葉」では阿龜が與兵衛の口を寄せ、「潤色」では伯母などが阿龜の口を寄せ、「紅葉」では末期に緋縮緬、「潤色」では白縮緬を用ゐた。趣向は亡魂に訪はれて、更に死ぬ氣になるとの趣きで頗る面白いが、憎しい事には阿龜の亡魂の寫し方に凄味が欠けた。此様な光景は實に描きばえの有る所、それを筆が淡泊に過ぎたのは心得がたい。

書き置きは一趣向變はッた目さき、面白い。中には道具屋だけに頗る其商賣道具の緣語を用ゐたが、既に斯う用ゐ出したからには隨分と精を盡くして成るべく澤山引ッ掛け、呼び掛け、用ゐるに限るものを、事爰に出でず、まばらに讀み入れたのは確かに作者が充分の苦心をしなかッたものと見えた。のみならず句も錬れて居ず、引ッ掛けも目立ッたものも無く、「わりご辨當茶辨當」のやうな僅に申し譯に「剃げぬ」を緣語とした冗漫な句、「轟く穢土」などのやうな聞も分からぬ形容の句、此類を以ッて組み上げられた。

伊達染手綱

此一曲の評註は早稲田文學で變體草村氏が詳密に施され、既に輯錄して同文學社がら發り出してもある所、猶私見も有るが、今姑らく評註をば同氏の物に讓って本文だけを出す。

伊達染手綱

上の巻

大名に生まるゝ種の一粒が、何萬石ぞ幾萬人。腹の中からうやまひて、持囃したる舌つづみ。丹波の國の一城主。由留木殿のお湯殿の子、しらべの姫はお國腹、金水引の初元結ひ、未十歳のうちから、すらりとしたる生まれ付き。東の高家入間殿より、御養子分の約束にて、當からとる花嫁子。御迎への諸侍、五千石を頭にて、騎馬が廿騎雑兒醫者は御輿つき、大上臈小上臈おさし抱き乳母御乳の人、中老下らうの供乘物、陪卒據はいろは付け。以上四百八十挺。金銀瑪瑙枝さんごじゆ、研出し蒔繪の長柄の傘、長刀袋傘袋。時代の金襴鶴びしたすき、花うさぎ嚢にあられ大内ぎり。覆ひかけたる挾箱。濃紅の大紐を、高々と結びしは、盛の牡丹に異らず。臺所荷は次傳馬、おつづら荷物は通し馬。三十駄の馬方の、小歌がなッて小奇麗な、聲のよいのをすぐられしも、金にあかせし吟味なり。刻限は巳の上刻との定めにて、御迎への奥家老、本田彌三左衛門。數獻の盃足元はよろ〳〵と、猩々緋の道中羽織、白い所は髪ばかり。きんか頭に顔色も、襤珍の裁ち着けりりしげに、「何と〳〵。御供廻りが揃ッたら、お先手から乘り出しめされ。是さ文左源五左。身はおさへを乘り申す。萬事夜前申し渡す通りだ。若黨仲間あらしこ小者に至るまで、大酒を致さぬやうに、馬次ぎ舟渡し等にて、がうぎ亂暴を仕ッたらば曲事でおぢやんべい。又とさ。とまり〳〵の赤前垂に、しやらくら致さないやうに、第一お乘り物の先で見苦しい。去ながらとさ。永の道中下々が退屈致すべい。若濡なぞを企つるとも、目だたぬ樣に物蔭へよッて、ちよこ〳〵濡たがよくおんぢやる。目出度い折りからと申し、殊に女中のお供だ。少々の事は見免しにして置き召されッちや」。「あッ」と答へて宰領ぞも、「ァ、御立ち」と催す所に、奥より女中聲々に、「ァ、待たッしやれ〳〵。氣の毒やお姫樣。關東へ往く事は、いやぢや〳〵と、やんちやばかり御意なされ、お袋樣も殿樣も、たらしつ叱ッつ遊ばせぞも、何樣でもいやぢやとお怒り。おちの人の重の井殿、色々と申されても、夫ほど江戸へ往きたくば、嫉ばかり往きをれと、お乳の人の背中を、どん〳〵と打たしやんして、御譏嫌が損ねました」と云ふ所へ、「眉泣きはがし姫君は「江戸も東もこちやい嫌ぢや。已は往かぬ」と泣く〳〵走り出で給へば、侍衆も下々も御門に駈け出で、家老の外男ぎれこそなかりけれ。お乳の人色を變へ、「コレ申し御姫樣。下々の子供さへ、九つ十では物の聞き分け御座ります。あれ見さんせ。百里彼方の山川越えて、白髪かづいた家老殿。皆歷々〳〵の侍衆が、迎ひませに參ッて、江戸へ御座れば入間殿の惣領嫁子と、侍かれるお身ぢやぞや。お乳の養育の難になれば、女でこそあれ嫉は腹を切られねばならぬ。ァよいお子ぢやお興に召せ」と、威してもたやしても、「いや〳〵。皆の歎しぢや。何の吾妻が能い所。腰元共が謠ふを聞きや。ァみんな爰へ出て、いつもの歌を謠へ〳〵」とせめ給へば、お伽小姓の頑是なし、十二三なが手を揃へ、「山も見えざるかりそめに、江戸三界へ往かんして、いつ戻らんす事ぢややら、殺して置いて往かんせの。放ちは遣らじ」と泣きければ、「ァおきや〳〵。

お大名の給仕。琴のくみでも謡はいで、誰に習ふて華美な歌。姫様などにおしやんな。必ず置いて貰はう」と、お乳の人の不識嫌さ。本田も余り詮方なく、「申しお姫様。彼は人の口てんがう。花のお江戸は京優り。浅草上野の花盛り。又堺町木挽町の、てんつく〳〵でこのばう、辨慶や公平が、えいやッとどえなどゝ切り合ふを見せませう。道中の面白い事、富士の山と申す、天までとぐろく山を御目にかけまする。サアお興に召ませい」と、力一ぱい賺しても、「いや〳〵江戸へは往きませぬ。何様でもいやぢや」と泣き給へば、お乳も今はあぐみはて、何様して能からう御家老も、忙れてこそは居られけれ。お仲居の若菜は旅出立ちに、菅笠持ッて門外より走り入り、「なうお乳の人様。面白い事が御座ります。十ばかりの剃下の小けな馬方が、道中双六とやら、東海道の絵をひろげあぢな事して遊びます。御機嫌なはしにお目にかけなされませ」。「ヲ、〳〵ようぞ氣がついた。夫は聞きゝようだ道中の絵を見せまし。お心も移るため、馬子でも子供は大事ない。お許しぢや。その丁稚に、持て参れと呼うでおぢや」。「心得ました」と御門に出で、連立來たる馬方が、片肌ぬいで、さばきがみ。御前近くも無遠慮に、様先にあげ足して、「やれ〳〵〳〵あり様達は、あッたぼこしゆもない。朋輩共と悪徳に、道中双六打ッて、酋の銭程してこませうと思ふたに、人呼び廻ッてなんでやる。はれやれ〳〵〳〵きり〳〵乗らッしやれ。馬やろいし」とぞつかふぞ成る。「扨々利口な野良ぢやな。船頭馬方お乳の人。此方も其方と同じこと。して年は幾才名は何と云ふぞ」。「年は今年十一。五つの歳から馬追ふて、一代若衆にならずに、はへぬきの念者ぢや。所で名はじねんじよの三吉」。「扨

もよい名ぢや。聞けば道中双六が有るげな。慥元衆もうッて見や。姫様も遊ばせ。ヤア三吉も爰へ來い。苦しうない」と呼びければ、「あい」と云ふより慮外をも、かへりみじかき煙管の煙り。立交りたる女中の傍、そゞはぬ様に見えざるは、さすが童の一徳と、絵を取出し双六を、皆打ち交り遊ばるる。

道中双六

これ〳〵御覧ぜ。うたしやんせ。是こそ五十三次ぎを、居ながら歩むひざ、ひざくりげ馬。はいしい道中双六。南無諸佛ぶんしんと、書いた六字を六角の、投子は櫻木花の都をまん中に、思ひ〳〵のしるしを置いて、さらば此方から打出の濱。大津へ三里爰で矢橋の舟賃が、出舟召せ〳〵旅人の、乗おくれじとぞさ草津。お姫様より先姥が餅。一ロ二ロみな口ぞろよう踊りこえ、坂へ越すのも投子次第。投子をふれ〳〵。ふるや鈴鹿を跡に下れば負まいと、せきにせきより龜山に、煙草火うちの石堅師。おッと桑名の舟渡し。宮へ上れば池鯉鮒へ四里の、宿にころりは岡崎女郎衆〳〵。岡崎女郎しゆと、もつれ寐よやれ藤川に、思ひ〳〵の君待ち受けて、解く前垂の赤坂や。吉田二川白須賀ちよいと越えて、手はん御座るか振り袖に、ヤ此この荒居今ぎれ、舟に召せ〳〵蛤召の蛤々濱松まで。舞坂三里ヤ馴染見附の泊りと聞けば、誰も惜まぬ縞の財布の袋井や。のり掛川を飛ぶりて、讒嫉笑顔やサア日坂の蕨餅。越しなば何ぞ日本一の大井川。投子に無の字を打ち出せば水の出ばなの八十川の、嶋田金谷に二日のよぎみ。仕合はせよしの旅すゞ六里。七里八里もただ一足に、さき〳〵と咲きかゝりたる、藤枝岡部瀬戸のその飯。うつの山邊のとをだんご。所々の名物買ふて、ふあしつ

く〳〵つく手鞠子に、ひいふうみいよ。ふちゆう江尻にすッとん〳〵。とんと打ッたる興津なみ。松原はるゝ〻賣藥買ふて、月をすひ出せ清見寺。由井蒲原や吉原の、花の蒲燒名物の、鰻のはだへぬまづの宿。三嶋こゆれば箱根へ三里。投子目次第にせきこゆる。悪い目うてば手はんをとりに、元の京へ立ち歸る。がッてんか。ヲ、のみこんだ。小田原うめらう大磯平塚藤澤の、さはりもなしに双六の、さいさきも宜し門出よし、道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷神奈川こえ、川崎をこえ品川こえ、まづ先駈のお姫樣。一番勝ちに勝色の、花のお江戸に着き給ふ。一のうらは双六の、幸あり喜あり、慰み有りける道中と、どッと興にぞ入り給ふ。お傍の衆に囃されて、幼稚心の姫君、「斯う面白い東都とは、今までおれは知らなんだ。サア〳〵往かうはや往かう」。「ヤア御座らうとおッしやるか。そりや目出度わ〳〵。又もや御意の變はらぬ間に、行列揃へ」と立ち騒ぐ。お乳の人は勇みをなし、「左樣ならま一度大殿樣、お袋樣とお盃。是も馬子殿おかげぢや。出來いた〳〵。其方には禮いふ褒美やる。其處に待ちや」とざざめき渡り、奥に御供し入りにけり。馬方は遂に見ぬ、金の間をうそ〳〵と、覗き廻れど趾の外、踏みもならはぬ備後表。「ヱ、此座敷はぎやうに滑ッて歩かれぬ。大名の家よりも、此方の家がけッこで御座る」と、獨言して居たりけり。お乳の人の大高に、お菓子さよ〳〵ぶんかうに盛り入れ「どれ〳〵三吉其處にか。まあ〳〵其方はけな者ぢや。道中双六お目にかけ、夫故に姫君樣お江戸へ御座ろと御意なさるる。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子。有難ういただきや。お錢三筋買ひたい物買やや。殊に其方は通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人

の重の井に逢ふといや。見れば見る程よい子ぢやに、馬方させる親の身は、よく〳〵で有らう」と、最念比の詞の末、「三吉つく〳〵聞きすまし、「由留木殿の御内、お乳の人の重の井樣とはお前か。そんなりや己が母樣」と抱きつけば、「ヲ、こは慮外な。おのれが母樣とは。馬方の子は持たぬ」と、拗放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋りつき、「なんの無い事申しませう。わしが親はお前の昔の連合ひ。此御家中にて番頭伊達の與作。其子は私。此方樣の腹から出た。與之助はわしぢやわいの。父樣は殿樣のお氣に違ふて、國をお出なされたは「三つの時でおろ覺え。沓掛の娩が咄しには、母樣も離別とやらで殿樣に御奉公。此方を娩が養育し、父樣に逢はせたう思へどもも甲斐もない。母樣の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、重の井樣と尋ねよと、念比に教へて娩はおれが五つの年久しう痰を煩らふて、あげくに鳥羽の祭禮に往て、餅が咽につまッてつひ死んでのけました。在所の衆がやしなひで、漸々馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。是守袋を見さしやんせ。何の盧を申しませう。お前の子に紛れはない。外に望みは何にもない。父樣を尋ね出し、一日なりとも三人一所に居て下され。みごと沓も打ちまする。此草鞋も私が作ッた。晝は馬を追ふて夜は沓打ち草鞋作り、父樣母樣養ひませう。父樣と一つに居て下され。拜みまする母樣」と、取り付き抱きつき泣き居たり。お乳はハッと氣も亂れ、見れば見る程我子の與之介。守袋も覺え有り、飛ついて懐に抱き入れたく氣はせけども、アッア大事の御奉公。養ひ君のお名の疵。偽ッて叱らうか。イヤ可愛げにさうもなるまい。まあちよッと抱きたい。ヲ、どうせうと、百千色の憂き涙。二

つの眼にはたもちかね、噎び沈みて居たりしが、いや〳〵我子ながらも賢しい者。僞ッて實とせず、母を心のきたない者と、視下まるるも情なし。譯を語ッて合點させ、耻しめて返さん物と、涙のごふて氣を靜め「爰へ來い與之介」と、引き寄せて兩手を採り、「扨又大きうなりやッたの。迚も成人せうならば、侍らしう何故尋常にも育たぬぞ。顏の道具手足まで、母は斯うは產みつけぬ。美しい黑髮を、此やうに剃り下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ」と、又さめ〴〵と泣きけるが、「これ物をがてんしや。腹から產んだは產んだれども、今では子でも母でもない。淺ましう成りさがッたを、嫌ふて云ふではさら〳〵ない。爰の譯をよう聞きやや。母はもと御前樣の奉公人。與作殿は奥小姓。たがひに若氣の戀ひ風に、擦つもつれつ、一夜が二夜と度重なり、通はせ文をお次に落とし、小姓目附に拾はれ、武家の作法と云ふ內に、殊にお家は御法度きびしく、御家老衆の評定。父も母も御成敗と極りしを、御前樣のお身にかへ、お命かけての御訴訟。殿樣の御慈悲にて、科を許され其上に、表だッて夫婦になされ、與作殿は段々に、奏者役番頭千三百石まで、お取り立て、追腹ほどの御恩の家。其間に其方を設け、上には姫樣御誕生。御內證のよしみにて、母が乳を上まし、首尾さへよければ其方も、今家老衆の子同然に、二番と下座に下がらぬ人。情なや父樣が、江戶詰めの山谷通ひ。大事の所を仕損なひ、又切腹に極ッた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫樣の乳離れ、御病氣も出ればいかがとて、母を其儘殘さうため、父樣の命助かり、奉公搆ひの御改易。其時母も一所に退けば、尤も夫婦の道はたつ。お姫樣の乳離れ。お苦みをかけまし、身に餘ッたお家の御恩。誰がいつの世に報ぜん。殘ッて御恩を報じてくれと、父樣のことわりゆゑ、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたわいの。男の子は幼うても御勘氣の末氣遣ひな。與作が子とばし云やんなや。早う御門へ出や。ア、いかなる因果な生まれ性。現在我子に馬追させ、男の行方も知らぬ身か、母は衣裳を着飾ッて、お乳の人よお局よと、玉の輿にのッたとて、是が何になる事」と、聲を忍びに泣くばかり。子は生まれつき賢くて、聞き分け有るほど猶泣き入り、「悲しい咄しを聞きました。去りながら、常に姥が申したは、姫君樣と私とは、乳兄弟の事なれば、母樣にさへ逢ふたらば、父樣も出世なさるる由。御訴訟なされ下されかし」と、云へばちやッと口を押さへ、「ア、〳〵勿體ない。その乳兄弟云はぬ事。姫君樣は關東へ、養子嫁子にお下り。高いもひくいも姫御前は大事のもの。先は他人の世間てい。三吉と云ふ馬追ひが、乳兄弟に有るなどと、どう障碍にならうやら、蟻の穴から堤も崩れる。輕い樣で重い事。ひそ〳〵云ふて人も聞く。先早う出てくれ」と泣く〳〵云へば三吉。「ア、母樣。あんまり遠慮過ぎました。先云ふて見て下され」。「未だ云ひ居るか聞き分けない。夫の事我子の事。母に如才が有るものか。合點の惡い聞き分けない」と制する內に奥よりも、「お乳の人はどこにぞ。御前から召します」と呼はれば、「あれ聞きや。人が來る。出てたも」と、手を取ッて引き出だす。不便や三吉しく〳〵涙。頰冠して目をかくし、沓見まつべて腰につけ、見すぼらしげな後影。「こりやま一度こちら向きや。山川で怪我しやんな。雨風雪ふり夜道には、腹が病いと作病おこし、二日も三日も休んで煩はぬ樣にしてたも。毒な

物喰はずに、腹や麻疹の用心しや。可愛の體やいた〳〵しや。千三百石の代取が何の罰ぞ、咎めぞ」と、式臺の段ばこに、身を投げ伏して歎きしが、懷中の有合ひ壹歩十三服紗につゝみ、「是たしなみに持ッて居や」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めし氣に、「母でも子でもないならば、病まうと死なうと入らぬおかまひ。其一歩もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の與作が惣領ぢや。母樣でもない他人に、金貰はう筈がない。ヱ、胴慾な母樣。覺えて居さッしやれ」と、わッと泣き出す其有樣。母は魂消え入ッて、「養ひ君お家の御恩思はずば、扨一人子を手放して、なんの遣らうぞ。奉公の身の淺ましや」と、悶えこがれて歎きける。時に奥口ざざめいて、早御立ちと姫君の、御輿舁あげ行列立て、お乳の人の乘り物を、ひらづけにこそ舁き寄せけれ。お乳はさあらぬ顔つきして、「姫君のお伽に、最前の馬方を此乘り物に引きつけ、お慰みに謠はしや」。「畏ッた」と宰領ども「こりや。其處なじねんじよめ。謠ひ居らう」と、きごつなく、「ヤア此奴はほえをるか。何ぢやこりや忌々し」と、握り拳を二つ三つ、いただきながら泣き聲に、「坂はてる〳〵鈴鹿はくもる。土山あひの、あひの土山雨がふる」。ふる雨よりも親子の涙。中にしぐるゝ雨やどり。

中之卷

これ泊りぢやないかえ。泊りなら泊らんせ。泊らんせ〳〵。旅籠安うて泊めませう。上旅籠中旅籠、お望み次第すき次第。椀家具も奇麗な座敷は此夏表がへ。寢道具ようて酒ようて、お茶は上々きちんでなりと、据ゑ風呂もしやん〳〵。かゝり湯取ッてかげん見て、旅の汚れのあかつきは、七つ

立ちか八つ立ちか。枕のお伽が御用ならば、振袖なりとつめなりと、足さすッて腰打ッて、吸ひ付け煙草のきせるのがんくび。首筋もとからぞッと庄野の六藏でないか。よい女郎衆乘しやッて足元がかるいの。置いてたも。ア、しやらくさつの三介三藏。石部金吉泊りなら泊めてたも。なんぼ先へ行かんしても、旅籠屋は皆ひとつ。同じねを啼く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか。目元にしほがこぼれる。爰へ見える坊樣は、此暖かなに紙子着て、仙臺の坊樣か。あの旅人は京の八幡の生まれやら、足にごんぼの毛がむく〳〵ぢや。向かひ通る菅笠樣、足元腰元身のまはり、すッきり奇麗にはいた樣なは、伯耆の國の人と見た。是々爰な若衆樣。越後衆か明石か。鬢がちッくりちぢんだ。あれへ大名一かしら。瓜ざね顔の旦那殿。東寺から出た人さうな。跡から御座る角まへ髮、吉野の衆かはなが美事。これへ見えた飛脚の足元のねばいは三河者に極ッたぞ。常陸の衆はおびで知る。是爰な奴殿、越中の國の人と見た。なんで見たれば此下紐を、といて一夜は泊まらんせ。夕暮れは急ぎの人も呼びとむる。色こそ道の關の地藏、しろこ屋の左次が内、小まん小女郎小よしとて、百廿里の名取ども、人呼ぶ片手の袖の下、おごけの替匣そこいには、戀ひに心をひねり苧の、纏みだいた胸の中。何とならそのうき身ぞや。「なう小よし小女郎。かうした勤めさま〳〵あれども、君傾城と云ふ者は、此るゐでの王さま。それから段々ある内に、おぢやれの身には何がなる。朝の夜から見世ざらし、晝休みから泊りまで、吉原雀のなく樣に、息のありたけしやべッて、それでも泊まりどあることか。如何した事やら此頃は、一ぜん盛の客さへない。隣にはあの樣に、大名のお姫樣、

今日で三日の逗留。よひあした百六十人。どッぱさッぱと忙がしい。これの内はいかな事、下宿さへ泊まりがない。晩にはみんな覺悟しや。旦那殿のにがい顔、日比はへた角にまたが咲かうぞ。なうこはや。常にひいきな馬子衆も、こんな時に客ひいて呉れそな物ではないかいの。ヤそれについて小女郎。そなたのおてき松坂の、七二は何として見えぬぞ。口説でもしやッたか。梯子の下のごそ〳〵が、過ぎて氣色でも悪いか。余りごそ〳〵ごそついて、馬は追はいでおとがひで、蠅をやろぞや」と云ひければ、「ム、其七二とは九郎助の事か。それは未生以前で、今は挨拶きり〴〵す、しいと云ふ馬追ひ聲も聞かぬわいの。初めはたんと可愛うて、元結の脚絆の、鬢付買ふの帶買ふの、くつの錢までつづけた、其わしが目を拔いて、一人か二人かみな口の、火なは屋のおげん、未だ土山のくし屋後家、庄野のふとのお米がたはら腰にくひ付いて、馴染のおれをすほんぬきに逢はせた。それも云ふたら止むにもせい。ほでてんごうの貧乏神。何もかもほつきあげ、今は布子と繻絆と、たッた二枚の四九をやッて、親方の駄賃の算用も立たぬげな。聞けば小まんの知音の、與作も博奕の友ぢやげな。與作がいとしか異見しや。小よしも取り沙汰ききやらう」と、云へば小よし小聲になり、「去ればうちの旦那が、龜山の問屋で聞いて來て、これの小まんが懇ろする、馬方の與作めは、博奕打ちの大將ぢや。あれから盗みの下地ぢや。重ねて來たともあしらふな。余程彼奴に懸けもある。丸裸にしてなりとも懸けを取ッて、それからは、門爪も踏ませまいと、夫婦咡きうなづいて、寄り合ひに行かんした」と、語りもあへぬに、小まんはら〳〵涙にて、「勸めの身にもおぢやれの身は、下の

下といふは爰の事。朋輩衆へも言はなんだ。横田村の父樣、二石二斗の未進につまり、六十六で水牢、男にも娘にも、子とては此身ばかりなり。しよざいこそ出女なれ、お大名へも知られた、闘の小まんが父親を、水牢では殺されず、參宮するとて隙もらひ、女子の身で代官所を、秋納めまで請合ふて、牢を出しは出したれども何をあだてに何とせう。まへの樣に客は勤めず、私仕事に賃苧うみ、女中とまりの袖の下、小まんといふ名でほつ〳〵と、鶴のあはれや淺ましや。請合ひの日は近付く。氣がいさまねば身もやせて、辛苦するのもあの人の、身をもくろめて遣りたいの、念力一つで立てる身が、世間でわるう謠はれて、まめしげもなき浮世や」と、をごけにひれふし歎きしが、「あれ〳〵あそこへ謠ふて來る、本小むろのひんぬきは、與作〳〵」と小手まねき、扨も美事なソンレハおつづら馬や。七つ蒲團にソンレハ曲录据ゑて、我もむかしは乘りし身を、人は夫とも白子屋の、見世さきに馬引き付け、「こりや小まん。此旦那殿馳走して泊めましや。お供かけて三人ぢや。サア下りさッしやれ」と荷物とく。小女郎小よし取り取りに、「それお足の湯先奥へ。合ひ宿もござりませぬ。ひろ〳〵と、御休みなされませ」と、奥にともなひ入りにけり。與作は荷物も跡付けも、そこ〳〵に投げおろし、「小まん此中逢はなんだ。無事で嬉しい。頓て逢はう」と、馬の口取り駈出だす。手綱に縋ッて、「これなんぞ。語る事がたんとある。此方も云ふ事ある筈ぢや。そは〳〵せずと待たんせ」と、引き戻せば、「エ、じやまな。其話しはいつでもなる。急な事ぢや遣ッてくれ」と、振りきれば抱きとめて、「是どうぞいの。何がそれほど忙がしい。どうで心に一物有る。譯を聞かねば遣りはせぬ」と、見世に

とんと抱きすゑられ、「ヲヽ荷物さへ下ろしたに、一物が有るものか。氣遣ひさうなに、短う咄して聞かせう。此不仕合はせを聞いてたも。朋輩共がけんねじついて、錢儲けする羨ましさ。勢多の久三が ぞうの時、百切はッて見たれば、勝つほどに〳〵一いきに七百。こりや門出が面白いと、腰にひッつけ。しやん〳〵〳〵と鈴鹿で增ついて居る。爰へもちよッと出かけて又六百してやッた。是でおけばよい物を、慾には見えぬ目川村の、馬子共よせて我らがぞうを取ッたの。當たらぬか〳〵。蠶さがりから七つまで。一文と六文の錢の顏を見ぬほどに、前の勝をぶちこんで、五百あまりのしすごし。ぞつこいぞこそで此損を、梅の木のせさいの辻で、身を粉にはたいてやッて見た。和中さんでもきくにこそ。金になはいて一歩二朱の借錢おふて、肩の重たい石部の八瀨に請合ふてもらうた。是をいくさの始めとして、大津八町で八百はける。小野の宿の小町塚で、九十九文してやらるゝ、すりはり峠の氣が細うては勝たれぬと、へそ村の上で分別しかへ「森山の觀音堂で、卅三夊が質置て、心は鬼神と出たれども、つひ平げてのけらるる。伊勢へ通しにいッた時、宵から あかつきの、明星が茶屋で飲み干す樣な大ぐさり。借錢の利を一月に、二月をぬる松坂こえて、くも津の渡しで算用したれば、二貫づつ四つ合はせて、二四が八瀨めに八貫のしやく錢。是はならぬと思ふ所へ、向かふから馬追ふて失せをる。じたい八めはぶう〳〵なり、己が胸倉しッかと捕ッて、こりや貸した錢はどうする。見忘れたか八ぢや〳〵と刺す樣に云ひをる。ぐど〳〵と見苦しう詫言もして居られず、錢と云ふて今はない。正味でかッた錢ではなし。數ばかりの勝負づく。一ばん

切についで見て、八貫を濟ますか十六貫おふ物か、ヲヽ來いと云ふたれば「八めは數年の通りもの「こちは八貫出して置く、負ければそれで取り遣りなし。勝てばむして十六貫。なんで濟す合點ぢや。抵當もなうてはいやぢやと云ふ。此方も引かれぬ云ひがかり、是此馬を知ッたか。池鯉鮒の市で九雨一分。親方の物なれど十六貫のかはりに、五百目の、馬ならしてこいと、木蔭へよッて錢にぎり、サアどうぢやといふたれば、三まいせいに七つぢやと二文張りをッた。まつかせとつくほどに、手の內に殘ッたは、たしか七文。南無三寶しをッた。一文はねて六文にして、當ててとらうと思ふて一文しやんところめて、ついて見たれば、かなしやの八文で有ッた物。一文はねて七つにして、彼奴が壺へあてがふたは、どうした因果のかたおふり。此方げんなりとなるほど、八めはいきッて馬を取ッたとしがみ付く。今日の乘り手は氏神やくそくの馬次ぎまで、やれ〳〵とせがまるる。八めも武士をのせたれば、なぜ馬を追はぬと目のぬけるほどしかられて、久保田で旦那をおろして、追付馬を取りに行くと、早おひばぢに追ッて來る。親方の馬をとられては、此海道は云ふに及ばず、木曾海道中仙道。たたずみが叶はぬ。八藏めが來ぬうちに、早う內へ往にたい」と、溜息ついで語りける。小まん心もくら闇にて、「人の沙汰に違ひはない。世につれるとは云ひながら、鼻しい心にならんした。古は御れき〳〵。私等ふぜいは下司にもお遣ひなされまい。緣なればこそ膚ふれて、抱いつしめつのわりないごと。嬉しいやら悲しいやら、一ばい愛しさ增す物を、わるい病まひがつきました。そりや雲介の身持ちぢや。友達仲間の交際で、引かれぬ事が有るにもせい。私が親の未進米、此六

日の吉書に立てねばもとの水牢。此世から八かんの地獄へおとす私が心。苦にかけうでは無けれども、案じてもくだんせず、しこり博奕のわる遊び、扨もつれない氣と思へば、あつい涙がこぼるゝ」と、せき上〳〵泣きければ、與作「わッ」と泣き出だし、「そりやきよくがない〳〵。慰みにも欲にもせぬ。其方の親の未進米、二石二斗は何程ぢや。むかし與作が草履取馬取の切米。是で可愛いそなたが親を殺させはせまいと、痩我をはッての出來心。千三百石から馬追ひまで成り下がるぼんのくぼ。よい事はない筈と、思はなんだは身が不覺。是は主の天罰と、あきらめて濟ますが、しこり博奕の榮耀とは、去りとは小まんむごいぞや。皆是そなたの親のため、胸に書き付けあるならば、爰が立ちわり見せたい」と、打ちたゝいたる胸當ても、しぼるるばかりの恨み泣き。小まん是はと手を合はせ、「忝なうござんする。とうに云ふてくだんせば、恨むまいもの。堪忍して下さんせ。父樣の出入りも、夏の物共人手に渡し、朋輩にも無心云ひ、百三十匁ととのへ、まちッとの所は賃苧もよッぽどうみためた。これ。見さんせ」と苧桶より金取り出だし、父樣の命代落ち付いてくださんせ。日が暮れて間がある。よもや八も來をるまい。泊まりどは無し私も隙。馬は向かひに繋いで、中の間に寢ていなんせ。たがひの憂きを散ぜう」と、草鞋の紐とく所へ、石部の八藏きよろ〳〵目して來りしが、「ヤア與作か。人の馬をとわりなしに、美濃路まで隱れもない、ひぬかの八藏めのあらい男知らぬかい。十六貫をただせうや。どうずりめ」と、馬をとく手を飛びかかり、捻ぢあげて、「こりややい。我がひぬかの八藏なれば己は丹波與作ぢや。二百めのかたに五百目の馬をほしいか。遣ッたら譏

嫌がよからうな。三百目のつりを持ッて來い。五十三次に汁かけて、かみこなす與作ぢや。づないやい〳〵ほてッぱらめ」と振りちぎる。「ヤイ男達は置いてくれ。錢濟まいて爲たかせい。腕づくならヤア來い」と、ぶッてかかれば、小まん取り付き「なう八藏殿。こなたは粋のやうにもない。其方も此方も親方持ち。馬をやッて能からうか、取ッてこなたを褒めうか。聲高に云はずとも、了簡づくがよいわいの。情なや」と泣きければ、「ヤイ爰な引きさがれ。其涙は與作に泣け。こちや忝う無いわいやい。取るべき錢はとらずに、馬を取るが了簡ぢや」。「いやそりや成らぬ。此門に繋いだ馬は、此小まんがやらぬ。關の小まんがやらぬぞ」。「イヤしにめらうのふりはりめ。竹の策をくらふなよ」。「オ、女子を相手にならば爲や」。「ヤア爲かねうか」と策を持ッてはたとぶつ。與作小まんを押し退けて、「あれは余所の奉公人。なぜくはした」。「オ、我女房ぢや所でくらはした」。「ム、ようくらはした。女房共の返禮」と、拳をかためて目鼻の間、缺けてのけと打ッたりけり。「來い。する氣なら爲て見せう」と、互にこづかを取ッては投げつ投げられつ、ぶッつぶたれつ摑みあふ。誠に馬子の喧嘩とて、馬のふみあふごとくなり。八藏は力ばかり、與作は取り手柔術とり。すりちがひに小腕を取り、こぶらを蹴かへし、「こりやあ」と取ッて投げつくる。門柱に腰骨うち、よろつきながら脫みつけ、「どうずりめ。覺えてけつかれ。問屋馬ざし親方へ斷ッて、海道筋のごきのみをぶちあげ、菰かづかせて見せうず」と、身を捻ぢ振ッて立ち歸る。小まん追ッ付き「コレ八藏殿。公用勤める馬方が、馬さし問屋へ斷られ、何處で身が立つ物ぞ。此小まんが手を合はせる。男は當たッてくだけい

ぢや。堪忍して下され」と、詫びるほどなはつき上り、「十六貫と云ふ錢貸して、其上に投げられて、堪忍したら、其方はよかろ。己がわるい。臭作めの博奕うち。ぬす人と、此門からわめいて往く」。「なう是々爰に百卅匁命がはりの金なれども、男のためぢや惜しうない。是で濟まして下され」と、取り出だすを引ッたくり、必ず跡もすませよ。錢の直段はどうせうぞ」。「ハテそこらは摑はぬ。そなたの勝手にしてたも」。「そんなら是で拾貫分。相場は十三もんめん巾著」。捨ておこんでこそ歸りける。小まんは小首かたふけ溜息ついて立ち歸り、「先の金を渡してやう〳〵と去なせた。彼等との変際、重ねて置いて貰ひたい」と、つぶやけば臭作肝をつぶし、「其金渡してよい物か。取りかやさう」と立ちあがる。「コレ待たしやんせ。人の物おひながら、返さいでよいかいの。昔とちがふて當代は、道中筋も吟味つよく、馬借問屋へ斷られ、惡名が立てば、とん〳〵とすたッて、出入りの門もふさがれば、おのづから逢ふ事も成らぬやうに成りはて、萬一お國へ聞こえての、恥辱は二度返らぬ。父樣の未進も云ひ延べるだけ言ひのべて、叶はずば水牢へ、代りに私が入る覺悟。差し當ッた男の難儀、すくへば私が本望」と、云へども臭作聞き入れず「馬方風情になんの恥辱。うき身やつすは親のため。其金をやる物か」と、駈け出でしが、「南無三寶。こりやならぬ。是の旦那の左次殿が、何事が出來たやら、問屋組中つれだち、それ其處へ戻らるる。何の彼のがやかましい。一寸かくれて逢ひともない。馬も何處ぞへ引いてくれ」と、隣の見世の幕のかげ、乘り物あるを幸ひに、戸をあけ片足ふみこめば、內より「あいた、あいたたして。横腹をふみくさる。何者ぢや」と、小丁稚が大欠して

によッと出る。「ヤア石部のじねんじよか」。「臭作殿か」。「そちは爰に何して居る」。「おりや江戸へ通しの馬追ふて、本陣に泊まるが、夕飯すぎから眠たうて、爰でぐッとやッた物。あり樣はこりや何事ぢや」。「いや氣遣ひな事ではない。隣の旦那に逢ひともない。爰へ隱してくれ」と言へば、三吉邊りをすかし見て、「其所なは小まんか。ヱ〳〵うまいな〳〵。已やとうから知ッて居る。外の人なりや成らぬが、臭作と云ふ名で愛しい。臭作の事なら引きはせぬ。隱してやたも。ヲッはいりや」と、膝おし合ひし心ざし。知らねど親に孝行の、通ずる念こそ哀なれ。程なく亭主門口から「內外の者共皆起きよ。問屋殿庄屋殿組中殘らず御座ッた。かかも起きて出や〳〵」と、わめく聲に出女共、いはらじ諸共表に出づる。庄屋問屋口をそろへ「かかたお聞きやれ。今日の寄り合ひは、是の小まんに付いて代官所のお差紙。小まんが父親横田の彥兵衛、四年此かた二石二斗の御未進にて、水牢に入れられたを、小まんが願ひ請負ひゆゑ、出牢仰付けられた。宿中としてきツと取り立て納めませいと、則ち小まんをお預けぢや。ようお聞きやれ」と言ひ渡す。小まんうつむき涙ぐむ。女房も驚きて「おとましい事仕出しやッて、主に厄介かけやるか」と、言へば亭主とがり聲「なんの主の厄介。一文もこちや知らぬ。上り下りの旅人衆も、關の小まんと言ふ名にはおぢて、百やる人も二百やる。一夜の貰ひもかもめじりに取りをる。百目や二兩は、半年にも貯れぢも、臭作と言ふ博奕打ちのぬす人めに、有りたけこたけ仕揚げて、夏の物は半がいに、繻絆が一枚なささうな。臭作がかけが余程ある。皆おのれが請合ひぢや。帳面は忘れぬ。旅籠が六かたけ、酒が四升五合、十父もりが

七十杯。芋とくぢらの煮賣りが八十五杯。くらひも食ふた蒟蒻の、田樂を百五十串。蒟蒻の錢ぢや
とて、砂にしてすはせうか。盜人におひなれば、此の出入りはこちや知らぬ。與作めが身の皮はい
でも、二石二斗が物はない。馬を質におさへて、彼奴にきッと濟まさせ、小まんを內へ入れて置きや。
皆御大儀でござる」と、辭義もそこ〳〵戶を立てて、錠さす音こそきびしけれ。庄屋間屋組がしら、
「扨々與作と云ふ奴は、存じの外の大食。旅籠から、盛り切りから、蒟蒻くふて賣賣り喰て、其間に小
まんと云ふ、妓女を夜食に喰ひをる」と、めん〳〵宿にぞ歸りける。與作は肌に冷汗ながし、漸這ひ
出でくるるの節穴、しとみの隙間のぞけど〳〵見えばこそ。竹簾子の出格子に、首を伸ばして取り
付けば、內より顏がにょッと出る。ちやッとひけば、「ァ、大事ない〳〵。コレ私ぢや」。「小まんか」。
「與作樣か。今のを聞いてくだんせ。悲しい事に成りはてて、籠の鳥に成りました。私が斯うなる
上は、父樣へ難儀はもう懸からぬ。こな樣にあふ事は、ならうやら成るまいやら、是が別れに成らう
やら、下から上は淪られぬ」と、手に取り付いて泣きければ、「ィャ是くもにしるが出來てきた。ぞうし
た縁やら三吉めが、與作と言ふ名にほれて、常に己を大事にする。乘り物の內でたらしこみ、隣りに
とまッた大名の、金を盜んでくれまいか。男と見こんで賴むと、のぼせば此奴がのぼされて、成程盜
んでくれうといふ。なればもと」と、言ひもあへぬに「いや〳〵〳〵。人まで聟におと
す事。止しにして下さんせ」。「ァ氣の細いあらはれても、彼奴が打たるゝ分。三吉殞たのんだ。
引かせはせぬ」と言ひければ、「はれやれ〳〵〳〵しちくどい。盜んで入らずば捨ちやいの。此じれ

んじよが賴まれて引きはせぬ。ァヲ親はなし一門なし。げんこ取るより小さい首。意氣づくなら取
ッていけ。盜みして露はれ、首きらるゝが不思議か」と、義を立てぬきし侍ひ氣。盜む黃金もくちせ
ざる、筋目恥づかし哀なり。「ァ、賴母しい。命掛けて賴んだ」と、ありたけそやされ、「ァヲイ味方があ
れば氣がおくれる。何處ぞへとッと退いて居や。ァア小まん女郎。此守袋が預けたい」。「ァヲ守袋は
かけて居やいの」。「いや〳〵是には私が本名が書いてある。若しあらはれて捕らまへられ、人に見
せれば恥辱ぢや」と、解いて預けし神妙さ。裾ねぢからげて忍び入る。「坂の下の彌六が方へ退いて
ゐて、夜中時分に戻らう。小まんもはいりや」。「私やあぶなうてきや〳〵する。南無地藏樣〳〵」。
「ェ、今願立てがきく物か。聲が高い。ひそかに〳〵。ひそ〳〵」と、胸はだく〳〵だくぼくの、坂の
下へと別れける。武家は道中おきてにて、半時がはりの、拍子木の、數も九つ十に余るやあまらず
の、子供心の愚かさは、盜みおはせし嬉しさに、拍子木を除けもせず、金欄の財布さげながら、門口へ
ずッと出る。夜廻りちらりと氣を付けて、暮ひ寄ればうろたへて、乘り物に近げ入ッて、內より戶を
ぞさいたりける。夜廻りつづいて飛び付き、乘物の戶をしッかと押さへ、すだれを揚げて「ァアうぬ
めか。是は御前のお金袋。ァヲ馬方の三吉めが、お金袋を盜んだ。出あへ〳〵」と呼ばはりし。是ぞ
此世の地獄おそし、かゝる鼠の如くなり。本陣の上下殘りなく、下宿の諸侍。隣町隣家の旅籠屋ぞ
も、棒ちぎり木にて駈け付け、海道の眞中に、乘り物かきすゑ高提灯。四方きびしく取り卷きたり。
當番下知して、「丁稚づれに旦山な。それ引き出せ」。「畏まッた」とあらしこ共戶を明けて、「ァア出な

せい」と、小龍取ッて引き出だす。「コレ旦那殿。ぬすんだ金は返します」と、きよろりとしてゞ居たりけり。「いかやうにも幼少な、彼奴ばかりではあるまい。同類を詮策せん。馬さしは居らぬか。當宿に泊まッたる、馬子共殘らず召しよせよ」。あいと言ふより驅れまはり、皆々一所に相つむる。八藏も大酒して、霄より關に泊まりしが「盜みかわくは何奴ぢやい。ヤアませのじねんじよめか。おのれなら尤ろくで果てまい奴おやと、常に言ふたが遂ふたか。馬方仲間の恥ぢさらし。エゝはッつけ柱め」と、背骨をどうど踏みければ、向下にがッばと伏し、顏を石にすり破り、血は紅と流れたり。「無念な。已れ踏んだか。枝骨もいでくれう」と、立ち上がればひッすゑ〳〵「そこな馬子めも慮外者。武士の前にて脛ざんまい」と、さん〴〵に叱らるる。「ヱ、彼奴にふまれたか。下々の刀でさへ、切られまいと思ふに、脛にかけて此やうに、顏に疵を付けたなあ。首がどんだら己の面へ、喰ひ付いてくれうぞ」と、はッたと睨む目の中に、無念涙をはら〳〵と、思ひこんだる腹立ちの、をさな心の念力は、そッと身の毛も立ちにけり。母お乳の人聞き付けて、駈け出で見れば大勢に取り圍まれし、我子の體。あッとばかりに腰もぬけ、呆れて泣くより外は無し。人々に悟られては、今迄で包みし甲斐もなく、お姫樣の乳兄弟、馬方して盜みしてと、いはれんも口惜しく、不憫さ憎さ腹立ちさ。「ヤイそちは國から目をかけて、情を加へた甲斐もない、卑賤いことを仕出したな。筋目も有りそな者なれやも、さすが育が恥かしい。其心故親々も知ッても知らぬ見ぬ顏して、其馬方とは成りつらめ。此方も子を持ち覺えがある。皆親心は同じこと。若し母なゞが聞き付けても、我子の命を助けんため、

火水の底へは沈まうが、此場へ助けに出らるる物か。見殺しにするやうなれど、心の中では神佛に、命ごひして腕くらや。年にもたらぬ心から、恐ろしい事する筈もない。父親が貧しうて、言ひ付けて盜ましたか。但しは人に賴まれたか、言ひ譯あらば仕てくれよ。母の心を推量し、此此の馴染もあり、兎に角命が助けたい。姫樣のお名を思はずば、此お乳がうんだ子で、姫樣の乳兄弟と云ふてなりとも助けたい。何うなりと埒うなりと、言ひ譯あらば爲てくれ」と、魂のそこ心のそこ。肝より出づるうき涙。當番吟味の人々に、推量もしてくれかしの、心遣ひ目遣ひを、夫とも知らぬぞ是非もなき。三吉も母の顏、見上げ見おろし涙にむせび居たりしが「申しお乳樣。さもしい盜みいたしても、馬方のことなれば誰恥づかしとは存ぜねども、お前一人に恥づかしい。父樣のためかとは恨めしの仰せやな。父樣があるほどなれば、馬追ひは致さね共、在所知られねば顏も見ず、又母樣も持ッたれども、女子の身の不甲斐なさ。奉公人のはかなさは、今では他人も同じ事。たとへ言ひ譯立ッてから、盜人の名を取り見苦しいめにあふては、父樣に顏は向けられぬ。はやう殺してもらひたい。其樣におッしやれて、可愛がッてくださるほど、そうやら心がうろたへて、死にとも無う爲りさうな。奥へ行ッて下され。もう顏見せて下さるなと」と、兩袖を目にあてて泣きしづみたる利發さに、母はなほしも心くれ「命はお乳が貰ふた。助けて下され侍ひ衆」と、わッとひれ伏し聲を上げ、人の推量思はくも、忘れはててぞ泣き居たり。家老の本多奥より出で「樣子つぶさに承る。盜み物出ると云ひ、殊に道中他領の者。是式の事評議に及ばず、お助なさるる。立ち歸れ」と、引き立つれば三吉

「此耻ぢかいて助られ、何と生きてゐられう。慈悲なら切ッて貰はう」と、猶座をしめて立たざりし。「ヱ、小しやく者。かるい科を成敗とは、古今の掟にない事。立ッて失せう」と怒らるる。「ム、此分ではどうでも命助かるの。オ、聞こえた」と、つッと立ち、「こりや八藏め。己は己をよう踏んで、面に疵を付けたな。元來我は武士の子ぢや。人に踏まれて生きては居ぬ。覺えたか」と、云ふ詞のうち中間が脇差ひらりとぬき、飛びかかッて八藏が首打ち落とせし早業は、めたたく間の稻妻なり。すは八殺しと取ッて伏せ「もう此うへは了簡なし」と、本繩に縛りあげ、「宿の庄屋へ預け置く。此方よりも人を付け代官所へ渡すべし。立ちあがれ」と引き立つる。母の性根も泣き入ッて、前後もわかずみだるれど「此お目出度い道中に、繩付きなどは見ぬ物」と、人にさそはれ力なく、見返り〳〵奥に入る。子は又母を見返りて、顔をうなだれ目をふさぎ、聲をも立てず歎きしが「ム、是ぢ本望〳〵。悪名取ッて人には踏まれ、助けられても生きて居ぬ。一人死より八切れば、往にがけの駄賃ぢや。父樣も母樣も誰も一度は死ぬる物。來世でゆるりと逢はうまで、あの世からきて彼世へ歸へる。戻り馬やろい。ほてッぱらめ」と、悪びれぬ、所存は侍さまさりかな。「惜しい奴ぢや」と涙ぐみ、引いて歸れば本陣は、火の用心の聲ばかり。物しづかにぞ成りにける。與作はとり沙汰聞くをひとしく、科を我身に引きうけんと、駈けつけ見れどもはや早落着してひそかなり。本陣も閉しまり、四邊もひッそと靜まッたり。小まん待ちかね格子たたけば走りより、「どうぢや〳〵仕損ふたげな喃」。「ム、仕損ふたんかいの。私や爰から覗いた。八藏まで殺いたは、ありや皆私等の身換はり、明日の日中に切らるるげな。可愛い事を爲ますると」と、泣きささやけば、「南無阿彌陀〳〵。そりや皆こちが殺すはこちとはいかい業人」と、顔を見あはせ泣き居たり。「なう三吉より、一時も跡に下がッて成るまいが、こなさんどう思ふてぞ」。「ム、其覺悟きはまれば、もう落ち付いた。滿足した。宵からさうは思ふたが、親父の難儀を見捨てては、死なぬ氣であらうかと、胸にばかり持ッて居た。心がかりは殘らぬの」。「ムテから左なはに成るからは、父樣の事も埒あかぬ。もじや〳〵言へば氣がもめる。余の事置いて、サア早うここが出たうござんする」。「ま、嬉しい〳〵。裏の軒につないだ馬を、人手へ渡しては、主たる人への不重寶。死に場へ馬も引くまいか。其間に身を出るほど、此竹格子をはなして見や」。「いや茲も小よしの悪性で、つい推せばはなれる。ム〳〵小よしは逢ふ夜の通ひまど。最期近づく二人には、冥途に通ふ鐵の門」と、くどき〳〵馬引き出だし、「預けて置いた脇差しは」。「そこらは抜からぬ。私が腰にさいて居る」。「できた。夫なら此馬の鞍をふまへて、そッと下りや。ム、あぶないぞ。怪我すな」と、かばはるる身もかばふ身も、恥づる廿日の月毛の駒の、をがみ亂れて置く露に、袖の涙をあらそひし。ひらりと飛びおり一町ばかり足ば、やに立ち退き、「海道は往還。伊勢路の方で先ぬまいか」。「ム、それに付いて待たしやんせ。三吉が預けし守袋。如何なる神の御札やら、私が懐中にも太神宮の守ぉ稜ひ。穢すは後生のさわりなり。地藏堂へ納めませう」。「ま、氣が付いた」と取り出だす。ふせんりやうに紅梅裏の袋を開き、月影に讀んで見れば、「正一位おばら太神宮。丹波の國の住人伊達の與作が一子與之助才息延命。南無三寶偖は三つで別れたる、我子の與之助なり

けるか。我を親とは知らねをも、與作と言ふ名を大切に、幕ひし物を氣もつかず、盜みをさせておきめにあふ。手を出して我子の首を切ッたと同じ事よ」とて、どんと坐して足ずりし、聲を上げてぞ歎きける。女もともに涙にくれ「因果人ともごふ人とも、ようも〳〵罪業を、重ねたは二人が身。死なうと云ふ氣の付いたこそ、未も冥加に叶ふたれ。何のかのと暫時でも、此世に居るほど罪かもしゃァござれ」。「ま、さうぢや」と、立たんとすれど腰立たず「口惜しや腰ぬけた」。「ヱ、氣のよわい」と引き立つれども膝折るる。抱き上げても腰をれの、三十一期の憂き思ひ。最期は伊勢路育は近江。生まれは丹波くりげ馬。夫を抱きかき乘せて、妻は口取りはいどう〳〵。今六道の次傳馬。三途の川を打ちまたぎ、昔の小歌引きかへて、あひの土山死出の山。冥途の旅路とほし馬、たどるや夢の……

下之巻

道行戀路の月毛馬

與作丹波の馬追ひなれど、今は野すゑの放れ駒ぢや。しやんとさせ與作。與作思へば照る日も曇る、關の小まんが涙雨かし。しやんとさせ。與作よさく〳〵と、呼びよばれつる、いなおほせ鳥も音をいれて、野邊のかるかや軒ばの荻。馬の馬草にかひ變す、草も我身も此あか月は、ともに枯れ野のくつわむし。人を乘せたが乘せられて、かぎりの旅の坂の下。なうあれ夜ぶかに急ぐのりかけも、泊まりは知れて四日市。我は泊まりもなな七日。中有の旅の馬ひつじ。歩めしい〳〵。ァ、しぶといロを、引けやしやくれを行きかねる。畜類ながら性あれば、最期を惜しむ綱すくみかや。私は十二で人よび初めて、今年廿一まる九年。とめし旅人何萬人ぞ。關一宿はせばけれど、男女に綾

人か、ともの好みも時の花。無常のかぜに散りはてて、馬より外にとふ人も、泣いてくれるか優しやと、鞍にひれ伏しはら〳〵と、袖には涙楫には、このみこぼるるむくもとや。契り初めしはさをとし、扱け參宮の道づれに、そなた櫛田の眞中ほどで、深き思ひをやれ紫ぼうし。ほんに口說いた其眞實が、關の地藏を誓ひにかけて、戀ひの重荷の馬追ふとても、足もかる〳〵心もひろき、とよく野とこそ樂しみも、飽かれぬ中を秋の霜。今宵ざりざと氣もへりて、久保田に浮き名うづむかや。小まん泣く〳〵申すやう縁は異な物其時に、起請一枚書かねをも、くもづのかはせ二世三世。指切りしての云ひかはせ、枕定めぬ參宮に、寢て居て胸を燒かうより、手を引きあふてゆる〳〵と、歩みなぐさむ夕暮れは、一わの火繩に火を付けて、相合ひぎせる思ひ草。思ひし甲斐も夏のせみ。春秋知らぬ世のたとへ。與作小まんが身の上と、昔忍ぶの露涙。今を恨みのうき歎き。このもかのもにあののもの、あのの松原時雨行く、阿漕の海士のあこぎにも、過ぎにし方を思ひ出て、二見の浦の二つ〳〵と啼く鳥。人の末期を知らすとは、音にきゝしが今ぞ知る。あさぐまの嶽淺ましや。彼のさいぐうの忌詞。いまはしやとて道もせに、晒す身體を道者にも、嫌ひ憎まれ人々の、よもや回向もなさけなや。過去も未來も現世で知ると、男見る目は泣く目元。ありやそりや早明がたの、お八つの太鼓の聲は高田の寺。泊まり〳〵は多くとも、十萬億土馬次ぎなしの、西は百味の旅籠屋に、觀音せ

いし手を取ッて、蓮の臺に泊まらんせ。夫婦の外はあひ宿も、南無阿彌陀佛彌陀佛と、こうの阿彌陀の影たのむ。其誓願の詞の緣。千貫松にぞ着きにける。與作も名ある弓取りの、家に生まれし氣質とて、きッと死に身に胴さはり、土手へ飛びおり、馬を小松の根につなぎ、小笹の露を打ち拂ひ、「茲へ〳〵」と小まんが手を取り、顏を眺め、「廿一と卅一。二人合はせて五十二才。是でから長いきと云ふほどの年でも無し。いとしい人を殺すよなう。心にかゝり言ひたいことは、無いか〳〵」と言ひければ、「ハテかはゆい男と死ぬる身が、浮き世に心なに殘らう。さりながら只一つ、いふて返らぬ事ながら」と、言はんとするを「ア、もう〳〵それもいらぬ事。人間の念慮かぎりなく、息の通ふ間は六根の、業慾にひかれ、思ふほど言ふほどなほ盡きず、皆罪障の種となる。此念をはらふを生死をはなれ、涅磐門に入ると云ふ。我とてもいひたいこと、千萬無量を打ち捨てたり。されども一つの粗忽には、そなたに預けし箱枕に、先祖の由緒所々の、勳功知行付けの一卷あり。死後に諸人にさみせられ、家名をながさん此無念。よし夫はまゝにもせん。不憫やかはゆや與之助が、最期まで親とも知らず、親戀ひし父親戀ひしと、思ひ死にに殺されん。其思ひは親のわざ。親では無くて仇ぞ」と、かッぱと伏して泣きければ、「それ私には言ふな〳〵とて、こな樣云ふて泣かしやんす。そんなら私も父樣が、年よッて子をさきだて、途方があるまいいとしぼや」。「オ、念を殘すが迷ひとなる。たとへ奈落に沈むとも、親の事と子の事が、思はず言はずに居られうか」。「さうでムる」。「さうぢや物」。「いッそ云ふて罪作り、親のため子のために、地獄へ落ちてやりませう」と、二人ひッしと抱き付き、聲の限りをとよくのの、風も哀を添へにけり。「あれ〳〵あれへ見える早提灯。走り飛脚と覺えたり。道端はいかがなり。卒最期場を換へまいか」と、半町ばかり草わくる。飛脚どもは汗水にて、「お乳の人の御立願。あす四つまでに、命乞ひの、太々神樂御願かなへば、御祝義の御褒美は知れたこと。急げ〳〵」と走り行く。「あれ聞きやッたか。何方のお乳の人。命乞ひの御願とは、養ひ君の煩ひか。いらぬ命が二つ有る。ア、換へらるる物ならば」と、悔やめば小まん涙ながら「それが叶ふほどならば、他の子よりもこッちの子、切られて死ぬる身換はりに、とても死ぬる此身體。髮頭より爪先まで、一分だめしに試されても、換はりたい。助けたい」と、歎きしづみし誠の心。百千萬のいのりより、などか祈禱にならざらん。時に人足四五十人ひそめいて來りしが、「ヤア主なき馬の夜中と言ひ、繫がれあるは訝し。提灯立てよ」と呼ばはッて、忍び提灯さやはづせば、萬燈會のごとくなり。「遠くはあらじ一二町野をかれ」と大勢が、「與作小まん」と聲をかけ、漏るる方なく取りまきたる。南無三寶見付けられては二度の耻辱。「率死なん」とひらりと拔く。「刄物の光りそれやこそ」と、お徒士衆やにはに二人を縋りとめ、兩方へ引きわくる。「やれ侍ひならば情を知れ。もとは伊達の與作ぞ。一生懸命の時節到來。死に損なはせて呉れるか。エ、口惜しい」と身をもがく。遙か彼方に立てられたる、乘り物より御意を請け、若侍ひ走りより、「ム、珍しい與作。故朋輩鷺坂左内見知られつらん。こんど姫君關東御下向御悅びの時節。今夜の始終御憐憫淺からず、吟味仰せ付けられしに、小まんが箱より貴殿の實名あらはれ、三吉事も實子與之助にまぎれなく、殊に内室お乳の人、神妙の志し。かれ

これ感じ思し召し、三吉が命を助け、母儀もおなじく御供にて、両人を助けんため、かたじけなくもあれまでお乗物を出だされた。大殿の御前相済むまで、五十人扶持の御合力。小まんもお家へ引き取り、重ねてよろしく御了簡あるべしとの御意の趣き。有がたう存じ、サア〳〵お乗り物のお供して歸られよ」とぞ述べにける。與作草むらに頭を付け「大殿以來例なき御厚恩、報じ奉る事もなく、不奉公の天罰にて、あらぬ樣になりくだり、親子も知らず恥辱の骸をさらすべき所、姫君の御愛憐、生々世々に忘れ難し。さりながら女共も悴も、人の笑はぬ志しも立てたるに、拙者は何を面目に、おめ〳〵と諸人に生き顔があはされん。朋輩の情に死んだ跡と御披露あれ。最期のお暇申し請ける。小まんが事はその擾はりに、頼み存ずる左内殿」と云ひもあへぬに、「是々々此小まんに殘れとはお内儀樣の思し召し。わたしばかりに恥さらせかし、一人歎けか物思へか。口で云へば人そばへ、先立って埒あけう」と、取り付く脇差おし止め、「さうぢや〳〵。恩も禮儀も忠孝も、死ぬる身にはへちまの皮。爰へよれ。南無阿彌陀」と、刺し違へんとする所を、左内飛び入り脇差もぎ、二人を兩へ踏み倒し、はッたと睨んで齒噛みをなし、「ヤイ道知らずの人外め。さすが以前は御家中の、物頭采配までで御ゆるされ、二つ道具をつかせし身が、心まで上々の、馬方になったよな。諸朋輩多けれども、親左近右衛門がえぼし子、與作と云ふ名を付けたれば、此左内と己と兄弟分が口惜しい。死なう〳〵とやかましい。死ぬるが左ほど珍らしいか。弓馬の家の死と云ふは、城攻めの一番乘り、野軍の一番鎗。能き敵の首取ッて討ち死にするを侍ひの、死に悪い死とは云ふぞ覺えて置け。關の小萬と心中

の、討ち死にを手柄とは、一切經にも無い事。僅の恥を思はんより、主君の恩を報ぜぬは、侍ひたる身の大恥と、知らざるか扱淺ましや。後指を差されうが、犬畜生と言はれうが、我身の恥を振り捨て、厚恩の主君に忠節を勵むこそ、恥を知ッたる侍ひ、大丈夫の武士の生粹と云ふ物ぞ。此道理合點なく、死んで勝手が能いならば、左内は留めぬ心任せ。さりながら侍ひならぬ馬方を、刀で死なすは勿體ない。舌を咥ふか身を投げるか、似合ふたやうに在鄉馬の、口取り綱で首縊れ。情に見物して遣らう。ヱ、侍ひでもない者に、心を盡くして氣が盡きた」と、大欠伸して居たりけり。與作わッと泣き出たし、「誤ッたり、左内殿。此仕合はせの上なれば、心も闇と罷りなる。萬事貴殿に任せ置く」と手を合はすれば膝立て直し、「合點いッたか過分〳〵。夫でこそ與作なれ。御前は拙者が受け取ッた」と大音聲で、「與作は御意を重じ、生害思ひ止まる由。御披露あれ女中衆」と呼ばはれば、御乘り物ざんざめかいて昇き寄する。お乳の人も與之助も、流石武士の子武士の妻。御前なれば手を突いて、四人目と目を見合はせ、「何事も姫君樣。御慈悲故」とばかりにて、嬉し涙に咽びける。姫君與の内ながら、與作丹波の伊達男と、歌に謠ふは彼人か。關の小萬も双紙に有る。繪で見たよりは能い女房。聞けば踊が上手ぢやげな。明日は一日滯留せう。踊を踊ッて見せて給も。家老共に云ひ付けて、知行を澤山遣らせう」と、生まれ付いたる御詞。その一言に千石千兩。千貫松の千代に八千代によろづ與作が諸果報。小萬が戀ひも通り町。仕合はせ能しで今はお江戸の刀差ぢや。しやんと一筆ふみ馬御免。踊り子寄する笛皷、馬も太皷をうつくしき、踊り浴衣の上から下まで、いろめき悦

び厥はべり。

與作をぢり

えい〳〵〳〵紺屋の德兵衛。房に元よりこひ染めこみの、內の身代あくでもはげず、くち入れ頼みて銀四百目を、かりに雇ふて女房と名づけ、あはう三太をらむうげん太で、やまけふづくる內儀の心。男いとしい子も又可愛い。吝い隱居の手前をつゝみ、宵寢する子を我夫ぞと、云ひまげ濟ますきほひ、顏は十面くめんもいらず、羽織ひらりとやッ、やッす鬢かづら。德兵衛不義ぢやと逃まるゝ脛ぐら取ッて引きずり出す。宵より積もるうき涙、理づめ義理づめ此やこの〳〵我子のこの〳〵、胸ぐら取ッて、かねも投げ出しふさとの中を、明日は神明今宵の月ぞ、思ひ切ッ情づめ。如才內儀の貞女にめでて、たと誓言すれど、今宵ちぎりの戀ひ風は、牛姜酒でも防がれず、氣もふは〳〵の玉子酒。まゝよ往ッてのきよ。さうも成るまいか。ぞうせうかうしやうが酒。辻にしよッつくばふて、思案なかばし戀ひしさまさる。胸かきまはす玉子酒。心二つに打ちわッて、君が方へと走り行く。跡は內儀がヤ一人寢てさ。ふさは日暮れて人待つ隙の、火まはすれば飛脚がせがむ。肥後屋の迎ひ早疾く德兵衛。兄の病氣を見舞顏で、來ても互の心の底は、云ふに云はれぬ鴛鴦の、起たんとすれば、病者の癖の長咄し。何とせんぎのあら腹痛や。痛や〳〵と虛腹病めど、そら寒き夜に、是非に泊まれとゆふ霜の、臭の火燵に蒲團とこけて、泣いて忍ぶは隣の二階。そろり〳〵。そろ〳〵〳〵差足は、「誰ぢや房か」。「德樣かいの」。是は夢かと抱き付き、絕り、憂さを呼き辛さを口說き、死なで叶はぬ身の

差し詰めど、成りゆく果てぞ哀なり。房を吞中に大屋根づたひ、足もよろ〳〵夜は何時ぞ。七つ八つの芝居の仕組み。浮名ばかりは殘れども、殘ら殘るものは命ぞと、最も涙のたる屋町。おりて二度此婆婆へ、いつかかうづの日進樣で、南無妙法蓮華經。南無法妙蓮華經。遠華一つと脇差を、胸に押しあて唯一刀。ゆッと叫びし一聲に、づんぶり染めの紺屋の德兵衛。お房が頓生菩提の回向。水を手向けて再度ぼんを、重井筒と名の立つにさ。千歲樂萬歲樂。踊り悦ぶ御代ぞ樂しき。

心中萬年草
●上の巻
(一)女嫌やる高野の山　紀伊國高野山は女人禁制の山ゆゑに云ふ。「女嫌やる」から「飛ぶまいか」までは小唄で、語句も面白い、女を嫌ふといふ高野山になぜ又「女」と名の付く女松が生える事であるかと難詰し、更に辯じて、もし女松が生えては爲らぬといふ事なら天上の夜這ひ星はどうしたものか、是また「夜這ひ」といふ賤しむべき名が付いて居るが、淸淨な高野山故避けて其飛ぶのが見えない事が叶ふかと承けたもの、語句の配合で滑稽の色を帶びた唄である。
○松より梅より柳より御寺小性の稚兒櫻　高野山では女人を禁ずる代はり、稚兒小性を近づける、其事をいふ。松、梅、柳などは別よ寓意なし、但それに對して同じ植物の「櫻」で承けた。「ちござくら」は櫻の一種、ここでは「稚兒」に掛けた。
○大師　高野山の開山弘法大師。
○衆道　元祿の通用語。若衆道の畧。
○顏ひねて足らぬ心の花之丞　顏はふけて居るが心は鈍な花之丞。
○かしこい人　反語。おろかな人。

高野山女人堂　心中萬年草

上の巻

女嫌やる高野の山に、なぜに女松は生ゆるぞや。なぜに女松が生えまいならば、夜這ひ星でも飛ぶまいか。松より梅より柳より、お寺小性の稚兒櫻。智惠文珠の御相傳。大師の弘め置き給ひ、俗も尊む若衆の情、衆道秘密のお山とかや。南谷の吉祥院に、播磨大名の使者ありとて、庭の掃除の下男、小性衆は客殿の、床に掛け物臺子の埃、掃いつ拭ふつ忙しさ。「これ長介、關助。掃除が大方出來たらば、不動坂まで一走り。お使者が見えるか見て戻りや。急ぎや急ぎや」と有りければ、「いや夫は余の者遣らしやりませ。私共は皆樣の、髮を結はねば成りませぬ。寺方のお小性は、俗の內儀と同事。法印樣の奥樣の、髮結はずに濟みますか」と、洒落を設けの顏ひねて、足らぬ心の花之丞、「ム、そんなら此方は法印樣と女夫か。ヱ、在所の父樣や母樣は嘘つきぢや。山へ登れば魚喰ふ事が成らぬほどに、豆腐や蒟蒻を鯛や鰈ぢやと思ふて喰へ、薯蕷を鰻と思へ、法印樣を親と思へとばッかりで、女夫とは聞かなんだが。ア、思ひ當ッた一昨日のお日待ちに、法印樣の相伴で、善哉餅を十三杯。夫から身持ちに成ッたやら、ぼてれんぢやと腹さすり、朋輩は皆小小性の、顏を赤めて挨拶せず、久米之助は年かさにて「なう花殿。笑止な事言ふ人ぢや。是に御座る主膳殿八彌殿右門殿。年は三つ四つ下なれど、此方の心が足らぬ故なぶられて居さッしやる。此方は他國者なれば、當地では此方の里を頼にして、一家同前の御身を笑はせて本意でない。此久米之助が居る內は、侮らせはせまいが、追ッ付けお暇申し受け、國へ歸ッたその跡では、高野一山のなぶり物。少し嗜んで下され」と、言へばむッと腹を立て、「どんな事いやんな。法印樣の女房が、法印樣と双んで善哉餅喰ふて孕んだが可笑しいか。コレ忝なくもおれが親は、神谷の宿で隱れもない、雜賀屋の與次右衛門。母樣と一所にいッつも物を喰やるで己も生まれる。お梅と言ふ美しひ妹まで生みやッた。そなたも毎もこちへ來て、妹のお梅と二人藏へ這入ッて、善哉餅を喰はしやるやら、お梅が聲で味い味いと云ふたを、己や聞いたぞ」と云ひければ、久米之助は赤面し、殘の朋輩口々に、「かしこい人の云ふ事を、氣に掛けては果てがない。さりながら正直な、法印樣の御耳へ入ッては云ひ譯ならぬ。小性仲間の恥辱なり、沙汰しやるな」と制せられ、六尺共も聞き流し、「阿房に油斷はなほならぬ」と、目まぜしてこそ入りにけれ。(一)』　良有ッて表より、「成田久米之助樣に逢ひましたい。お國の親御武右衛門樣よりの飛脚なり」と、若黨一人刀の先に文箱付けてつッと入る。「ム、久米之助とは身が事。國元よりの使ひとは氣遣はし」と云ひければ、「いや別義にても無く、御老體の武右衛門樣。御隱居の願ひに付、久米之助を呼び戻さんと、御一門の談合極り、法印樣への御狀段々の御口上。兎角は首尾能くお暇の出るやうに、御朋輩樣達へも賴ませとの御使ひ」と、文取り出だせば久米之助「是は思ひ寄らぬ事。父が老後の大望を、違背ならずと云ひながら、我口からは申されず。何れも朋輩言ひ合はせ、お暇の出るやうに取り合はせ賴みます。狀も進せて能いやうに、何れもに任する」と、手を合はすれば人々も、

「心一ぱい申して見ん」と、一度に座敷を立ちけるが、花之丞振り返り、「コレ久米殿。御暇貰ふて行なしやらば、糠袋は已に下され。巾着にしてあないちの、粒入れます」と打ち連れて、皆〳〵奥にぞ入りにける。飛脚はそッと傍に寄り、「申しお國からとは偽り。雑賀屋へ出入り致す、貴志の和田の九兵衛と申す駕の者。お梅様のお頼みで、密にお話し致せと有る。彼の御存じの京の紙屋、此中下ツて逗留し、二三日中に祝言し、其明る日お梅様を京へ連れて参るとて、内方にも御用意。兎角お前が片時も早く、山をお出でなさるると、何所ぞへ一所に立ち退くか。分別も有る所、夫故内々約束の如く、お國の親御の偽状で、お暇取ッて今日中に、久米様連れて來て呉れと、いとしぼやお栃様、涙を流し手を合はせ、お頼みなされた手前も有り、どうぞお供致したし。委い事はお筆に」と、懐中よりお梅が文取り出してぞ渡しける。久米之助も心堅き「成程〳〵」其筆。そなたも知ッての上なれば、隠す事は少しもない。外の者に添はせては、生きて居られぬ二人の中。親の命と有るからは、法印了簡無いとても、暇をひすて出で易し。先文見ん」と封め切り、讀まんとすれば南無三寶上包はお梅が文、久米様との名宛にて、中は吉祥院法印様參。成田武右衛門親の文。「ム、奴は聞こえた。お梅が常々男手を能う書く故に、國元の狀をも人頼みするなと、下書き書いて渡せしが、隠し忍んでする事とて、封じ違へて我文が、法印の手に渡ッたか。是は〳〵」と色違へ、立ッても居ても詮方無く狼狽廻る折り柄に、主膳立ち出で「是々飛脚。法印直に問ふ事有り、先休息召されとの事なり」と、言ひも敢ぬに久米之助「なう主膳殿。最前の文を法印様は、早御披見なされたか。封ぴお切りなされ

(二)あないち　意錢と書く。小兒の遊戯。地に線を畫し、錢を打ッて勝負するもの。

ずば、そッと取ッて來て下され。一期の御恩」と言ひければ、「イヤ其狀は法印様繰り返し披見有り、反古棚へ入れ錠前し、手が穢れた勿體無いと、跡で手水をなされたが、如何成る狀で御座るぞ」と、問へども譯は話されず、はッとばかりに胸踊らし、詮義に逢はばこそせうと、飛脚の九兵衛が心まで、細谷川の丸木橋。踏み返れとぞ祈りける。(二)』時に麓の山ぞよむ、木遣りに法のひんよえい。聲播磨路の大名より、御輿引くこそ殊勝なれ。則ち宿坊吉祥院僧衆立ち合ひ石塔請け取り給ひければ、使者は座敷に直りける。法印頓て出で迎ひ、「遙々の御使者御太儀〳〵。いざ〳〵是へ。それ御盃お茶持て參れ」と挨拶有る。使者の侍ひ慇懃に、「旦那が悲母第七年に當たりし故、御當山に石碑を建て、日はいを備へ申すに付、祠堂銀五百枚奉納致され候。御受納有ッて末世末代、不退轉の御回向頼み存候」と、包の白銀目錄添へて渡しければ、「武門の御身に御信心、御孝行の御追福感じ入り候。抑々我山に卒塔婆一本殘せし人は、五十六億七千萬歳の後ち、彌勒の出世に逢はせ給はん御志願、なにか疑ひ候ふべき。先此銀子の請け取り認め申さん」と、法印奥に入り給へば乘て用意の勝手より、銚子盃重箱や、「早吸ひ物の椀折敷き、ぜん盡くしたる馳走なり。後住の弟子舘辨律師を始として、納所同宿入替はり立ち替はり「山中と申し、風情は無くとも御時分よし。お吸ひ物でもお撰へなされ。と色めきける。使者も數献を傾け「扨々御器量なる小性衆。いづれもお名は何と申す。御生國はいづく〳〵の御方ぞ。仰せ聞けられよ」と云ひければ、「我等は有村主膳と申す、當國田邊の者」。「私

(三)山どよむ木遣りに法の　山にどよめいて木遣りの聲が聲くとの義。「ひんよえい」は木遣りの掛け聲。

○ぜん盡くしたる　馳走なり　「ぜん」は「膳」、「盡」夏方へ掛けた。

は世繼八彌と申す大和の者」。「身共は伊賀の上野の生まれ。小栗右門と申します」。「私は此麓神谷の宿、雜賀屋の花之亟。年は十九で法印樣のお內儀。私が妹にお梅と申して、ずんどきやらめで御座れども、惜しい事は女子で、坊樣の口へ這入りませぬ。私が顏は花のやうで、花之亟と申しまする。妹をお梅と云ふ譯は、どうした事か知らねども、あの梅と云ふ物を、此方は割ッて見さしやッたか。中に平たい物が有る。こちのお梅が中にも、夫が有るやら無いやら、つひしか割ッて見ませぬ。ぶ念な事」とぞ眞顏なる。使者も返答仕兼ぬれば、朋輩は笑止がり、「是しい〳〵」と袖を引く。久米之助はお梅が噂聞くに付けても彼文の、法印の手に渡り、今や詮議の有るかとて、思ひ痛める胸の中、釘を打たるゝ八寸の、給仕も更に手に附かず、目に涙持つばかりなり。使者重ねて御自分はお年かさと見え申す。お名は何と生國は」と問ひければ、「吾等は播州飾磨、成田武右衛門悴、同苗久米之助」。「ム、扨は同國武右衛門子息。高野に在るは此方か」と、見上げては泣き出だし、見下ろしては涙に暮れ、打ち萎れて見えければ、身に思ひ有る久米之助、心便りも無き折りから、故鄕の人の染み〴〵の、涙にほだされ傍に寄り、「一見に馴れ〳〵しき事ながら、同國のよしみと申す御落涙の樣子。御心體の優しさも、押し量ッて頼み奉る。私事此山に、一夜も足を留め難き、身の難義出來致し、幸ひ國より迎ひも參る。具の事は麓にて、お物語り致しません。お詞を添へられ、法印より暇を取り、今日中に此山を、連れてお出で下されば、生生世世の御恩に受け、命の親と存じませう」と、身の置き所無き儘に、粗忽の無心も戀ひ路ゆゑ、若氣故こそ是非なけれ。使者は膝を立て直し、「コレ久米之助。

○ずんどきやらめで　ずッと伽羅めでの義。「伽羅」は元祿流行の隱語。すべて快よく上品なものの稱。世辭追從をさへ伽羅と稱した。ここでは「俊れて美貌いである」の義。

○八寸　徑八寸の膳。

お主が山へ登ッたは、末は出家の筈なるに、今此山が出度いとは、還俗仕度い心よな。ヤレ出家する因緣を忘れたか、恨めしい。お手前十二歳の時、朋輩伊吹重太夫が二男、卯之助と云ふ十一に成る友達と、鷄合の友達喧嘩、敢無くお主が手に掛かッた、卯之助が兄伊吹千右衛門とは身共が事。其頃は數年の在江戸。後日に聞けば殿よりは、切腹との御評定。父母が了簡にて、子の可愛いは同事、親達へ歎きを掛け、討たれし者の爲でも無し、出家させて幼い者の、後世弔はせんとの扱にひて、我親共が命を助け、當山へは登らぬか。一人の弟が死骸をも見ぬ懷かしさ。せめての筐に其方を、一目見たさに此度の、お使ひを望み受け、小性衆の名を尋ね、久米之助と聞くよりも、弟が有るならば、今年は十八莟む花。つれなくも討ッたかと思へども、改めて恨みを言はんやうも無く、仇を恩たる出家して、後世を助けて呉れるかと、思へば形見の心地もする。恨めしいと床しいと、未練の涙を溢たが悔やしいぞ。久米之助。譬へ親の敵でも、出家は格別。在家となれば見遁し置かれぬ弟の敵、此山が下り度いとは、夫こそは望む所。麓に下ッて八年以來鬱憤を散ぜん。法印に斷り申す爲め御意を得ん」と立つ處へ、法印駈け出で、「樣子委しく承る。やれ若衆め。己は未髮こそ剃らぬ、九字でしんぼう傳授して、禮拜顯行も勤れば出家も同前。殊に大師此方潔戒淸淨の御山。假にも女犯の穢れが有れば、一山暴れて震動し、其身は狗賓に五躰を裂れ、木の枝に掛けらるるは目にも見せ話しも聞かう。夫を知ッて此寺を、能うも〳〵穢したな。國元の親から珍しい文を得た。此年になれども、思ひ[illegible]、御げんの如く二世三世。くされ〳〵と血判するゑた、小舌たるい女子文。手に觸

れたは今日始め。梅よりとは誰が事。皺の寄ッた此法印を梅干しに譬たか。師匠相應な弟子でも無い。あのお使者の手に懸かり、死なうが生きやうが攀ひ無い。あれ引き摺り出せ叩き出せ。十一から敎へた經文も眞言も、魔道へ捨てたか勿躰無い」と、腹立ち涙に暮れ給へば、久米之助は伏し沈み、有りあふ小性同宿も、傍から何と千右衞門、呆れ果てたるばかりなり。(三)』 祖辨律師走り出で、久米之助が袴ごし、割るるばかりに踏み付け〳〵引き起こし、齒噛みをなして涙を流し、「ヱ、見損なうた悴め。其根性とは夢にも知らず、兄弟の契約の「念頃したは何事ぞ。雜賀屋にはお梅と云ふ、若い娘も有るほどに、出入りするには行儀が大事。浮き名ばし立てられな。若衆の嗜み是第一。兄分に恥かかすなど、立ち居に言ふたを忘れたか。コレ千右衞門殿。今まで愚僧が存せしは、彼めは敵持ッたる身。若しも覗ふ人有らば、拔き身の下へ此法師が、駈け入ッて討たれんと、一命遣ッたる中なれども、只今念頃切る上は、金胎兩部の大日も、御照覽ましませ。不便とも存ぜず。御舍弟の敵。サア御手に掛けられ」と、座敷の下へ取ッて投げ、「俗の女を慕ふより、法師の身にて少人を、思ふは幾千增さるぞや。其兄分を袖になし、こころざしを無下にした、憎や無念や淺ましや」と、氷のやうなる眼より、涙をはら〳〵とぞ流しける。千右衞門續いて下り、「心無いには似たれども、寺を出づれば弟の敵。討たでは武士の道立たず」と、するりと抜いてむね打ちに、四つ五つ丁々と打ちつけ、「是からは死したる人。此方意恨無き上は、心次第に師弟の中、何卒挨拶致し度い」と、這は武士の神妙さ。久米之助わッと聲を上げ、「只今のむね打ちも、討ッて打たるる身の報い。恥辱とも思はねども、山の名殘に法印樣の、御讖嬢損ふ悲しさと、二世と賴し兄分を、袖にしたとの恨みの詞。悲しうて〳〵死んでも迷ひと成りまする。疾くに髮を剃ッたらば此悔やみも有るまいもの。坊主天窓の素氣無い顏、兄分に見せる悲しさに、せめて〳〵梅に思ひ染められた。是も前世の因果かや。お梅に逢ふて斷り立て、緣を切ッて來ましたら、元のやうに念頃に、可愛がッて下さるか」。「おんでも無い事。女と緣さへ切ッたらば、身に換へても法印樣へ、詫び言申して念頃せうが、誠緣を切らずば、大師の罰を受けうと云ふ、誓文を立てうか」。「いかにも誓文立てませう」。「ヱ立て。サア何と」。「ヱ、こちは切らうと思へども、お梅が合點せぬ時は、何と爲ませう。悲しや」と、かッぱと伏して泣きければ「それ其心の附くこそは「罰の當ッた印ぞや。早出て失せう」とどうと伏し、俱泣きするこそ道理なれ。(四)』 其隙に法印以前の文を取り出し「山に置くは穢らはし、持ッて失せう」と投げ付け給へば、恥づかしさうに密と取り、肌懷に入れけるが、男女破戒の御咎め、俄に吹き來る天狗風。岩も枯れ木もどう〳〵〳〵。雲動雷電雨霰。天地ひとつに黑雲覆ひ、長夜の暗とぞ成りにける。「すは一山の大事なり、不動坂まで追ひ出せ」と、下僧下部が小腕引ッ立て、棒よ杵よとひしめいたり。流石好みの花之丞。「コレ久米殿。妹が事は氣遣ひさッしやんな。こなたの居所知れるまでは、己が女房に持ッて遣ろ」と、開くも苦しき名殘の山。髮も髻も引きみだかれ、涙零れて目も暗く、さらば〳〵と振り返り、泣く音も嗄るる聲や、お梅に通を失ひし、久米が心ぞ憐なる。

○露　その縁で
「梅」と。
○久米　久米の仙人が通を失ッたと

の故事に因み、其久米之亟の名から「通を失ひし」と出した。文辭絶妙。

㊟中の巻

（一）白紙、厚紙、横紙、漉れ紙、塵紙、鼻紙共に繰言。

○はな紙「花」、「鼻」製方へ掛けた。

（二）お引き「ひきでもの」の畧の敬語。

○筒ごかし　つゝくるみ。

（三）おかさま「おかみさま」の畧。

（四）ぼらそうさやてい　梵語。心經の偈中の句。上の「觀音陀羅尼」を承けた巧みな洒落。「腹を立て」に言ひ

中の巻

逢はぬ昔しの白紙も、忍び重ねて厚紙を、八に裂かるる横紙に、袖濡れ紙の洩れ易き、浮き名やばツとちり紙の、嵐に脆きはな紙や。まだ十七の懐子。名さへお梅は氣もすしや。親與次右衛門いきく〳〵として外より歸り、「お梅が祝言いよ〳〵今宵に極ッた。今朝云ひ付けた通り、市助傳九郎鱠を掻け。夏よ雑煮の用意せい。竹臆立ても綺麗にせい。聟殿は京烏丸の人なれば黒棒が能からう。塗り盃はいらぬぞ。年のいかぬ娘ぢや、土器を三寳に、口取りは鼈斗昆布。肴は鰑車海老。熊野から貰ふた鹽貝が有らう。ヤ鹽貝の序に女房共は何所に居る」と、嬉しがるのも親心。内室様は中二階に、お梅様の髪梳いて」と言ひければ、二階の口まで駈け上がり、「こりや〳〵。宿老殿へ往て談合して。皆内證勝手づくの祝言なれば、弘めは重ねて下ッた時。今宵盃濟んだらば、娘は最早聟の物。とんと先へ渡いて、女夫連れで明日早々、登して退けいと云はるる」と、きほひ掛かる親の顔、見るよりお梅は涙ぐみ、「急な事云て下さんす。盃さへ延べてはしけれど親の後見、是非無うて何うなりともと云ひました。京登は先づ待ッて。氏神へも參りたし、阿房でも兄は兄、花様にも知らする筈、日頃懇切遊ばして、御守よ御符よと、御恩を受けた祐辨様。お山にはまだ外にも……」と、其人の名は言ひ兼ねて、思ふ邊をかすらする、是も思ひの餘りかや。（二）母親も打ち頷き「オ、夫もさうぢやがこんな事、念頃な方へ知らすれば、餞の祝儀のと、厄介掛けるが迷惑ぢや。兎角聟御の心次第。御座れ」と、納戸へ入れば與次右衛門、「コレ嘆。葬の供の者共、是の内の奴等にも、何がなしに三百宛、お引きを遣る台數ぢや。筒ごかしの顔で、つらりと九文十文づつ、百の口を扱いて置けや」。「ハヅ此方もあんまりな。お梅が一世一代に、何が惜しいぞ。矢張九十六文で、百宛遣ッて置かしやれ」と、連れて納戸に入りにけり。（二）　お梅は幼き時よりも、甘やかされて二親に、我儘言ひし習はしも、心に疵を持ッたれば、いぶりもならず、すねられず。「ア、九兵衛はなぜ遲いぞ。久米様の返事は」と、そろ〳〵表へ出でけるが、女子丁稚が口々に「よう、お梅様。晩には立ち聞き致しましよ。京のお母様にならッしやる」と、嬲られても浮き〳〵せず、「ア、何いやる。京へ往こやら冥途へ往こやら、知れた事か」と門に立ち、坂を見上げて居る所へ、久米之助は頬冠、九兵衛も投げ首して辻へ見ゆれば走り寄り、「なうよう來て下さんした。文に言ふて遣る通り、京の奴めと今夜盃する筈で、私が氣は今朝から、とんと死んで居たわいの」と、絶り付いて泣きにけり。「オ、和女は氣が死んだか。私は叩かれ引き摺られ、身も心も死にまする。嘘なら是」と手を取ッて、袖から「胸中が、ハアたんと腫れて有るわいの。鬢もそそけた。顔も泣いた顔ぢや。こりやどうぞいの」と入りわけも、いはず知らずに泣き慶たり（三）　丸兵衛不承な調子にて、「ア、麁忽なお梅様。文を封じ違へて、久米様への濡れ文が、法印様の御手に入り、何が日頃法印様、眞言陀羅尼讀んだ目で、くどくは御見思ひ切〳〵と、讀んでは、らそうぎやていを立て、ぼじそはか成顔附きする。念者坊の祐辨様は、賂、殺すと、云ふ煮えさッしやる。一災起これば二災起こる。お國からは弟の敵ぢやとやら申して、理屈臭い侍ひが、むね打ちを喰はする。弘法大師御入定八百年此方の、一山の大騒ぎ。飛脚の註義も有るさうで、私は据めッた膳箸

掛けた。
○ぼじそわか　梵語。心經の陀中の一句。此段では別に何にも掛からず「何も無し「不識嫌な」の意に利かせた。
○念者坊　若衆と男染みを重ねた人を念者といふ。
○狗賓　天狗。

も取らずに隱れ居る。其間にお山が暴れて來て、天狗殿が鼻を怒らかし、大雨大風雷鳴。大事の山を久米之助が、穩しやと叩き出されて、斯くの體にて在します。お兩人のお蔭で、煙草入れを落とし ましやした。中に賴母子の掛錢七十四文有ッたもの。定めて狗賓に攫まれたで御座らう。正眞の天狗賴母子ぢや」と、ぶつくさ云ふも道理なり。(四)』「ヲ、其樣な事內へ沙汰してたもんなや。山は暴れても崩れても、久米樣に逢へば嬉しい〳〵。こな樣嬉しう無いかいの。少笑ふて見せて下さんせ」と、言ふても後先思はれて、泣き顏見ゆる不便さよ。親は「お梅よ〳〵」と、門口見遣りて「誰ぢや。ヤア久米樣か。九兵衛是は何として。呼びに遣り度い處へ、能うこそ〳〵。先づ內へ。噪久米樣が御座ッたぞ。暮れたになせに火は灯さぬ。お梅が祝言常とは違ふた。二階は蠟燭、庭もおう〳〵も燈心を、摑み込んでくわッくわとやれ」と、勇む所へ母親は、形振りを心得難くや思ひけん。「いつの間に九兵衛は、爰へも寄らず山へ往て、お梅が祝言聞いてお出でなされたか」と、不審さうなる顏色を、九兵衛見て取りつッと出で、「久米樣のお仕合はせ。まだお聞きなされぬか。御國の親御御隱居で、跡目を御繼ぎなさるる筈で、私も在所から早飛脚に雇はれ、打ち通りに上がりました。日頃の念頃暇乞ひのため、一寸連れて寄ッてくれ。祕辨樣も追ッ付け其處へと有る事。今日からは是七百石の御世繼ぎ。旦那樣物は談合。お梅樣の御祝言、まだ盃なされぬ先、あちらを變替ひなされて、久米樣へ進ぜられまいか。私しやお爲を申します。祕辨樣も大方其お心と見えました。千貫目持ッても商人は、一時の損が知れませぬ。照れ降れなしに七百石。すればお前もお手柄。雜賀屋の聟殿が、

(五)しやんと打ちまそう　手を打ッて約た堅ゆやうとの義。「しやんと」は拍子の音。
○ねちみやく　本義未詳。
○ぢやぢや馬、のりもの、馬は馬連れ　皆連絡の語。

(六)なこのせき心「勿來の關」に掛け

ひん〳〵刎るぢや〳〵馬に乘ッて娘御は、金物の乘り物に乘らッしやる。ヤアしやんと打ちまそう」と手を廣げても「ヲヤまあ打つまい」。「ヲねちみやくした。そんなら鼻御夫婦も、乘り物やぢや〳〵馬」と、乘せてもいかな乘らばこそ。「いや〳〵馬は馬連れ、牛は牛連れ。今日祝言する婿殿は、京三條烏丸簑屋の作右衛門。お梅をほしいばッかりで、年々の殘銀九貫五百目。百六拾兩で帳消して、此秋の買ひ入れに、紅の花のやうな小判貳百五拾兩。先へ預けて買かれた。今宵の物入り仕掛へ、こちには一文入れさせず、娘を裸で請け取る婿は、世間にちッと有り兼ねる。何と九兵衛」と言ひければ「いや久米之助樣も小判の事は請け合はれぬ。お梅樣を裸でなら、鬼に鐵棒で御座りましよ」。「コレ阿房な事言ず共聲がおぢやるか出て見よ。コレお梅久米樣二階へ連れまして、新しう出來た寢道具を見せましや。こりや女子共、着を鼠に引かるゝな」と鼠の用心しながらも、二人二階へ上げたるは、是そこ猫に鰹なれ。(五)』二階には元渡の大紋緞子の夜の物。二つ枕の總附きを、姉まし さうに久米之助。「ヲ〳〵京の男と此枕を並べて、此夜着を被て、二人しッぽりと寢さんしよの。ヲ、ひよんな物見せて、又泣かせて下さるか」と、ほろ〳〵涙を流しける。「ヲ嫌がらすやうな事聞きたうない。京の奴となんの寢よ。今夜中に連れ立ッて走るぞえ。胸を極はめて下さんせ。此夜着滿團に今の奴が寢くさる筈。ヲ、嫌らしい。うるさや」と踏みちや〳〵くッて投げほふり「是は又私が の新らしい寢道具。祝ふて寢初めてほしけれど、人が來うかと氣遣ひな。ヲしんきや」と、疊みし夜着に凭れ合ひ、誰もなこそのせき心。花のお梅に鶯の、人くと厭ふわりなさよ(六)』時に簑屋の作

た。「なこそ」は「來るな」の義。せき心は急く心の義。
○人く「人來」の義。古歌に梅の鶯が「人來」と鳴くとある所から出した。

（七）にちければ「ねぢる」の轉。

○すずしさうに潔白らしく。

右衛門、小者を連れてつッと入り、與次右衛門が髻を取ッて引き寄する。女房始め下々も、「これは聊爾」と取り付くを、「寄るな〳〵」と擲ち拂ひ、捕ッて引きすゑ、「こりや與次右衛門。京の者を陷め立てしたら、返りを喰はう用心せい。親代々の得意で二十年此方、二千貫目足らずの商ひに、九貫目のほこりを取り、先も見えぬ秋買ひに、十五貫目の先金取り、祝言の仕入れに四貫目取り、男の有る娘をかづかせて、去らせて搆はぬ工面ぢやな。爰らではまだ流行るか。京大坂では其手のもがりは廢ッた。サア娘の首を渡すか。廿八貫目戻すか。二つ一つの返事を聞かう。ヤイ一升入れ袋は海川でも壹升。方の能い者の仕合はせ見よ。盃せぬばッかりで、廿八貫目拾ふた。戎大黑が乘り移ッた作右衛門を欺さうや。置いてくれ」とぞ罵りける。與次右衛門眞直者。ぐッと急いて、「ヤア京々と喧しい。頰げたが過ぎる。七拾萬石の下に住む與次右衛門。氣の狹い己らがさげしみとは違はう。銀返すは安けれど言ひ詰められて戻したと、言はるゝが口惜しい。娘にも疵が附く。サア男の有る證據を出せ。何處ぞで藥を焚かれて、銀が惜しうなッたか。慮外申した御免あれと、詫言させて其上で、是非に祝言させねば娘の垢が拔けぬ。サア證據を出せ」とにちければ、家内の上下しみこほり、二階には逃げばも無く、死ぬるより外分別の、泣いつ震ふつ狼狽る。作右衛門押し靜め、「證據〳〵とすずしさうに言やるな。身は明日立つ合點で、今朝からお山へ上ッたが、八時でも有らうか俄に山が暴れ出して、大雷風雨一期に覺えぬこはい事。さる寺へ駈け込んで、樣子を具に聞いたれば、南谷吉祥院の小姫久米之助と言ふ者と、雜賀屋のお梅と、數年密通して山を穢した其祟り。夫故今追ひ

○くくりつけて連れ立たせて。

出さるゝと、一山が見物後姿を己も見た。飛脚のやうな僕が供して麓へ下ッた」と、言ふより九兵衛もじり〳〵と門の方へ後退り、亭主もはッと二階を見れば、女房かしこく、「いや〳〵〳〵。其分では胡亂な。こちの人、娘が垢を拔かッしやれ。狼狽て娘一人捨てさッしやるな。これ〳〵」と膝を突けば合點し、「オ、呑み込んだ。こりや男。雷が鳴ッたとて、こちの娘が不義の有る、證據には成るまいぞ。どうでも今宵祝言させ、くくり附けて去なさねば、雜賀屋の與次右衛門が、町へ面が出されぬ。手柄に婿にして見しやう」。「オ、己が身代見かけては、定めて婿にほしからう。廿八貫目の金では、疵の無い手入らずの女房が持たるる。己が銀で拵へた、夜着蒲團から取ッてくれう」と、二階へ上れば與次右衛門、腕捻ぢ折らうと引き卸し、上を下へと摑み合ふ。久米之助は脇指拔いて、すはと言はばと縋り付く。お梅がわッと泣く聲も、下には聞かず叩き合ふ。女房中を押し分けて、「こちの人から默らッしやれ。待ッて下され婿殿」と、あなたを拜み此方を拜み、やう〳〵兩方押し靜め、かッぱと伏して泣きけるが、「都衆とも覺えぬ物の情の無い事や。これほどまで取り結び、さあ祝言の場と成りて、打ち破ッてこち夫婦、世間が立たうか身が立たうか。男を持たぬ娘子は、誰が身の上に何事の、有るまいとも言ひ難し。過ぎつる事ぞ二親が、迷惑するを聞くならば、氣の細い娘なり、先の小性も堪へ兼て、死なうとするは必定。留めに往かるるしぎでもなし。必らず死ぬるな死ぬまいぞ。爰は死ぬる場で無いぞ。親に歎きを懸けるといひ、其身もない難受ける事。親孝行と思はば必らず死んで呉れるなと、先づ斯う言ふて留めたらば、よもやとは思へども、若い心の一筋に、恥づ

かしいとばッかりで、若しや死なうか悲しや」と、知らせの詞ひとつをも、皆兩方へ掛け橋の、二階にも聞き取りて拔いたる脇指流石又、死にもやられず聲立てず。抱き合ひてぞ泣き居たる。(七)』「なう親はどれも變はらねど、母の名汚すも雪ぐのも、娘の育ちの善し惡しから。お梅が一期の疵付けば、三十年添ふたこちの人に、面かい拭ふて添はれもせず、是非に一旦盃して、男の手柄に何時でも、退き去りは世の習ひ、子が立ッてこそ慾もあれ。家財かざい代なしても、返す物を返さずに、置く與次右衛門でさら〳〵なし。母が此歎を聞き、お梅が爰へ出るならば、夫をしほに和睦して、祝儀を渡して下され。譬へお梅が我を立てて座敷へ出まいと云ふとても、先の小性も木竹では有るまいし、先往きや〳〵といやる筈。それも聞かねば不孝者、子を一人育つるに、生きるせか死ぬるせが、七度有るとは幼い内。十七八に脊丈伸び、親に夜の目も寢させぬか。憎い者には世話やかぬ、子を持ッたらば思ひ知らうぞ。恨めしの世の中や」と、聲を上げてぞ口說きける。久米之助も聞き取りて、「後はともあれ、親御の心安める爲、涙も拭ふて下りてたも。拜む〳〵」と進められ、口惜し涙ひッしよ無く、階子とん〳〵踏み鳴らし、駈け下りて、「コレ嚊樣。徒らも惡性も、男持たぬ先ならば、云はれぬかまひぢや有るまいか。それに意地無地いふ人は、ほからかいて置かしやんせ。私が斯うして出るのは詫言と云ふもの。夫でも合點ないからは、氣に入らぬで有らう迄、田舍育ちの私ぢやもの、何の都の目に入らう」と、身振りもすねて見えにけり。婿はお梅に搖られ、にッこと笑ひ、「是親父お袋默らッしやれ。あれが爰へ出て呉れて、今の詞で千倍ぢや。天窓の上で踊ッても、去る事では御座

(八)子を一人そだつるに　子を一人育て上げるには其生死二つの瀬戸際が七度も有るとの義。つまり一人を成長させるには最も困難であるとの意。
○ひッしよなく　「乾るよし無く」の約。語氣を力めた故の轉。
○云はれぬかまひ　餘計な世話。夫を持たぬ前の惡性を責めるのは餘計な世話といふもの、それをくどくど言ふ人はほからかいて（ほからかして）即ち拋げ出して手を付けずよ置いた方がいいとの意。
○其間よそれそれ　つまり久米之助を二階から逃がして婿の目にかからぬやうにしろとの意。

らぬ。サア寢所へ」と手を引けば、二親家内打ちうるほひ、「ハア目出度い〳〵。さりながら先づ爰で盃事。其間に夫〳〵」と、氣を注けてもがけども、「いや〳〵今宵も四つ過ぎ頓て夜中寢る間が無い。目出たう寢所の盃」と、寢所急ぐ氣の毒さ。平に爰で酒盛りなされ。此間に内外の者。一献くめや酒をくめ。そりやくめ〳〵」とあがいても、何處へ落とさん久米之助。夜着引ッかづき身を縮め、生きたる心地はなかりけり。(八)』　婿は蒲團に伸し上がり、「ヤア誰ぞ寢たやら暖な。去らば此夜着を着て盃せう」と、久米之助が臥したる夜着を取らんとす。「ア、是〳〵。こな樣ばかり寢やうでの。とんと二人が一度に寢る。盃濟むまでいかな事、夜着に手をも掛けさせぬ」と、凭れ掛かりし夜着の袖。足をさすり手を〆めて、つまに力を附けゝれば、「ひとつに寢やうは忝い。銚子早う」と呼ぶ内に、夜半の鐘も鳴り渡る。下には夫婦手に汗握り、九兵衛其外小隅へ寄り、供の者にも酒盛ッて、「醉ふた時分に臺所の、火を消して闇にせい。二階の酒のしゆんだ頃、祝儀の石を打ち込んで、騷ぐ拍子に蠟燭を踏みこかし、どやくや紛ぎれに久米殿の、手を引き門へ拔かさうぞ。仕そこなへばお梅が首が無いぞ。ぬかるな」と、示し合はせて酒肴、下では下人盛りつぶし、二階を母の酌人は、怪我有らせじの氣遣ひや。(一〇)』　作右は母に辭義もなく、酌いつさゝれつ式作法。大盃四五杯引ッ掛け、「なうお袋。姑に酌取らせ、むやくしいか知らねども、斯う召さッたが能い筈。作右衛門ほどの婿は慮外ながら取り憎い。久米之助は若衆で前髮は有らうが、己がやうに小判の前髮は有るまい。あの樣な奴等が、娘子供をそゝのかし、京大坂にも有る事、大方果ては心中。ホ、嫌な事。お梅は命拾やる、

(九)しゆんだ頃　「すんだ(濟)頃」の轉。
○祝儀の石　此頃の風習、婚禮のある家に其夜近所の若者などが石を投げ込んだ。
○むやくしい　無益しいの義。
○かう召さッたがよい筈　斯う御考へ爲さッたが宜しいとの義。即ちこ

れそれと其下の慢言に絡る。

親御は娘拾やる、己は盃拾はう」と、又三杯引ッ續け「ヤッ寢ませう。お袋あち〳〵行なしやれ」と、夜着引ッ立てんとする所へ、大石をはたと打つ。是はと驚く天窓の上、障子雨戸を打ち破り、大石小石透き間無く、ばらり〳〵と投げければ、お梅は爰を大事ぞと、久米之助に抱き付き、作右衛門はひよろ〳〵足。「お梅危ない夜着被きや」と、立ち寄れば、母親燭臺を蹈み倒し、やれ闇いわ。火を灯せ」と、云ふ聲に與次右衛門下の火殘らず吹き消して、常闇の夜と成りにけり。母は這ひ寄り、久米之助が手を取ッて引き出だす。悔りするも夢心地。お梅は久米が帶を取り、附いて出づるも闇の夜の、母は斯くとも知らばこそ。作右衛門はぞを失ひ、「お梅はぞこに」。「ィヤ爰に居ますする」。「闇りで怪我しやんな。お袋はぞこへぞ」。「火を取りにでがな御ざんしよ。こな樣勝手知らずおや。動かずにござんせ。私も爰に居ますする」と、聲が殘れば母親も、獨と思ひ連れて出る。お梅は跡も恐ろしく、母に知らせぬ足音をば、火を蹈む如く爪立てて、震ひ〳〵靴ぬぎまで忍び出で、母久米之助に叫きて「こなたは命の無い人なれど、お梅が歎く不便さに、こち夫婦が了簡で、今宵の命を助ける。お梅は男定まれば、思ひ切らねばならぬぞや。是はお梅が呑んだ盃。是を筐の緣切り」と、懷に入れければ、二人は死ねる覺悟の上。心の中の暇乞ひ。顏は見られぬくら暗に、まー度聲をとためらへば、「遲い〳〵」と氣をせきて、急ぐは吾子の死を急ぐ、產み出すも母、死なすも母。生死二つの門口を、明けて出で行く先も闇。跡も子故の暗の夜に、迷ふ親子ぞ悲しけれ。(一二)』

下の巻　久米之助お梅道行

(一)われはそさまの前髪の「そさま」は其方樣の畧。阿梅から久米之助を指していふ語。「前髪の」から「永き」を掛けた。全體の意は久米之助が稚兒の姿で前髮を直さず、其儘の額であるのを目じるしとして、末永い來成でも見失ふまいとの意。○夕月「言ふ」へも掛けた。○あらし「有らぬ」へも掛けた。○春の霜　霜は朝まで殘る、身はそれよりも早く消えるとの意で、霜を養む意。○乾すや神谷　乾すや「紙」と掛けた。○語呂合せで、別に深い關係は無い。○縛の繩　不動尊所持の繩。○惡魔を

幻や。定業の限りとは、如何に如何なる婆婆やらん。世は何の譬へぞや。逢ひ初めて早三歲、影ばかりの契りにて、妻は野中の一つ井戸。名は後の世の筐かや。殘す筐は親の爲、吾はそ樣の前髮の、永き來世も私が此、直さぬ額此儘で、見たり見せたり六道の、辻の街は多くとも、はぐれまいぞと夕月は、早入果てて更け渡る、まだ如月の八重霞、隱れ忍ぶによけれども、顏が見憎の朧夜や。ふたつ能事嵐吹く、木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば、身に疵附けず死にたやと、顏と顏とを摺り寄せて、こぼす淚はおのづから、互の口に傳ひ入り、末期の水となりけらし。刀を急ぐ我命。末短夜の春の霜。羨ましやな朝まで、消え殘るかと白妙に、里の夜なべも時過ぎて、乾や神谷の宿はづれ。生まれ在所の名殘さへ、親より殿を思ふぞや。我はそもじの親御の恩。戀ひと思ひに縛られて、情のきづな、縛の繩。不動坂にも差し掛かり、「死出の山路を越るかと、心細しや卒塔婆谷。爰な塚は弓とりの、猛き心やあづさ弓、彌生の空の月の前、櫻が本の盃に、開いた花は散りもせで、花の茎に身を捨てし、無常の世語り身の上に……十九十八一盛り、今宵散り行く初櫻。兒が泷とぞ淚ぐむ。あれへ越ゆれば尼の口。去年母樣と連れ立ちて、拜みし事の忘られず。憐れ佛の御母も、女の罪のねぢも、賴む佛の御名問へば、我をば外の不動樣。二親よりも捨て難き、嘸や若木の花の兄、歎き恨は眠りて物言はず、谷の流れよ聲立てて、人に語るな此姿。わしが心をこなさんに、隱す事とて持たねぢも、賴む佛の御名問へば、我をば外の不動樣。二親よりも捨て難き、嘸や若木の花の兄、歎き恨

縛る用。「きづな」の縁で、重ね出し、又其縄の縁で「不動」をも出した。
○卒塔婆谷、兒が瀧、尼の口　共に高野山中の名所。
○あはれ佛の御母も「佛の御母」は釋尊の母の義。實母は摩耶夫人ながら此段では名義上の母橋曇彌を指す。橋曇彌は心ねぢけて居たとの史傳から基づいて高野山中の名所「ねぢ岩」をも出した。全體の意、佛母も女だけに罪が深く此ねぢ岩のやうにねぢけて居た、我身も女ゆゑ嘸や罪の深い事であらうとの意。
○皐月雨　この「皐月雨」から「悲しえ」の邊までは亂れの所作になる唄で、それゆゑ合ひの手が込む。「つひにな」の「な」は感

みの數〳〵も、二人が上に罰受くる、天竺山の山おろし。締めた肌へにしみ〳〵〳〵と、悲しえ。いとしと言ふも今の間の、冥途の苦患覺束な。此世からさへ嫌はれて、深く心をおくの院。渡らぬ先に渡られぬ、微妙の橋のあぶなさも、後世の見せしめぢや柳や。鬼が千疋責めうぞ責められつ、さいなまるゝと離れまい。放すまいぞと取りかはす、袂は涙、手には珠數。頼めや頼め一筋に、一心重來滿德圓滿、釋迦如來信心舍利。髑〳〵佛になるとても、又は三途に迷ふとも、ひとつ回向の水汲めや。手向けの梅の花折り坂、たどり越ゆれば曉の、五障の雲に埋もるゝ、女人堂にぞ着きにける。若い心の一向に、死んで來世で〳〵と、思ふ心のがッくりと、着きました嬉しやと、勇むは跡の歎きなり。(一)』　堂の内には吾より先、泊りし女中の目を覺まし、「申し〳〵」と呼びかくる。「あい」と言ふのもおぢけ立ち、身を抱き合ひて居たりしが、「イヤお氣遣ひな者では無し。私は播磨の飾磨にて、成田武右衛門娘さつと申す者。南谷の吉祥院に、久米之助と申す弟を尋ねて、今日の暮れ方下人共を登せ問はせても、有りとも無しとも知れ難く、坂の麓神谷の宿を、尋よと言ふ人も有り、皆樣所のお衆か。若し御存じも有るまいか」と、他人に見なす姉弟。後世の闇路も知られたり。弟は骨肉恩愛の、涙に暮れて返答も無く、暫ためらひ居たりしが、「ム、久米之助とは聞いたる人。昨日の晝より俄に大病引き受けて、今宵限りの命なりと申せしが、夜明けなば生き死にの定說隱れ有るまじ」と、涙を隱す聲つきを、姉はそれとも猶知らず、「さればこそ思ひ當ッたれ。此お山の萬年草は、人の命の生き死にを、示し給ふと申す故、余りの事の訝しさ、守に入れし萬年草を、あの谷川の水につけ、久米

歎詞。「秋田のよおとし水」の「よ」と同上。「秋田のおとし水」といふ中へ感歎詞を挿んだだけのもの。全體の意、皐月雨の降りたまッた果ては秋田の山から落ちるおとし水となッて仕舞ふとの義で、裏から戀ひ路の末は身が落ちるとの意になる。
○山は眠りて　山の靜かな形容。山は靜かに眠ッて物をも言ふまいが、谷の流れは動いて音もする、どうぞ聲立てて二人の事を人に知らせて呉れるな。
○嘸や若木の花の兄　「若木の花」は暗に久米之助阿梅の身を指し、花から轉じて「兄」と出しては暗に詰辨律師の身を指す。
○心をおくの院　心を「置く」と「奥

之助を心ざし、半時ばかりひたしても、次第に枯て凋しが、弟が命有るまいとの、大師樣の御告げか。遙々と尋ね來て、昨日にも着くならば、せめて死に目に逢はうもの。男の身ならば一山を、駈け廻ッても逢はうもの。女と生まれし惡業は、あさましや悲しや」と、聲を上げてぞ泣きければ、夫婦も倶に伏し沈み、お梅涙のひまよりも、「親御樣をもお誘ひか、但し姉樣ばッかりか」。「なう其事よ。爺樣が、去年の冬から煩らひで、此二月の朔日に、六十九にて御臨終。明くる二日に烟りとなし、今日七日の吊ひを、兄弟一所に拜まんと、此お骨を持ッて上がりしに、弟も同じ骨となし、すご〳〵歸ッて母樣に、何と申さん定なの浮き世や」と、又さめざめと泣きければ、久米之助は我親の、骨と聞くより氣も亂れ、お梅は一目も見ぬ舅。緣と言はうか因果と言はうか、心に含み目に洩るる、涙を袖にせき兼ねて、わッと絶え入るばかりなり。(二)』　傍に伏したる供の下女、「あれ申し。七つの鐘が鳴りまする」。「善か惡か夜が明けたら知れませう」。「ア、こちは草臥れて、何が善やら」あくびやら。ふら〳〵眠る心なさ。「ア、夫もさう御用有るも存ぜず、引き留めて長物語り。是も他生の御緣でこそ。若し久米が事お聞き付けなされなば、お知らせを頼みます。何れもに別るゝも、殊更名殘惜しうて、久米之助が臨終の、暇乞ひをするやうで、心細うて悲しや」と、物が知らする血の由緣。涙すすむるばかりにて、言はず知らせず別れしは、ほいなくも又憐なり。堂の小蔭に身を潜め、「片時も娑婆に居る内は、見るも聞くも皆罪障。夜明けも近付く此上に、如何なる苦しみ恥をか見ん。いざ死なう」と呼けば、「早う死にたう御座んする。さりながらこな樣は、余所ながらも姉御に逢ひ、親御のお骨

の傍にて、羨ましい最期ぢやが、私は爺様嚊様の、悲しい中にも不孝者と、叱られうかと氣にかかり、是が迷ひと成ります」と、又泣き出だせば、「これ〳〵。宵に母御の下されし、盃は爰に有り、手に觸れられし物といひ、心ざしの籠もッた筐は是ぞ」と取り出だす。「ア、有り難い脊丈の伸びた私を、親の心で何時も童と、思ふて抱いて寐て下さんした、其心で死にましよ」と、盃肌に手を合はせ、刄を待ッたる其顔。「オ、奇麗な奇麗な。和女は母の筐を持ち、我は父の骨の傍、夫婦親子一蓮の、示しの時刻延ばされず、只今ぞ」と脇指拔き、胸に押し當ておんあぼきや、べいろしやのまかもだら、まにはんどまじんばらはらはりたや。うんと突ッ込む切ッ先の、膽に當たればのり返り、はりたやうんとくり通す。阿叫の息も消え〴〵とのッつ返しつ苦しむ聲。姉主從は驚きて、走り寄ッて「南無三寶。「人殺し。人殺しよ」と呼ばはれども、山中夜中聞く人も、泣いて麓へ走りけり。久米之助身を隱し、立ち歸れば骨桶に、櫛を添へて殘したり。押し戴き三拜し、分けて給はる骨肉を、ひとつに返すあじほんふしやう。あじの一刀是なりと、咽にぐッと突き立てて、死骸の上に法の花、梅と枕を並べける。地水火風の風は山、水は谷水土は又、土砂の功德の眞言秘密。善男子善女人堂、心中斯くとぞ聞こえける。(三)』

(總評) 此曲全體の趣向甚しい無理も無く、翁の作中傑作の地位に立つ。破題の小唄の取り合はせも甚だ可し、一種異彩の人物花之丞といふ白痴を添へ、賑はひを見せたのは最も好く、而も其白痴の描寫も巧みであッた。花之亟の言葉から阿梅と久米之助と譯の有るやうに

の院」と掛けた。
○微妙の橋　高野山中の名所。
○髑髏　上の「舍利」と同聲。
○花折り坂　高野山中の名所。
○五障　「いつつのさはり」とて歌などにも咏じ入れた。佛說婦人の身にある五種の障礙。法華經協裝品、「一者不得作梵天王、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身也」。
(三)善やらあくびやら　善やら「惡」やらと掛けた。
○おんあぼきや…はりたや　梵文。眞言陀羅尼の全文。高野山故に眞言の偈を出した。
○あじほんふしやう　眞言の秘密。阿子本不生の義。
○地水火風　佛說、萬物を成す四元素。ここでは「火風」の「風」を承けて、ただ緣語で下に「風」を出した。
○土砂　是また眞言宗の語。土砂加持を眞言宗では行ふ、その緣から用ゐた。
○善女人堂　「善女」から「女人堂」へ掛けた。

早く聞かせたのは腕前で、是ある故に九兵衛が阿梅の狀を持ち來ッた所で、冗句を費やさずに其事情が悉しく知れる。手紙の間ちがひから久米之丞の難儀となる所、伊吹千右衛門を仇と知らず連れ出してと賴む所、局面俄に變じて仇と名のられた所、師匠が呵責する所、祐辨が慈愛の情を現して責める所、千右衛門が刄のむね打ちにする所、久米之助が祐辨に對する優しい情合ひ、穢れで山の暴れる所、趣向實に自在を極はめ、相伴なッて叙法も巧みに、誠に名作といふに恥かしく無い。

中の卷と爲ッて阿梅の父がとつかはする風情もよく描いてあり、九兵衛が阿梅に不平を並べる趣きも滑稽を交へて面白く出來た。作右衛門の入來に浪が起こり、二階と下と相呼應して氣を揉み、闇がりに爲ッて終に阿梅久米之助の兩人が拔け出す趣向、實に間髮を容れずといふ切迫な場合ひ、筆もよく相應じた。

下の卷の道行の文句はさして上乘の物とは言はれぬが、女人堂で暗に久米之助が父の骨桶及び姉に逢ふ邊は趣向であッた。

明治三十年十月二日印刷
明治三十年十月五日發行

版權所有

著作者　東京市芝區南佐久間町一丁目一番地　山田武太郎
發行者　同　神田區錦町三丁目一番地　大平舘
印刷者　同　田中正造
發行所　東京市芝區南佐久間町一丁目一番地　文修書房
同　日本橋區通一丁目　嵩山堂
同　神田區裏神保町　明法堂
同　神田區表神保町　東京堂
同　神田區南神保町　岡崎屋
發賣書肆

山田美妙評註

日本淨瑠璃叢書

評註近松著作集

一册正價金三十錢
三册秩入美裝金九十錢
遞送料一册ニ付八錢

第一册目次

○長町女腹切（お花半七）
○淀鯉出世瀧徳（井筒屋新七）
○曾根崎心中（お初徳兵衛）
○重井筒（お房徳兵衛）
○五十年忌歌念佛（お夏清十郎）
○心中二枚繪草紙（お島市郎右衛門）
○戀八卦柱暦（お三茂兵衛）
○堀川波の鼓（四人の仇うち）
○卯月の紅葉（お龜與兵衛）
○卯月の潤色（おとおひ心中）
○伊達染手綱（丹波與作）
○心中萬年草（お梅久米之助）

第二册目次

○今宮心中（おさき治郎兵衛）
○心中双は氷の朔日（小かん平兵衛）
○夕霧阿波の鳴戸（夕霧伊左衛門）
○冥途の飛脚（梅川忠兵衛）
○生玉心中（おさが嘉兵衛）
○鎗の權三重帷子（おさゐ權三）
○壽の門松（山崎與次兵衛）
○博多小女郎浪枕（小女郎惣七）
○天の網島（小春治兵衛）
○女殺油地獄（お吉殺し）
○宵庚申（お千代半兵衛）

第三册目次

○出世景清
○百日曾我
○世繼曾我
○曾我會稽山
○本朝三國誌
○傾城反魂香
○國性爺合戰